女鑑

第十四年
第五号

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新意匠

羽衣コートの御披露

一羽衣コート甲種金三圓六十錢
一羽衣コート乙種金貳圓九十錢
以上各種

御望の方は御報次第説明書幷に直段書を呈す



一吳服物一式 幷に御婚禮式御衣裳

其他新規仕立日本衣服品々

一男女御袴 寸尺區別種々調製有之候

東京市麻布區飯倉町四丁目

發賣元 萬長吳服店

電話新橋千百六十七番

御披露

此立田洗粉は世間有りふれたる品と同一視する勿れ能者より御試用の上其効の顯着なるを知られたし、何卒皆様も立田洗粉位にて是れ此通り美人となる事なれば彼是れと氣をもみしでなく「リボン」の商標と御尋ね一日も早く小川商店の清き流れに身を洗ひ給へかし

尚年始、年末の御贈物として高尚優美他に比類なし



注意 近頃弊舗の意匠に擬したるものある販賣所至る所の和洋小間物店、化粧品店及藥舗に有之候間特と右紅葉の登録商標に御注目の上御購求わらん事偏に奉願上候

東京市神田區岩本町二十二番地

貫々舍

立田洗粉製造發賣元 小川商店

女鑑 第拾四年 第五號 目次

口繪

仁川駐在帝國領事加藤本四郎氏及夫人直枝子
名譽の帝國軍艦　敗殘の露國軍艦
旅順口の景色
女鑑懸題投稿優等者
向島三圍社畔の春色　信州座光寺如來堂の櫻花
宮里三本枝子書
勝の卷御扇夕顔（編物模樣圖按）

社說 …… 一
恤兵と女學校 ……

論叢 …… 四
女子と高等教育 …… ドクトル 福岡秀猪
戰爭と國民 …… 文學士 濱田紅於
女子修養論 …… 松村蓬麻

史談 …… 二四
義仲及び其母 …… 松濤庵主人

學藝 …… 三七
東子道の記評釋 …… 文學士 境野天華
支那古代の詩 …… 林恒山
英文和譯 …… 高森麻太郎

海外新話 …… 五六
○喫煙と迷信○兒童と談話○面白き遺言○話のくさ〴〵○無邪氣なる問○漁夫海中に連れ去らる○四十層の高屋○スペンサーの遺言○少女丈夫を貴ぶ○犬の爲めに宴會○天才の子は親の性質○世界の九大運河○指頭の形と罪人を知る法○演說人を殺す○ネルソン將軍の紀念物○大男の痴鈍なる事證明せらる○二年間に七人の子を產む○可驚長命なる戰死者の遺族○天氣豫報器の發明者○容易に雷鳴距離を知る法○沐浴は健康に害あり

演壇 …… 六六
戰時女子の心得 …… 三輪田眞佐子

家庭 …… 七〇
軍人の家庭 ……
家政學資料 …… 磯部武者五郎

刺繍……上村百世子
猩々の話……野花生
衞生雜話
牛乳日本料理……清水鈴子
衣服の色の配合……よし子

遊戲……九一

西洋室内遊戲法……宮内芳樹
簡易ピンポン
鳥の飼法……嘲々子

雜錄……一〇〇

高等女子佛英和學校と其寄宿舍……菊池鮮子
世界最小の王國……竹陰舍
菜の花と蝶……清水橋村
露西亞のいろ／＼……こしのゆき
河原操子女史の書簡
米國通信一笑一萬圓……澁谷馬頭

小說……一二七

隣同士……氷光闌月

撫子の花束……河越てる子

文林……一五二

和歌……大口鯛二外
新體詩……山本細柳
長歌……下田春輿

敎の庭……一五六

遠山花（歌）……日高かず子外
海上雲（歌）……古瀬りく子外
春を惜む詞（文）……日高かず子外
故鄕の友に試驗成績を報ずる文（文）……遠田みゑ子外

彙報……一八一

數十件

新刊槪評

新刊書目

廣告



小町印
唯一の女學生袴
東京神田區南神保町二番地
卸小賣部
永井支店
小町印學生袴發賣元
卸問屋
永井本店

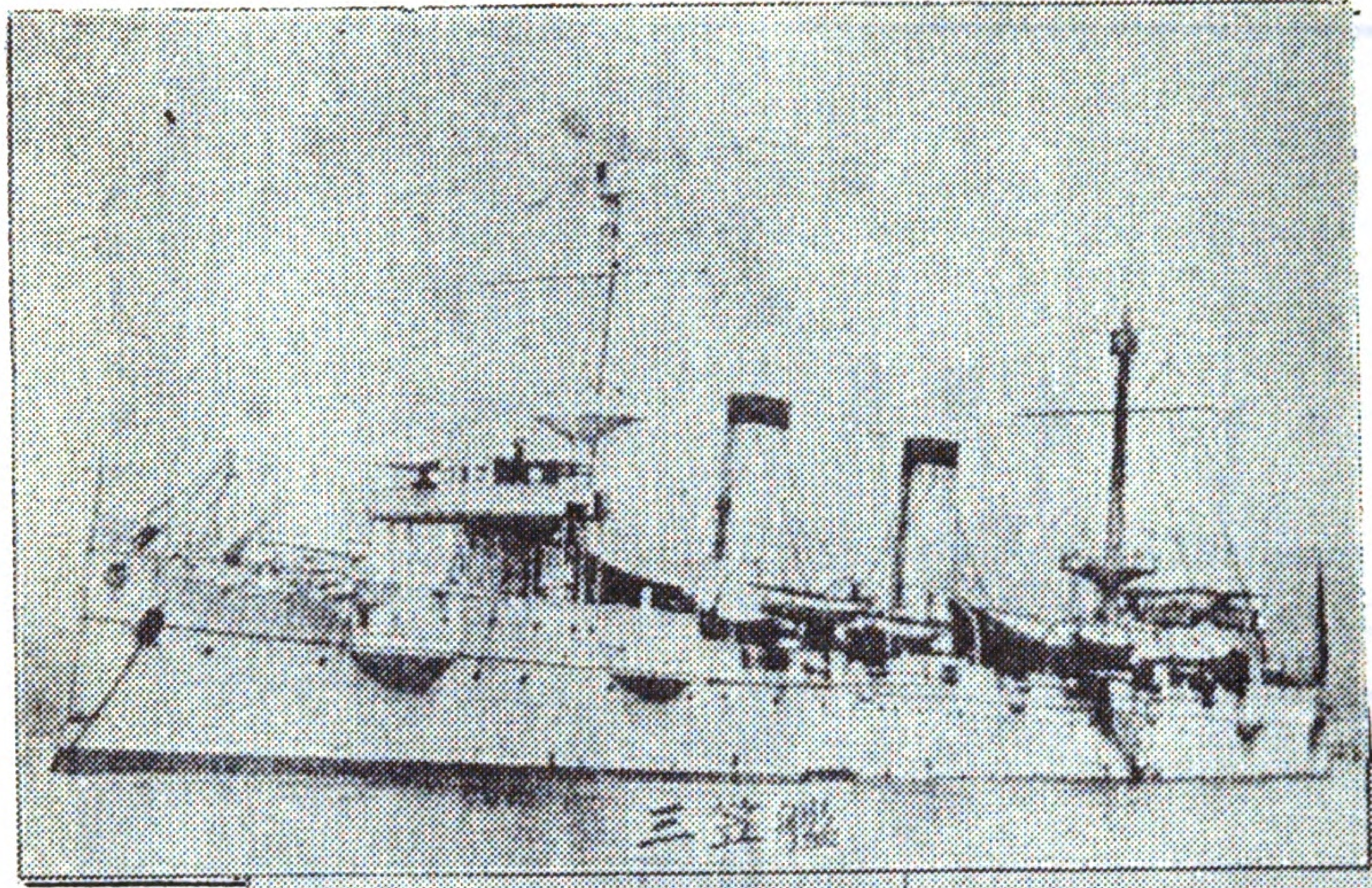


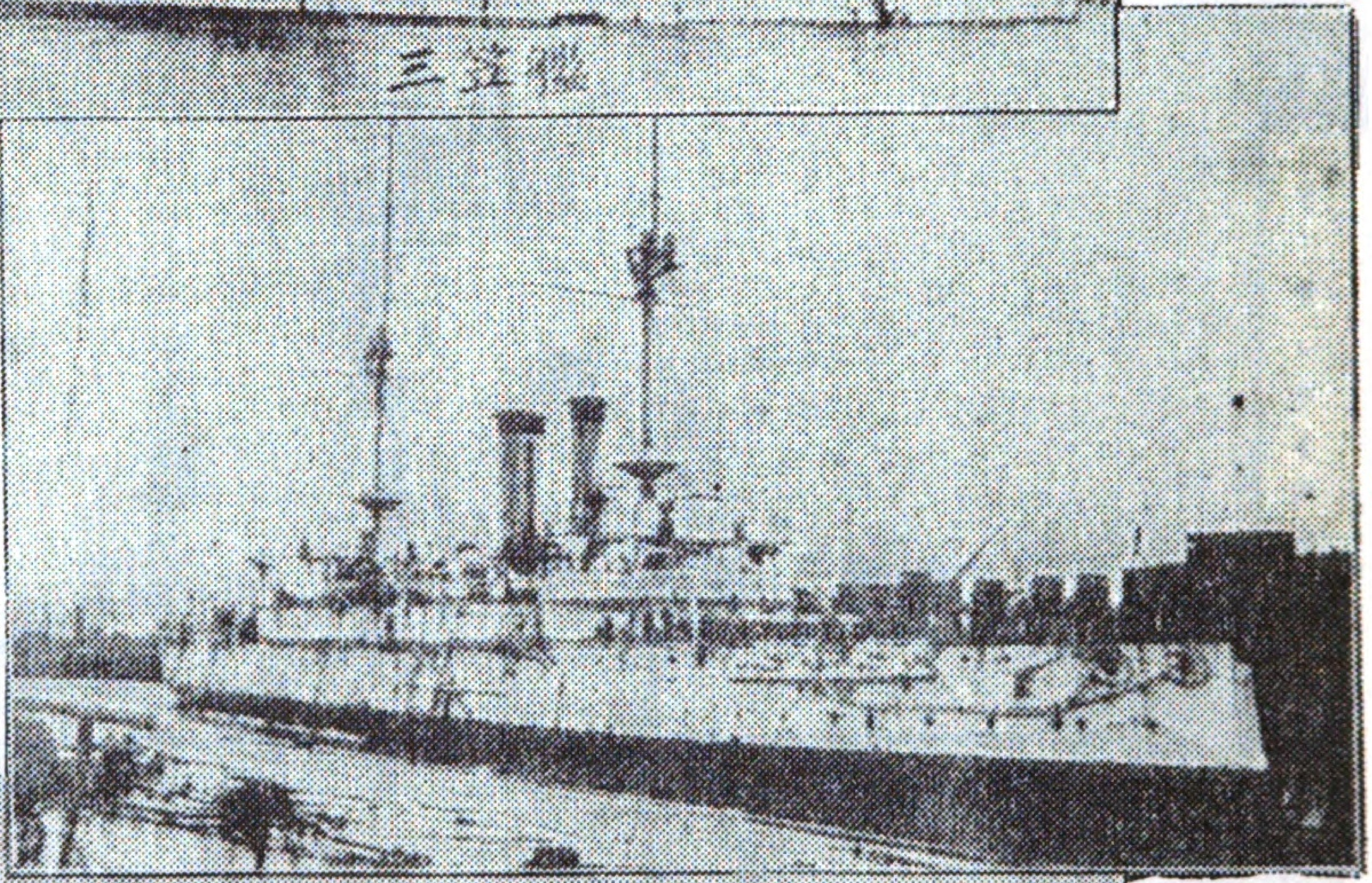
仁川駐在帝國領事加藤本四郎氏



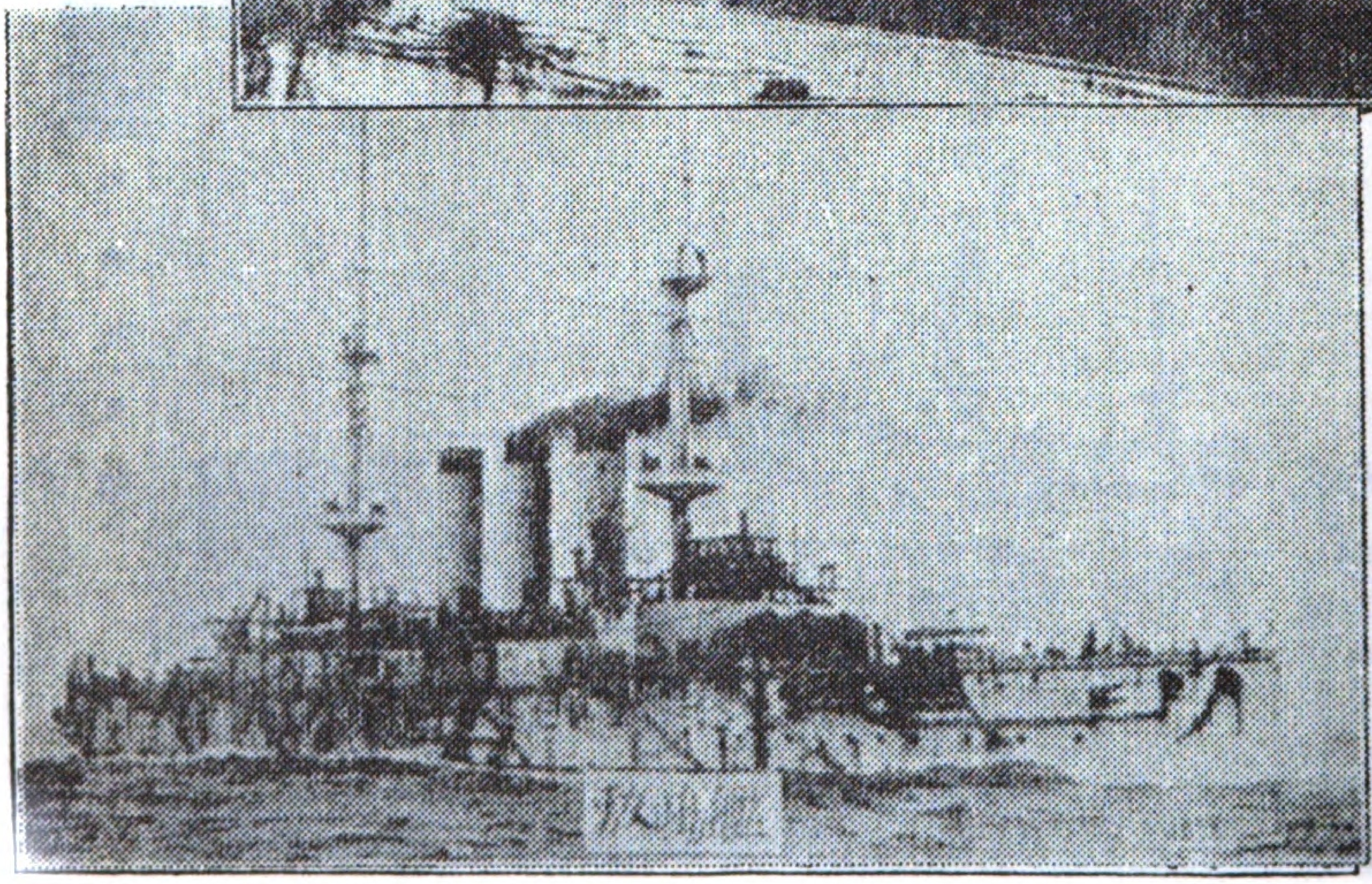
同夫人直枝子

名譽の帝國軍艦

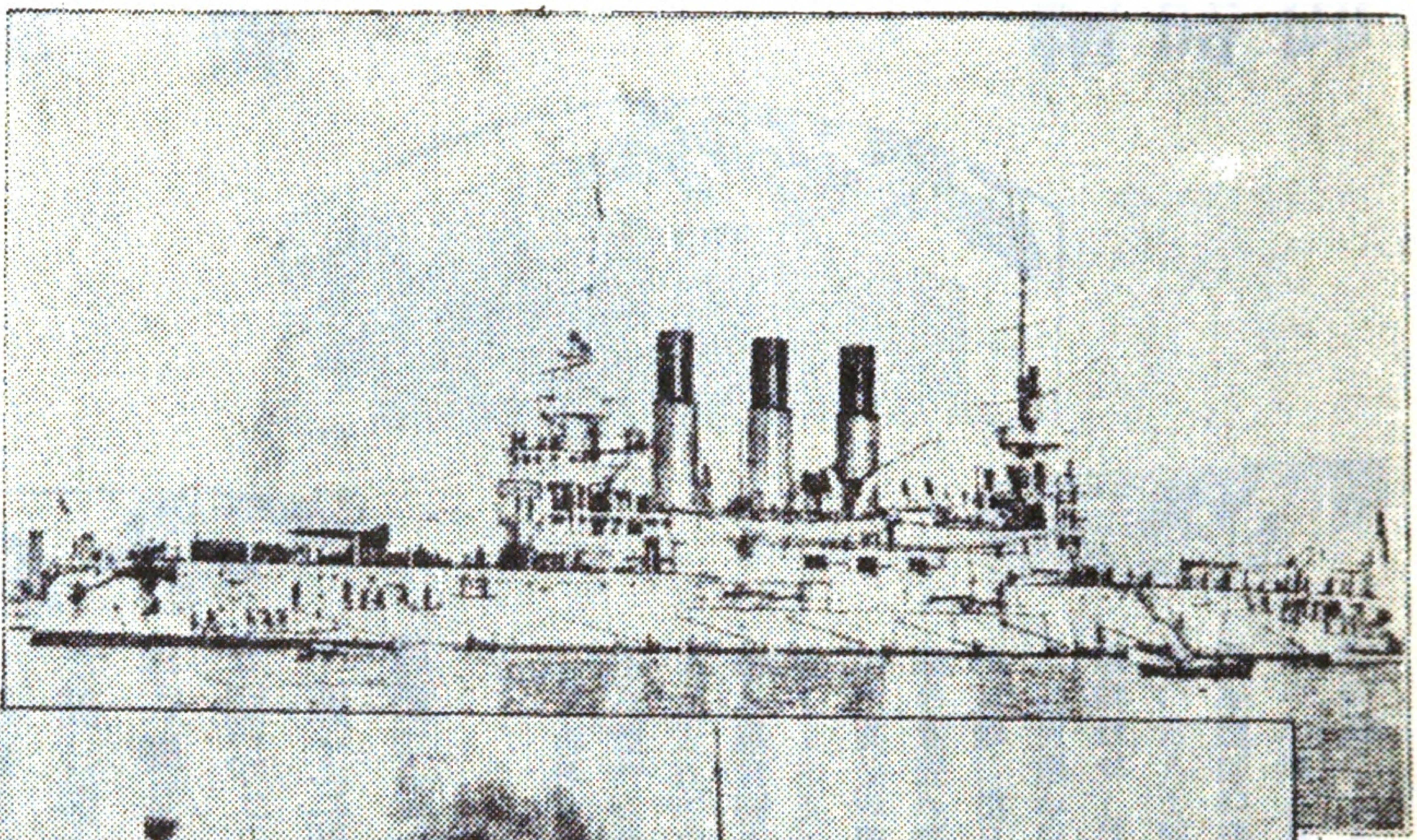




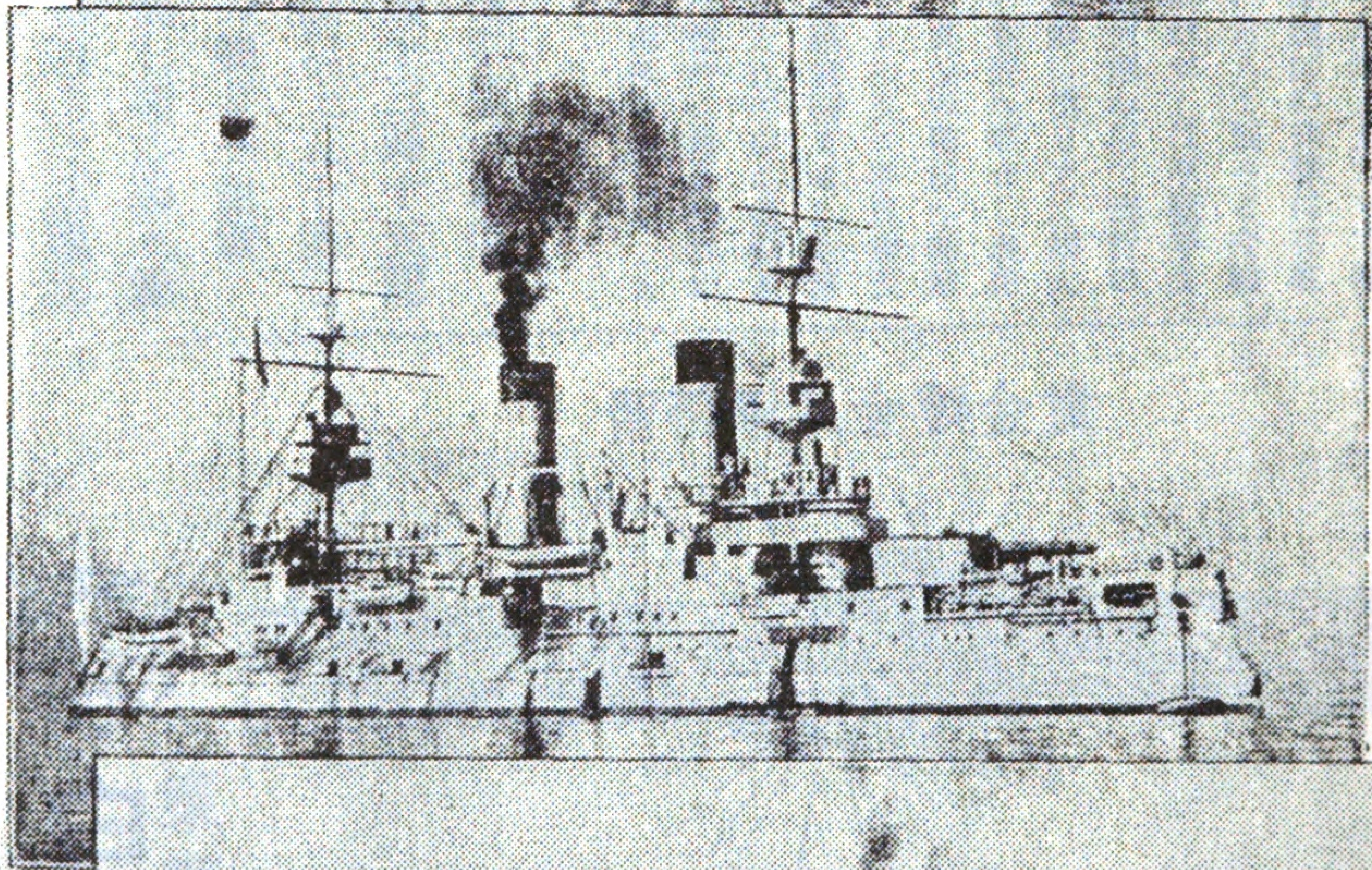
朝日艦



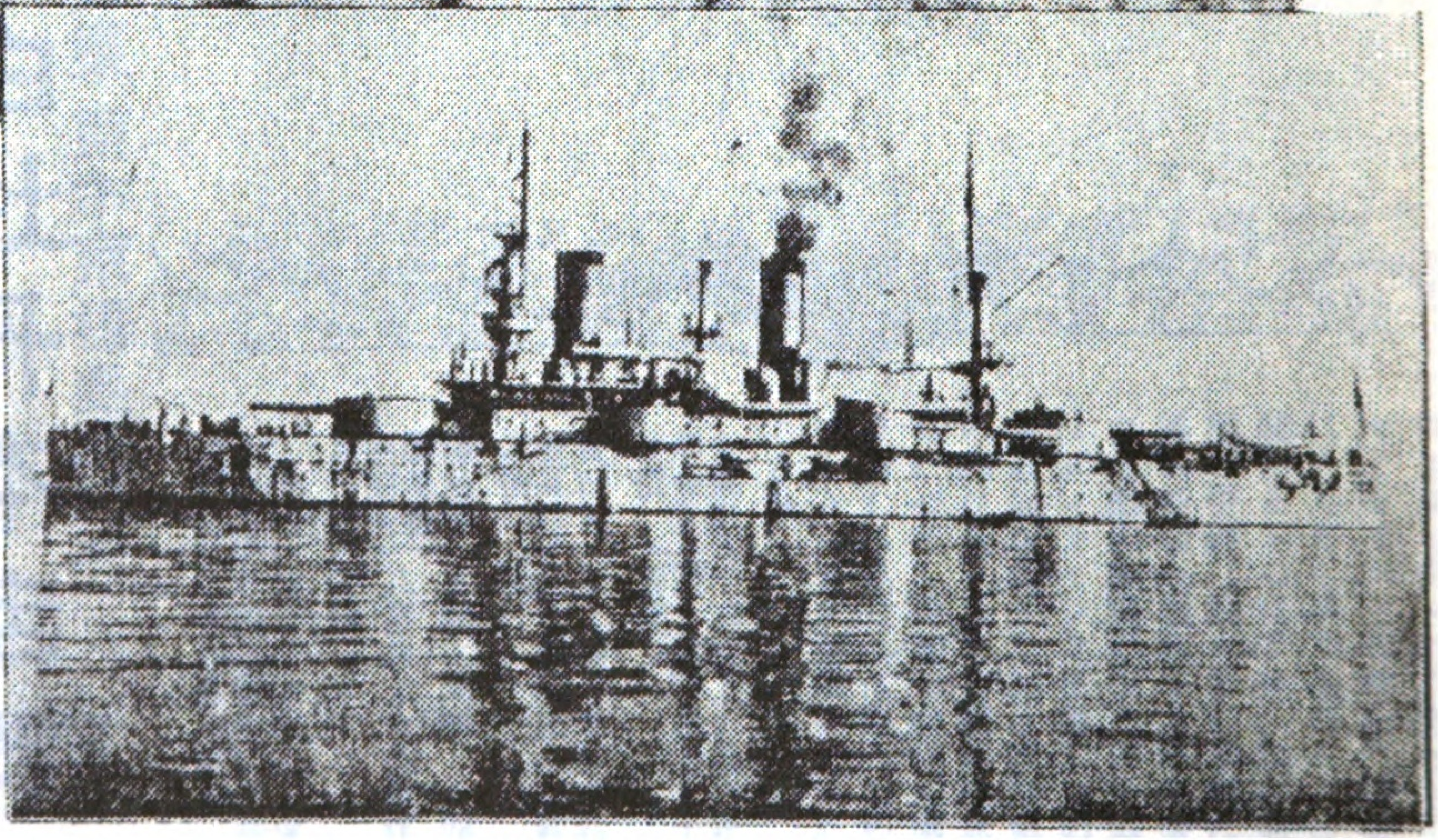
敗殘の露艦



レトウイザン號



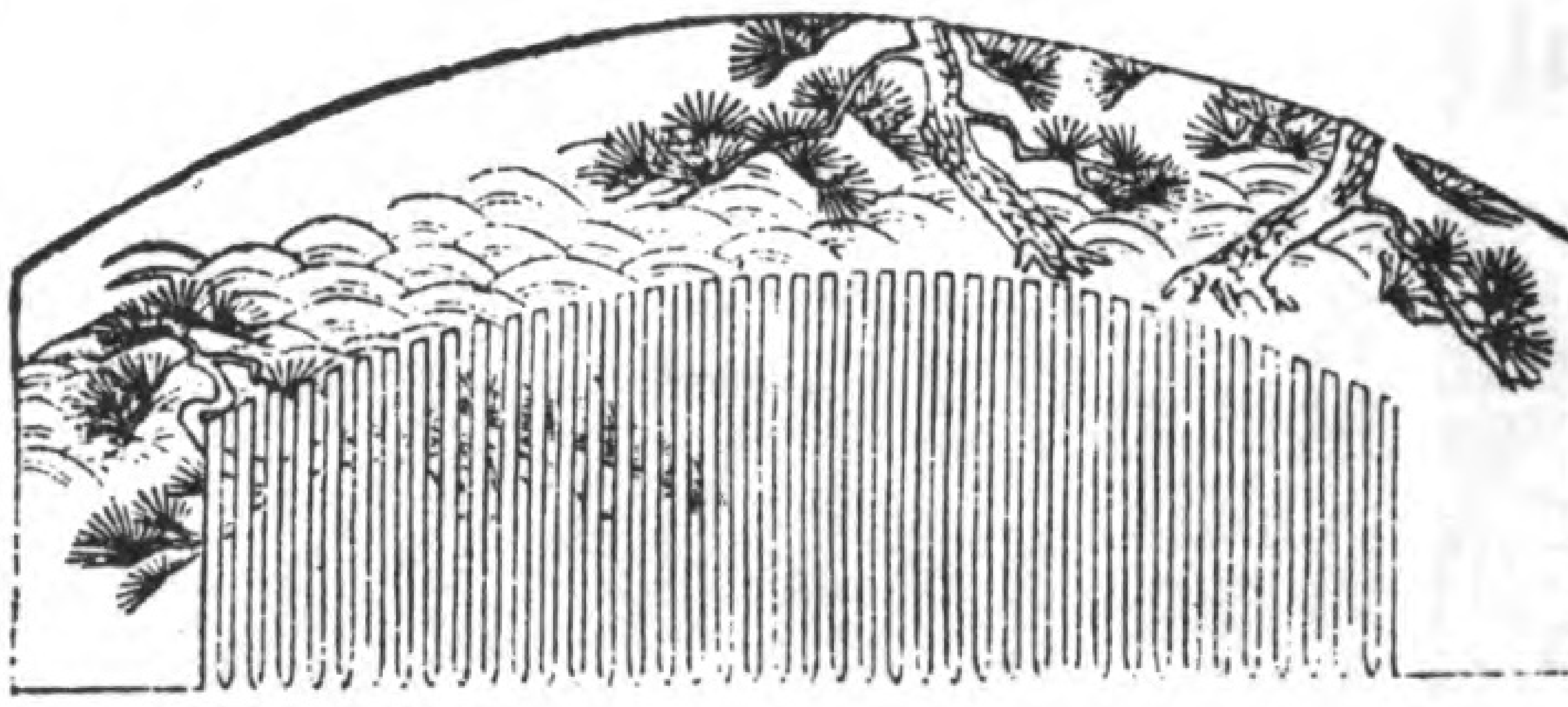
ツエサレウイツチ號

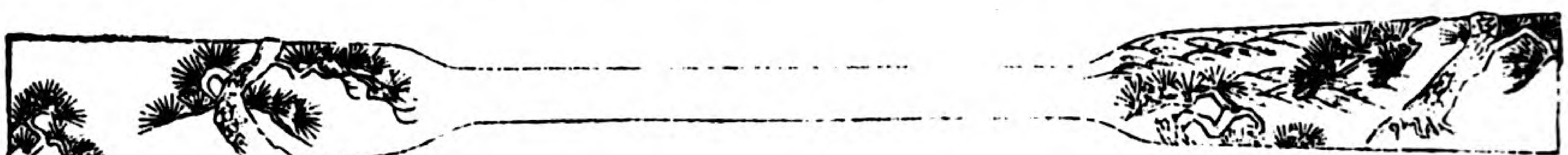


ポルダワ號

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御蒔繪　櫛　笄



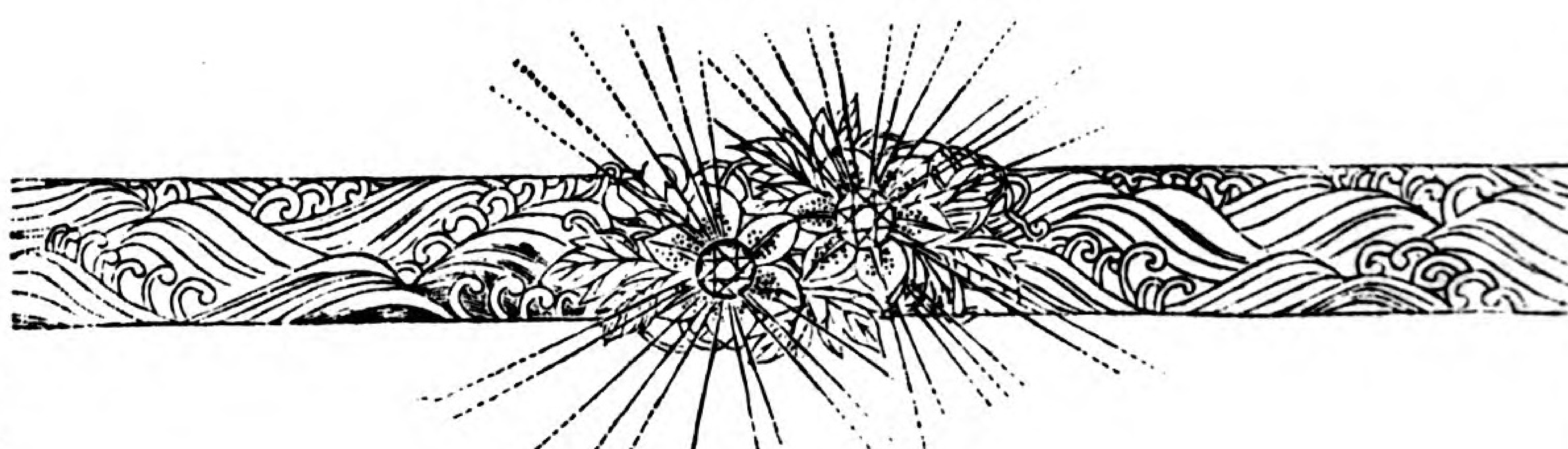


柳の髪のうるはしきに眺めを添ろ月ならで四季を選ばぬ櫛笄は花紅葉いろ〳〵候へど今般新調致せしは厚鼈甲又は四方張を以て流行の中京形に造り之に諸大家の意匠を凝せし名花山水其他の模様を蒔繪せしもの又は奇貝寶玉類を彫刻嵌入せし佳麗の品なれば世の貴婦人方は流行に後れ給はぬうち御注文あらんことを

墨鼈甲臺一組價
十圓十三圓十五圓
廿圓以上五十圓迄

四方張臺一組價
三圓五圓六圓八圓
十圓以上十三圓迄

貴金製具附帯留





花も錦も夫々の取合せありてこそすべての價あれ帯美はしくとも帯留佳ならば裝ひとゝのはず玆に本店新製の帯留は諸大家の意匠に係ろ斬新の圖案を其儘黄金白金銀赤銅朧銀等に彫刻或はダイヤモンド眞珠其他の寶石類を嵌入し紐は鶉瀨地の縫ひ取り又は金襴錦朱珍等いづれも美術の精巧を極めたる品なれば霞の帯の引きもきらざる御注文あらんことを

金製彫刻金具付價　十二圓　十五圓　廿圓　卅圓以上六十圓迄

寶石入金具付之價　二十圓　二十五圓　五十圓以上一百圓迄

銀赤銅麗銀並彫刻金具付價　三圓　五圓　六圓　八圓以上十圓位迄　各種

（本店に於ては市内の分支店共通仕候小間物切手發賣致候間御用命奉願候）

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

松田幸治郎

電話新橋五五一番



十八分で二升の御飯がモー出来た
特許
瓦斯竈
瓦斯七輪

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

金製指環

●川端玉章先生考案並畫

●加納夏雄先生考案並畫



●一個ニ付八號二手乃至十八金目方三匁付片切彫刻價十八圓ヨリ二十三圓迄◎同十八金目方三匁付平象嵌入價二十圓ヨリ二十九圓迄◎同二十二金目方三匁五分付片切彫刻價二十五圓ヨリ三十七圓迄◎同廿二金目方三匁五分付平象嵌入價三十一圓ヨリ四十七圓迄（市外郵送料金廿錢）

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地

電話番號新橋三百三十三（長距離加入）

時計寶玉類貴金屬美術品及銃砲火藥商

天賞堂

天賞堂出張所々在地

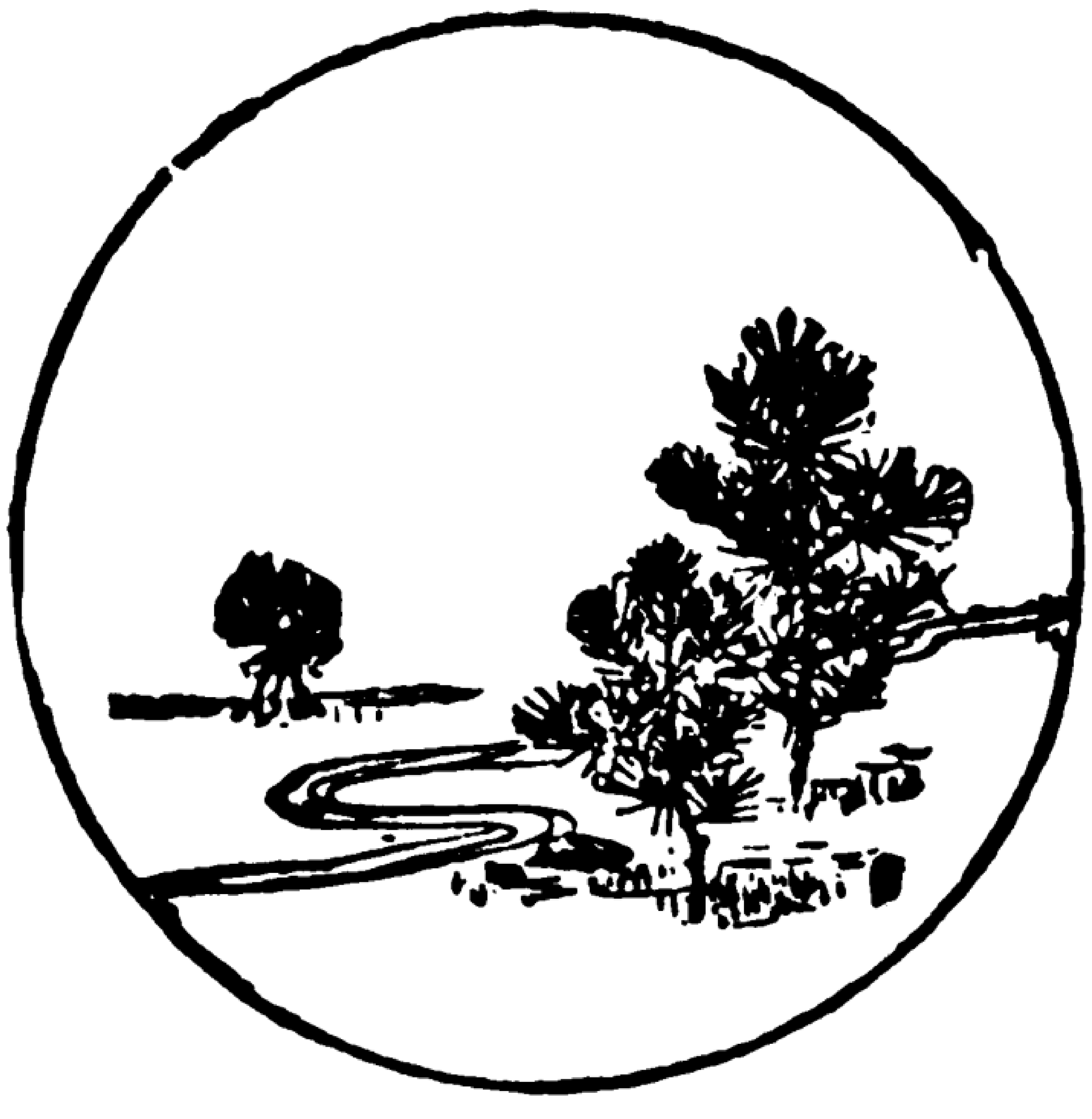
●東京市神田小川町●横濱市●名古屋市●大阪市●廣島市●熊本市●長崎市●小樽臨時

盃類圖案一班

（金、銀、輕白金、白銅、安質母尼杯及木盃製作應用）

●玉田先生畫

稚松細流圖



生ノ寶ノ還ノ賀達ス
臨親著ハ層親ニ用

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地

時計寶玉類貴金屬美術品及各種銃砲火藥商

天賞堂


（特電話新橋三三三）

天賞堂出張所々在地

●東京市神田●長崎臨時●名古屋臨時●大阪市●廣島市●熊本臨時●長崎卅●小樽臨時

●無料贈呈 天賞堂營業一覽（送料四錢）

旅順口



女鑑兼題投稿優等者



原田ひで子



青木たま子


内外博覧會金牌受領
FIRST CLASS. GOLD MEDAL. GOLD MEDAL. FIRST CLASS. FIRST CLASS. FIRST CLASS.
PATRONISED BY THE IMPERIAL HOUSEHOLD
最上醤油
REGISTERED
TRADE MARK
元和二年創業
ヒゲタ醤油
宮内省御用達
田中玄蕃醸造
下総國銚子港
ESTABLISHED IN 1616.
HIGETA SHOYU.
Manufactured BY
G. TANAKA,
CHOSHI, JAPAN.

御注文の節は女鑑廣告に據りし旨御附記被下度候

帝國貯蓄銀行

銀座一丁目河岸通り

電話 新橋 八一六 二八〇八番

- 飯倉四ッ辻 飯倉支店 電話新橋一五七四番
- 赤坂表一丁目 赤坂支店 電話新橋二〇六八番
- 四谷大通り 四谷支店 電話番町五一〇番
- 入神樂坂 神樂坂支店 電話番町六三〇番
- 本郷一丁目角 本郷支店 電話下谷七二番
- 神田須田町 須田町支店 電話本局二〇七三番
- 兩國米澤町 米澤町支店 電話浪花二五九〇番
- 淺草吾妻橋通 吾妻橋支店 電話下谷三番
- 南品川一丁目 品川支店 電話新橋一一三九番
- 横濱吉田町 横濱支店 電話横濱一三〇四番
- 日本橋坂本町 代理店 田中銀行 電話浪花二四〇番

第五回博覽會褒賞受領



賣捌は全國小間物店賣藥店に特約あり



發賣元 東京市京橋區銀座三丁目 松澤商店

賣捌所諸々藥店賣藥店にあり

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

東久世伯爵題辭
本居侍講校訂

東京府知事千家男爵
篠田神宮奉齋會々長 題詠
角田熱田神宮々司

高柳秀雅氏著 （假洋裝 美本

（新刊）

精神教育 和魂百人一首

全壹册

定價金卅錢

……おのれは小倉百首の戀歌のみ多くして時勢に適せぬことをはやく見とめたり、物學ぶ幼兒のたすけとならぬことも疾くより見知りたり。そを知るより良き書はなきか、面白き集はあらざるかと心を碎きて……花おもしろき朝も月あかき夕べもこの事のみは忘れずありけり。學校の聖殿に宿直しては身を清め心を靜にして考へ歩兵第六聯隊軍旗の下にありても演習のひまには勉めて心を雄々しくし或は謳ひて見つ吟じてみつ且つ其の人々の心を花と月とにたくらべ、功業のたかきを仰ぎつゝ月日もくれ竹の園生の御身はかけまくも畏かれど、九重の雲井をたちならしたる公卿より國々の國のあるじより梓弓やたけ心の武夫も鳥のあとふみしらべたる大人たち、墨ぞめの衣にやつれたる世すて人に至るまで、たかき賤しき男女のへだてなくただ心の麗しきをとりて名づけて和魂百人一首といふ。……白雲かゝる高嶺にも分けのぼるべき青年子弟の養氣の友となるべく言行のあらましを書き加へて教育の助けとなれかしとねがふにこそ。……（以上は著者の記せし序文の抜萃）

● 本書は幼年子弟が家庭に於ける讀物として編みたれば成るべく平易の歌をとれり。
● 人名は普通にきこえわたれるをとれり。
● 肖像と繪畫とを入りまぜたるは見るものをして倦まざらしめむがためなり。
● 本書は學校の褒賞用書として最もよろしきものなり又家庭の贈進用としても好良なり。

◎ 發兌元 東京日本橋區本町三丁目一七 電本局三〇二（特）本局一六一七 金港堂書籍株式會社

賣捌 全國到る處にあり

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

東京府第一高等女學校教諭市川源三著

高等女學校用 國史教科書

（文部省指示濟）

全一冊
菊版總クロース
定價各金五拾錢
郵稅金六錢

●本書は文部省教授細目に據り、著者多年の實驗と豐富なる學識とを以て、高等女學校及び之と同程度の女學校の教科書として編纂せられたるものなり

●史實中特に女子に關係し若しくは、女子に教育上裨益多き事項を記載することを勉めたり。然れども之が爲めに歴史の本旨體裁を害するが如きことは毫もこれなきを期せり。

●されば本書は一般女子用教科書として最も適當のものたると同時に又た古往今來本邦女子が歴史中如何なる部分を働きしも又働くべきを知るに於て餘師あらん。

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

愛國女學校生徒募集

本校は日進月歩の社會に遅れて本邦女子に須要なる學術技藝を授け世界の潮勢に鑑みて愛國の美風を喚起し奉公の至誠を完からしむる所以の道を講す◎校長は木村文學博士にして講師は各專門大家熱心懇切に教授せらる◎規則入用者は郵券二錢送付すべし

◎本科技藝科各級入學許可◎

東京麴町區元園町二丁目四番地

◎生徒募集

●本校位置ハ電車ノ便アリ

●望ニヨリ寄宿ノ依賴ニ應ズ

東京芝區三田四國町二番地

私立 東京高等女學校

●生徒募集

入學試驗は四月六日七日兩日施行

豊多摩郡澁谷村中澁谷

實踐女學校

常盤松御料地內

女子技藝學校

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

前女子高等師範學校教授川村理助先生著

高等女學校用 **動物學新教科書** 全一册 文部省檢定濟

同 **植物學新教科書** 全一册 文部省檢定濟

同 **生理衞生新教科書** 全一册 文部省檢定濟

菊判總クロース美本 各定價五十錢 郵稅六錢

●近時高等女學校用博物教科書の出版せらるゝもの充棟汗馬も啻ならずと雖も、其の多くは編纂の法を得ず、或は徒に其の材料を多くして乾燥無味に陷り、或は猥りに學理的に偏して教授の實際と隔絶し、若しくは日常生活に無關係にして、眞に趣味と教授の實際と日常生活との調和を謀りたるものは誠に少なし。

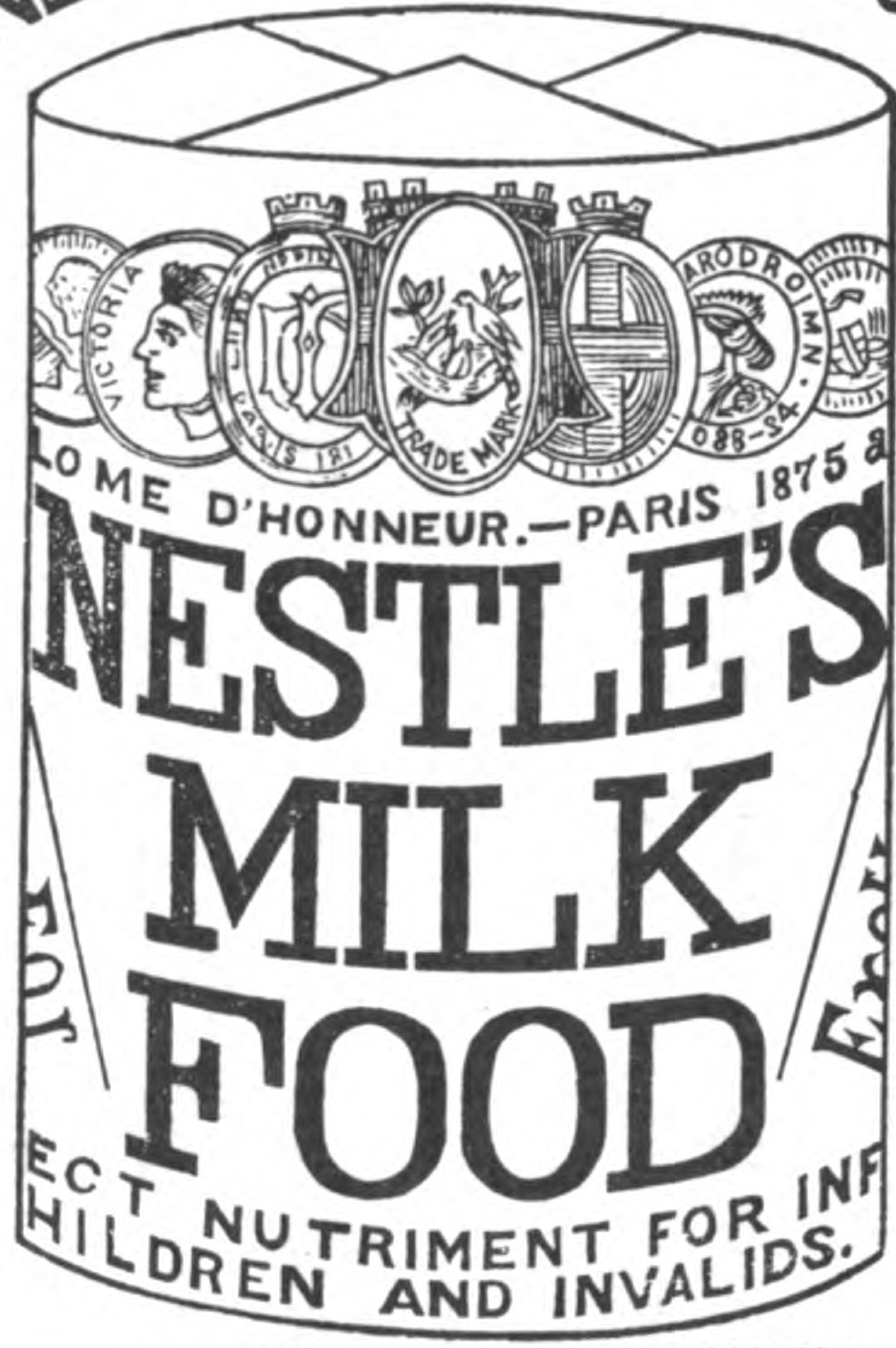
●本書は此に慨する所あり、高等女學校及び此と同程度の各女學校の博物科教科書に充てんが爲め、著者多年の經驗と豐富なる學識とに基き文部省撰定教授細目に據りて編纂し、趣味と教授と日常生活との調和配合に注意し普通博物學教科書の通弊に陷らざらんことを勉めたり。

發行所 東京市京橋區築地二丁目 株式會社 國光社

瑞西國ヘンリーネッスル氏製

ミルクフウド

NESTLE'S MILKFOOD



各國帝室御用品

各國醫科大學大病院

醫學博士ノ賞讃ヲ恭フス

（全國洋食品店及藥舖にて販賣す）

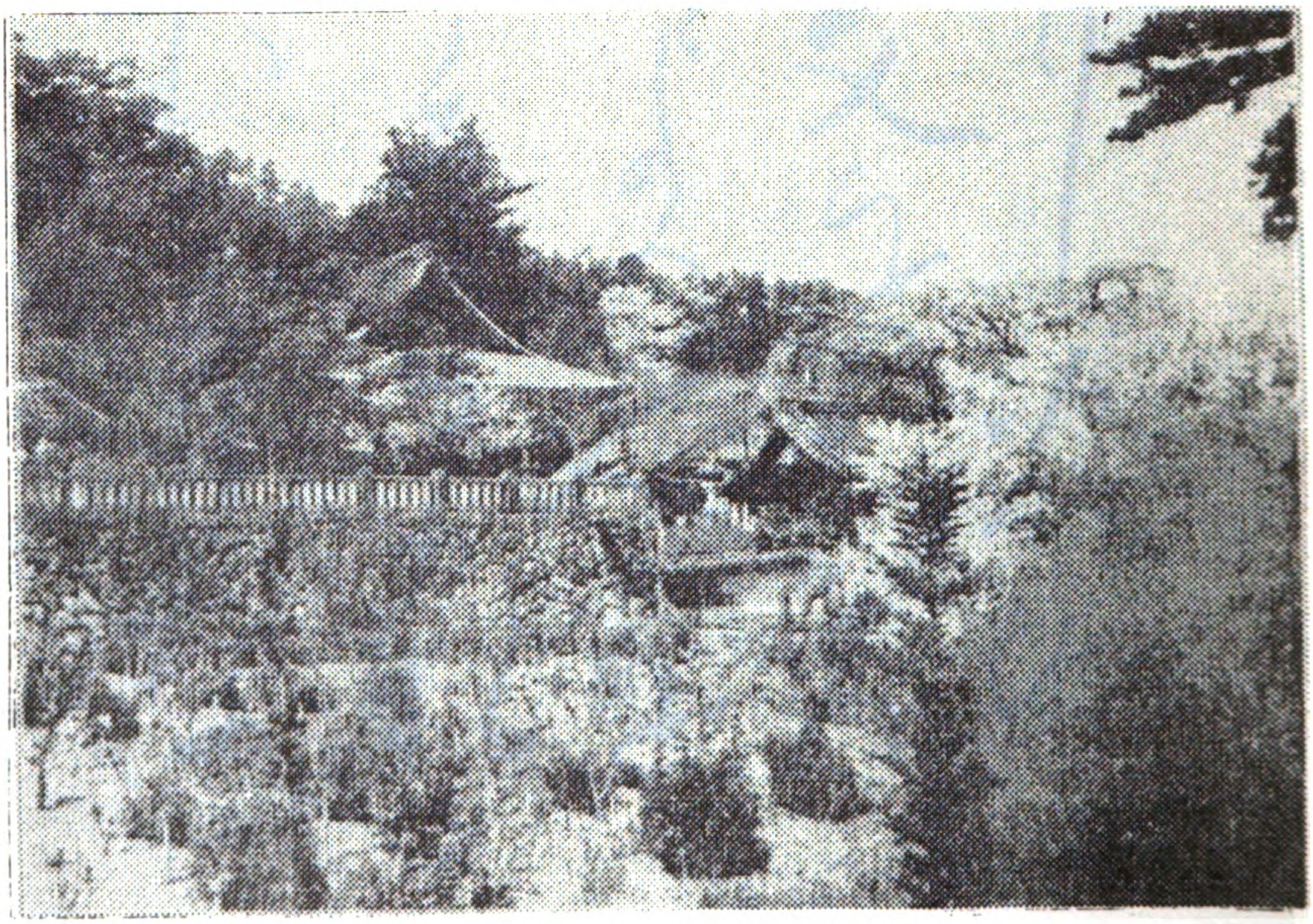
ミルクフウドは麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

ミルクフウドは小兒の生育、病者、虛弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり

ミルクフウドは完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの場合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり



向島三圍社畔の春色



信州善光寺如來堂の櫻花

いまより火の
をやらし文をもたろ
けくらわてまめ人を
友よらにことそてらまれら
うなるそそたかいわりらかきな
れ

宮里三木枝子書



女子技藝

編物模樣圖按

一、本書は毛糸、絹糸、木綿糸等にて諸模樣を編み或は刺繡するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなれば女子技藝に於て教育上參考上必携書なり

一、編物模樣圖案は從來歐米各國に於て盛に出版されしものあれども其意匠圖案の樣式風趣は直ちに我邦工藝の風致に適應せざるのみならず價格の點に於ても不廉にして一般に普及する能はざりしを以て本書の著ある所以なり

一、本書は著者が專門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を研究參照し前項の欠點を改善せしものにして我邦に於ける編物圖案の嚆矢唯一の書なり

一、編物は本邦女子の技藝として貴賤、都鄙の別なく極めて適當の手技なるを以て漸次盛大の域に達しつゝあるのみならず海外に輸出するの望ありと雖も從來行はれたる意匠圖案の拙劣なることは斯道技藝家の遺憾とする所にしてこれが欠點を補はんが爲め本書の著作ある所以なり

一、本書著作の順序は片假名、平假名、歐文字、等の簡易なるものに始まり横模樣、連續模樣、角模樣、圓模樣、隅模樣、單獨模樣、等の順を經て漸次、高尙優美なる繪畫的、下繪に進み花卉、蟲魚、獸類、器具、風景、人物等を蒐集しあるを以て編物修學者の教科書として適當なるのみならず斯道技藝家の好參考書なり

一、本書は編物模樣圖案に必要なるは勿論なりと雖とも參考細工、織物、等各種手工技藝の教育參考書として必携のものなり

一、本書の普及は女子技藝發達上大に有益なるを以て來る四月十五日迄に本社に直接別紙割引券を添へ申込あるときに定價の一割引無郵送料にて御送附致し女[illegible]購讀者の好意に報ゆべし

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

東京府第一高等女學校教諭市川源三著

高等女學校用教育學教科書

（文部省指示濟）

全一冊
菊版總背皮
定價金五拾錢
郵税　金四錢

●本書は著者が豐富の學識と多年の經驗に基き文部省所定の教授要目に據り高等女學校用教科書として編纂せられたるものなり。

●心の現象は最新の學說によりて說明し、教育の法は、公平中正の主義によりて說明せり。

●本書は三大部に分ち、第一部にて心理篇を說き第二部にて心理篇を復習し之を豫備として家庭教育及び幼稚園教育を說き、第三部に家庭教育幼稚園教育を復習し、小學校教育の部を授け最後に兩者の比較を試む。

●故に本書は高等女學校及び此と同程度の女學校の教科用書として適當なるのみならず、子女の唯一の教育者ともいふべき母たり或は母となるべきものゝ必ず一讀すべき良書なりと信ず。

發兌元　東京築地　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候





定價•金五十錢•金廿五錢•金十五錢•金十二錢

女鑑
第拾四年
第五號

恤兵と女學校

奉公美譚と題して各新聞紙に掲載するところのものを見るに、日々凡そ一欄以上二欄三欄の紙上を塡むるも猶ほ足らざるものゝ如し。我が國民が報國の志に厚く、奉公の心に富めることは、今更らのことにあらずと雖も、今回の如きは、殆んど已往曾て見たるなきの盛事なりといふべし。

富豪縉紳及び顯貴の人々が、幾千萬圓の巨金を献納するの美擧たるは、勿論のことなれども之に優して、尤も感動を予輩に與ふるは、田間の父老や、坊間の少婦や、其他の卑賤にして貧困なる人々が、其の勞働によりて得たる賃錢を割き、或は朝夕衣食の料を節して、贏し得たるところのものを献上して、毫も吝むの色なきこと是れなり。此の人々の献納したるものを以て

之を富豪縉紳及び顯貴の人々のそれに比較して、單にその金額上より打算せんか、此れの千人は、彼れの一人に匹敵し得べくもあらずと雖も、その報國奉公の誠忠に至つては、此れ却つて彼れに優るものあるも又た知るべからざる也。何となれば彼れは餘りあるもの丶中に就きて、其の千百分の一を出し、此れは足らざるもの丶中よりして、殆んど其の十分の十を出したるものなればなり。

されば物の大小と多寡とは、國家に對する臣民の志を尺度すべきものにあらずして、た丶その丹心は大小多寡の如何に拘はらず、献納したる物の上に存在するものなりと解釋せざるべからず、若し徒らに大小と多寡とに拘泥して、判定せんには、千圓を献じたるものは、百圓を献じたるものより忠義の志に厚く、拾圓を納めたるものは百圓を納めたるものに比して奉公の志薄きものといはざるべからず。世豈に此の如き道理あらむや。

今は吾國海軍の忠勇なる、既に一たび仁川に捷ち、三たび旅順に勝ち、又た浦鹽斯德克を攻撃して、敵の肝膽を寒からしめたり。思ふに陸軍もまた一たび旗鼓相接するに至らば、忽ち大勝の吉報を見るべきは、疑を容れざるところにして、終に全局の勝利を收むべきは、炳として日を睹るよりも明かなりと雖も、彼れは世界無類の惡國なるに加ふるに、又宇内無二の大國なるを以てし、且つ强國强兵を以て、常に歐亞の天地に誇稱したるもの、海戰已に全く利を失うて、再び闘ふの勇氣なしと雖も、猶ほ强暴殘惡、剽悍頑兇を以て名ある哥薩古以下精鋭と稱せら

る丶陸兵あり、縱ひ一敗再敗して地に塗る丶の醜狀を呈し、勢ひ已に窮境に陥るも、未だ俄かに白旗を立て丶降を吾が軍門に乞ふ能はざるの事情あるべし。總督アレキシイフが、その幕僚以下を率ゐて、奉天に逃れ、更に遠く哈爾賓に走らんとすとの情報は渠れの能く爲すなきを知るに足るべしと雖も、又以て其の意を用ゐて、持重耐久の謀を講せんとするを察すべく、大將クロパトキンが戰爭の繼續を豫想して、少くも十八ケ月を費やさゞるべからずといひしは、決して誇大の言にはあらざるべし。彼れと是れとを思ひ合すれば、吾が勝算は歷々たるものあるに拘はらず、戰爭の終局を見るの日は、今より一年若くは二年の後にありと覺悟せざるべからず、而して此の覺悟や、啻に軍事其他當局の人のみならず、一般國民の大に注意を要すべきものならずんばあらざるなり。

戰爭の終局が、今より一年若くは二年の後にありとすれば、軍費、軍需、其他戰爭に必要なる諸般の事物が、戰鬪の期間に繼續して、間隔することなかるべきは勿論、民間の篤志にかかる恤兵の美擧の如きも、亦粗々間斷なくして以て、戰爭と終始するところなかるべからず。萬一初めに熱するも、中ごろ冷やかに、初めに盛んなるも、後に衰ふるが如きあらば、吾が國民は、輕躁浮華、一時の流行を趁ふことを知りて、更に持久沈重、遠大の赤心に乏しきものなりとの嘲りを、歐米各國の人士より受くることあるも、如何にして、之を辨疏するを得べきぞ。斯の如くなれば、外には赫奕たる戰捷の名譽を輝かさんも、内には人民の熱誠に乏しきを列國

に嘲笑せらるゝを免かれざるべし。而して予輩は吾が忠誠なる國民が、一年二年は愚か、假ひ五年十年の久しきに彌るも、苟も戰爭の終結せざる限りは、冷熱俄かに處を異にし、盛衰地を易ゆるが如き、輕忽なる擧動なきを信ぜんと欲す。

此際予輩の尤も希望に堪へざるは、女學校及び女生徒が、從軍兵士に對する物品寄贈のことならざるべからず、或女學校は、軍人袋といふを製し、各種の藥品手巾などを入れて献納せんとするあり、或は女生徒の製作品展覽會を催ふし、その賣揚金を以て、必要なる物品を購ひて献上せんとするもありて、みな競うて恤兵の美擧を斷行せんとするものゝ如し、思へ是等尊ぶべき女學生の志が、戰場に達きて、砲煙彈雨の下に、死を見ること歸するが如くなる兵士の手に渡らんときには、如何に其の兵士は、花の如き同胞姉妹の心を籠めたる贈物に對ひ、敵行の涙を濺ぎて感動し、愈々敵愾の志を振作すべきぞ。されば事情の許す限りを以て、或は時間を節し、或は冗費を省きて、恤兵の美擧を行ふと共に、また叨りに先きを爭うて、たゞ速かならんことを是れ勉め、今日明日にも献納するにあらざれば、戰の間に合はざるが如く考ふるは、寧ろ早計に失するものなることを思はざるべからず。此故に急かず躁がず、徐ろに爲し、靜かに行うて、戰爭と共に終始するの謀を爲すは、思慮ある女學校、分別ある女生徒の取守すべき道なりと信ずるなり。

論叢

女子と高等教育

ドクトル　福岡秀猪氏談

一　高等教育

女子には高等教育の必要は無い、若し必要があるとすれば、夫れは或る少數の不幸なる女子のためのみにいふ可きであるといふ人がある、けれども之は女子を蔑視した御話である、私は夫の文明國の社會が、プロフエサーの地位に立つ位の人は、必らず大學出身の女子と結婚するが如く、追々日本もさうなると信じて居る。

併し私は女子教育の專門家ではない、いはゞ門外漢であるから、深く立入つてはいへない、或は無責任の地位に居るものであるから、多少無鐵砲なとをいふかも知らないが、其邊は特に御許しを希ひたい。

私は平素、我國に二ツ三ツ立派なユニバールシテー的の大學を造つて、女子の高等教育に充てたいと思

つて居る、世間では、克く女子に惡まれ口をいつて、女子に高等教育を仕込ば生意氣になる、御轉婆になる、家政が御留守になり、夫を御尻に敷くなど丶非難を數へ立てるが、這は間違つた御話で、そんなことがあれば、それは必らず高等教育を仕込んだからではなくつて、下等な高等教育即ち表面ばかりの高等教育を仕込んで、實際は中等教育の上等とも何とも分らぬものを仕込んだ結果であると斷言したい、人は男女何れにまれ、深く修養したるものは、決して生意氣などの惡風を有つものではない。

然るに、日本では、女子教育の仕方が多く女子を愚弄するような傾きがある、各女學校では、女子の學力を試驗するに、餘りの寛大で、落第生を禁物として居る、それならば可く出來る故かといへば、決してさうではなく、出來ても出來なくつても及第さするのである、されば高等女學校を卒業したといつても、其學問の力は甚だ如何はしい、目白に女子大學が出來たといつても、其科目の程度は決して大學といふべきほどのものではない、ソンナ仕方で女子を試みて、而して女子に高等教育は必要でない、高等教育があれば、生意氣など多くの弊害を生ずるといふのは、私は甚だ女子を愚弄して教育し、其當然來る可き惡結果の上に立つて、彼是非難するので、正しい仕方からして女子を試みた上の御話ではないと考へる。

二　能力

女子は男子に比して能力が劣つて居るといふ者がある、或は克くいふ、夫唱婦隨ふとけれども、是は女子を玩具の如く心得て居る時代に出來た言葉で、斯く女子を低く視るは、決して當を得た者ではない。

女子は男子に比して、劣りはしないが、若し劣つて居るとすれば、それは社會の罪で、多くは、男子の暴力に女子が壓制せられる結果であるといふが歐米に於ける普通の解釋である、私は日本の如きは確かに

社會の罪からして、今日の如き哀れな女子の地位を作つたといひたいのである、日本の女子は、遺傳のため、男子に劣つて居るといふ説があるが、或は爾うかも知れぬ、されば今日男子が女子と共に女子の遺傳性を破壞して、眞に女子の本色を現さしむる樣に盡力するのが其義務の一ッである。

大陸(歐羅巴)では、女子は立派に高等教育を受けられ、伯耳義などでは、女子が男子の大學に通うて居る、尤も其數は尠ない、而して女子の大學卒業は非常の名譽となつて居る、且つ其成績決して男子に譲らない、英佛獨等にても、或はパンションとかセミナレとかいふ普通專門學校の上に尚四五の立派なる高等教育を授くる所がある、而して其教育の仕方はいふまでもなく、我日本の如き甲板的のものではない、是等の國の女子は、多く文學、哲學、理學を専攻して、法學生は殆んどない、米國にては、稍趣を異にし堂々乎としてユニバルシテー的の大學が建てられ、法學も亦盛んに研究せらるゝのである。

而して、それ等の女學生は、不幸なる女子といふ人達ではなくして、中等以上の社會に賢妻良母たる目的を有せらるゝ良家の女子が多い、女子に高等教育の必要あるは不幸なる女子にのみ然りといふ論は此處でも事實に於て破れて居る、發達して居る社會にては夫婦の智識を平均することが、肝要であつて、それでなければ到底内助とか、家庭の美しいといふことは出來ない、夫が外交官たれば、妻も亦外交官、夫が詩人なれば、妻も亦詩人といふ樣にならなければならぬ、さうなれば温かいホームの御話でも常に夫の處世上の作戰計畫となるのである、されば妻たる人の能力は、必らず夫に劣らざることが肝要である。

三　如何なる女子大學乎

日本でも、現に中等以上の社會に立つ人は、高等教育のある妻を望んで居るものが多い、貴族、宮中の人、

外交官、軍人、學者凡べて交際社會に立つ人々は、皆その妻たる人が、新敎育殊に高等敎育を受けて居ることを望んで居るのは一樣である。

然るに日本に現存する女子の高等敎育は此需要を充すに足る乎、女子高等師範でも女子大學でも、或は其他の女學校にても、殆んど此に思ひ到れば失望しなければならない、女子高等師範は、女敎師として立つ女子の養成せらるゝ所で、元より良妻賢母の側からは、立論し難いが、女子大學は良妻賢母てふ美名の下に建てられて居るので、其授くる敎育の仕方は到底私共に滿足を與へない、簡易なる女子の專門敎育校としては別に非難すべき點はないが、之を一のユニバーシテーとしては、或は中等以上の社會に立つ良妻賢母を出す所としては、未だ甚だ足りない。

私のいふ高等敎育を授く可き女子大學とは今時の如き簡易なる高等敎育を授くるものではなくして、其學校は嚴格に其入學生を吟味し、十分に豫科にて學ばせ、それから四年或は五年で卒業せしむるので、卒業したる曉は、男子の帝國大學卒業生と餘り軒輊のないほどのものでなければならぬ。

女子大學を卒業したりとて唯名ばかりで其學問技藝は、家政でも、英文でも、國文でも、單に其道開きを仕たに過ないものならば、到底其實力を以て自分は大學を卒業したりといつて非難なく社會に立つことは出來ない、かゝる中途半途の敎育は甚だ女子の爲に好ましからぬものである。

四　高等女學校と高等敎育

更に他の方面からいつても、凡て何事でも最上なるを望んで、其次位を得らるゝものであるから、我國女子の中等敎育を盛んにせんと欲せば、先づ其高等敎育を奬勵するのである、さうすれば、自ら中等敎育即

ち高等女學校が大に振ふて來るに違いない、目白の女子大學の附屬高等女學校が盛大なるは、何である乎といへば、全く其上に女子大學といふものがあるからである。

今の高等女學校が、殆んど遊び半分的の仕方であつて、眞面目を缺ぎ、教育の至難なることを知らざるが如き惡風も、一朝最上なる大學校が二ッ三ッも出來て、女子大學の卒業はなか〳〵容易なるものでないといふこととなつたならば自ら此の弊は刈除せらるゝに至るべしと思ふ、然るに今日の如く、高等女學校を卒業すれば、直ちに女子大學で、もう此先女子の學ぶ可き所はないといふ有樣は、決して中等教育を盛んならしむる所以ではない、少成に滿足し半可通にて生意氣となるは當然である。

五　女子大學に注意すべきもの

女子が家政を有つ上に於て必要なるものは多々あるが、就中法律と體育の二科に於て特に注意する必要がある、それは邦人の習慣として、餘り此二科を大切に思はない、けれども處世上此二科位必要なものはない。

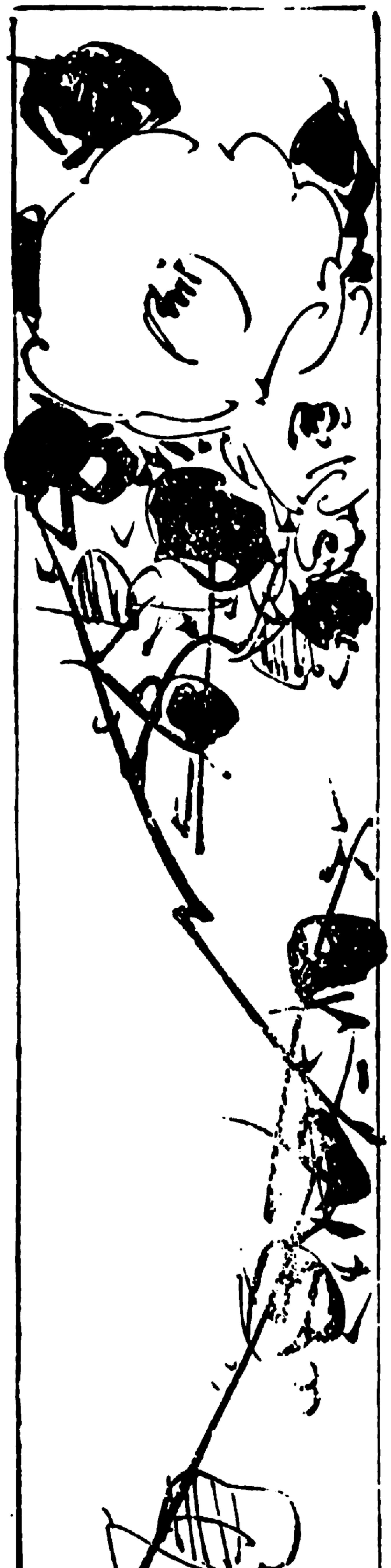
女子大學にては、國文、家政、哲學の如きは克く發達しつゝあるが、法律思想には乏しい、體育は大學生といふ上から氣取るのでもなかろうが、高等女學校よりはヤヽ等閑に付する傾きがある。

併し良妻賢母となりて第一に必要なることは地所家屋の貸借、金錢の取引、親族關係等、即ち法律思想がなければ分らぬことが多い、而して此法律上の智識は何も玄妙なる理窟を上下する法理の說明ではなくして、通俗の法律話が出來る位の所に養成したいもので、今の女子大學、或は今後出來る大學にても此點に注意したら可からう。

體育養成に付ては、其教師の人格に注目することが疎いと思ふ、女子の體育は柔らかにして健全であるやうにせんければならぬ、而して教師は其モデルであるから、立派なる發達を遂げて居る人、殊に女子的に柔かで健全なる人でありたい、然るに日本の女子體育の教師は、多く男子のと同じやうに筋骨逞しきものが多い、男子ならば可いが、女子にかゝる體育教師あるは決して其宜しきを得たるのではない。

兎に角、日本の女子高等教育は、未だ女子其者が惡い遺傳があるとか、或は天性が愚かなとかいふよりは、寧ろ教育者が惡い、教育機關が不十分である、否女子を愚弄しつゝあるといふ方よりいふべきである、されば我國にては女子に高等教育の適不適は未だ何等の實驗を積まないで、男子自らが自らの惡く試みた結果の上から、氣隨に亂暴なる斷定を置くものであるといつて可い、而して之と同時に、已に中等以上の社會は熱心に高等教育ある女子を歡迎しつゝあるに社會は未だ一個も適當なる供給所を造つて居ないといつて可い、故に予は此の欠乏を補ひたいといふのである。

（をはり）



戰爭と國民

文學士　濱田紅於

表面には萬國平和會議といふ立派な大風呂敷をひろげながら、裏面には百方奸計をめぐらして、他人の國土を占領して居るロシヤ國は、實に神人の忿怒の中點となつたのである、我が　天皇陛下もその亡狀を赫怒まし〳〵て、遂に宣戰の大詔を煥發し給ふた、當に起るべくして起つた此度の戰爭は、誠に千歲一遇の大快事である、この際に於て我々國民は何事をなすべきであらうか、宣戰の大詔にもある如く、軍人は力を極めて軍事に從ひ、その他の國民は各自その業務に盡力すべきは勿論である、併しながらこゝに一つ考ふべきことがある、ギリシヤの或學者は、敵軍がその書齋に亂入しても、平氣で研究をつゞけてゐた、我國にもかの明治二十七八年の日清戰爭を知らなかつた學者先生があつた、これらの先生連の業務に忠實なることは、以て手本となすべきであるけれども、一般國民がこれではこまると思ふ。

予は過日某師團出征を見送つた、沿道の學校の職員生徒が萬歲を唱へ、出征軍歌を勇しく歌ふ毎に、將士もこれに和して手を振り足を動かし、無限の希望と勇氣とが、その眉宇の間に充ちて居た、然し個人としては、隨分つらい悲しい事情もあつたであらうが御國のために、その恩愛の絆を切つて、不知の他國に出征するのである、若しも他の國民が、各自その業務に盡力すると稱して、冷靜に構へ込んで、一言の萬歲も唱へなかつたなら、如何であらうか、霜をいたゞき氷を踏み、夜寒の風に吹かれながら、出發する軍人達を、見送る人が一人もなかつたなら、如何であらうか、或は三軍の元氣に關係するであらう、三軍を歡送する萬歲の聲は、やがて敵軍を擊退する鯨波であることゝ、予は思ふのであります。

文部大臣が訓令を出して、諸學校に注意する所があつた、そこで或はその文字を墨守して、午前は授業をして、午後は見送をすると云ふ學校もあれば、或

大都會の學校は、一切の歡送を全廢したと云ふことである、半日だけ見送るといふやうな偏頗な爲方があらうか、歡送全廢を決議するやうな人々は、抑も國民の元氣を解しないものである、而して彼等の議論は、皆文部大臣の訓令を小楯に取つて居る、乍併訓令の意志は、狂亂的に行ふ提燈行列や戰捷祝賀を禁じたので歡送すべからず、提燈行列行ふべからずといふのであるまい。

過日の讀賣新聞に、板垣伯の實歷談が載せてあつたが、戰爭は、勢でやるのだ、所謂旗鼓堂々、勢を以て敵を制するのである、然るに拘らず、出征軍人を騷々しく見送るのは、よくないなどゝ云ふ事は間違つた話で、予も維新の際、奧羽で戰爭をした時に、戰爭は冷靜な頭を以てやらなくてはいかぬと、云ふ考でやつて見たがやはりいかぬ、冷靜な頭で進退するのは大將株だけで、一般の兵卒は矢張、勢を以て戰はなくては駄目だ、伯はかく言はれて居る、しかれば我々國民は力を盡して、軍勢を振作し、軍氣を鼓舞すべき義務を有して居るのである、歡送の如き提燈行列の如きは、その一方便ではあるまいか。

歡送と云つても、これが一月も二月もつゞくのではなし、長くも一週間位である、千載一遇の大快事に際會して、僅か一週間を犧牲に供して、何程の損失があるか、殊に小學校や、中學校の生徒をして歡送せしめるのは、忠君愛國の精神を喚起せしめる大功力があつて、敎場に於ける千言萬語の空論よりも、百倍の感化を與へるであらうと思ひます。

仙臺市に於ては、婦人會の六團體が相協同して、防寒用の耳嚢を製作して、師團に献納した、その會員中には耳順の老嫗もある、立派な令夫人もある、妙齡の令孃もある、此等の會員達が、朝は九時より夜の九時に至るまで、耳嚢製作に勉められた、その精勵なる實に讃歎に堪えない次第であります、而して軍隊出發の際には、降雪をものともせず、淤泥の途を凌いで、唱歌の聲いさましく歡送せられた、かの歡送全廢を主張する人は何の面目かある。

乍併我々は熱誠なる一面を有すると同時に、冷靜なる一面をも維持しなければならぬ、日本人は元來吶喊的の國民である、又お祭好の國民である、あまりに熱誠の度を高めて、お祭好の狂體を演ずるのは賞すべきことでない、特に教育者はこゝに注意していたゞきたいのである。

我國民が露國に對して敵愾心を起すのは、當然の事であり、これをおこさしめるは、現時の教育上必要の事であらう、乍併頭から露國を馬鹿にしてかゝるはいかゞであらうか、或は坊主が惡ければ袈裟まで惡いとて、露國公使館の空屋や、ニコライの教會堂に石をなげこむ如きは、穩健な國民とは云はれまい、甚しきは他の外國人にまで迷惑をかけるものがあるが、以ての外である。

四國の某小學校では、遊戲場に世界の大地圖をかゝげて、終始生徒をして觀覽せしめ、その敵愾心を挑發せしめつゝあると云ふが、時節柄面白い考であるがしかし露國の海軍は支那のよりも弱い、ロシヤは野蠻國であるなど、敵國の有らゆる缺點のみをあげて、これを侮蔑する念をおこさしめるは、好結果を來すまい、ロシヤは勿論文明開化の國ではなからうけれども、そう缺點ばかりではなくて、幾分の長所は持つて居る、軍事に於ても、天兵の向ふ所破れざるはなしと云つた所で、軍馬は日本のものに勝つて居るし、コサック兵も中々侮りがたい、日本兵の突貫は常に成功するけれども、これを一年もつゞけては氣息がきれる、而してロシヤ兵はねばり強くして防禦することは得意だと云ふから、馬鹿にしられない、外交談判の破裂したにも拘らず、芝居見物をするやうな、悠長な司令長官もあるけれど、大國人の襟度であると云へば、一理窟は附けられる、要するに面積に於て我國の五十餘倍もある大國であるから、ゆゝしきことゝ云はねばらぬ。

大人に說くにはこれを藐んぜよ、況んや夷狄に於てをやと、韓退之が云つて居るが、これは外交家か軍人の氣宇で、一般國民は冷靜な眼を以て、彼の缺點

を知ると同時に、その長所をも知る必要がある、かの豐太閤の朝鮮を征伐した時、日常携帶して居た扇の一面には、日本支那朝鮮の略圖を描き、必要な土地にはその名稱がかいてある、又他の一面には支那語或は朝鮮語と、日本語との對譯略表が列記してある、この扇は現に子爵戸澤家の執事古瀨彌治氏が所有して居る、古今の英雄が事を爲すに當りて、いかに冷靜な頭腦を持つて居たかを想像することができる、我々國民はこの態度を取るのが穩當であらうと思ふ、徒に戰捷に狎れてお祭騷ぎをしたり、無智の兒童をして、偏頗な敵愾心をおこさしめたりするのは穩當なる行爲でない。

聞く所によれば、當今國民の態度は、日淸戰爭の當時に比べると、非常に沈着で、外國にも例のないことであると、外國人もいたく賞讚してゐるさうである、穩健なる國民は當にかくあるべきだ、この沈着をいかなる場合にも維持していくのが肝要であります。

我邦は外國と戰爭をして、敗北した先例は非常に少ない、文永弘安の蒙古來襲は、我邦危急存亡の秋であつた、その結果は我邦の大勝利に歸したが、それが大敗北であつたならば、當時の國民の態度はいかがであつたらう、その時最後の勝利は得たもの丶、文永の役には九州の人民は、ひどく苦しめられ、隨分敗軍もした、當時の國狀は騷がしかつたらう、京都の公卿たちの恐怖は又非常であつたが、鎌倉武士はそんなでもなかつた、即ちどこまでも强硬の態度をとつた、のみならず日本から蒙古へ攻入らんとの企さへあつたことは、京都九州に正確な史料が殘つて居る、日本國民の氣象は凡そ斯くの如くであります。

この度の戰爭も、勝敗の決は旣に明であるが、我々國民は萬一の場合を覺悟しておかなければなるまいと思ふ、勝負は兵家の常で、連戰連捷といふことは、形容詞にすぎずして、實際には不可能の事であるから、一勝のために狂喜し、一敗のために挫折す

るやうでは駄目である、たとへ萬一の場合に遭遇するとも、よく沈着を維持し、かの出征軍人にますます偉大な聲援を與へて、捲土重來の勇氣を養はしめるのは、これ亦我々の義務であると考へます。

これを要するに、今日の場合我々國民は、熱誠の感情と、冷靜の理性とを均齊に保ち、熱誠を以て軍人に聲援と同情とを與へ、冷靜を以て益々各自の業務を精勵すべく、而して熱誠すぎてお祭騒の狂體を演じ、冷靜すぎて冷淡に陷る如きは、穩健なる國民でないと云ふことを申したのです。

女子修養論

松村蓬麻

身を修め徳を養ふことは、吾等の片時も怠ることの出來ないもので、今男子の方は暫く之を措き、女子の修養のみに就て一言しましやう。

元來女子は感情性が強くて、凡て事物の刺戟に感動なし易く、理性と意志とは却て之に似合はず、男子に比べて物又は事を思考する力が乏しくて、それと同時に決心して事を實行するところの力が、薄弱なものであります、然しながら其情緒、即ち愛情とか同情とか美感とかいふものは、却て大に男子に勝つておる點がありますから、其足りない所を開き進めて、其長じておる所に伴ふ樣に致すのは、最も大切の事であると考へます。

今、人の心を知と情と意に分ちまして、心理學により、是等が如何に合せたならばよろしきかを述べ、終りに女子が修むべき徳の重なるものを擧げて少し御話致しましやう。

(1)知。―知といふものは、始め吾々が事物を認め識ることで、これを認識と謂ひまして、是れより觀念記臆、想像、概念、斷定、推理など、いろ〳〵の作用をなすもので、（是は心理學中にあります）吾々は此等の働をなさしむる本を悟性と謂ひ、此悟性を進めて現在の事柄より以上の吾々は如何に

せば、完全に樂しき生活をなすべきかの如き理想を考ふるときは、之を理性と謂ひます、それ故此理性といふものは、教育の力に由らなければ發達が出來ないのであります、知には又こちらで判斷するものと、他の事物より經驗によつて得らるゝものとの二樣あります、こちらで判斷する力は、矢張吾々が幾多の經驗より得たるものが、漸次自分の主となつて他を判斷するのでありますが、然しこの經驗の外、更に知を持たぬとは謂へないので、已に知の素因は吾々の天性にあるのであります。

(2) 情—情とは喜怒哀樂愛憎等の如き、或は心地よく或は心地惡しき不定の感じでありまして、其續くのに長いと短いとあり、其力に強いと弱いとありまして、或は俄に生じて俄に衰へ、或は漸次に長く繼續することもあります、情には感覺的感、知感、德感、美感、自我及名譽の感、同感、宗教感等の色々の種類があります。

(3) 意—意とは一の行を爲す時に當つて事物を撰み、又は決斷して行爲を惹き起す心の力であつて、之が基は苦樂の感と知とで、……感は意を生ずる起原、知は意の方向を示すもので、是も亦自然的意、悟性的意、理性的意の三樣となる、（自然的意は衝動欲望等より成り、三者の中で極劣等であるから、吾々は此より以上なる悟性、或は理性的の意を擇ばねばなりません）

以上の三つの分解は理論上のものであつて、固より此知情意の三者が各々別々に働くものではありません、實際には此等は相互に關係して動作を顯はすものであります、已に述べました如く、女子の長ずる所は情であつて、他の知と意の如きものは、之に比べて見ますと大に劣つておるので、是がつまり短所であります、事物をよく思考し心の中でよく撰擇すればよろしいが、此等の事に由らない感情の急劇に發するものは、隨分大いなる過失を生じ大事を破りまして、其激しい感情が段々靜まる樣になりますに從つて漸く後悔の念を起すもので、是等は誠に世の

中によくあることであります、是はつまり知の缺乏に基くわけであります、或は一つの行爲を表はす際猶豫したり、疑つたり、グズ〳〵しておるのは、つまり意志が薄弱であるからであります。

是等の缺點をば如何にして入り埋めをなすべきか、是を補ふには第一智識を發達せしむることを努めねばならぬ、智識を發達しますには、澤山の書を讀むに勝れることはないのであります、即ち多くの書を讀み之を理會し推考して見ねばなりません、唯文字の記號を記臆するだけでは誠に價値がないのです、先づ始めに一通りの智識だけを得んければならん、是等は日常缺くことの出來ない肝要のとであります、そうして此等は今日は充分に學校の制度が完全になつておりますから、普通教育の上で一通りの智識は得らるゝわけで、別に御話する必要はないが、茲に本題のは自己の修養論でありますから、自分で修めなければ、學校でいくら善良の教師が導いてくれても、それは唯形式のみの智識を受るだけで、何の役にも立ちません、此點はよく御含みなさらないといけないのであります、右の次第でありますから先づ一通りの智識を得ておくは勿論であるが、自己の修養に就ては第一道德上の智識を得なければなりません、それでないと第一人の目的は如何のものか、亦如何樣にすれば其目的を達し得らるゝかといふとが一向分りませんので、實に御氣の毒な事となるのです、そこで此人生の目的といふものは中々大なることで六つケ敷ことでありますが、何にしても自分をよく修めて智も德も體も備はりまして完全になればよいのでありますが、扨其完全といふことが中々出來難いことで、御承知の通に人は單に獨り獨りのものではなく、即ち此社會の中に存在しておるものでありますから、個人を修めて完全にならんと思ふには、矢張り人との關係が離れることが出來ませんから、自分を修むると共に人をも其樣に致さんことを希望せねばなりません、それであるから自分は社會の一員である故、自分の修養は矢張一部社會の爲めとい

ふことが出來るので、か樣になつて段々と社會が進み、人々其修養が充分出來て圓滿に平和で幸福が伴ふことゝなりますれば、先づ人間の目的地へ進むだものといふてよろしいのであります、斯の如く人生の目的地へ進むには、先づ自己の修養が必要でありますから、倫理道德上の智識を有せねばなりません、倫理道德は結局其目的地へ達せしむる方法であります、それ故此倫理道德的の智識を得んには則ち古聖賢の訓示せし幾多の格言、或は斯學の書に基いて、其今日に適當せるものを撰擇するが宜敷ので、東洋には論語は勿論烈女傳益軒十訓等隨分參考に資するものであります、されど此等にも取るべきものと取るべからざるものとがあることを忘れてはなりません、此外猶一通りは輓近の倫理に關する善良の書物を見て置くことは無論のことであります。

總の感情を此倫理的の智識に照して、過失なき樣に注意して行爲の上に表はしますれば、常に道德の域にありまして安心して心中の幸福は不斷であるのであります、古來幾多の貞女烈婦が非常なる大事に際し、激しき感情に支配せられず、沈着に思考して其節義を全うせしは、皆此倫理的智識が感情を支配したるもので、換言すれば理性的意志となりたるもので、或る場合には全く感情を抑へ、或る場合には感情を指導してゆくものであります、我邦にて袈裟御前、小楠公の母堂、山内一豐の妻、明智光秀の妻の如き、支那にては項羽の姬虞氏の如き、西洋にてはナポレオン一世の妃ジョセイヒンの如きは、其一例であります。

以上に述べました知情意の適宜に相融合して、善良なる品性をなして自己に充ち足りて、何時でも之を現はし得る力あるを德といふので、要するに此知情意の三者相適して圓滿なる生活を致すことが出來、之を社會に現はし得たならば、吾々の精神上の修養は先づ是れで足れりと謂つてもよいでしやう。

吾々は是より修德の主要なるものだけを摘錄しましやう。

(一)、家族に對する德、孝行、友悌、禮節、貞操、齊家、忠實、慈愛、和合、等、

(二)、自己に對して、愼重、克己、勉强、衛生、質素思慮、秩序、寛裕、快活、熱心、忍耐、廉潔、習業、清潔、等、

(三)、他人に對しては、親切、柔和、同情、忠實、友誼、尊敬、信義、報恩、公平、正直、禮讓、慈悲

(四)、國家に對して、忠君愛國、國益、奉公、遵法、

(五)、社會に對して、慈善、公益、博愛、等、

(一)は家庭にありて家族に對する德で、第一兩親にはよく事へ、よく從ひて孝行をなすは勿論のことで、兄弟姉妹の間は互に相援け、兄姉は弟妹をば友愛をもて親切に指導し、弟妹は亦兄姉に對して從順に何事も弟道を守るべきものであります、又夫婦間はよく和合して、其間には禮節を亂さず相一致して家を治めねばなりません、尙此禮節は夫婦間に限らず家族一切の間に行はるべきものであります、次に妻が夫に對しては是非とも貞操といふ德を守らねばならぬ、貞操とは正しき操といふもので、夫の爲には身命をも惜まず吾心を變へずして夫に事へ、且つ之を內助し之を守るもので、婦人に此貞操が缺げたならモー語るに足りないものであります、つまり此貞操といふものは强力の意志ある人で、感情の爲め激變しない人であります、次に齊家は家を齊へ治むる事で、婦人の職務として充分心得なければなりません、忠實はおのが誠の心をもてまめ〱しく働くことで、慈愛は親が子に對し、又は兄姉が弟妹に對し、又は夫が妻に對する等の愛情で、上より下に對するを慈といひ上下何れにも應用せらるゝを愛といひます、此等の慈愛あつて一家睦ましく互に和合してゆきますれば、其家庭の幸福といふものは非常なもので、到底他に比べるものはないので、即ち一家團欒の樂などいひまして、實に喜ばしい事であります、これ和合の德であります。

(二)は自己に對しての德にして愼重とは妄語少なくて自ら身を愼み、何事によらずよく思考したる後言ひ

顯はし、又は行ひ、自ら重むじて輕々しき擧動なき事であります、克己とは己が私慾に打ち勝つ事で、わがまゝなる慾心を抑へつけること、勉强とは凡て學問にでも事業にでも勉め進むとで、人として之を缺けば決して進歩といふことは出來ないのであります、衛生とは吾身體の健康であつて、病に罹らぬ樣常に養生することで、何程學問も德行も人に勝つておりましても、身體が虛弱になれば更に役に立たぬ樣になりますし、又多病で虛弱な人は一生涯其人の不幸であるから、充分注意せねばならないのであります、質素はとり飾りのない極めてつゝまやかなことで、此の反對で奢りに進む樣になると、とても其身は持てないことになりますから、平常是になれて吾身を維持してゆかねばなりません、思慮は智識が本で、何事によらず輕卒になす事を已め、其事の前後などよく／＼考へ、吾理性で充分判斷しまして、其正しき事に從ふ樣にするので、女子には最も肝要なる德であります、凡て此思慮さへ充分出來ておれば感情に激して後悔する樣の事はないのであります、秩序は事物を整理するに肝要のことで、此の秩序即ち次第又は順序がないと、皆入り亂れて混雜致しまして理まらないので、無駄に時間を費す事が多くて、一生の間多くの困難をするものであります、寬裕とはおのが心のゆつたりとして廣いことで、心が狹いとそれが爲め氣短になり過が多く、又氣が鬱して其日／＼を誠に不快に送るものでありますから、女子には此德は非常に尊ぶべきもので、倘次の快活は是非とも寬裕に伴はんければならないので、凡ての事に對し自分の心を廣くして愉快に活潑に行ふことにしたらば、心の狹い氣の鬱がる人に比べて、どの位善いでしやう、つまり一生を面白く暮すのは其人の幸福であります、熱心とは事に當つて心をこめ、一心をそれに注いでおる力で、何事も之がなければ充分の成功を見ることは出來ません、又之と同時に忍耐といふ德は非常な必要な德で、熱心といふ事は場合によると早く變換して冷えることがありますか

ら、何事でも成功する秘訣は、この忍耐でこらへ忍びて如何なる辛酸の事でも淩がなければならないので、之を淩ぎぬきますと、實に悅ばしい樂しい境地になるのであります、忍耐は其人の意志の最も強いので、此忍耐と前の熱心と勉強とが揃ひますれば、吾々は恐るゝものはないのであります、特に是等は御注意なされる樣に願ひたい、廉潔とは慾の少ないので、事物に對しよくそれを思慮した上で取捨しますので、これも誠に吾身にとりては善い德であります、近來の樣に慾の爲めには如何なる手段でも行ふといふ塲合には、是非とも此德でそれ等の者を警め醒してやりたいのです、習業は人として世に立つ限りは必ず何か一定の事業を習ひ、忠實にそれを行はねばならないので、餘り說明するに及ばない、清潔は衛生上離ることの出來ないもので、矢張秩序とも伴ひます。

(三)は他人に對しての德で、親切とは人に對しおのが眞心をもて丁寧に取扱ふことで、如何なる人でも之なければ情が薄くなりまして、交際が出來ぬ樣になるものであります、殊に女子は一家の內助でありますから、充分心得ねばならないのであります、柔和は他に對しおだやかにやさしくすなほであることで、女子には其天性であるといふてよいのであります、同情は(同感)女子の長所で、人の苦悲又は喜び樂み等に對し自分にて得たると同じ樣思ひやりをするので、同情心は即ち良心の一部で道德の根本をなすもので、美なる感情であります、而し是れには矢張理性が、加はらないと充分發達することが出來ません、忠實は家族に對する德の中で述べました通り、此德は家族でも他人でも何れへも極めて大切なる德で、先づ誠といふものであります、之がなければ一切虛僞となつて、人間は無情な冷淡な者になるのであります、友誼は朋友間に行はれます親切なる誼で、之を廣めますと人と人との間の信義となるので、相互に信用し義理を缺ぐことなく務めねばなりません、尊敬は勿論長上の人に對して自分が禮儀をとるわけ

で、此禮がなければ秩序が亂れて我儘の者のみ出來て致方がないのであります、報恩とは一旦人より恩を受たる時は必ず其恩には報いなければ、人たる義務が立たないので、是は、相敬愛する感情の上でも、道理の上でも固より至當の事であります、公平此德は女子の最も注視すべきもので、偏頗なく一樣にゆき渡る樣、心を平にして判斷するもので、是實に理性の命ずる所であります、此の公平といふ心がないと、事々感情の衝突のみ起つて、不圓滿な不愉快なことゝなる、正直とは條理に從つて其通り正しく行ふことで、これあればこそ互に信用も出來、詐りの違背のといふとはないやうになる、是れ交際上欠ぐ可らざるもので、幸福も繁榮も皆此中から生み出すのであります、禮讓人は單獨のものではない、即ち社交的のものでありますから、互に相讓り其禮儀を亂さない樣に心懸けねばなりません、相爭ふて自己の利慾にのみ耽るときは、禽獸と變りのないものとなるので、恥かしい事であります、人の人たるは、禮儀といふ規則がありまして、秩序が立てあるからであります、慈悲此中には同情博愛など一切含むでおるもので、つまり愛情が本で人を憐れみ人を惠むので、隨分大いなる德で、孔子の仁なぞも異名ではありますが同體であります、然し此慈悲といふものも道理によつて判斷せず、妄に些細な事に行つてよいと思ふと、大分の誤りで、餘程前後を考へて行はねば却て効を失ふことがあります。

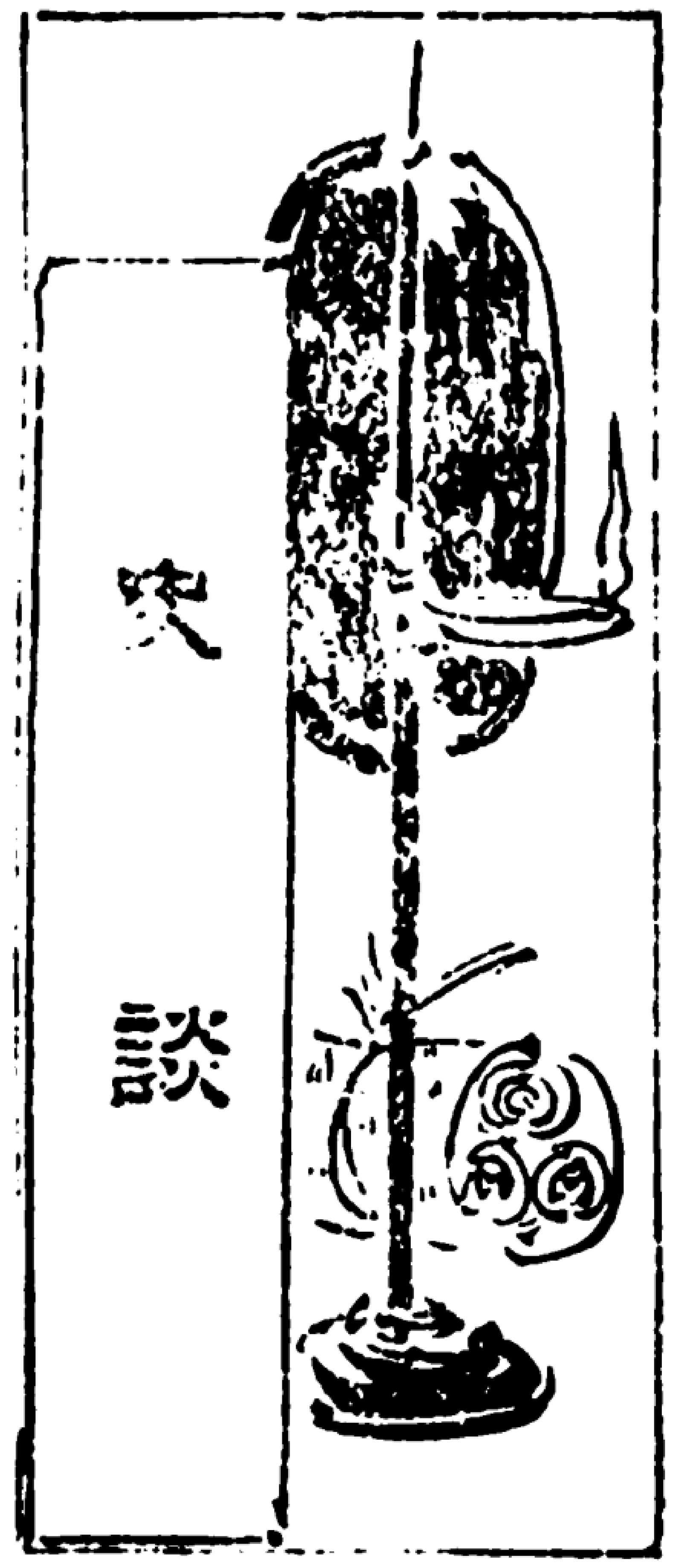
(四)國家に對して、忠君愛國　是は國民たる者の一日も忘るゝとの出來ないことで、其國に生れて其君に忠を盡し其國を思ふは、臣民の情の純粹なるもので、殊に我國の萬國無比なる國體を有するとを思はゞ、一層忠君愛國の思念を高むるといふことは當然の事でありましやう、國益是は我一人や人の事ではなく國といふものを眼中に置て、其國家全體の益になる樣に圖らねばならないので、大なる德であります、奉公は一朝事あれば國家の爲め一身を犧牲にしても盡力すべく、常には國家の命令に從ひ善く務に服し

國家といふ觀念を失つてはならぬのであります、遵法は國家の法律規定に遵ひて、此法規を破らぬ樣にするとで、吾權利を認め安寧に幸福を希望するには、堅く此の法規を遵守せねばなりません。

(五)は社會に對しての德、慈善は前に述べました同情が基となるもので、貧しき者悲しきもの等薄命不運なる者を憐み救ふので、此の情緒は寧ろ男子より女子の方が深厚なるもので、寔に美なる德であります、公益は公共の人の益になる樣計るべき德で、今日では隨分注意すべきものであります、博愛は最も大なる德でありまして、孔子でも釋迦でも、基督でも、古來より聖賢哲人が皆之を唱へたので、大なる方面から見れば平等無差別となりまして、平和幸福などは皆此中から生ずるので、實に社會人類全體を蓋ひたる德といふてよろしいのであります。

以上で大畧德の修むべきもの丶概要を述ました、此等の德に反するものは皆不德で害あるものであるから、斷じて行ふてはなりません、德といふものは各其時代によつて違ひまして、即ち昔の德は必ず今日の德ではない、今日の德は亦必ずしも未來の德といふことが出來ない、それ故德の内容は其時代の進步につれて變遷するもので、我邦維新前に於ての女德と、今日の女德とを比較しましたなら、餘程相違がありましやう、現に我邦の古は女子には國家又は社會に對する德などはなかつたのでありますが、今日では段々進步に伴つて德の種類が殖えてきたのであります、東洋に於ては家長制の因襲としまして、女子の德は概ね保守消極的で、專制抑壓の弊を免れないので、多く屈從的のものでありましたが、今日は頗る此等の點に注目して其進步發達を忘れてはならない樣になつたのは、喜ばしい事であります。(完)





幼年時代の義仲及び其母

松濤庵主人

往昔久壽二年八月、相摸國大倉谷に於て、源義賢と同義平の叔姪が互に敵對して、私の同士軍を企てた後續いて保元平治の大亂となつた事は、偏に天魔破旬の所爲として歴史上有名のものである。其大倉谷の戰の原因は、義賢が兄義朝の所領鎌倉七郷を我物にせんとの慾心から兵を起し、義朝の嫡子源太義平が之に當つたので、其結果遂に義賢の敗北となつて大倉谷の露と消て了つたのである。

さて此源義賢は即ち六孫王經基の末裔八幡太郎義家の四男源爲義の二男で、自分には子が三人あつた。嫡子を仲宗と謂たが故あつて頼政の養子に遣はし、次を菊姫と云ひ、三番目を駒王と云つてこれは妾腹の出生である。この三番目の駒王こそ後の木曾義仲で、妾……即ち義仲の母は名を小枝と呼んで猫間中將といふ人の別腹の娘であつたのである。

小枝が義賢の妾となつたのは嘗て義賢が京都に在番の頃、一日加茂の祭禮に往つて親しくなつたのが緣の初めで、駒王を生むだのが久壽元年の春、即ち義賢が大倉谷に討死を爲た前年であつた。故に、駒王――後の木曾義仲は僅か二歳にして我父に別れて了つたのである。

父義賢の討死に就ては、小枝の嘆き一方ならず、餘りの悲しさに自分も跡を慕はんかと劒に手を掛けた事は一再では無かつたが、我兒駒王愛着の絆につながれて、爾來憂き日を送つて居たのである。處が其頃の風聞に、源太義平が叔父義賢を亡ぼしたにも飽かず、駒王母子をも失はんと、潛かに其在所を探

れる由を聞き、如何にして生命を全うせんと、一層憂ひの種を増して居たのであつた。で、小枝の父猫間中將も殊の外心配して、種々と商議の末、洛西西岡の片邊りなる小枝が乳母に當る人の家に一先隱れて居ることになつた。

然るに、茲に其頃有名なる畠山重能も、其風聞を聞いて思ふには、義賢一旦非義に依て義平の爲に討たれたが、其遺子にまで罪の及ぶべき所以は無い、義平唯に若氣に任せ武士たるもの丶情を忘れて、其身の後難を除かんため嬰兒までも亡んとする條、什麽にも似氣なき行迹である、可し、自分は義賢とは緣邊の因みもあり――義賢は幼き時秩父重信の養子と爲つて居たのである――殊に莫逆の交りも有つた事ゆゑ、一は義賢が追福作善の爲め、駒王母子を救ふに如かずと思ひ立ち、密かに猫間中將を訪ねて我所存を打明け、駒王母子の隱れて居る所を問ふた。けれども中將は其實を打明けなかつた。再三再四の賴みに依て今は疑念も晴れた丶めか、漸く其在所を打明けて、さらば何とかして駒王母子が命を助けて吳れと、涙ながらに賴むだのである。

重能元より一々諒諾し、斯くなる上は我一命に代へても必ず助けまゐらすであらう、決して御心を勞したまふなと誓を立て、即時に中將より小枝に宛てた消息を請取り、其足で西岡の片邊に駒王母子を訪ねて往つた。

隱家なる賤が家の主は重能の顏を見て、源太義平から召捕に向つた者に相違あるまいと一途に思つたため、先胸つぶれ心惱して更に云ふ處を知らず、呆れ果てた面色であつた。重能もそれと推量したから優しく小聲になつて、實は猫間殿からの消息を齎らして來た者である、小枝殿に會はして吳れ、と云つたが、主の者愈よ駭いて、中將殿よりのお使とならば、例のやうに仕丁童の女房達をこそ寄越したまへ、併し我方にはさる人は在さぬゆゑ、他にてお問ひ合せ下され。と慌て丶前後不揃ひの返辭。重能心の中に可笑く、猶も言葉を和げ、夜中と云ひ又我が此

爲體を見て、一應疑ふは尤もなれど、今は何をか包まむ、我は畠山重能と云つて先義賢殿とは親族の者此度の在京を幸ひに、駒王殿母子を救はんと、今日父卿の許へも行き心底を打明してお迎にまゐりしもの、今にも源太の討手とて來ぬとも限らぬ、それには却つて我心も水の泡と消え、お命も助かる道を失ふであらう、疾く此消息を小枝殿に渡し、我に對面せらるゝやう計らはれよ。と利害を説いて諭した所が、彼の者は半信半疑、自ら決する事に躊躇して居たが、此時、廣くもあらぬ賤が家居の事とて、小枝は一間に右の一什を聞いて所存の臍を固め、兎も角も重能に會はんとの事であつた。

けれども愚直の主は尚主人の大切を取つて、今度は乳母が出て來て、先よりの情ある詞は漏れ聞いては居れど、木にも草にも心をおく今の身ゆゑ、狹にも會ひまゐらせぬが、誠は駒王どのを抱き此家に隱れて在します。所狹くいぶせくはあれど、此方に入らせたまへ。と言ひながら尚重能の身邊に心を配つて居る。重能は漸く安堵の思ひをして伏屋の中に入つて見ると、什麽にもいぶせき蘆の屋の、松の柱も斜に歪み、竹の簀子も凹みがちにて、肥松の燈ふすぼりわたり、板戸は立ても透間多く、夜風を防ぐ枕屏風も破て骨を現はす有樣。其影に小枝は、何かあらん色あひ定かならぬ衣を着て、駒王を掻抱き物に倚掛つて居られたのであつた。重能先づ一揖して其人を見るに、此年月の物思ひに窶れ果てゝは居らるゝが、天のなせる容貌は端麗で、例へば雨に萎るゝ芙蓉のそれか、流石は中將殿の姫君とは夜目にもそれと知らるゝのであつた。

重能に更に低頭して、早や聞召されし上は名のるも鳴呼がましき次第なれど、某こそ畠山重能と申して故義賢殿には緣體の者、さて榮枯不定の世の習とは申しながら、義賢殿不慮の一戰に黃泉の客となり給ひ、御身御親子斯く世に流落遊ばさるゝ事、將亦年月の物思ひ左こそとお察し申す、然るに粗承る處、義平どの身の後難を除かんため、御親子の行方

を探居らるゝとの事、某親族の身として他に見るに忍びず、如何にもして御親子の危きを救ひまゐらせんと、既に御父中將卿にも謁し御在所を問ひ、御消息をも頂き推參致した次第、何卒是を御覧して、重能に野心無きことを知り玉へ。と言ひつゝ件の消息を小枝に渡した。

小枝は之を受取つて封押切りて讀み下したが、欣びの色面に現はれ、果は嬉し涙押ぬぐひつゝ、世に便り無き此母子を左まで心に掛けられて、什麼にも難有き事、何分宜く頼み申すと、重能に向つて言はれた後、可愛き駒王を重能にも抱かせ、其顔見てはさめ〴〵と泣かるゝのであつた。

是に至つて初めて重能を見て左右の疑ひを抱いた主の者も、漸う安堵の思ひをなし、今さら重能に面目を失し、乳母と共に茶よ菓子よと追從するのも、我主人の爲かと思へば、理せめて哀れである。

斯くて重能は我本意を遂したので、善は急げと其夜の中に小枝に勸め、何くれの物取り締めて、主の者には固く口留をし、乳母も倶々、重能の從者に前後を守らせ、一先づ重能の私邸六條大宮にと歸つたのであつた。

さて畠山重能は一旦の義心によつて、駒王母子を救ひ取つたけれども、倘能く考へて見ると迚も我手にて隱ひ育ん事は六かしいのである、本國武藏は鎌倉にも近く隨つて義平へ直に知らるゝ憚れがあるので、如何はせんかと苦心をしたのであつた。すると丁度此時、重能とは同國の好もあるし年來隔なく交つて居て、才智人に勝れ弓矢取つては剛の者と聞えた齋藤實盛が、これも京都の在番で來て居たのが、此程任滿ちて本國に歸るにつき、重能在番の任も滿ちたのを幸ひ、倶に同伴して歸國せんとて大宮に重能を訪づれたのであつた。處が其れに就て重能は思ひ付いたのである。幸ひ齋藤實盛は智勇人に勝れ、殊に義のためには一命をも拋つべき武士なれば、此人を賴むで駒王母子の身の上を託したなら、彼とても決して爲惡くは計らふまじく、更に能き思案の出ぬ

でもあるまいと。左右の者等を遠ざけ、膝を進めて實盛に向ひ、折角同伴のお誘ひ難有けれど、某は今少し京都に所用あれば、此度は御同伴致し難し、されど茲に御邊を見込みて、重能が一命に掛て頼入れたき路連あり、何卒同伴し玉はらずや、と思ひ入り改まつて云つたので、實盛は與醒顔に、これは事新らしき申され事かな、さらぬだに武士たる者が人の命を掛て頼むと有る儀を、何とて聞捨てになるべき、况て御邊と某とは年來深き交を結び、戰場に臨んでだに晴の分取功名を捨てゝも、互に危きを救ひ合ふこと人も知つたる事、譬へば實盛が首を呉れよと申さるゝとも、決して辭むべき某ならず、何事にても某が力に及ばん程の義なれば、遠慮なく申されたし。と義氣面に現はれて詞清しく言ひ放つた。

重能大いに欣んで、然らば其人を引合さんと、一間から駒王小枝の兩人を伴ひ出で、さて又實盛に向ひ此二方こそ只今願ひし路連れなれ、と斯く計にては不審したまはん、是こそ故義賢殿の遺孤駒王殿と母御前小枝殿、御邊も御存じの如く、曾て義平殿身の後難を除かんとて、暗に二方を失はんとの取沙汰を聞き、某縁體の身として他に見るに忍びず、隱家に尋ね行きて連れ歸りしものゝ、迚も我手にて隱ひ育てんこと、却て駒王殿の御爲宜しかるまじと、是のみ心を苦しめし折柄、御邊の御入來、願ふてもなき幸ひと、實は足手纏ひならんが、何卒伴ひ下され、恙く成長するやう計られたまはらば、某生々世々の鴻恩也と涙を流して頼み入るので、小枝も傍らから涙にくれながら、自分の身は如何なる艱難に遭ふも厭はねば、野の末山の奥にてもたゞ駒王の成長すべき様計ひ玉はりたしと、伏拜むで頼み入つたから、鬼神をも取ひしぐ實盛も、重能が義心小枝の心中を思ひ遣つて、不覺の涙に袖を沾らしたのであつた。

で、稍あつて實盛は重能に向ひ、什麽にも御邊の云はるゝ如く、故義賢殿一旦の過ちに其身を亡し玉ひしとも、何ぞ根を斷ち葉を枯すの罪か有らん、安心爲したまへ、御兩所の義は御邊に代りて某預り、

必ず人と爲し進ぜん。と一議に及ばず承引したので小枝は云ふも更なり、重能も雀躍して悦び勇み、深く實盛が情を謝し、軈て酒肴を命じて盃を取交はし、主客稍醉を帶びた頃、實盛は別れを告げ、其夜駒王母子並びに乳母をも同道して一先づ我が邸に歸つて往つた。

斯くして哀れなる駒王母子の運命は、更に齋藤實盛の手に托せられたが、尙且それが萬全の策では無かつたのである、實盛は二人の命を引受けて我邸へ歸つて來た後熟々考へて見ると、什麽にも本國武藏は多く義平の武威に靡き、殊に彼の家人も多き故、必ずしも便宜よしとは云へぬ、萬一此事義平の方へ洩れ聞え駒王殿を奪ひ捕はれたなら、重能に誓つた大丈夫の一言相立たず、さればとて家城に立籠つて駒王殿の征兵を引受たなら、三度や五度は縱令追拂ふにしても、遂には防禦も叶ひ難くなるであらう。武士の義に依つて捨る命は鴻毛より輕しとは云ふもの丶、而かも駒王殿の命を救はでは何の役にか立たん、抑も如何にしたら萬全の策を得らる丶事かと。さしもの實盛も思慮に心を苦しめて居たが、漸と思ひついたのは、玆に木曾の中原兼遠といふ人は、豫て昵懇の間柄ではあるし、弱を扶けて强を凌ぐの義者。殊に其領地と云へば他所にも勝して山深く幽栖の地故、駒王殿の隱家としては最窟强の土地なり、洵に駒王母子の安全を託するには此兼遠の外には無いであらう。といふ事であつた。で、一兩日經てから此次第を小枝にも說き聞かせ、早速駒王母子並に乳母を誘ひ、從卒を率ゐて深夜京都を立ち出で、木曾を指して赴いた、時はこれ久壽二年の暮十二月十三日の事であつた。

云ふまでもなく寒風肌骨に徹るの時節、殊に北國路のならひとて道中雪深く、血氣壯んなる男子ですら堪へ難き中を、父母の鍾愛深く深窓に養はれた小枝は、人目を忍ぶ旅の事とて士卒の體に身を扮裝して、實盛が從者に打交り、履も狎れざる草鞋脚袢に足を痛め、雪嵐に身を惱まされて、殆ど步み煩らふ

様を、見る實盛は餘りの痛はしさに堪へず、從者に命じて替る〲負ひまゐらせ、只管路を急いだのである。

去る程に實盛は道中滯りなく木曾に着して、兼遠の邸宅に赴いて案內が賴むと、兼遠は即時に迎へて後、見受る所御邊には女性嬰兒を伴ふて雪中をも厭はず、かゝる僻地に來臨とは如何なる仔細にてかと不審りながら尋ねたので、實盛は、御不審は御尤も千萬、今般某都在番の任終り、歸國致すにつけ路を橫切りて當家へ推參致したは、御邊の義心を見込み密々賴み入れたき仔細の有りて。と是から駒王母子の事、畠山重能の事、自分が引受けたが尙安心のならぬ事等を語つて、憐れ武士の情を思ひ此賴を背き容れたまへ、遮莫駒王殿成長の後言甲斐なき人ならば、家人とするか或は出家入道させて父祖の後世をも弔はせたまへ。と申し入れた。處が元來義に勇み物の哀れ知つたる兼遠、深く重能實盛の義心を感激し、御邊と云ひ畠山殿と云ひ、武名天下に轟きし英雄の、仁義の道さへ淺からぬ情の程こそ難有し、兼遠を田舍武士とも思はれず、人がましく思ひて遙々と賴み來りたまふ嬉しさ、假令匹夫下郞の子たりとも、御邊の賴みとあらば爭で違背申すべき、況して我家には大恩ある八幡殿の嫡孫義賢殿の公達とあらば、我方より望みても預かりたき義、必ず育て進らせて主君と仰がん程に安心あれ。と喜悅の色面に見はれ、最快く承諾し、乳母が遂に差倚つて駒王の顏を熟々永見、成長の人に物言ふ如く、盛衰轉變は人倫の常なれば、天運循環して往きて返らぬ事はなし、暫時の間氣疎き深山住居に憂き光陰を送りたまふとも、軈て人となりたまはゞ、蟄龍飛躍の時を得て、海內に名を轟かす程の大將軍になりたまへと搔き口說き、木曾山育ちの荒くれ武士も、堪へずや男泣きに泣いたのである。

此の有樣に小枝を始め實盛も即座の承諾を限りなく悅び、始めて安堵の思ひし厚く謝禮に及んだ。兼遠は又悅びの餘り酒宴を促して長途の旅鬱を慰め、

猶共々に駒王の行末の事共を商議し、斯くて實盛は木曾に一夜滯留し、翌日別れを告げたので、小枝等は殊に別れを惜み日來の厚情をくれ〴〵も謝し、恰かも父母に別るゝ如くであつた。

是から後中原兼遠は、駒王母子を得て主君のごとく傅き、山下と云ふ所に新に邸宅を造り設け、駒王母子を此處へ移し、侍女近臣を定め、衣服調度の類は元より、萬事不足のないやう心を配つたので、小枝等は厚く兼遠が信義深情を悦び、今日まで片時去らなかつた畏怖の念も失せ、たゞ一意駒王の日に増し生立のを樂しみに、兼ては兼遠を賴むで、京都の猫間中將が許へも告げ知らせ、折に觸れては消息を取り通はして、月日を送る事とはなつた。

扨、此年＝久壽二年も程なく暮れて、翌年四月廿七日改元あつて保元元年と改まつた。これぞ前にも云つた如く未曾有の忌はしき大亂の起つた年であつて、其大亂の原因は既に鳥羽天皇の保安四年頃に萌したので、彼の

虫の音のよはるのみかは過る秋を惜む我身ぞまづ消えぬべき

と詠じさせ玉ひし近衞院の崩御から、續いて鳥羽法皇の崩御となり、延いては崇德上皇御兄弟を双方に頂いて、源平の一族は思ひ〳〵に相敵となつて、此極遂に＝保元々年七月十九日には、平清盛は叔父忠政と其子五人を六條河原に於て、源義朝は父爲義を始め弟五人を船岡山に於て、皆斬罪するの非道を來し、果ては讃州松山の配所に

濱千鳥あとは都にかよへども身は松山にねをのみぞなく

との御製を血書したまひ、遂に崇德院は配所の裡に崩御となつた有様。尚それのみならず、保元四年四月＝即ち平治元年と改元した十二月九日となつては義朝等の叛逆の事あり、其結果遂に義朝は長田忠致の爲に浴室に弑せられ、源太義平は平家の爲に擒となつて難波三郎經房に首を斬られ、源氏は衰へ平氏は盛り、天下は實に平家の物となつて了つた。

此の四年間の大亂中、彼の木曾に養はれて居た駒王は什麼であつたか。固より頑是なき時の事とて、何事をも知らずにたゞ母の手に育てられて居たのであるが、實に此不幸なる駒王は、二歳にして父に別れ、爾來辛うじて他人の厄介となり、其間に殆んど一族を失つて了つたのであつた。で、それかあらぬか、駒王の天性頗る温順であつて、如何なる事あつても泣き怯ゆるなどの事は無いので、兼遠も大いに嘆賞し、三才の時に一日其意を試し見んと、兵器樂器儒書兵書筆墨の類を始め、鞠鼓木偶花車等に至るまで、多くの物を廣間に並べ置き、そして此方に小枝に駒王を抱かせて坐に着け、彼處に並べし物の中にて欲しと覺す物を取りたまへとあるに、駒王は聴て母の膝より這下り、ヅカ／＼といざり行つて、並べる諸品の中から何れを取らうかとの面地であつた。母小枝を始め人々は、小兒の事ゆゑ固より花車か木偶をでも取る事と思つて居た處、豈計らむや駒王する／＼と這寄つて、先づ兵書を把つて左に抱へ、右の手をさし伸べて生羽の征箭一筋を取つて、再びいざり戻り母の膝に這上がつた。是に於て兼遠はたと手を打ち、實に栴檀は二葉より馨ばしとか云ふは此事なりと、悦ぶこと限りなく、彌々心を用ゐて養育したので、小枝も末頼母しくおもひ、晝は諸士が射術劔法の稽古する處を見せ、夜は兼遠が子息若侍を集へて聖經を説き兵書を講ずる席に在て聴せなどするに、駒王其度毎に倦怠の色なく、小兒ながら眠を忘れ乳を忘れて居るやうな有樣ゆゑ、人々感賞せぬものはなかつた。

斯て年月何時しか經つて、早や七才になつた時には、躰軀は十歳の男兒も及ばぬ如く、しかも飽まで力強く、其性質も追々と荒々しくなつて、十歳の頃には一擧にて犬を斃し一脚に鹿を殺すなどいふ事は稀らしくは無かつた。加之兼遠が敎ふる四書五經をはじめ兵書の冊々、何時の程にか暗記して、射術を敎ふるにつけ劔法を傳ふるにせよ、一を聞いて十を知るといふ有樣なれば、忽ちの中に諸藝に熟し、

假初の遊戯にも、或は陣を布き隊を整へ、專ら戰爭の眞似ばかりをして居つた。其中に月日は關守なく早や十五歳の春を迎へたので、茲に兼遠は烏帽子親となり元服をする事となり、名さへ父義賢の一字と中三兼遠――兼遠は中原氏の三男で通稱中三と呼むだのである――の中の字を象つて、木曾冠者義仲と稱する事とはなつた。

是から後義仲は朝に兼遠に源氏衰勢の事並びに平家跋扈の事、乃至は源家の嫡流として伊豆の佐殿――賴朝の事である――の外語る者の無き事を聞き、夕に母小枝に父義賢が陣歿の事、並びに畠山齋藤等が信義の事、乃至は兄弟親族の事どもを糺して、慷慨悲憤の情に堪へず、兼遠の勸めもあり旁々今の內に諸國の地の利を察し、國々の事情をも調べ、且は賴朝にも面會して潛かに大義の謀を示し合はせ置くには如かじと、俄かに今井兼平樋口兼光等を隨へ、田舍武士の京內詣といふ躰に扮裝ちて、母小枝に此旨を述べ、木曾を立つて先づ京都へと上つた。

一行はもとより急がぬ旅であるから、心安さに茲に三日彼處に五日と滯留し、往き〳〵て加賀越中の境の礪波山に分け登り、或は各地陣場戰場の便を考へ、山賤が家に宿を需めなどして、越前若狹路を經て京都へ着したが、これより所々を見物する中にも、平家の繁昌を見ては嘗て聞しにも勝る事と考た、尙又義仲は自分の別腹の兄なる仲宗が、賴政の養子となつて居る事を思ひ出し、急に會ひたくなつたので、賴政の邸を訪ねると、賴政父子の悅び一方ならず、種々と義仲の爲に款誠ふる事あつて、さらぬだに初對面の事とて酒宴を設けて饗應されたので、義仲も心嬉しく、此家に止まること三日、其間に行々の事なども充分示し合せ、別れを告げたが、其時賴政から國宗の太刀一振を餞別にとて義仲に贈つた。

それから義仲等主從は路を攝河泉大和に取つて、再び山城に歸り是より東國筋に掛らんと、江州から美濃路を經て、大垣の八幡宮に參詣した處、社前の馬場に四五人の靑侍が競馬を遣つて居たから、そ

れを見て居ると、一頭の馬が何事にか驚かされて狂ひ出し、口綱切つて一散に駈け出した、仲間等は大いに周章て是を曳留めんとしたが、馬は益す猛り狂つて段々との大騒ぎとなつた。と、此時遙か向に年齢十二三四才の乙女が、手ごろの盥に濡れたる衣を入れ高足駄はいて來掛つたが、前面から驀地に馳つて來る馬を見るや、些しも動ずる氣色なく、靜かに身をかはして馬の後に引たる口綱を、足駄の下にしかと踏へると、さしも狂ひし馬は走る事叶はず、其中に先の仲間等が追々に馳せ寄つて、馬を曳いて歸つて往つた。

義仲は眼前此有樣を見て大いに驚き、其乙女の怪力をいと懐かしく思つたので、そも誰人の女かと土地の者に尋ねると、乙女の名は巴と云ひ父の名を安太夫といひて以前は武士なりと、其住家をも敎へて吳れたので、義仲は直ちに其家へ往つて見ると、萱葺の柱斜なる家に最前の乙女と六十近き老人とが居つた。案内を乞ひ姓名を名乘つて其老人と語らつ

て見ると、此人以前は近江の山本兵衛に事へし武士、故あつて八年前より父女二人にて、斯く詫しき烟を立て居るとの事に、義仲感慨に堪へず、非禮ながらと前口上措いて、お娘巴殿を某に賜はらずや、さもあらば後年我室となし生涯見捨てまじ、御邊も亦我木曾に來られ、農業を捨て心閑かに老の身を養はるれば、斯る村に朽果らる丶には聊か増ならずや。と懇望した處が、安太夫は願ふてもなき事と思へど本人巴の心は如何と思ひ、巴に問ひ糺して見るに異存無いとの返辭。是に於て安太夫改めて義仲に御意承諾の旨を答へ、義仲も大いに悦んで早速約定の盃を取り交はし、何れ義仲東國を經歷して木曾へ歸りし後、使もて親子を呼び迎へる事に取極め、義仲主從は再び東國指して赴いたのであつた。

義仲等は今度は道を尾張に取つて、軈て諸國を經て伊豆國蛭ヶ小島に赴いた。是れ即ち賴朝に會はんが爲めである。云ふまでもなく賴朝は、源義朝の三男で義仲とは從兄弟になるのである。母は熱田の大

宮司季範が女で、彼の平治の戰ひに父兄と共に戰場を拔落したが、龍花越の山口と云ふ所で味方に後れ平宗清に捕はれ都に送られたが、清盛の繼母池の禪尼及び重盛に救はれて、此島に流罪となつたのである。其時は丁度永曆元年であつたが、それから應保二年まで約三年の間は島内の入牧の別所と云ふに置かれ、翌年から仁安三年まで七年間、北條の神沼の館に移されて居たのである。義仲の訪ねたのは即ち此時で、双方初ての面會とて、互に名乘り合つた時の嬉しさは又格別、酒宴を開き醉を盡した事であつたが、軈て二人は閑室に入つて膝突並べ、一門の亡滅を悔み平家の暴惡を誹り、密々義兵の商議を爲して、互に後日奮起の誓約をして、斯て玆に二三日を經、更に別れて義仲は武藏へと入つた。

武藏へ入つた義仲は、先伯父に當る葛貫別當能隆の許を訪ね、後永井に齋藤實盛を訪ねた。處が突然の事ではあるし、斯ばかり義仲の成長したのを見て實盛の悦び一方ならず、落涙しての昔語をも聞かされて感激啻ならず、玆にも亦山海の珍味を竭した饗應を受け、必ず大恩報酬の時機を得てとの詞を殘し、其翌日一里餘りも實盛の見送りを受け、名殘はつきねど遂に袂を分つたのであつた。

以上の如く義仲は諸國を遍歷し恩人一族に面會し大いに感激を受け智識を廣めて、軈ての事に木曾へと立歸つたが、此間丁度仁安三年二月から同年十月まで九ヶ月間であつた。

歸つて見ると、豈計らむ義仲の母小枝はなか〳〵重き病に臥して居つた。義仲は驚いて其今日までの事を糺すと、母小枝は去る八月中に、フト風邪の心地で打臥したが、日を追て疾病重なり、醫藥に手を竭し加持祈禱怠り無かつたが、更に夫等の驗なく、次第に賴み少く見らるゝので、何はともあれ義仲殿へ知らせたしと、諸々方々へ使を出したが尋ね當りしもの一人もなく、如何はせんかと思ひ患らひし次第。と兼遠の物語、愈よ義仲も驚いて早速母が病床へ入り、今日までの仔細を敍べて、種々と母を慰さ

めた。母小枝は又大いに悦び、重き枕を擡げいと苦しげな息の下に、有りし次第を物語り、さて改めて兼遠夫婦の人々が、由縁もなき二人を重代の主君の如く敬ひ傅きくれし鴻恩は、必ず何時かは酬ひねばならぬ、又母が空しくなりし後は、夫婦の人々を實の親とも思ひ、朝夕の孝行を怠つてはならぬ、又兼遠の力を假りて家名を引興す時節もあらば、構へて短慮殺伐の行跡なく、仁徳を以て人を懐け、萬の進退兼遠始め智慮深き人々と商議し、近くは父御の御最期に能く鑒みて誡めとせよ、忘れても智に慢じ勇を憑んで人に疎まれぬやう。母死したりとも追福作善に心を用ゐず、只時節を待ちて家名を引興さば、これぞ母がために七基の塔を建るにも勝る追福なるぞと、操返し〱遺言せられて、義仲悲嘆の涙遣る瀬なき中にも、仰せの次第逐一感銘したれど、それはともあれ、何事も念とし玉はず、勤めて藥湯を服し今一度恢復して下されと諫め慰むれば、小枝は打點首くのであつたが、天遂に年をかさず、其翌日遂に此世を去つて了つた。

これが二歳にして父に別れ、爾來母の手に養はれた義仲の幼年時代であつて、即ち十五歳に至るまで母と共に辛酸を嘗めた概略である。若し夫れ義仲が青年以後の事は、明かに青史の示す所、こゝに云ふまでの事は無いのである。

（をはり）



學藝

庚子道の記評釋（二）

文學士　境野天華

なほゆき〳〵てひくまのすぐにやとる

ひめ小松ひくまの野べのかり枕
　げにねのびする人ぞおほかる

道につかれて人々のいぎたなくふしたるを見て忍びやかにかくつぶやけば例の口さかなさよとて今宵もせいす。

足に任かせて行き今宵の宿を引馬の宿に定めた

（歌）今宵はこの姫小松、引馬の野の宿を借り、旅寝をすることであるが、一日の旅行に疲れ切りて茲にゆつくり足腰を伸ばす者の多いことである

道の疲れに連の人々のぐつすり寢込んで入る體裁を見て、人知れずそつとこう云ふ歌を口の中で云ひかけたが又しても女の口惡るさと今宵も自分と自分の口を制したことである、

ねのびする　姫小松と詠み、其の緣から子日（ねのひ）するとかけたのである

いぎたなく　前後も知らず眠り入りたる體、貪眠（ねぎたなし）と云ふ意、

つぶやく　くど〳〵口頭にて獨語すると、さがなく不祥の字是れに當る、故に口さがなしは口惡るきなり、柿本人丸の歌に「君がみまさかなく常にはなれつゝ我が花園をふみしだくめり。」とあるのも馬の惡性にして柔順ならぬを云つたのである

引馬野はゝやくより濱松とも云ふなり。

げに濱べに松どものおほく生たりしが

風に吹かれてさゝとなる おとのいといみじうめでたく聞ゆ、人のかしづく婿君などの來り玉ふに酒のみたちて濱松のおとはとおの こどものうた ふはこの所よりのことならんかし。

濱松にあらし吹く夜はことさらに
大君きませいざふたりねむ

女ともたちの若くじ ちえうなるは顏うちあかめてなほわびし、かゝるそゝろことは源内侍などこそいひつれとにくむに、あらず、よのつねの人こそものはぢはすべかめれ、あそびのものゝ上らうらしさは今やうならずとて、みさかなになによけん、あはびさたをかかぜよけんとうたへば、何につけても皆をかしやとてほほとさへわらふ。

引馬宿は昔より濱松とも名けられて居る、其の名の通り、見渡した所、緑松生ひ茂り、磯から吹いて來る風に、颯々たる音を立てゝ居るのが何とも云へぬほど氣持能く聞かれる。能く昔から酒宴の席上等で、花婿を祝ひ、濱の音はと云ふ詞を歌ふのは此の地から起りたと思はれる、

(歌)濱松が枝に磯風吹きて、獨り寂しい夜は殊更大君の來り宿せんことを待たれる、どうか來て下されば好い、こう云ふ晩は、

と云ふ洒落れた歌を云つたので、未だ年の行かぬ正直な女どもは、顏を赤らめて耻かしさうに、さう云ふ洒落れた事は、彼の源内侍のやうな耻しらぬ老ぼれの女が詠むものである、あゝ聞き苦るしいと云つて頻りに非難するので、いやさうでは無い、普通の人ならばそのやうな物耻ぢをしていやに氣取りても見やう、然し、身分が身分で高が遊女白拍子の果敢ない者で、身分貴い人達の眞似を

して氣取るのも、反つて當世ではあるまいと云つて酒の御肴は何に致しませう、鮑か、さだをか、かせか何れなりとも御好み次第と歌ふたので、何から何と面白く拍子を取り違へず上手の事じやと云つて微笑を洩らして居る人もある、

ひくま野　ひくま野を濱松と云ふとは、十六夜日記にも見へ「こよひはひくまのすくと云ふ所にとどまる此所の大かたの名は濱松とそいひし」とある即ち是れである、

濱松のおとは將軍足利義教富士見に下向の時、此の濱松のあたりにて「濱松の音はさゝんざ」とうたひ酒宴せられた事があつた、其の故事から酒宴の塲に能く歌ふ文句となつたのを、茲に引用したものと見える、

じちえう　着實正直、伊勢物語に「いとまめにじちえうにてあだなる心なかりけり」と出て居る、

源内侍源氏物語紅葉賀に此の人の年老いなからなほなまめかしき心の去り兼ねたる狀を滑稽に書いた所がある、

みさかなには　此の一句は催馬樂の我家と云ふ一曲を引いた者で即ち我家の曲には、「わいへんはとばりちやうをもたれたるをおほきみきませ、むこにせん、みさかなに何よけんあはひさだをかかせよけむ」とあり、上に大君きませとあるより、下の御肴はと歌ふたのである、あはびは鮑、さだをは催馬樂にまたさだえとなつて居る、榮螺のことで、かせは帆立貝又海膽を云ふとの二說がある

二十九日、濱松をよぶかに出ぬ、雨ふり出で横さまにしぶくめり。明ぬほどわびしさいはんかたなし。天龍川わたるとて

舟さして雲のみをゆくこゝちしぬ
名もおそろしき天のなか川。

圓位上人のはづかしめられたまひけんむかし人はいかに、棹の雫ならでもたとぬれぬべし。

二十九日にはまだ夜中から出發したが、雨、しかも風があつて横時雨が來て居つたから堪らない、それも夜でも明けて居たら、まだしも幾くらかよかつたらうが、實に實に辛いことであつた。天龍川の渡に懸つた時、

(歌)如斯して舟に乘りて名まで恐ろしき天のなか川(天龍川を昔よりかく云ふ)を渡りて居るが、丁度空中の雲の道すぢを行くやうな氣がして、少しも地上に居る心はない、

と云ふ歌を詠んだが、思ひ見れば此處は昔彼の西行法師諸國巡遊の時、舟中武人の笞に打たれ辱しめられた所と云ふことを聞いて居るが、其の昔、いかに胸に無念の思ひはあつたであらうかと思ひ袂のぬれて來たのも强ち棹の雫の爲めばかりでも無いやうである、

みを　舟のゆき通ふ水路をいふが常である、しかし、また道の緒即　みちすぢのことをみをと云ふこともある、此處は其の例であらう、

天のなか川、昔から天龍川のことを天のなか川、あのなかのわたり、天つ空なかなる川とも云つて歌に詠んだのである、

圓位　は西行上人の法名、此の事實は西行物語に出で又、十六夜日記にも一寸見えて居る、

見つけのすく、

さらでだに毛をふききずを求む世に
　見つけといへる里の名ぞうき

(歌)兎角人の缺點をのみ穴探しするは人の惡るい習慣であるのに、此處にはまた又見付けと云ふ忌ま忌ましき名を態々と宿の名につけて居るのは、さても、

毛を吹き疵をもとむ此の句は今日廣く用ゐらるゝが、出所は漢書武帝紀にあるのが始めとおもはれる、歌によみ込んだのには後撰雜二の高津内親王の歌に「なほき木にまがれる枝もあるものを毛を吹ききずをいふがわりなさ」と云ふのがある、

懸川葛布おほし

かけ川にさらす葛布かずならぬ
　身のうはぎにといざもとめてん

懸川の宿わたり家毎に葛布を多くさらしてあるのを見て、

（歌）如何にも奇麗の葛布上衣作らん其の材料に一つ買つて行かう、

懸川葛布に關しては、藻鹽草に冷泉爲相の歌に「これぞこの所ならひと門々に葛てふ布をかけ川の里」と云ふのがある、

承久のむかしを思ひいづるに菊川いとあはれなりや．袖しきかぬるとよめる歌のあるにけふは雨さへふりてげにわたくしの旅ならば宿らまほしきなり、

今もなほかやが軒端に雨もりて
　むかしおぼゆる菊川のやど

過ぎし昔、承久の頃彼の中御門前中納言宗行勤王の爲めに捕はれ人となり、關東下向の時此の宿の名の菊川と云ふを聞いて宿の柱に書かれた詩の句「今東海道菊川、於西岸而失命」と云ふ故事を思ひ、感に堪へ無かつたが、又昔の歌にも袖しき兼ぬると云ふが如く、今日は朝からの雨、自由になる身勝手の旅ならばせめて茲の宿に一泊して、雨も避け、昔も弔ひたしと思ふたが、それも思ふやうには成らず、

（歌）昔もさうと聞いた、今も茅葺の家根のこと雨はもり勝ちである、さながらの昔の儘の面影を留めて此の菊川の宿は哀れな様子である、

小夜の中山は名高きところなれば今いふもさらなり．光行朝臣のかきたまへるものにもいとめいぼくあるさまに見ゆ、

としはまだみそぢがほどにゆくとくと
　やたび越えけり小夜の中山

夕ぐれ大井川の水まさりぬれば駿河へ
わたらで金谷にやどる、

自分共が今日越えて行く小夜の中山は昔からの名所の事、今更云ふ迄も無いことであるが、彼の光行朝臣の書かれたものにも、如何にも見所多く、面白い所として記るされて居る、

(訳)自分はまだ三十歳にも足らぬ年齢ではあるが此の道には縁がありて往來共に云つたなら丁度今回迄八度も此の小夜の中山を越えたとである、雨に大井川の水嵩増し、今日到底越すに越されず駿河の國とは河一つ隔てゝ遠江の内の金谷の宿に宿をとることにした、

光行朝臣のかきたまへるもの海道記の事、海道記の中に「さよの中山にかゝる云々此所はその名ことに聞えつる所なれば、一時のほどに百たびたちとまりて打ながめゆけば云々と、見えて居る、此の海道記は光行朝臣の作であるのを、普通には鴨長明海道記と誤まられて居る。

晦日、雨はれて日うらゝかになりぬ。河原へ出で見るにやゝ水おちて石いでたり、されどもとつ瀬わたるほど今やさかまく水に落ちいらましとおそろしさいはんかたなし。からうじてむかひにつきぬ後思ひ出づるだに筆ふるへてそのをりの事大かたもらしつ伏屋の板敷尻かけてしはしおくるゝ人まつほど、

大井川水おとたかきよひ／＼は
岸のとまやに夢も結はじ
とおもひやらる

みそか、今日は昨日に引かへ、雨も歇み、空も名殘りなく晴れ渡りて來た。河原の邊り迄出掛けて見ると、昨日よりも少しは水嵩も減りて此處其處に河原の石が露骨に見えて居る、と云つても何を云つても音に名高き大井川、殊に雨後のことで河

の本流とも云ふべき所を瀨わたりする時は、あはや逆浪打つて流るゝ水の中に落ち込みはしないかと氣も氣で無かつた。それも無難にやつとの思ひで向ふ岸に着くことが出來た、此の日記を書いて居る今でさへ其の時の恐ろしさを思ふては、筆持つ手先が顫るへて書けぬほどであるから、委しく書きたくても書けぬ故、只のあらましに止めて置く、扨向岸に着いて、河番の小屋の板敷に腰を下ろして、後れて來る同伴の人達を待ち合する間に(歟)昨夜あたりのやうに河の水增し、瀨の音高くなる時は何時も、此の河番の小屋の番人は、水音の高いが爲に碌々は眠りにも着かれぬことではあるまいか、慣れてはさうでも無いかしらむ。と心の中に思ひやられたことである。

島田の入口ひたりの方へ並木のさくら植ゑわたして、おうよりて玉垣しわたしたるやしろの見ゆるを、いかなる神にかおはすると問へば、大井の神とをしへぬいづれの神をまつりけん式などにのりたまへるか知らず、幾度か廣前をすきながら、花のたよりにつけてけふなん見いでたてまつりたる、

なほざりのぬさとは見えず神垣に
春の手向し花の白ゆふ

島田の宿の入口左手の方に當りて、櫻を並木に植ゑ込んで、其の奧まりた所に玉垣を繞らしてある神社一宇見つかりたので、近く居た人にあの社の神はと問ふたら、大井川の水神樣だと答へて吳れた。御本體には誰を祀りたものであらうか、さう云ふ神樣はかの神名式の中に見えて居られるであらうか、能くは知らぬが、此の處神社の鳥居の御前は幾度か通して居ながら、不斷はつい氣も付か無かつた。櫻が餘り立派に咲いて居たので今日ふと眼が止まつて神社なるとも知つた次第である。

(歌)神社の垣に春の佐保姫がわざ〳〵取り掛けて呉れた、此の櫻の白木綿の見事さ、並一通りのぬさ(幣帛)とは思はれぬ實に立派なものである

おうよりて　おくの方によりて、

玉垣、神社の周圍の垣、玉はほめたる言葉、式などに、**神名式**のこと、日本國中の神名を記せるもの、此の式中に記せられぬ神は公に認められぬものか、式の出來た後に祀られたものと見て好い、扨て茲に神名式迄も引き出して居る所を見ても此の道の記の作者が並大抵の女でなく、豐富なる學問があつた事が推察される。前にも賈島の詩を引き其外更科、伊勢、十六夜、大平記、海道記等の故事を引いてある具合から云つても和漢の書に眼を曝らして居た人と云ふことは明白な事である。

廣前　神社の鳥居の前邊りの廣くなり居る所、

花の白ゆふ、櫻の花を神前に捧ぐる幣帛を白木綿と見て詠んたのである、

瀬戸川をわたるに見ゆるを烏帽子山とをしふ。柳さびなどのいやしきにはあらで、もろ眉のかすみにこもりたるがいとをかしく覺ゆ。

瀬戸川を渡る時あたりに見ゆる山は何と尋ねたに答へて、烏帽子山と教へられた、烏帽子にも種類があるが此處にはかの柳さびの無位の社人などの被むる卑しいのではなく、攝家諸家の若殿原の被むらせ玉ふ諸眉の烏帽子、其の證據には眉墨の匂ひほのかに、霞は立ち罩めていかにもゆかしい山の眺めではないか、

柳さびもろ眉　柳さびもろ眉共に烏帽子名であつて格式によりて定められたものである、即ち柳左比は無位社人攝家は小諸眉諸家は十六以前諸眉と定まりたもの、それを甘く霞み罩めたる烏帽子山の面白き景色に引きあてた處、故實家の知識を要する所で例の學殖が見える。

宇都の山越に修業者ふたりあひたり、む

かし物語のけしきにはあらず馬にのりてゆくなりけり。はふしなどはいつもかちにてやつれたらむがさまよくやさし。此行者どもはこえあぶらつきてつねにきうじものゝあしきをくふとは見えざりけり。彼にそゞろなる文などことづけたらば物ゆかしおのれまづひらきても見るらむとおもひやるもつみふかくや。

是から宇都の山越と云ふ所になりて二人の法體の修行者に出逢つたが此の修行者は昔物語（伊勢物語）にあるあの修行者のやうに裝ひはして居ないで、二人とも馬に打乘りて居た。自分思ふに法師と云ふのはどうしても徒歩からぽとりぽとり、身の裝ひ、樣子も窶れて居た方が法師らしく、人見もよく、似合はしい、又やさしく殊勝に見えるものであるが、今行き逢つた修行者さうではなく馬に打ち跨りて、其の顏容の肥えてあぶらついて居る處から推察して見ても、不斷肉類を食ふて、精進物の粗末な食物は食ふて居ないらしく思はれる、若しか彼の昔物語（伊勢物語）にあるやうにうつかりした手紙でも托しやうものなら、それこそどう云ふ文句が中に書いてあらうと下司の根性を出して、先方の手に渡らぬ前に、開封して見てのけられることであらうと思つたのは餘りした邪推かも知れず、こういふ邪推、容貌によく人を判斷するのは誠に罪なことであるよろしくないことである。

昔ものがたり、伊勢物語に「ゆき〳〵てするがの國にいたりぬ、うつの山に至りて我いらんとする道はいとくらうほそきに、蔦かへではしげり、物心ぼそくすゞろなるめを見る事と思ふに修業者あひたり。かゝる道にはいかでかいまするといふをみればみし人なりけり。京に其の人のもとへとてふみかきてつく、」云々と見えたのを云つたもので

ある。

此の一節、文章はいかにも自在に、流暢に出來て居て結末の筆つかひの面白さ、ひきしまりた所、とても他の作者の眞似せられぬ所と思はれる。

山のそばに菫のさきたるを

やよすみれこゝろにまかす旅ならば
一夜はねなんうつの山べに

山の崖(きりきし)に咲いて居る菫のやさしいのに對して、

(歌)やよ菫、なつかしき菫の花よ、思ふ儘になる旅行であつたら此の菫咲きこぼるゝ宇都の山にせめて、一夜なりとも宿りて行かうものを、それも叶はぬ身ぞ、今の此の身は、

一夜はねなん　萬葉集山邊赤人の歌に「春の野の菫つみにと來しわれぞ野をなつかしみ一夜ねにける」とあり。此等の歌を思ひ合せて詠んだものと思はれる。

深山木の中に櫻の咲たるを見つけたるはまことにしるべえたるこゝちしてめづらしくも哀にもぞおぼゆる。ちりて谷川にながるゝさまはためでたし、

雲と見え雪とちりゆきてはまた
花の涙たつうつの山河

深山木黑く生ひ茂りたる中に一きは立ちて珍らしく櫻の今を盛と美しく咲きこぼれて居るのを見出した時は、何となく知己の人にでもあつたやうな氣がして珍しいやうな、又物哀れな感も起こるのであるが、眺めて居れば櫻の花瓣はひらひらと散りて、下を流れて行く溪流に落ち込んで居る景色は何とも云へぬほどである。

(歌)咲いて居る中はあれは雲かと人に眺められ、散りてはあれ雪ではと眺められた揚句、宇都山川の水に落ちて浪のまに〳〵浮きつ沈みつ流れゆく樣の、あな面白さ何と云ふ奇麗な景色であらう。

丸子のすくのうしろの山に火のたかくもゆればうちおどろかれてあれはいかにと〻へば、蕨のためやくなりといふ。たゞ春の日にと思はる〻に風さへ吹けば心もとなし、

春の日に下もえいそくさわらびを
　さのみは人のやかずもあらなん

丸子の驛の後方に當りた山に火花高く燃えあがりて居るのを見て、吃驚りしてあれなる火はどうしたのだと尋ねたが、何あれは蕨の萠え出るやうにと山番が火をつけたのだとの答へ、さう云ふことはせずに、只暖かい春の日のせんがまゝにまかせて置いてよさゝうなものと思はれた。丁度風が吹き起りて來たので飛火でもして危くはないかと氣も氣で無く心配をした。

(歌)燒かなくとも春になれば蕨は萠え出やうとしきりにあせりて居やうものを、山番よ、何しにさまで燒くのであるか、

たゞ春の日に　新古今春上に壬生忠見の歌、「やかずとも草はもえなん春日野はたゞ春の日にまかせたらなん」と云ふのがある。

阿部川のほとりより暮れか〻りてしづはた山もけそうには見えず、

鶯のこゑのあやめもわかぬまで
　はやくれそむるしづはたの山

阿部川の宿邊りへ懸つた時は日は暮れて來て近い賤機山もはつきりとは見えぬ程であつた、

(歌)節おもしろき鶯の聲も暗に隱くれて、賤機山一帶とつぷりと日は暮れて來た美しい四邊の景色も見えぬやうに成りて來た。

鶯のこゑのあやめ　日暮れても聲の聞こえぬ譯はなきを日に聲まで隱くる〻やうに詠んだのが此の歌の興で鶯の云々はあやめもわかぬと云ふ下の言葉の枕詞のやうな格になつて居る(つゞく)

支那古代の詩（中）

林 恒山

前にも話した通り、詩には種々あるが、今度も短い分り易いのを話さう、又時節柄でもあるから兎罝の詩とせう、

肅々兎罝。椓之丁々。赳々武夫。公侯干城

肅々とは、肅はシヅカナルといふ字で、肅々となると、シヅカに儀威を正すといふことになり、其れから嚴重といふことにもなる、此處では此嚴重といふことに說かねばならぬ、兎はウサギで、罝は本音シヨであるが、釋文に據るにシヤと讀まねばならぬ兎を捕へる網のことである、椓はタクと讀むが、兎を捕ふるには、其網を張る杭を打たねばならぬ、其杭を打つことを椓といふのである、丁は音ソウで、丁々とは杭を打つ鳴り音の形容で、唐詩選にも伐木丁々などといつて俗にいふカン／＼といふ音で、手堅き音の形容である、此嚴重に兎を捕ふる網を張り其網を止むる杭を打つ音の手堅いといふのは此である、元來兎といふものは、小さいもので、コセコセした、惡智惠のあるもので、其れからして、詩では多く小人の姦智にたけて居るものに喩へてある其網を張るといふのは、此小人を取締る法度を設くることで、其れも手緩くては、其甲斐がないから、肅々といつて至つて嚴重であるといふ事をいつたのである、赳はタケシ又イサムと訓する字で、赳々とは漢書の註には才強の貌となつて、說文には輕勁にして才ありとある、是れによつて觀ると、唯々武勇といふのみでなく、其中に才のきゝたる所があつて云はゞ勇武才略兼備はるといふ形容である、武夫とは今いふ軍人といふことである、公侯は日本でいふと、古の大名の事で、周の時代には大名に五等あつて、今日我國の華族に五等あるのは、此周の時の五等の名を採つたので、即公、侯、伯、子、男であるが、周の時の大名には、斯いふ五等があつたので

公侯といふと其大名中で一二等に位するのであるから、我國維新前の大名でいふと尾張とか、加賀とかいふので、此詩でいふと當時では周の文王は一の大名であつたのである、干城の干は盾です、此句の意味は武勇才略兼備の武士は、文王の盾ともなり城ともなるものであるといふので、即ち是は事實を述べたので、詩でいふと賦であるが、此の赳々といふのは武勇一偏でなく、才智もあるといふ事に注意せぬと、次章の文句が分らぬのである、以上の四句を一口にいふと、嚴重に兎を捕へる網を張り、其網を止むる杭を打つ音が、手嚴しくカン〳〵と聞える、即ち姦智の小人を取締る法度が、着々と制定されて居る、之を取締るべき勇武才略兼備の武士がある、是は大名の盾ともなり城ともなる人物で、其れで國内が治まつて居るといふことである、是れは比と實事とを並べたのである、此に一つ少し六ケしいか知らんが、ザット云つて置かねばならん事がある、以上は唯々比と實事即賦であるといつた許りでは、言ひ足らぬので、詩には比と賦と興といふ三つの體があつて、比はタトへで、賦は實事であることは、前にも云つたので分かるが、興といふのは、此比と賦とが相呼び起して相應ずるのをいふので、喩へていふと、俗歌に「丸い卵は切り樣で四角なる、物もいひ樣で角がたつ、」といふのがあり、又「釋迦に提婆や鯨に鯱、國には盜人、家には鼠」といふのがあるが、此「丸い卵は切り樣で四角なる」といふのは、比で「物も云ひ樣で角がたつ、」といふは實事であるが斯いふ樣に比と實事が相呼應するを興といふので、「釋迦に提婆や、鯨に鯱、」といふのも比で、「國には盜人、家には鼠、」といふ實事に相呼應じて居るから興となるのである、此詩も肅々たる兎罝といふ比と、赳々たる武夫といふ實事と相呼應して居るから、興と云はねばならぬが、併し次ぎのは、椓之丁々と、公侯の干城とは相呼應して居らぬから、此詩の體を半興とか漫興とかいふのである。

肅々兎罝。施于中逵。赳々武夫公侯好仇

初めの一句は前章と同じ、施はモヲクと讀みて、張り置くこと、中逵とは逵中といふことで、前回にも中谷と書いて、谷中といふ事であるといふ事を説いたが、此處も其れと同じで韻を蹈むために、逆樣にしたのである、逵とは面白い字であるから、序に少しく詳しく話さう、説文に逵一に馗といふ、龜背に似たるをいふとあつて、龜の甲の筋の樣に道の續いて居るのをいふのだとしてある、又爾雅といふ書には、道の名を並べ擧げてあつて、一達を道路といひ、二達を岐旁といひ、三達を劇旁といひ、四達を衢といひ、五達を康といひ、六達を莊といひ、七達を劇驂といひ、八達を崇期といひ、九達を逵といふとある、即逵は四方八方位でなく、九方にも通ずるといふ道で、往來の最も多い場所である、斯る場所に網を張り置くといふ事で、此二句も比であつて、小人の惡事を止めんが爲めに、制札貼札などを此往來頻繁なる處に立て置くことで、最も多く人に知らする方便であるからである、第三句も前章と同じく、好仇の仇は逑と同じく、逑はもとモトムルといふ字であるが、アフともナラブとも訓して、相手といふ事になる、當時大名たりし文王のよき相手であるといふ事で、全章の意味を一口にいふと、嚴重に兎の網を九方にも通ずる何れに往くにも通らなければならぬ場所に設け置く、即制札を往來繁しき場所に立て置き、之を取締るに才武兼備のものを以てし、其人は文王の國を治るによき相談相手たる人々であるといふ事である、此相談相手ともなる人でなければ、唯々武勇一偏の人では六ケしい、其れ故赳々たる才武兼備の人でなければならぬ事が分かる。

肅々兎罝。施㆓于中林㆒。赳々武夫。公侯腹心

此章も第二第三の句は前章と同じく、中林も林中といふ事で、前章の中逵と同じく韻を蹈むために逆樣にしたのである、此兎の網を林中に張り置くといふのは、是れが此詩の最も大切なる意味のある、所で兎の最も多く居る所は此林中である、腹心とは文王の腹や心といふ事であるから、人の知れぬ機密にまで

與るといふ事で、臣下たるもの、最も君に信用せられたるもの丶事で、前章から推して見ると、初めは干城といひ、次には好仇といひ、今度は腹心といひ、段々文字の使ひ分けも進んで來て居る、之に從つて初めは何處ともいはず、次に中逵といひ、今度は中林としてある、此中林即林中といふのは、元來林といふものは、木が多くあつて、其枝などが生え茂つて居るから、其奥深い處は人の出入せぬ處である、是れが兎の最も多く居る塲所である、此喩へは奥深い林中といふのは、文王の宮中即奥向きの事で、奥向きは臣下の出入りする事の出來ぬ處であるが、此奥向は女子や宦官などの居る所であるから、小人の多い塲所である、兎角法度などの亂れ易い所である、其れからして動もすると、此奥向から騒動の起り易いもので、其例も澤山ある、其れ故此奥向が最も注意すべき所でありて、最も治めにくい所としてある、先づ此の奥向が治らぬと、一國の治まる理窟なく、其奥向の治まると治まらぬとは、一に夫人の賢否に關するので、賢夫人さへあれば、自然と奥向の法度も行はれ、誰一人の不義不法を働くものなく、是れが一國の治まる源となつて、小人は次第に屏息してしまひ、賢人は殘らず登庸さる丶といふ事になる、是れが此詩の意味の大切なる所で、此詩は表面の文句は武夫の兎狩から、武勇才略兼備の武夫の本色を說きて、如何にも勇ましき詩であるが、其文句の中に含める意を味ふて見ると、斯る武夫の盛なるのも、内に賢夫人のあるから、此に至れるものであるといふ事が分かる、是れが此句の中林といふので知れるのは、斯いふ所が古の詩の奥ゆかしい所である、即此詩は文王の妃が才德共に備はりたることを褒めたので、斯る賢夫人が内に立つたから赳々たる武夫の多く登用せられて、遂に周の天下を見る樣になつたといふ、極めて目出度い詩である。

（つゞく）

MRS. HAMA TEI IN BESIEGED TIENTSIN.—(*Continued.*)

By A. Miyamori.

The consulate staff and the Japanese residents who were taking shelter in the consulate numbered fifty-two. They were divided into three divisions. It was the duty of one division to go round the consulate with guns on their shoulders to keep watch over it day and night. The other two divisions attended to provisions and to nursing the wounded. Mrs. Tei worked at the head of the nursing corps. With such motherly tenderness and kind thoughtfulness did she nurse them that a wounded sailor said, "Madam, I have no word to express my thankfulness toward you. How troublesome it must be to take so much care of us!"

"Oh, no!" said Mrs. Tei, "it is a pleasure to me. It is indeed a great honor for me to nurse soldiers who are wounded for our country's sake. So you need not think of me at all."

"You are too kind to say that," said the sailor, at the same time melting into tears of gratitude.

There was another sailor named a certain Doroya who was wounded in the right hand and so could not take his food by himself. Mrs. Tei accordingly fed him with rice gruel which she prepared herself and took special care of him in every other way.

"Madam," said he, "it is too much for you to do this for me." Then he wept, the big tears streaming down his cheeks.

"Why do you weep, Mr. Doroya?" inquired Mrs. Tei. "Does the wound pain you?"

"Oh, no!" replied the sailor. "A Japanese sailor does not weep for the pain of a wound. But your kindness makes me weep. My tears are tears of gratitude. You do not know how thankful I am."

The sailor still wept on and a flood of tears streamed down into the gruel he was taking.

"As this gruel is watered with your tears I will bring some fresh to you," said Mrs. Tei.

"No, thank you," returned the other. "It would be wrong to throw away the gruel containing my tears of gratitude."

So saying he ate up the gruel.

A letter came to Mr. Tei from the German consul to the effect that, since the Japanese consulate was considered the safest among the consulates, he hoped he would be permitted to send the German women to it. He added that the Japanese consulate would do well for making a last stand, in addition to the British Engineering Bureau. Mr. Tei, consulting with Mrs. Tei, wrote back to the German consul consenting to his request. Then the consulate must be cleaned as nicely as possible. If the German ladies said the Japanese consulate was dirty, it would be Japan's shame. With this idea Mrs. Tei began to clean and dust the rooms. The rest of the consulate inmates hastened to help her; and soon two of the rooms were completely cleaned so that they might take the German ladies there any time. Mrs. Tei, tired with toil, paused and was taking breath when there came into the room a Chinese man-servant about fifty years old named Kogo. There had been in the service of the Japanese consulate five Chinese man-servants but they had deserted the consulate since the preceding day except this Kogo. He had served Mr. and Mrs. Tei for years with unchanging faithfulness rare for a Chinese, and was consequently in the special favor of Mrs. Tei. In appreciation of her favor, he would not desert the consulate amid the fierce bombardment.

"My lady," said Kogo to Mrs. Tei on entering the room, "while I was just now standing at the back-gate, a pretty girl about fifteen appeared in a window of the second-storied room of a house opposite the street and threw something into the yard of the consulate. I picked it up and found it to be a letter with a hair-pin inserted through. Here it is. I think the hair-pin was attached to give weight to the letter."

Mrs. Tei received it and, looking at the envelope, found that it was addressed to the consul from a daughter of Tō Shōgi. Accordingly she took it to Mr. Tei, who opened it and after a perusal said, "Ah, this is a letter from the second daughter of Mr. To Shogi, Railway Master-General. His wife and eldest daughter were wounded by pieces of a cannon-ball from the Boxers. He asked the Russians for the assistance of a surgeon but they refused. The second daughter is very anxious to relieve her mother and sister from their agonies. So without telling even her father, she has written to us asking for a physician."

"Oh, dear me!" said Mrs. Tei. "How unkind the Russians are! Well, then, had you not better at once ask a surgeon to do this service? Let us show the Chinese our kindness by sending a physician."

"Oh, yes," said Mr. Tei, "I'll ask a surgeon to go to their assistance."

A surgeon, accompanied by an interpreter, was sent to To's house. On examination the elder daughter's wound was found to be mortal. The mother might be saved but her left leg must be amputated. Her relations objected to the operation and she was of the same idea saying in tears, "I would rather die than have my leg cut off!" However, after a great deal of exhortation, they were at length prevailed on to consent to the amputation. In the evening Mrs. To was carried to the consulate for the operation. While she stayed in the consulate Mrs. Tei nursed her with great care and kindness to the boundless gratitude of her relations.

(*To be continued.*)

天津籠城中の鄭夫人（承前）

宮森麻太郎

領事館員及領事館に避難し居る日本居留氏は合せて五十二名ありたり。此人數を三組に分ち一組の任務は銃を肩にして晝夜領事館を巡回して警戒を爲すにあり。他の二組は糧食の事と負傷者看護の事に任ず。鄭夫人は看護隊の主任として働けり。夫人の働き振り極めて深切懇到なりしかば一人の負傷水兵は云へり「奥樣何と御禮を申してよいやら私は御禮の申し樣がございません。萬事萬端世話をなさるのは定めて御迷惑でムいませうね。」

鄭夫人。「どう致しまして反て愉快です。國家の爲めに御負傷なされた軍人を看護するのは私に取ては大なる名譽です。それゆへ私の事などは御考へなさるには及びません。」

負傷兵「そう被仰（オッシャ）られると痛み入ります」と云ひながらポッポッ感涙を流したり●

又泥谷某と云ふ水兵あり右手に負傷して自から食餌を取ること能はず。鄭夫人乃ち自から煮たる粥を取て之に哺（ク）めてやり。且つ種々特別にいたわりしかば泥谷は「奥さんどうも濟みません」と云つてボロリボロリ涙をこぼしたり。

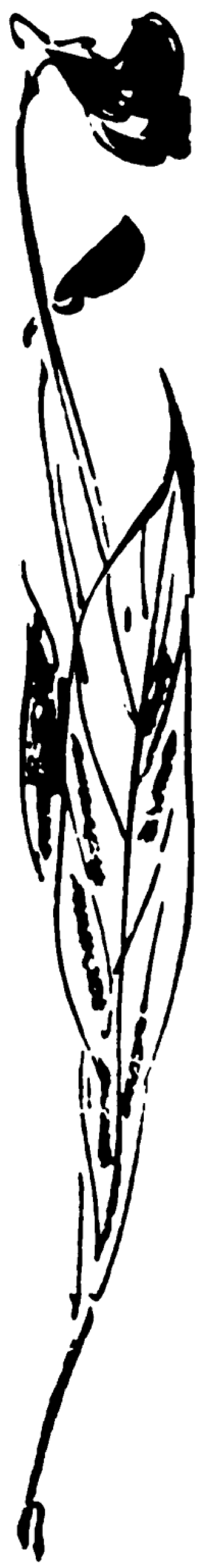
鄭夫人。「泥谷さん何故お泣きなさるの。傷が痛みますか」
泥谷。「否日本の兵士は傷の痛む位で泣きはしません。私の泣くのはあなたの御深切なので泣くのです。私の涙は難有涙です。どれほど私が難有思ふかはあなたには御分りになりませんでしやう」
泥谷は依然泣き續けたれば其涙は澤山彼の食ひ居る粥の中に落ちたり。
鄭夫人。「此粥には涙が這入て穢ないから涙の入らない新しいのを持て來ませう」
泥谷「どう致しまして有難涙の這入ている粥を捨てるのい勿體ないです」と言ひながら其粥を啜り了れり。

時に獨逸領事より鄭氏に宛てたる書面來れり「日本領事館は各國領事館中最も安全のやうに思はるゝゆゑ獨逸の婦人を日本領事館に送り込みたいから宜敷賴む又英國の工部局の外更に日本領事館も最後の防戰所として適當ならんと思ふ」と云ふ意味の書面なり。鄭領事は鄭夫人と相談の上承諾の旨を回答したり。「そこで獨逸の婦人が來るとすれば領事館を成るべく奇麗に掃除して置かないと日本の領事館は穢ないなどゝ云はれては日本の耻辱になります」斯る考を以て鄭夫人は各室の掃除に着手せしかば他の人々も急ぎて加勢し忽ち二室だけは全然掃除し了はり何時獨逸婦人が來るも差支なきに至れり。鄭夫人疲れて箒を停めてホッと一息ついて居る所へ年の頃五十許の支那人のボーイ胡五と云ふ者入り來れり。日本領事館には是まで支那人のボーイ五名使用し居りしが昨十六日來皆逃去て殘るは此胡五一人なり。彼は數年間一日の如く領事館に在て實に支那人には珍らしく忠實に鄭氏夫妻に事へたり。鄭夫人は其故彼を愛顧したり。彼も亦恩顧に感じ此の激烈なる砲撃の中にも領事館を逃出さんとはせざりき。胡五は入來るや否や鄭夫人に向ひ「奥様私が唯今裏門の所へ出ておりますると道路を隔てた向ふの家の二階窓に愛らしき十五六才の娘が顏を出しまして領事館の庭に何か投込みましたから私が取上げて見ますと一封の書面に花簪が挿してムいました。簪は錘として書面に附けたらしうムいます。其書面は此處にございます。」
鄭夫人は之を手に取て見しに鄭領事宛にして唐紹儀の女子よりとあり。其故夫人は之を鄭領事の所へ持行きしに領事は之を開封し讀下して曰く「ア、之れ

は鐵道總辨の職を務むる唐紹儀氏の次女から來たのだ唐氏の妻が其の長女と倶に匪團の砲彈の破片にあてられて負傷したから露國人の方へ軍醫を頼みに遣ッたか寄越（ヨコ）して呉れない。次女は母と姉の苦みを救ふてやりたいが腹一杯で父にも話さずしてお頼み申し上るが何卒醫者を寄越して貰いたいと云ふのだ。」
鄭夫人「それはマアお氣の毒ですね。マア露國人の不深切なこと、ではあなた早速一ツ軍醫の方をお頼みになッたら如何です。醫者を送てやッて日本人の深切を支那人に知らせてやりたいと思います。」
鄭領事「ムヽ、そうじや軍醫を頼もう。」

一名の外科醫は通譯官と共に唐紹儀の家に赴けり。親子の傷所を檢（アラタ）め見るに長女の方は致命傷にて生命覺束なし。母の方は助命の見込あれども左脚を切斷せざるべからず。唐夫人の親屬一同之を肯せず夫人も同じ考にて「妾は片足を切る位なら死んだ方がましであります」と云へり。然れども種々諭して遂に手術を施すことに同意せしめたり。其日の晩手術を施す爲めに唐夫人を領事館に連込みたり。唐夫人が領事館に居る間鄭夫人は丁寧懇篤に看護せしかば唐夫人の親族の者は一方ならず打喜びたり。

（未　完）



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

自然之友

各冊插畫入

定價各冊金拾六錢
郵税各冊金四錢
内七卷郵税二錢

秋山鐵太郎著 卷一 通俗 物理學講話

卷二 通俗 化學講話 上下

高桑良興著 卷三 通俗 植物學講話

卷四 通俗 動物學講話

秋山鐵太郎著 卷五 自然界の迷信

高桑良興著 卷六 小生物之大作用

秋山鐵太郎著 卷七 地文學講話

高桑良興著 卷八 生活法之多趣

秋山鐵太郎著 卷九 通俗天文學講話

秋山鐵太郎著 卷十 毒 （新刊）

毒、毒、毒、毒、毒、毒、

天地慘憺、人生悲傷。概ね毒害の致す所なり、畏るべきは毒、滅さゞるべからざるは其害、本書は毒に關する東西各國の歷史、統計より各種の毒の性狀、作用、檢出法、解毒法など、頗る通俗的に說明せるもの、世人毒の畏るべきを知らば、速に其害を避くる法を知らざるべからず、

堀内新泉著

家庭讀本

全四冊 各書插入

定價各金拾六錢
郵税各金四錢
全部郵税金拾錢

全部目次

春之卷 1古稀の賀 2自愛 3老船長上 4老船長中 5老船長下 6花ちる里 7おもちや 8御國の風俗上 9御國の風俗中 10御國の風俗下 11母のおもかげ 12初旅 13おぼろ月夜

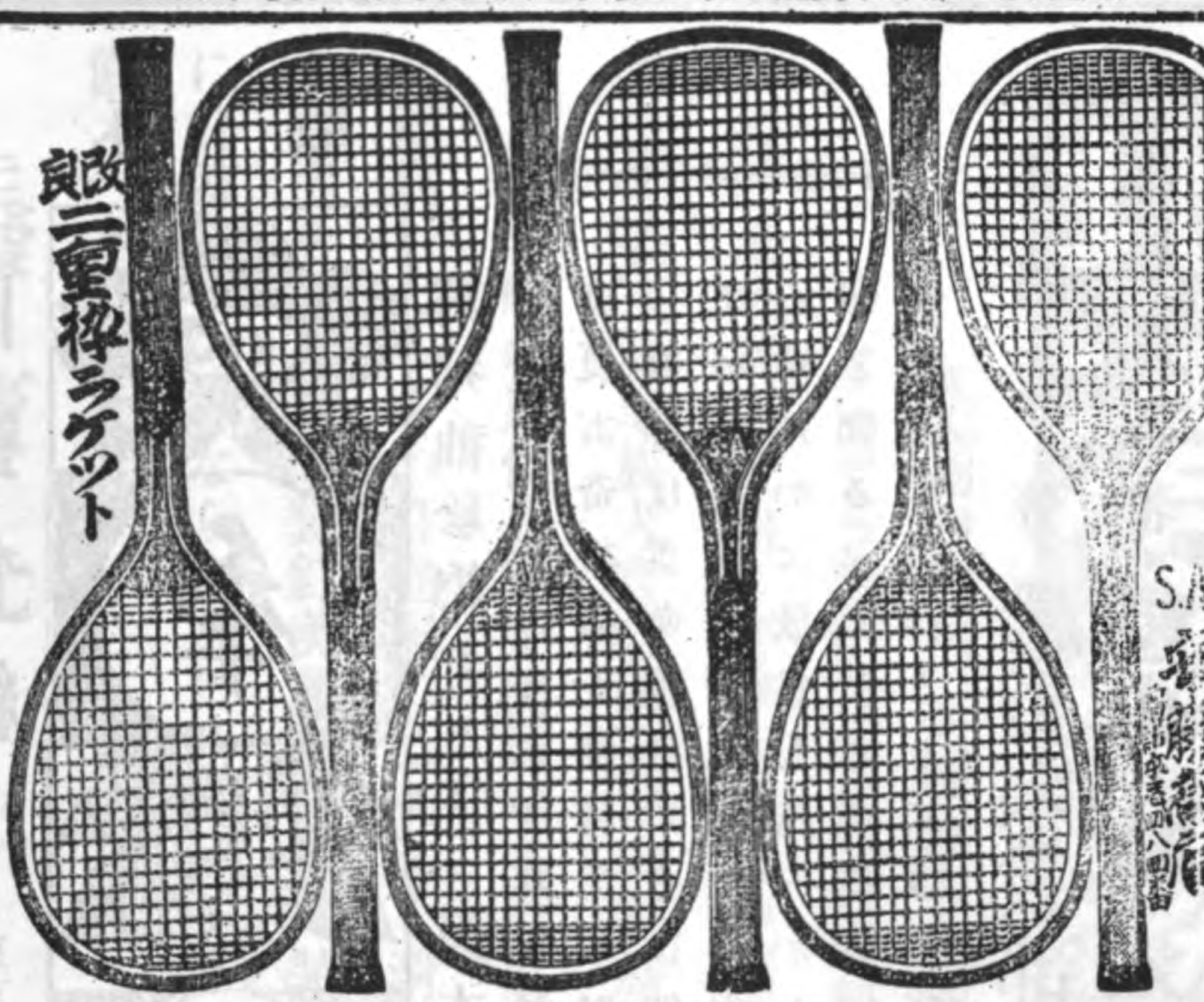
夏之卷 1庭の若葉 2螢狩 3游泳の名人 4雨後の月 5蚊やり火 6姫百合 7夕すゞみ 8夕立 9撫子

秋之卷 1秋の旅 2ゆく秋 3雁かね 4十三夜 5千草百草 6虫の音 7紅葉狩 8かくれ家 9暮れの鐘

冬之卷 1初時雨 2木枯 3霜夜 4冬の月 5雪の月 6寒紅梅 7うつみ火 8水鳥 9歳の暮

發行所 東京市神田區小川町 電話本局二四三〇番 開發社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



諸學校用　体操器械

登錄商標

安藤商店

改良二重枠ラケット		
一號	四本	一三、五〇
二號	四本	一一、五〇
三號	四本	一〇、三〇
四號	四本	八、三〇
五號	四本	七、三〇
六號	四本	六、三〇
七號	四本	五、三五
普通二重枠ラケット		
一號	四本	一三、〇〇
二號	四本	一一、二〇
三號	四本	九、八〇
四號	四本	七、四〇
五號	四本	六、七〇
六號	四本	五、七〇
七號	四本	四、七五

テニスネット		
一號	長四間半 巾三尺五寸	一、七五
二號	長五間半 巾三尺五寸	三、三五
三號	長六間 巾三尺五寸	二、四五
四號	長七間 巾三尺五寸	二、九五
網張棒		
上等	四點付	二、九〇
並等	三點付	一、五〇
最新形室內テニス（ラケット二本 ボール四ケ ネット一張 網張棒二本）	壹箱入	一四、五

S.A.
体操器械
遊戲品一切
東京
安藤商店
神田

S.A.
体操器械
遊戲品一切
東京
安藤商店
神田

海外新話

◎噴鼻と迷信

他人に陰言を云はるゝと噴鼻が出るとは我國の迷信なるが是は又變つた迷信と云ふべし亞弗利加スーダンのセナノル王の宮殿にては國王が噴鼻を爲せる場合には多くの後宮は一齊に國王に背を向くると云ふ國王の面前にあらずして其噴鼻の聞えたる時亦同樣なりと但し如何なる迷信に本づけるものか這は明かならず

◎兒童と談話

西洋には兒童に談話を爲すを專門とする家庭敎師あるが今經驗ある一敎師の言ふ所によれば普通の御伽話は兒童に取つて有害無益なれば成るべく事實譚を試むるを良しとす今其種類に付て云へば一般の兒童は動物に關する談話を好み貧民の兒童は農業に關するもの上流社會の兒童は冒險談を好むの傾向ありと云ふ

◎面白き遺言

佛國の貴族にてピエルクール伯と云へる人は面白き遺言を遺したり即ち生前その居住したる土地ルーエンの町に於て年々大男大女の夫婦を募集し其優等者四夫婦に四萬圓づゝを惠與せんと云ふとなり伯は之が資金として四百萬圓の財產を存置し此財產より生ずる收入中右の惠與金を除きたる殘餘の額を以て更に右等夫婦に其體格に適當せる家屋を建造し與へんことを希望せり此遺言に叙述する所法廷の鑑定を經て既に有效に決したるより今は我こそ此惠與に預らんものをとて世界の隅々よりルーエンに驅け出づる大男大女尠なからず中には未だ配偶なき者あり兎も角もとてルーエンに赴き扨其場にて同じく馳せ集れる未婚者と談合を通じ結婚を申入るゝなどの滑

稽さへあり左れど遺言の趣に據れば大男大女夫婦は體格上子を産むこと能はず又人爲上に避姙を謀るが如き者ならざるを要す故に合格者は先づ初めの夫婦間に一兒を有するものならざるべからずとあり是れには大男大女の當惑する者甚だ多しとなり左りながら之が募集は爾今毎年行はるゝことなるを以て今年は規定通りの合格者を得ること能はざるが如きことあらんも是れより世間の大男大女をして早婚を思はしめ遠からずして續々惠與金の要求者を出すに至ること必然なるべし伯が斯くの如き遺言を爲したるは何が故ぞと云ふに抑々是れには其故あり伯自らも六尺の身長を有したる人にて伯の家未だ曾て身長に於て多く世間に引けを取りたることなし蓋し家憲に依り體格俊拔なるものを索めて其配に擇ぶの習例あるを以てなり故に伯以爲らく伯の家憲を以て廣く之を世に施さば遂に世の人をして著しく其身長を増さしむるに至るべしと即ち自國民の身長概して世に劣れるを恨とし此遺言を遺したるものなり故を以て伯の惠與金を受くるものは爾後永くルーエンに居住せざるべからざる定めなりと云へり

◎話のくさ〳〵

▲十九世紀中戰爭で死んだ文明國の男子の數は三千萬人に達したとのことである

▲濠洲のイクトリア市にては子供が學校に往復する時には市街鐵道にては乘車賃を取らぬことになつて居る

▲西藏では人に遇た時手で自分の耳を引ッ張ッてそれから舌を出して見せるのが一番叮重な禮法である

▲眞に土一升金一升の價のある今の紐育市の立つて居るマンハッタン島は其初め亞米利加土人が五十圓で賣り渡したものだ

▲獨逸の衛生局の統計に據ると獨逸人一年に飲む酒の總代價は十二億五千圓で十五歳以上の男女一人平均七十圓である

▲瑞西蘭は山水の美を以て有名であるが毎年此國に漫遊する外國人の總數は三十八萬人に上り其費す金

は四千萬圓以上である

▲露國の鐵道は世界一番の危險なる鐵道で統計に據ると乘客百萬人につき三十人の死傷者を出す割合になつて居る

▲或る醫學者の説に鐵道で汽車が衝突した場合に睡つて居た人々は害を受けるとが少いと云ふ話である

▲墺地利維納市では總體五千の御者の中で士族株の歴々が四百人で男爵華族が五十人伯爵が四人あるとの話

▲倫敦市長の宴會で料理の爲めに費した石炭が十四噸ソップに用ひる鍋を磨ること四十餘仕人が二百五十人で換へ皿の數が八千箇さて其費用は七萬圓であつた

▲獨逸の或る地方で動物園の獅子が齒痛に罹つて苦しむので獸醫を呼んだが獸醫は獅子の番人と一緒に檻へ入つて終に其痛む齒を拔取たさうだ

▲小學生徒に將棊を奬勵すべしとは此間露西亞の文部大臣が發した布令であるが獨逸のタラシと云ふ博士も熱心に將棊論者で學校で正科目として將棊を敎ふべしと論じて居る此人の説によると將棊は少年の性質を鋭敏にし又決斷力を與へるとの主張である

▲南米のアルゼンチーン共和國は米國と濠洲とに次て多くの家畜を產する國で今は牛の數のみが一千萬頭あるとのことだが此澤山の牛は二百餘年前にブラジルから連れて來たたつた一匹の牡牛と八匹の牝牛が追々に殖えてこんなに多くなつたといふことだ

▲英國ポーツマスの救貧工場に入つて居る元水兵であつた男は無類な少ない年賜金を貰つて居る其額は一年四片(十六錢)で三月に一片宛貰ふことになる領收書には矢張一片の印紙を用ふるので詰り年に三片より貰はぬことになるさうだ

◎無邪氣なる問

米國の小學生徒數名は一敎師に引率せられて同國副大統領の邸を訪問したるが其際秘書官ホワイト氏は嘗つて副大統領たりし故ヘンリーウイルソンの半身像を安置せる一室に兒童を導き像を指して曰く「ワ

イルソン氏は實に此室に於て永眠せり」と兒童等問ふて曰く「氏自ら此像を作れるか」と

◎漁夫海中に運び去らる

露國の漁夫約二百名計りが過般アゾフ海の西岸なる露領ペトロプスク海岸に固着せる一大氷塊の上に集りて釣を垂れ居たるが其際氷塊は突然海岸を離れ折柄强風の吹き來りし爲め氷塊は二百名の漁夫を乘せたる儘海上遙かに浮去れり然るに同村には電信局の設けなきが故に警吏は約二十哩を距つる電信局所在地に馳せて急をベルヂアンスクに報じたれば即座に救助船を出せるも更に見當らず翌夜に至りて初めて其氷塊を發見せるが多數は凍傷に罹り一名は驚愕の餘り發狂し居りしと云ふ

◎四十層の高屋

紐育市は土地狹隘にして膨脹する能はざる地形なるより次第に高層の家屋を增しつゝありて十數層乃至二十層の家屋は同地に於て珍らしからざることなるが近々同地のブロードウエイに新築せられんとする家屋は實に四十層にして其高さ六百十五呎七千五百戸の家族を入るゝに足り其建築費は一千萬圓なり目下同市にて最高の建物はパークロウ館なるが同館は二十九層高さ三百八十二呎に過ぎざるなり新築館の間口は二百十二呎奥行百二十三呎にして二十個の昇降機を有し最下層は料理店に貸與し他は悉く事務室として貸與する筈にて貸賃は總て三百萬圓の年額に達すべしと云ふ

◎スペンサーの遺言

過般物故したるハーバードスペンサーの遺言こそ面白けれ曰く遺骸は先づ弛き蓋の棺に收め然る後之れを火葬に附し灰は何等の宗教的儀式を用ふることなくして埋むべしと又著籍の版權其他の財產は之れをオーブレー、ハーバート、博士バスチアン及びダビット、ダンキヤンの三氏に委托し右三氏にして現時生存せるビクトリア女皇の凡ての血統者及び其配偶の生存中及其死後二十一年の後迄は絕えず「社會學事業」の發行を繼續刊行せしむ而して右終て後は

凡ての版權、鉛版等を擧げて之れを競賣に附し其收入は當時存在せる科學研究の諸會合間に分與せらるべしと附記せり尙スペンサー氏の自叙傳は英國米國同時に發行さるヽを要し更らにダンキヤン氏をして相當なる傳記を物すべきことを委任せり殊に面白きは其時計を形身としてチヤールス、ホルムスに與へんことを要求し附記して曰ふ是れ余が幼時生命を救ひたるチヤールスの父ジヨージ、ホルムスの紀念也右時計は嘗て米國ボストンの友人等が贈る所此の形身をして長く同家に傳はらしめんことを望むと遺言附錄として重ねてメトリツク、システム（寸法十進法）に反對の意を繰返し同法案の議會に顯はるヽ每に之れに反對したる小冊子を復版して上下兩院の議員に配布すべきことを命せり一風變りたる遺言と云ふべし

◎少女丈夫を賞す

英國のケタリングと云ふ處にリジースミスと云ふ六歲の幼女が辛くも其幼弟を災厄より救ひ出だしたることわるを以て少女の勇名忽ち四方に傳播し該少女の爲めに寄附金を募集して其勇名を賞せんとするもの出で來れり殊に其筆頭に揭げられたる一紳士は新聞上少女の勇敢なる所爲を記述したるに感じ多額の金錢を銀行に預け入れ少女が二十一歲に達する頃其結婚費として取り出すべしと云ふ條件の下に寄附をなせり此他寄附金の應募者甚だ多しと云ふ

◎犬の爲めに宴會

米國紐育市の交際會社に於ては時々其寵犬の爲めに宴會し之が爲めに數千金を抛つて顧みざるの風習なるが舊臘同種の宴會を開き各愛犬を攜へて其席に列し禽類の饗應に贅を盡して散せりと云ふ

◎天才の子は親の性質

天才と稱せらるヽ人の子は普通に親の性質を傳へざる場合多しとは人々の常に稱する所なるが英國のペアソン敎授は種々の研究を爲したる結果此說に反對して曰く普通に子は其體格に於て親の質を受くると同じく性質才能に於ても親より遺傳せらるヽものに

して才能は教育に依りて之を發育し訓練せしむることを得べしと雖も教育に依りて之を創造するは至難の事なり才能は實に遺傳にして如何なる國民と雖も才能の劣れるものは單に教育機關を通じて優れるものとなすを得ずと所謂英國派の議論にして其正否は俄に判定する能はざるべし

◎世界の九大運河

米國統計局の報に據れば大なる汽船を通ずるに足る運河は世界に唯九あるのみにして其内最も大なるスエズ運河は千八百五十九年に起工して千八百六十九年に成り、露國のクロンスタットと聖彼得斯堡との間を通ずる運河は千八百七十七年に起工して千八百九十年に成り、コリンス運河は千八百八十四年に始て千八百九十三年に成り、マンチエスター運河は千八百八十七年より千八百九十五年まで獨逸の運河も同年より同年までを費して竣工しエルベ運河は千九百年に開通しウエルランド運河は千八百三十三年に成り其後千八百七十一年に次て千九百年に堀廣げられたりソートセイントマリーの二運河は千八百五十三年に開鑿し次で千八百八十七年及び千八百九十五年に改鑿せられたりと云ふ

◎指頭の形と罪人を知る法

吾邦には往古より拇印を以て實印に代用する風習あることなるが支那にても罪人の信僞を確め得るや否やは明ならざれども巴里には已に百萬以上の拇印あれども一として同形なるはなしと云ふ

◎演説人を殺す

去十二月中旬墺國維納府の醫師ルエーゲル博士は同府の去る場處にて一場の演説を爲せる際醫師は輕卒者の懷中物を覗ふ掏摸兒に異ならずと云々の語を放ちしが同博士は平素下等社會に非常の信用ある人なれば下等社會の無智なる輩は全く博士の言を信じて一概に醫師を惡漢と思込み其結果同府中央病院に在院せる約二百名計りの外科患者は急に手術を厭ふに至り百方諭すも聞き入れずして七名の患者は遂に死亡したり患者の中に十三歳の一少女あり同少女の病症

は僅かの手術にて容易に全治し得べきにも係はらず兩親の承諾せざりし爲め遂に生命を失ふに至りたりされば同病院にては其後是等の無智なる患者に對しては全く放任して顧みずと云ふ

◎ネルソン將軍の紀念物

過般英京倫敦に於て葡萄酒入れの一細口壜の糶賣に附せられたるものありたり壜の表面には「ナイル海戰の紀念の爲めに、千七百九十八年九月二十日、余が第四十回目の誕生日に於て、ネルソン」の文字を刻しあり此壜は將軍がナイル海戰に於て敵將水師提督ブルーエー氏を擒とせる際得たるものにて同提督の平素愛玩せしものなりしと云ふ

◎大男の痴鈍なる事證明せらる

倫敦のローヤル、ソサイチイに於てアルコツク博士の論じたる所に據れば大男は小男に比して痴鈍なるものなりとの俗說は之を科學的に證明し得る由にて博士はゴムの管を多くの大男と小男との手に握らしめ電流を通じて之に應ずる遲速を實驗したるに大男は總て之を感ずること遲かりしと云ふことは大男の方筋肉太くして神經の變動を受くること遲き故なり

◎二年間に七人の子を產む

ウオニシーゼツヘアイツングの報に據れば伯林の近傍なるライベに住する一婦人は二年間に七人の子を產みたる由にて最初一昨年の春双兒を產み次て昨年の一月又々双兒を產み續いて昨年の十二月に三つ兒を產みたるなりとは珍らしき話なれど英國には二年間に七人の子を產みたるものありと云ふ

◎可驚長命なる戰死者の遺族

米國には戰死者の遺族として政府より扶助料を給せらるゝ者の中驚く可く長命なる者多く目下一の疑問となり居れるが同國政府の帳簿に據れば同國の革命戰爭に戰死したるものゝ未亡人今回尚ほ二名あり革命戰爭は千七百八十一年の十月に終局を告げたるものなれば其時一歲なりしとするも此未亡人は百二十三に達し居る筈にて况んや其時已に結婚し居たることなれば少なくとも百四十歲に達し居る譯なり又た

千八百十二年の戰爭に從軍したるものにして今尚ほ生存する者一名及び戰死者の未亡人にして生存するもの千百十五名あり此等は孰れも百十歳以上となり居る筈なりとは驚く可きことゝいふべく又た南北戰爭の從軍者の未亡人は九十五萬一千八百四十七人ある由にて從軍者の數よりも多き程なりと是亦驚く可きことゝいふべし

◎天氣豫報器の發明者

佛國の理學者トマシナ教授は此程天氣を豫知する器械を發明し之を電氣ラヂオフオーンと名づけたるが此機械は空中に於ける電流の變化を精確に記すものにして時計の如き構造を有し別に鈴の如きものあり電流を感ずるなり教授の説明する所に據れば此器械は殊に航海者に必要なりと云ふ

◎容易に雷鳴距離を知る法

雷を恐るゝ人に興味あることなりとて一英國雜誌の報ずる所に據れば電光の閃きたる後一秒時間を經て雷鳴を聞くときは其距離は凡そ一哩の五分の一なり即ち閃光より雷鳴の距離は一哩なりとし其割合にて計算するときは常に雷鳴の距離を知り得べく之に依りて雷を恐るゝ人は餘計なる心配を避くること得をべしと云ふ

◎沐浴は健康に害あり

先頃市俄古に於て開かれたる科學協會に於てジョンデイル、ロベルトソン教授の述べたる所によれば沐浴は肺撳衝寒冒其他の疾病の原因なり沐浴を爲さゝる爲めに皮膚の毛孔を塞ぎ爲めに健康を損ふ可しどは大なる誤なるのみならず沐浴は皮膚に暗渠を生じ却つて一切の黴菌の侵入を容易ならしむべし現にグリーンランドよりボストンに來れるエスキモー人は至つて健康なりしにも係はらず一度沐浴を爲せる爲め二日目に死亡したりと云々と



演壇

戰時女子の心得

三輪田眞佐子

這回の戰爭は、洵に我國未曾有の出來事であります、我海軍は已に一二回勝利を得て居ります、けれども先方は尨大なる領土と、多數の國民を有する國家であります、殊に黃人の日本が白人の露西亞と戰ふのでありますから餘程の大事であります、されば勿體なくも宮樣御三方も御從軍遊ばしまして、彈丸の中に立たせ給ふ位のことであります、いふまでもなく擧國の男子は、殆んど皆兵の決心で屍を積み血を流して奮鬪しつゝある士卒に後援を與へて居るのであります、此時に方りまして、女子は如何なる心得を以て國家に盡すべきか、女子の方にても、已に幾多の美擧がありまして、私共の言葉を竢たずして軍國の精神火の如きがありませうが、戰爭終局迄は未た多くの時日もありましやう、それに此戰爭に成功したならば、日本は世界の最强國となるのでありますから、私は女子に向つて、尚此上の奉公をせらるゝ爲めに左の四ケ條を申し上げる積です。

一　婦人の刺擊

すべて婦人が男子に刺擊力を與へるものであることは明かなる事實であります、昔スパルタの婦人が其出征將士の首途を其軍門に見送つて、一國の威武を輝したることは、有名なる物語りであります。

婦人は素より、弱いものです、併し此弱いものゝ奮發は、非常に強い力を現はしますものです、昔時より男子の奮發は多く婦人の刺擊を其動機として居るのであります、やゝ古臭い譬かも知れませんが、徒然草などにも、婦人の黑髮で拵へました綱は以て巨船や大象を繫ぎ得らるゝといつて居るのであります、乃で私の方では、此精神から致しまして目下私の女學校では、生徒に十錢の原料にて靴足袋を編まして居りますが、凡そ二十錢位の値の物が出來ます、献金よりは、品物を送る方が、出征軍士に刺擊を與へる力があると信じますから、之を軍隊に送りて奉公の幾分にもと心掛さして居るのであります。

二　涙あること

婦人は涙を以て特色として居ります、同情は婦人の生命であります、喜びの時にも婦人が必要です、悲みの時にも婦人が必要です、特に國家危急の秋に婦人が必要であります。

戰死者の後を弔つたり、出征者の家族を慰問したりするのは、婦人の職分として天が命ずるものであります、一國の士氣を鼓舞する上からいひましても、又人道の上からいひましても、婦人の職分として、これ程適當なることはありません。

されば、私共志を同うするもの、這度、出征軍人慰問會を起して居ります、他々でも、種々これと同じやうな會が出來つゝあるやうですが、希くは盛んにかゝる會の起りたいものであります。

三　勤儉

勤儉は、國家のため軍資の助けになるはいふまでもなく、男子に內顧の憂なからしむるためにもなりま

すから、軍國の精神としては甚だ大切なることであります。

勤儉の効果をいひますると、一日十錢宛の銀行貯金が五十年後には一萬二千圓になるのであります、されば、此間、私の友人で結婚する女子がありましたから、私は其人に、結婚は式のみで濟し、其御馳走其他冗費に使ふ四五百圓を悉く無いものとして、銀行に預けて置き、他日銀婚式（二十五年目）或は金婚式（五十年目）に引出すやうにしたら可いでしようといひました。

此戰爭は、隨分永くなるやうといふことですから、隨分軍資が入用と思ひます、今後國民としての負擔は甚だ重くありましよう、されば、國家に對して何時にても奉公に遺憾なきやうにするには、平生から勤儉の心掛が必要であります。

四　殖民

戰爭は、他日日本の勝利に歸しましようが、勝利と共に日本人の働く可き土地は清韓二國であります、否東洋至る所大和民族を以て充したいのであります、韓國の如きは、早くより、澤山に日本人が渡つて壯んに事業を營んで居りましたならば、日本は頗ぶる可い結果を得たことであつたらうと思はれます。

而して彼地に渡つて居住するには、即ち所謂殖民しまするには、男ばかりでは不可いです、必らず女子が行かなければ不可いのであります、男子ばかりの殖民でありますると、一時的或は腰掛的の考へで、何か一儲すれば、直ぐ本國に歸ります、或は又、本國にも居られない破格者が、何かの奇利を貪ぼるために稼に來るのでありますから、些とも永久といふ思想がありません、土着的の風が出來ません、然るに、女子と男子と共に渡行するときは、直ぐ其處に家族が出來ます、而して樂しい村が造られます、賑やかな町が出來ます、即ち土着的となりまして、住めば都といふことになるのであります。

清韓二國に殖民すると、何の位利益がある乎といひまするに、清國の方では、農業などは、支那人の耐忍力と狡猾とに對して到底日本人が競爭は出來ぬといひます、併し學問技藝の新智識の經營ならばどれ丈でも從事せらるゝ餘裕があるさうです、韓國に於きましては、農業は頗ぶる見込がありまして、所に由りては、濡手で粟の攫み取りとでもいはるゝ姿があるさうです、日本で、一反歩買ふ金で一町歩が買へますし、勞働者も日給十五錢も出せば雇入れられますさうです、韓國には、已に政府が京釜鐵道等盛んに經營せられつゝあるのです、それに地理上の便利もありますから、此處は日本人が競ふて殖民し、事實的に日本の範圍に數へたいものですから、女子は男子と共に此地に殖民する心掛が肝要であります。

戰爭の終た曉は、國力が外に伸びんければなりません、清韓殖民は、戰後は勿論今日と雖も出來能ふ限り、我國人は盛んに着手すべきことゝ思ひます、這回の日露戰爭は、日本人の東洋に蔓延する端緒を開くものであらんければなりませぬ。

戰時女子の心得に付きましては、未だ申したいことが澤山ありますけれども、要はいふことは尠くても實行すれば足れりでありますから、たゞ日頃の雜感を四ヶ條として申したのであります。

（完）





軍人の家庭

上村海軍中將の愛孃

第二艦隊司令長官として決死隊七十七勇士を掩護したる驅逐艦水雷艇隊の司令長官として勇名一世を蓋へる海軍中將上村彥之丞氏は(五十五)慓悍なる薩摩隼人の中にも稀に見るの勇者にして嘉永三年鹿兒島市鍛冶屋町の宅に生れ戊辰の役十六歲の初陣として官軍に從ひ白川口に出戰し敵彈に胸部を擊たれしかど未だ全癒するを俟たずして箱根に轉戰し人をして其豪氣に驚かしめたり後明治四年海軍兵學寮に入り三年三月卒業して實地研究の爲め筑波艦に乘組を命せられ清國、臺灣、米國等へ遠洋航海をなし九年九月玄揚艦に乘組み西國に向ふ途中紀州洋に於て同艦破壞の難に遭しも危きに臨んで措置を誤らず充分に海軍軍人としての技能を發揮したりと云ふ十年六月少尉に任ぜられ鹿兒島の暴徒を征討して功を現はし十五年の朝鮮事變にも出張して相當の働きをなし凡そ維新以來干戈を動かせし出來事には一回も關係せざる無しそれより千代田、天城、大和、摩耶、鳥海等の乘組員或は艦長等を勤め二十七年日清葛藤の際には秋津洲艦長大佐として六月二十三日朝鮮に廻航し同二十五日豐島沖にて敵の運送船操江號を砲擊し遂に之を捕獲したるが是ぞ日清戰役の火蓋を切りし始めにして中將の剛膽能く斷じて大事の鐵輪を開き得たるは長く國民の記臆して忘るべからざる所なりとす黃海の海戰に偉功ありしは勿論にして澎湖島の占領には參謀となり引續き臺灣の軍務に服し二十八年十月五日北白川宮殿下の御遺骸を守護して歸京したり其後海軍省人事課長、海軍大學校學生銓衡委員等を經て

少將に進み造船兵監督長となり海軍省軍務局長に轉ず北清事變には勳二等に敍せられ卅五年三月海軍々令部次長を兼補したるも同年十月更に常備艦隊司令官に補せられ三十六年二月松島艦に乘じて南洋を航行し歸來中將に昇る而して昨冬十一月第二艦隊司令長官に任せられ今回の旅順攻擊に赴きたるものなり中將の邸宅は芝三田綱町一に在り夫人を井口貞子（四十六）と云ひ明治十一年中將と結婚し敏子と呼びて今年十三になる愛孃一人を蝶よ花よと大事に育て居られるが夫人の實母井口淸子も嫡男（上村夫人の弟）が近衛第一聯隊附伍長として出征せし爲一人身となりたるに依り今は上村家に來りて家事の取締りをなし孫敏子の世話をなし居れるに敏子は殊に此老いたる祖母を勞はり母貞子が目下佐世保に出張して頻りに宅へ手紙を送り敏子にも來よと勸むれど敏子は之に從はず父上の戰爭へ御出でになり母樣も佐世保へ御出張なされたれど敏が學校を休みて母上の御許へ參りたればとて何の御役にも立ち申さず父上は國家の爲戰場にて天晴の御手柄を現はさるべく母樣は佐世保に在りて戰爭の樣を御通知被下度敏は祖母樣と共に留守居をなし學業怠りなく勵み今度の試驗には好成績を得て父上の御譽めに與り度く試驗休みと相成候はゞ御安否伺ひに參上可致候との返書を送りて餘念無く勉强し居れるは流石中將の獨娘に耻しからぬ心掛けと云ふべし因みに記す敏子は芝區三田なる東京高等女學校の生徒にて本科一年生なりと

川島海軍大佐夫人

芝三田綱坂德川伯爵邸の隣りに新らしき二階立の一構あり、川島令次郎と優しき筆の門札あり、これなん彼の松島艦長川島大佐の留守宅なり

二三日以來風邪の氣味にて臥床中なれど兎も角も御面會致さんとて通されし二階は一閑貼りの机の上に硯卷紙のせられたる四疊半に次いで八疊の間あり此處には主人大佐の寫眞、水彩畫、油繪などの額ありて床には大なる宮島杓子、掛軸、花瓶等順序よく配

置されたり「大層お待たせ致しました、四五日以來風邪を引きましたので……イエもう宜敷いので御座います」と出來られし夫人は年の頃三十前後、髪は無造作に束ねられて病中の樣とも見へぬまでに粧顔はれたり

「先づ今迄の處は大勝利ですが、どうか陸戰も好結果を得たい者で御座います日清戰爭の樣にも參りますまいが」と會話の緒は戰爭談より初まりぬ

「川島で御座いますか、今頃は何處に參つて居ますか、旅順攻擊には加はりませんですが、自分では何か面白い結果を見せたいなど〻申して居ました、妾



等には戰爭の事は一向解りませんので御座います」

「日清戰役の砌りは侍從武官で廣島に居ましたし北清事件の折には英國へ參つて居ました、ハイ英國には四年許り左樣初め三年間は留學で後に公使館附きになりました彼是九年程陸に居りましたので軍艦に乘ますのは久し振で御座います、松島艦長を拜命しましたのは昨年七月で、其後一月に一寸歸りましたが立ます時分はモウ戰爭になるといふ事は解つて居たのですから別段言置く樣なともありませんでしたが只『軍人の妻の覺悟はあるだらうな』と一言申しました限りです

話頭は一轉して家庭の事に移りぬ

小供は大勢で御座いますよ、長男は慶應義塾の幼稚舎に居ります、本年卒業しますから麻布中學へやりませうと思て居ます、江原さんがあのやうなストリクト(嚴格)な方で居らつしやいますから、子供の爲にもよいかと存じます、其あとは九つが女で次が五つと三つ、皆男子で御座います、妾ですかホンの一寸夢見た程の間英國に參ッて居ました、其時次男が英國で生れましたのです長男はこちらで寄宿させまして女の兒は母に托して置きました、英國から歸る時に兼て次男を育てゝゐたナース(褓母)……エ、英國婦人です、それが是非一緒に日本へ行きたいと申しますから、連れて來たいと思ひましたけれど其ナースの母が許しませんので、止むなく支那人の乳母を頼みましたのです、處が此乳母は少しゝか英語が話せませんので、船に醉ふとすぐ支那語で話りますから、大變困難しました、エ、巴里へも一寸見物に行きました、親類の者ですか、中村靜嘉と申すのが川島の妹の良人で今は第〇隊〇〇長で居ます」云々

淺野新高艦副長

春雨のしと〳〵と降しきる去る八日の午前梅や咲くらん赤坂のほとり、溜池學校近きに新高副艦長少佐淺野正恭氏の住めるをきゝて、そが留守宅に夫人を訪ひぬ

取次の下婢が此方へとの案内に八疊許りなる一と間に打通れば、筒袖なる愛らしき小供の出で來たりて見たこともない叔父さんが來てと云ひたげなる動靜にて次の間に駈込みしが、少佐の夫人は引違へに出で來たられ、優雅なる挨拶ぶり、藪の椿にひそめる鶯の俤ありしぞ床しき

夫人の名をまつ子(二十四)と呼びて、父君は舊海軍中佐の職を奉じ、つい隣れる家居こそ里方なりと示されまつ子は八年前に少佐に嫁ぎて遙(四つ)といへるを擧られしが、今の先チラと見えたまひしは夫れ、此程までは眼を病みて醫師の許に通ひ居り、度々お訪ね下されましたに、ツイ失禮……少佐につきましては御紹介を煩はす程の事はございませんがと一應辭

退されしが、やうやう迷惑さうに物語られし

その大概に、少佐は常陸の人にして兩親共に壯健、兄なる人は晁と呼びて下總の布川に醫を業とし、少佐の弟は和三郎と呼ばれて大學文科を出で、目下幾何學校に敎鞭をとられ居れり、少佐は年若き頃より海軍に志深く、日清の役には千代田にあり、北清の際には横須賀、その後海軍大學校に入り專科學生となりついで昨年の二月廿六日淺間艦に砲術長として乘込まれし、同七月大學敎授に擧られ、本年一月七日新高の副長として乘組れたり、云々と語られ「至つて無口の上に筆不性な者でございますから何も申しては參りません……二月の六日に艦が佐世保を出まする時『或る方面へ向つて出發する』との一言、誠に簡單なもので其後一向音信はございませんが、昨年の暮頃から切りに『戰爭があればよいと申して』居りました、兎に角第一戰に加はりましたので嘸ぞ滿足に思つて居りませう

此時坊ちやんは出で來たりて、夫人の傍らに行儀よく座られ『お父さんは』と云へばニコ〳〵して『露西亞人はよはい、お父さんは強いぞ』との一と言、遉がに軍人の家庭に生育られし子は、二葉の中より香ばしきよ

少佐は常に詩を好み、四季折々の月花を吟ずるを、無上の娯樂となし居られたるが、日清戰役後は寫眞術に凝りて、上京の折には三日にあげず子息を撮影し『自分ながらコンナに技術が進んだかと思ふと感服の外はない』などゝ自慢せらるゝに、夫人は腹を抱ゆる事ありと、次に自轉車を嗜み屢々遠乘せらるゝ事あり、一昨年大學に居られし時、ある宮樣のお供にて遠乘りせしが、その際の寫眞は傍へなるブックを開らかれしが、生憎どこぞへ參りしやらみえず、是は新高へ乘組の際撮影したるものと、少佐と令息及び夫人との睦しきホームの寫眞を示されたり

夫人の親戚はこと〳〵く海軍々人にて、笠置艦長井手氏、吉野艦副長廣渡氏、他に六七名あり、また夫人の長兄省一氏は中機關士として鎭遠に乘組まれ

居れりとぞ、少佐の一族に新る名譽ある士の多きは薄雲艦長土屋光金氏も次ぐべきものなるべし

辭して歸へれる頃例の坊ちゃんは敷臺まで送り出でて「叔父さん、グドバイ」

家政學資料（一）

磯部武者五郎

家政學を修めらるゝ諸孃の參考に資せらるべき事項、又は自ら思ひ付きたる說どもを書き蒐めて、誌上に披露することになしたり。

（一）家政學の研究法

家政學は通常左の科目に分つなり、

一、家事經濟　二、家事衛生　三、衣服
四、食物　五、住居　六、育兒
七、子女敎育　八、養老　九、看病
十、交際　十一、避難　十二、僕婢使役
十三、家計簿記　十四、割烹

以上十四科目に分類すれども、之を概括すれば經濟と衛生の二つに外ならず、家政學は家事經濟と家事衛生の二つより成り立つといふも不可なし、之を要するに、以上の十四科目は經にして、經濟と衛生とは緯なり、たとへば衣服にても、食物にても、皆經濟と衛生との二つを考へて爲さゞるべからず、其の他育兒、看護交際にても皆然り、悉く經濟上の原則にも協ひ、衛生にも協ふ樣爲さゞるべからず、故に家政學を修むるには、必ず先づ經濟と衛生との智識を備ふるべきことなれば、左の二書の如きは一應通讀するの必要あるなり。

經濟一夕話　衛生一夕話

又食物には、食品の鑒別、調理等に關して博物學、水産學に關する書を一讀すべし。

交際に關しては日本西洋の禮法書を一讀すべし。

其の他避難等に關しては、法律の一班を知る必要ある故、法制讀本の類を一讀すべし。

此の如く家政學は、單に家政學敎科書のみに據りて修めんとするは、不完全なることを免れず、故に參

考資料として、以上の如く關係ある他の學科の書を通讀するを要するなり。

(二)家政學と他の學科との關係

家政學は一家を整理し、家務を處置することを敎ふる學科なり、而して其の關係せる學科卽ち一家の事に關係ある學科にて、主婦たるもの丶一應學ぶべきものは左の如し、

經濟學　極めて大體にてよろし、銀行會社の組織預金、貸金、利子、手形、小切手、爲替等の事は學び知るを要す、

衞生學　衣服併に育兒看病に關する衞生、個人、公衆に關する衞生の大體

生理學　身體、骨格、筋力の生理大略

理科　物理化學の極めて大要、動植物の大略

兒童心理　育兒に必要なる要點

敎育學　極めて大要

法制　公法私法の大要

禮法　日本西洋の禮式

簿記　家計を整理するに必要なる記入法

割烹　日本、西洋

手藝　裁縫、編物、嚢物、

習字文章　通信交際に必要なるに止む、

(三)家事經濟の項目

家事經濟の項目は誠に多數なるものにて一々擧ぐるときは左の如きものなり、

第一生養の費(飲食物)

穀類、野菜、鳥獸肉類、卵子類、乾物類、鹽、味噌、酒、(各種の酒)醤油、酢、氷、水、海草類、菌類、芋類、香料(胡麻、芥子薑の類)

嗜好物、(茶、煙草、砂糖、味淋の類)

製造品(饂飩、素麵、蕎麥、菓子の類)

果實類、雜飲料、(ラム子の類)

第二身装の費

衣服、附屬品の類(股引、足袋、靴、下駄、靴下釦、カラー、カフス、シャツ等)

髪の飾、(櫛、釵、半掛)

傘、雨具、旅行具
裝飾品（指環、時計鎖の類）

第三住居の費
家賃、地代、修繕費、掃除費、寢具（夜具蒲團、蚊帳の類）家具（客道具、居間道具、臺所道具、敷物類）裝飾品（掛物、額、床置物、窓掛類）

第四火光の費
薪炭、光明器、（洋燈、提灯、蠟燭、瓦斯、電燈器）
光料、（石油、菜油）暖爐、

第五衛生の費
水道、下水、入浴、清潔の費（石鹼、手拭散髪、）
醫藥類、看護料、防病費（海水浴、温泉行等）

第六智識の費
學校費、授業料、教育貯金、書籍雜誌新聞の費、
音樂、學會教育會の會費、學校其他への寄附金

第七信心の費
說教、神社祭禮、佛寺供養、社事への寄附金、賽錢

第八義務の費
國稅、府縣稅、市町村費、裁判所登記料、組合の費用、

第九豫備費
生命保險料、火災保險料、預金、貯金、

第十娯樂の費
觀劇の費、觀能の費、遊藝（茶湯、挿花、琴、三味線、圍碁の類）、遊獵、遊覽、庭園花木の費、

第十一傭人の費
下男、下女、臨時雇人、使賃、

第十二交通の費
郵便電信の費、荷物運送、人力車、馬車、滊車、滊船、鐵道、

第十三臨時の費
慈善施與、祝事、吊事、親族他人の助成、旅行、

以上の如く實に夥しき費用を要するなり、此の項目は獨逸人「チ、ウス」といふ人の考にて「グッチンゲン」大學の「ックマン」といへる人の修正せしものにて、杉亭二先生の飜譯せられたるものに係り、其

の幾分を加除したるものなり。

刺繍

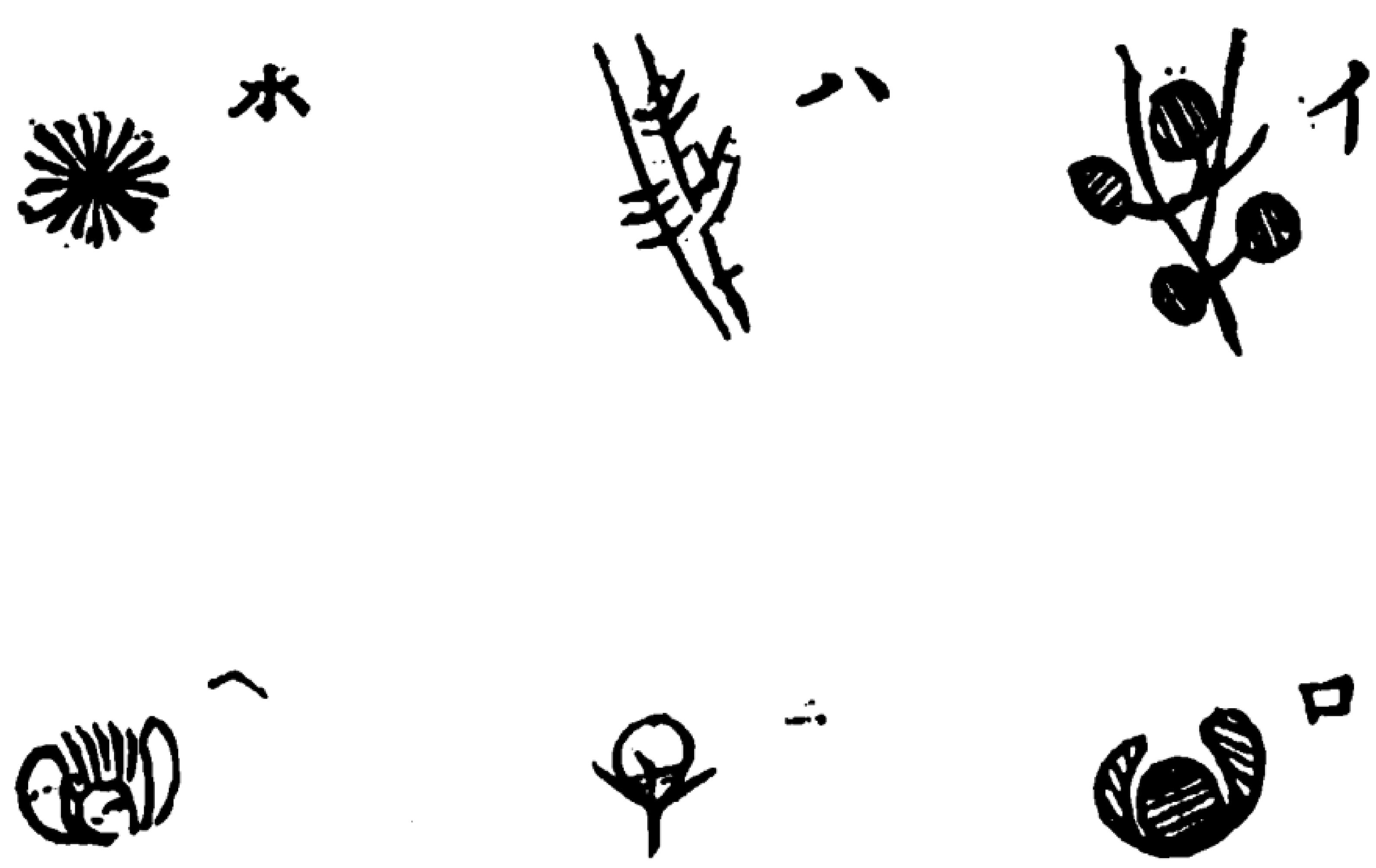
梅花平糸縫ひ

上村百世子

梅花は白或は時色のかま糸を用ひまして縫ひます、其縫ひ方は、初めの木綿糸練習の梅花の縫ひ方と異りません、初めに開きましたものと、蕾みとを縫ひます、蕾みはイ圖に示したる如く、枝に附て居ります、向きによりまして圖の如く、横に縫ひます、よく立てに成りたがるもので有りますから、注意して成る可く横にかま糸で縫ふので御座います、半開はロ圖に示したる樣に、眞中のを横に縫ひ、兩端の花瓣は向き合ふ樣に、菊の花瓣を縫ひたる如く致します、次は枝で御座います、之は撚糸で縫ひましても、かま糸でいたしてもよろしいので有ります、

撚糸で致しますには、青茶に普通の茶色とを左よりに致します、太き所を縫ひます時は、二本づゝを合せて甘よりに致します、是を用ひまして、縫ひますには、糸が左よりで御座いますから、縫ひ方も矢張り左縫ひにいたします、此の左縫ひと申ますのは、其よりました糸を見て、其よき方と同じ樣に縫ふので、あまり針目の短く無き樣にいたします、細く枝が成るにつきて、其糸も細くよります、枝の先きの方になりますと、草色を出し合せに致しまして、餘りからく無い樣によりまして縫ひます、前の太き所を縫ひました茶色の糸と、枝の先きを縫ひました草色と、かけへだてが出來ますから、つなぎ目は茶色の針を一針づゝ二三度殘して縫ふて置きまして、草色で初めます時、前に殘して有る針目に入れるので有ります、枝の先きの方は成る可く細く縫ひます樣に注意いたしませんといけません、此の枝にさびと申しまして、其縫ひました所に點體の如き物を縫ひます、之をハ圖に示したる如く二三針り枝の縫つ





ホ
ハ
イ
ヘ
ニ
ロ

て有る糸の上から、地質にかけて縫ひます、之は太き所は枝の先きより多く致します、梅の枝は曲りが多く有りますから曲り角はよく注意しなさい、蕚はニ圖に示したる如く蕚の下に二針縫ひます、是は一針はすこし長く、後のは其れより短く縫ひ、兩端に針を出し、後横に三針ばかり縫ひまして、枝に附けます、之は矢張草色で致します、にほひは開きましたものにはホ圖の如く縫ひます、此の糸は撫子の時と同じ事で有ります、半開はヘ圖に示したる如くであります。

家庭科學 猩々の話

野花生

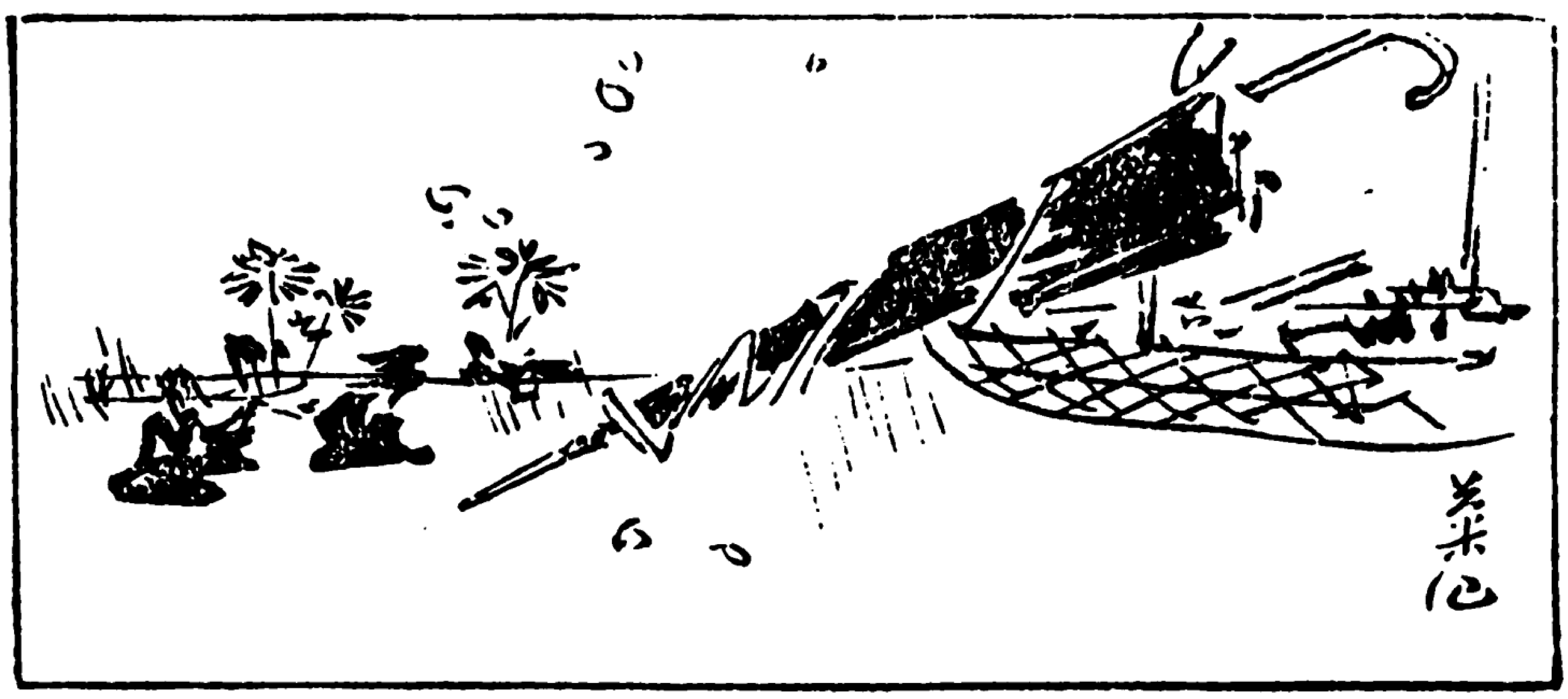
毛筋三本足らない許りで、人間になれないといふ位であるから、猿や猩々が人眞似をするのは何も不思議はないが、可哀想に人眞似が出來る程の才智を有つて居る爲めに、往々不測の災害にかゝることがある、犬とか猫とかいふ他の動物ならば、勿論人の眞似が出來ない、出來ないから爲ない、爲ないからそんな災にはかゝらぬが、生中人眞似の出來るのは、猿類の爲に却つて不幸である。

二三年前のことであるが、サンフランシスコの公園に大なる動物園があつて、其の中に二疋の猩々が蓄つてあつた、勿論猩々のことであるから、よく人に馴れて、靜かで、穩かであるといふ中にも、此の二疋は一層優れておとなしいものであつた、その住むで居る室内には、ターフルやら、椅子やら、臥床やら、皿鉢などが、整然と備え附けられて居て、恰ど一家内のやうな仕組であつた、さうして甲をダルビー、乙はジョアンと名を附けられて居た。

或る日曜日のことであつたが、ダルビーとジョアンは、見物人に、その一家族の生活の有樣を示すことになつた、その室の一面は取外づされて、更に金網と入れ換えられたから、一見して直ぐに室内の生活の有樣が分るのである。

其處でジョアンは女房といふ譯で、婦人の衣裳を着け、ダルビーは短い赤い腿引を穿いて、緑色の羽織を着て、皮の帯を締めたところは、如何にも亭主然たる風であつた、さて是れから愈よ飯事を始めるのであるが、彼等は先づ椅子の足でもつて、其の歯を研いてそれから寢床から布團を引出して、それをターフルの上に載せたり、又は臥床の上に押付けたりして遊んだが、其の有様が、如何にも面白いから、見物人もみな興を催ふしたが、彼等もまた甚だ興に入つたらしい。

　ダルビーは、何でも新奇な物が室の内にあらはるゝと、決して目を逃がさないで、それを握つて見て、何の用をするものであるかといふことを見出だすのが、常であつたが、此の習慣が、



遂に彼れの友達にして女房たるジョアンの身を亡ぼす基となつたのである。

　或日十歳ばかりの小兒が、金網の間隔からマッチを投げ込んだ、ダルビーは妙な風采でそれを詠めたが、直ぐにマッチを拾ひ上げて、頻りに考へ込んで、例の通り、先づ口に啣へて見たが何の味もないから、食物ではないといふことが分つた、そこで口から外したが、直ぐに其の仕用を悟つてターフルの上にそれを摺り付けたから、忽ち火が點いたのは善かつたが、その火の點いたマッチが、丁度ターフルの下に居つたジョアンの上に落かゝつたから耐らない、火はジョアンの毛皮に燃へついて、間もなく廣がつて、一面の猛火となつた。

　若しジョアンが、靜かにして居たな

らば、何とか始末も附いたであらうが、室の内を右往左往に暴れ廻つたから、火は愈々勢を得て、どうすることもならなくなつた、番人が救助に來た時には、彼れは臥床の上に倒れてしまつて居た、番人は彼れを室の内より伴れ出して、火傷の痕に膏油を擦りつけて、さま〴〵治療を加へたが、烟や焔を吸込むで居るし、又た恐怖がひどかつたので、遂に其儘死んでしまつた、次の日から、ダルビーは、哀れや鰥夫の獨生活となつて、淋しい月日を送らざるを得ないことになつた。

（をはり）

衛生雜話

（小兒の注意）

小學校に通學する小兒を持たるゝ母方の、平素兒童の教訓の爲めにお心得になりて、兒童をして習慣的に身體强壯の方法を會得せしむるやう、お務めを願度其訓話の材料として此處に少く記します。

一、呼吸は口を塞いで鼻で爲さい

二、塵埃の立ツた空氣や惡臭のある空氣はなるべく吸はないやうに用心すると、そんな空氣のなかでは「ハンケチ」か袖で鼻を被ふて呼吸をすると、

三、痰と云ふものは不潔ものですから、家の内では決して吐き出してはなりません、外では溝のなかに吐くやうにせんければなりません、それから家の内でならば、塵紙をあげておきますから痰や、鼻汁は其のなかに、かむのですよ、あとで母様にお渡しなさい、（母は之を便所に投棄すること）

四、學校に參つてゐて、休憩時間には運動場へ出で充分活潑に運動をなさい、

五、朝起きれば直に水でお口を嗽ぎ、また食事のあとゝ晩にお寢の前にも水で含嗽をなさい、

六、机に向つてお稽古をする時、例へば讀書を爲し、習字をなし、畵をかく等には何時でも、身體を眞直にしてゐなければなりません、前に屈んだり横に曲つたりしてはなりません、何時でも胸と、お腹とは押し付けないやうになさい、

七、お稽古やお復習が濟めば、外に出で丶走つたり、飛びつこをしたり、體操をしたり、なんでも危險無い運動をなさい、

八、凡て家の内では塵埃の立つやうなとは可成してはなりません、雨がふつて外であそべない時に家の内で遊ぶには、可成塵埃のたゝないやうになさい、塵埃の立つやうなことをする時には、窓や障子を放開して置くのですよ、

實驗 牛乳日本料理（第一回）

清水鈴子

牛乳を料理に用ゆることは、西洋に既に行はれて居りまして、その用法も彼の國の料理書に散見致しますけれど、未だ我國に於ては只日常の飲料に供するの外、これを料理の上に使用せることは聞き及びませぬ。記者は牛乳を嗜好せる餘り、唯是れを飲料とする許りでは面白くない、一層進んで日常の食膳に上せて見やうと企てまして、やゝ成効を得ましたものが一百餘種、今度本誌の需めに應じまして每號掲載ることになりました。今之れが我國の家庭に行なはるゝを得ば、たゞに記者の幸福のみならず、一は牧畜事業に於ける國家の利益かと考へます。而して今此の料理法を誌すに先立ちまして一應牛乳の撰擇其他之れを實驗するに就ての智識を備へて置かねばなりませぬから、面倒ながら下に少しく其事を申述べます。元來が始めての仕事ですから、それ等の事を明かにしてございませぬと、或は料理に使へぬ牛乳を用ひたり、中には牛乳を以て鬼の血でも呑む樣に考へられたりしますから、順序として煩はしくも記述する事に致します。然して本題にかゝります。

まづ牛乳の功能などは省 略いたして置きましてこれを飲用するに如何なる種類の牛の乳が宜敷やと申しますと、ゼルシー種を以て第一と致し、其外、ガーンジー、ホルステーン、アーシャー、無角ゼルシー、ケーリー、ホルダーネス、などの種類があり、

乳肉役の三用兼備牛と稱するものに、デボン、短角赤無角、無角ダーハンなどがありますから、今料理用に供する牛乳を得やうと思ふならば、右のゼルシー種を飼養する所　牛乳屋より之れをとるのが肝要です。下等の牛乳屋などで多く見受る黒白斑の大牛は、即ちホルステーンで性質は極く劣等なものですから、此樣な牛の多く居る處の牛乳は用ゐられませぬ、ゼルシーは茶褐色の小形な鹿に似たりと稱せらるゝものでございます。

夫から牛乳中には黴菌が居ると申して、非常に危險がる人もございますが、然し今日ではツベルクリンの試驗法が各府縣一般に行はれて居りまするから心配するには及びませぬ。該試驗は肺病などの有無を試驗するため、ツベルクリンと稱する注射液を乳牛の皮下に注射し、十二時間の後毎二時間毎に體溫を計り、二十四時間に至り體溫に異狀なきや否を斷定して、健康牛はそのまゝ、不健康牛は落第してその乳汁は勿論販賣致させませぬから、安心して飲用して居ることができます。よしや又中途病牛の乳汁を渡されると思ひましても、攝氏六十度に於て二十分間加熱する時は、全く無害乳となる薄弱な黴菌でありまするから、若し掛念なれば之れを呑む時に能く煮沸すれば、何の障りもなくなり此危險を避ることができるのでございます。

今は牛乳販賣の上にも其筋の取締が嚴重になつて居りまして、中々不正手段も行なはれないやうでありまするが、然しそこは又奸商輩の、種々顧客を瞞着する方法を取つて居りまするから、今此の料理に使用するに當りましても、ゼルシー種でない牛乳屋と、下等な小さな店からは可成之れを購求ないやうになさなければなりませぬ。牛乳の脂肪に關する取締規則も、各々地方に依て異なります、がまづ東京では全乳を三、〇%以上とし脫脂乳を〇、五%以上としてございます。然してこの脫脂乳と申すものは即ちクリームと稱し洋食に使用する乳皮（上附脂肪分）を、乳皮分離器を以て脫取した殘滓でありまして

これは只單にチースの製造用に使ゆるが、或は養豚料に供するかに過ぎない劣等なものであります、が所謂奸商輩はこの脱脂乳に良乳を混和して販賣する者がありますから能々注意せんといけませぬ。又次には良乳に水を加へ、或はミルクを牛乳に混交し或は澱粉、カタクリ、米糖(米のとぎ汁)などを加へます。

東京に於て時に交番所の巡査が牛乳の途上檢査を行ふことがありますが、此時不正手段を發見さるゝのは、重に前の脱脂乳へ良乳を混和したのと、良乳へ水を加へたのゝ二つで、脱脂乳は脂肪試驗、加水乳は比重試驗に依て發見さるゝのでございます。又澱粉質を投加したか否かを試驗するに簡短な方法は乳汁を煮沸して沃度丁幾を加へて見るのです、牛乳にもし澱粉質のものが加へてありますれば、乳は乃ち青色を呈します。

然らば如何なる牛乳を以て料理用に供しますか、これは凡そ何處の牛乳屋にても高等の店ならば、殺菌牛乳、或は清蒸牛乳として普通のものが壹合五錢するなれば、八錢位する牛乳がありまする、この牛乳を用ゆるに限ります。でこの殺菌法をかけました即ち清蒸牛乳は如何なるものであるかと申ますと、これにも高熱法、低熱法の二種ございまして、高熱法は長時間の保存に適するやうに致し、低熱法は普通販賣の物の上に行ひます、之を行ふには普通まづ裝壜密封のまゝ容器に入れ蒸氣を送つて殺菌するのでありまして、組織の完備した牛乳屋にては重にこれを行ひます。而して尚殺菌の方法に攪拌殺菌、流動殺菌、靜止殺菌(即ち蒸殺)の三種あり、中には市中に販賣する無菌消毒殺菌など稱するものに、この攪拌法や、流動法をほんの申譯的に行ひ、或は生乳のみ大釜などに入れて加熱し、容器に只一回洗つたばかりで配達する向がありまするから、重ね〲注意をして信用のある牛乳屋より求めるやうにせねばなりませぬ。

全體牛乳には一種の乳臭きものがありまして、往

々これを厭ふ老人や婦女子などもありますが、今この料理に蒸清せしものを用ゆれば、少しの臭みもなく只その甘味のみ舌に上るのでありますから、總て料理に用ゆるにはこの蒸殺せしものに限ります。これならば決して老人婦女子の嫌はる丶やうなことはなく、却てその一種の風味を嗜好し、料理には必らず是れを用ひねば承知せぬ樣になられませう。

尚又日本料理に牛乳を應用するに先立まして、その乳が果して牛乳屋の手に於て加熱せられしや否やを試驗して見る必要があります。それは兼て癒創木丁幾を用意して置て、これを牛乳に投入すれば速かに青色を呈します、されど若し牛乳が攝氏の八十度以上の熱に逢ひたるものなれば、毫も變色することがありませぬ。八十度以上の熱に逢ひたる牛乳なれば大抵の黴菌は死んで居りますから、まー安心と云つてよろしい、然し時とすると蒸氣法を行ふ場合、完全にしたやうでも八十度以上の熱が加はらなかつたり、或はこれだけの蒸氣法を取らなかつたりすることがありますから、今この乳を使用する際には、牛乳屋の許に飼養する種牛の如何と、その店の信用の程度によつて撰擇するより外に、器械を用ゐぬ素人の檢査法はありませぬ。



扨いよ〳〵本題に入ります、が最初に述ますものは特に日本料理と稱する譯のものでありませぬけれど、日本今日の風習上これを實際に行なつて居まするから、記して以て本料理に入る階程と致します、且つその品種に致りましても記者がこれを實驗致したばかり、格別な名目を附してございませぬから、爰では唯單に假名を以て種類を別にする見覺えのみに致して置きまして、後日その名を案出する考です或は讀者諸君の御勘考を煩すつもりでございます。

一、ミルクテー

珈琲碗にまづ白砂糖を適宜に入れ、次に温めたる牛乳をつぎ、番茶をよく焙したるものを濃くして之に加へます、（茶に牛乳を加ふれば舌當り能くして飲せますから上茶でも宜しけれど、これには番茶の方却て風味があります）この法で角砂糖入の珈琲を用ゐ又は紅茶を用ゐてもよろしいのです。

二、ミルクマッシユ

通俗コガシ又は麥コーセンとて大麥を煎りて粉とせしものに砂糖を加へ、温めたる牛乳を以て攪き、匙にて食べるのです、やはりこの傳で蕎麥攪きをこしらへ、又は蕎麥湯とすることができます。蕎麥かきを作る塲合には、最初牛乳を以て粉を溶き、熱湯を以て手際よく攪き終れば、別に用意せる牛乳に砂糖を加へしものをつけて食べます。蕎麥湯の塲合にはこれを作りたる後に牛乳を加へます。

三、ミルクイチゴ

ミルクテーを客に出すとき、夏なれば苺の蔕を取り去りたる者を小皿に盛り、冷したる牛乳をこれに掛け、そが上に又三盆を振り、匙を添へて出すのです。

四、ミルクパン

パンを食するに、半斤のものを四隅の堅き部分を切り去り、殆んど長方角形のものを凡そ三四片位に薄く切り、牛乳に紅茶又は珈琲を加へたる（ミルクテー）濃厚のもの〻熱く沸したるを掛け匙にて食べます。

五、ミルク汁

これは毎朝用ゆる味噌汁に供するのです。初め味噌をする時牛乳にて延べ、少しく水を加へて煮沸いたします、汁は稍濃厚となりて、舌當りよく、一種の風味ありて今迄の汁に一段の進歩を與へたものであります。中實に用ゆるものは豆腐か八頭など格好です、但しこれには余り香氣の高き獨姑、葱などは宜敷ありませぬ、汁を全く牛乳のみにてとくは餘り濃過ぎますから、牛乳五勺に水三合位の割合にてよろしいが尚その濃淡は各自の欲する儘ですから、經驗の上目分量を定めるに越した事はありませぬ。

六、ミルク飯

病人などの食する粥に蒸清牛乳を入るゝもよし、また簡易なライスカレーに用ゆる飯に、良乳を一升の飯に一合の割合を以て生米の中に釜に加へて焚き用ゆるもよし、右の飯を普通食するも風味あり、一歩進んでは脱脂乳を以て焚くもよろし（脱脂乳は壹升貳拾錢位にて得らるべし）但し夏季は腐敗し易ければ之を永く置く事はできませぬ。

（つゞく）

衣服の色の配合

よし子

▲衣服の色を巧合よく配合するのは、最も注意すべきことであります、折角立派な衣服を着ても色の配合が無頓着であると、着榮が無いばかりか、却つて見つともない事がありますから、注意せねばなりませぬ。

▲尤も同じ配合でも、共色を配り合せるものと、反對の色にするとの二種類があります。

▲共色の配合といふのは、似寄つた色で、濃い色氣のものと、淡の色氣のものとを配合するので、此内には黑と白との配合もあります、例へば黑の上着に白の下着、又は黑に鼠の襲衣など、重に儀式の時に着ける禮服や、白襟に黑紋付、黑の羽織に白の紐などの服装は、誠に上品なものであります。

▲生壁色の上着に、淡生壁の下着や、栗梅色の小袖

に、淡い共色の裾廻しを付けた風俗は、何處となく落付いて見へます。

▲濃い鼠紺の羽織に、鼠縞の着物は大人しく、焦茶御召の襲衣に茶博多の帯は、澁いものです。

▲斯ふ云ふ巧合で、一體共色の着付は、地味向きの人には、中々善くうつるものですが。

▲併し濃い色に、淡い色を配合せるのは、濃いと淡いの境目が、際立つて見へるから、濃い方は、實物よりも濃く見へ、又た淡い方は餘計に淡く見へますから注意すべきことであります。

▲色の黒い達の人が、淡色の着物や、淡色の半襟を好まぬのも、結局此の道理なので、本來の生地よりも、一層色が黒く見へるからであります。

▲次に反對の色を配合するのは、例へば黄に紫、赤に綠といふやうに、反對の色を配り合せるのです。

▲これは色數が多いだけに、共色の巧合のやうに單純には參りませぬ、隨分むつかしいものであるが、旨く行くと、尤も人目に立ちて、心地よく立派に見へるものであります。

▲中にも赤と綠の配合は、最も稚ない、幼かしい、華やかな配合であります。

▲紅地友禪の振袖に、檜皮色繻珍の帯を矢の字に結んだ令嬢の着付けは、何時見ても可愛らしいではありませぬか。

▲また帯地でも、友禪でも、紅に草色をあしらつた形のものや、柿茶色に紅入りの模樣は華美で綺麗なものであります。

▲これは天然の草や木などにも能くある配合で、綠色の葉に赤い花の咲いたのは則ちこれであります。

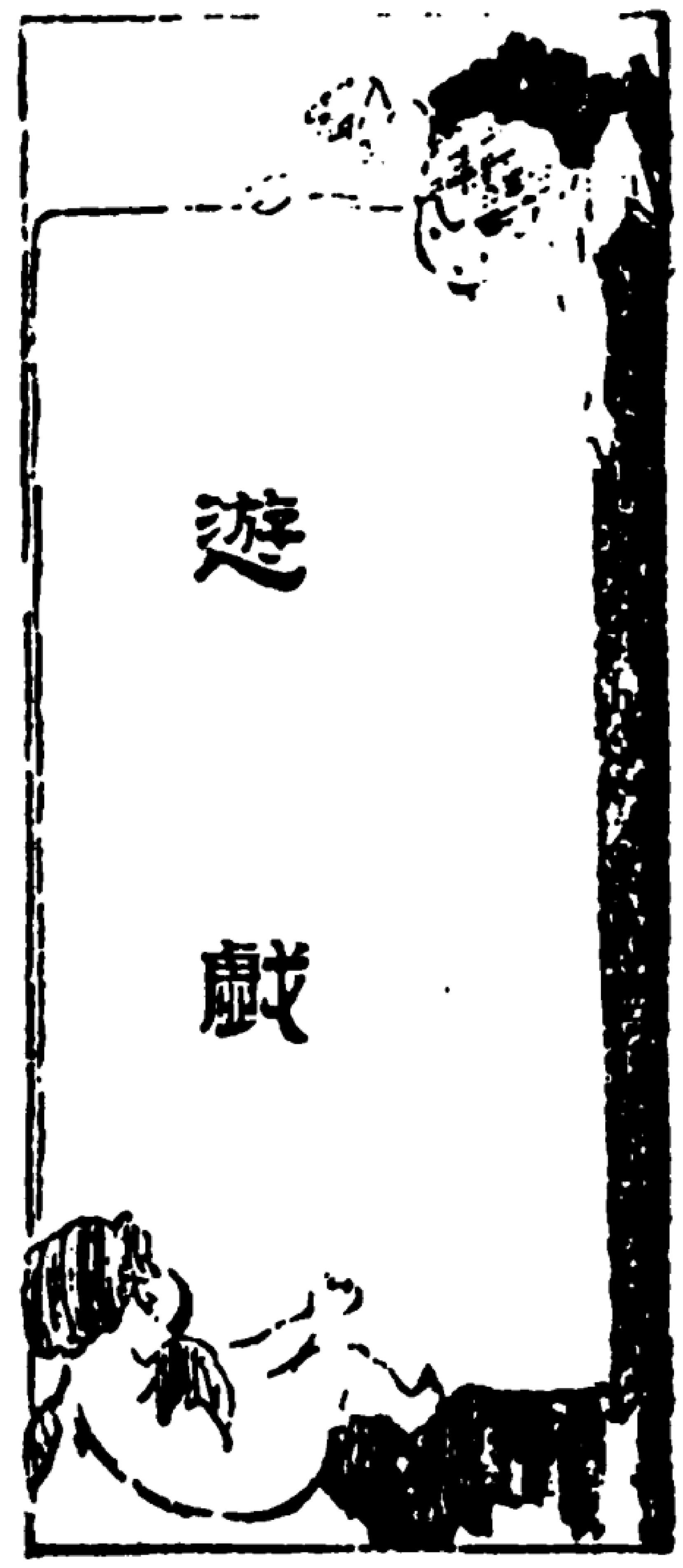
▲かの淡萠黄の若葉の中から、薄紅匂ふ、八重櫻を見ては浮かれ、綠なす松の木の間の紅葉に吟するのも、色の自然の調和を心に樂しむ譯ではありますまいか。

▲又た紫と鬱金との配合にして見ても、紫縮緬の着物に、金茶色の帯は、うつりがよく、花色衕地に淡茶暈しの裾模樣は、品善く見へるではありませぬか。

▲紫根地に、白茶色で、露笹の模樣を織出した繻珍の帶は、此の白茶が金糸で織り出したかのやうに金色の光るので、帶の價値が、一段と引立つて見へます。

▲右陳べましたのが反對の色の配合の効能であります、衣服を選ぶにしろ、また着るにしろ、色の配合を注意すべきことは、大畧こんなものであらうと思ひます。





西洋室内遊戯法

喜内芳樹

（一）影法師當て

此の遊は興味の多い割合に餘り騒々しくなくて誠に品の好い遊です、一室の眞中へ、一方の壁へ、大きな白布を引張つて、室内を二に區分致します、多勢の遊戯者中一人丈け其の一方に入りまして、殘りの者は一同他の一方へ入ります、此の多勢の者の入る方には、白布から餘程離れて壁に近い所に、一挺の蠟燭を立て丶之に火を點しておくのです、偖て是から此の多勢の者が、順番に一人宛つ歩み出しまして蠟燭の立て丶ある所と白布の間を通り拔けるのですが、蠟燭の火で其の者の姿が歴然と白布へ其の影が印する譯です、白布の那方に居ります一人の遊戯者は布に向つて立つて居りますから、此の影法師を見た其の本人を推測し、那方から大聲で「誰某」と指名致します、此の指名が旨く適中すれば此の者は言ひ當ての役を許されまして、多勢の方に加はり自分も影法師を白布に寫して、之を言ひ當てさせる一人となり、又た己のが影姿を言ひ當てられた者は、彼に代つて白布の那方に廻はり、言ひ當ての役を勤めるのです、併し推測を誤りまして指名の適中しない場合には、矢張同人が其の役を繼續致しまして、終に首尾よく指名を適中させるまで、決して其の役を罷めさ丶ないのです、夫れですから此の役に當つて魔誤つくと、幾十回も引續いて一人で言ひ當なければならぬこと出來るのです、但し蠟燭の前を通り拔ける時には、出來得る限り奇妙な態を装ひまして、可及的自分の姿を晦まし、容易に推測されないやうにすることが何によりも必要なのです。

（二）　驢馬の尻尾繼ぎ

是も餘程目先が變つて居て非常に面白い遊だと思ひます、先づ鳶色の厚紙で可なり大きく一匹の驢馬の形體を切拔きまして、此の驢馬の全形から更に其の尻尾だけを切取つて別にしておくのです、そこで、壁か襖か或は屛風のやうな所へ、適當の大きさの布を一枚吊るし下げて、之に先きに切拔いた驢馬の軀體へ尻尾なきものを貼りつけます、而して別に取つておいた尻尾は其の根本の所（即ち驢馬の體軀の臀部へ）、接合すべき部分へ、一本の留針を突き刺すのです、偖て遊戯者は一人宛つ順番で此の尻尾を向に貼り貼けられた驢馬の軀體へ繼ぎに行くのですが、其には尻尾に突き通してある留針の尖端を摘んで、正直に兩眼を閉ぢ、布の吊り下つて居る所へ進んで、恰も尻尾の接合すべき所に留針を突き立て丶之を繼ぐのです、一寸考へると甚だ無雜作な業のやうに思ひますが、實際此を適當の所に繼ぐといふことは中々六ケ敷いので、飛んでもない見當違ひの所へ突き立てる者などが出來まして、從ふて興味も多い譯なのです。

（三）　盲人の給仕

二人の者に目隱をさせまして、向ひ合せに善き程の間隔をあけて座わらせるのです、而して各自に大匙を一本宛つ持たし、之に砂糖を盛つて合圖の下るのを持たしておきます、此の二人の外の遊戯者は一所に集つて見物して居るのですが、其の中の一人は時機を見はからつて「御始めなさい」の號令を掛けるのです、すると、前記の二人は心の中で見當をつけて、互に相手の口中へ匙を持ていつて砂糖を入れやうと一生懸命になります、所が、是は中々うまく入らないもので、或は頤の下へ喰したり、或は鼻の孔へ押し込むやうな滑稽を演じまして、行つて居る當人達よりも、脇に居る見物人が面白がるのです、斯ういふ風で砂糖の散り溢れることは免れないのですから兩人の坐席には敷物をしきまして、相方共胸へ手拭か前掛を懸けさしておくことを忘れてはなりません。

（四） 袋破り

此の遊戯は食物に關係して居りますから、少し下卑て居るやうな感もありますが、西洋でも聖誕祭に最も適當した遊として、盛にやらせますから、我邦でも新年とか又は祭日などに少年少女の遊として惡くはなからうと思ひます、先づ新聞紙のやうな破れ易い紙で、大きな袋を造りまして、此の中へ種々な菓子を一杯詰め込み、天井から吊るし下げるのです、そこで、遊戯者の一人に一本の杖を持たした上、目隱をさして、其場で二三度グルグルと廻はらせ、方向を迷はしておいて、天井から吊るし下げた菓子袋を打ち破りに遣るのです、愈々打ち破りに進む時に、側から「二度だ」とか又は「三度だ」とか杖で擊つ度數を命令しておきますから、其度數で打破れない場合には次番の者が出て之に代るのです、而して首尾よく袋が破れると、中なる菓子は四方へ散亂して落ちて來る、一同が馳せ寄つて之を喰ふといふことになるのです。

（五） 盲人の杖

遊戯者の一人に目隱をして之を盲人に見立て、室の一隅に佇立せて一本の杖を授けておくのです、殘りの者は一同他の一隅へ集り、順次に一人宛つ盲人の前に進んで、其の杖の一端を捉へますと、盲人は之に向て三個の問を掛けるのです、蓋し其の目的は返答の言葉で誰れの聲音だといふことを知らうとするのですから、答をする者は充分に注意して自分の聲音を隱くさなければ不可ません、盲人は相手の聲音を粗々推知して、是は「誰某だ」と名を言ひ當てるのですが、旨く當れば盲人は其の役を免かれて、言ひ當てられた者が之に代ります、若し當て損へば幾度でも當るまで盲人を勤めなければならない、それで、答をする者も誰だか判別のつかない聲を出したり、又は他人の聲を眞似たり、種々の手段で盲人を苦めることになるのです、而して或る場合に盲人は動物の啼き聲を所望することがありますが、相手は之を拒む權利なく、命せらるゝまゝ、犬の如く吠へ、猫の如く啼き、虎の如く吼らなければなりません、是

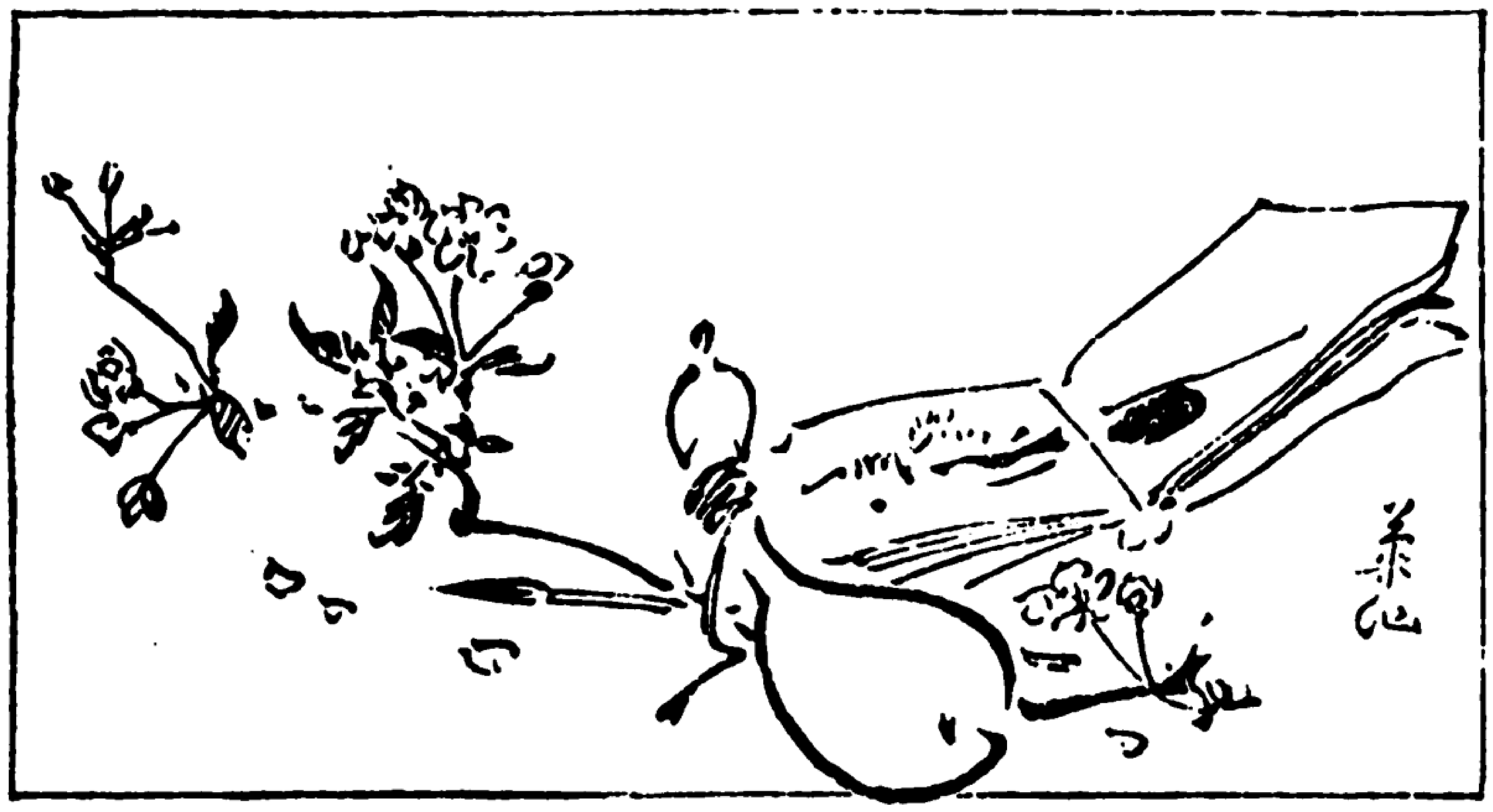
は盲人の方の猾手段で大抵の者は是で其の本音を現はして了ふのです。

（をはり）

簡易ピンポン

ピンポンは此頃新に西洋から輸入された家庭の遊戯で、もと男の學生間に持て囃さるゝローンテニスに對し、女の學生の趣味を充す爲め始められた室内の運動具である、從つて多くの讀者の中にはまだ其名前や遊戯の方法を知らぬ人も多いであらうと思ふ、尤も先年日本體育會が大阪博覧會の參考室に此遊戯を設置して、運動室を開放した事があるから、夫より一部の人の注意を惹いて、昨今では良家の家庭に漸く盛んになるやうな形勢が見えてきた、それは此遊戯が極めて簡易であるのと、至つて無邪氣な、罪のない運動具であるからで、殊に女小兒でも、紳士淑女でも、受ける所の趣味が共通で、容易く室内に行ふ事ができるからである然しながら如何に其方法が容易とも正式にピンポンの器具を整へて行ふとなると、中流以下の家庭では較々困難である、從つて遊戯が貴族的となつて了つて　誰にでもやれるといふ譯には行ない、今茲に紹介するピンポンといふのはさういふ大袈裟なものではなく、誰にでもやれる極めて簡易なもので、まづ第一に必要なのはコース（戯場）である、是は本式にやると玉突臺のやうなものであるが、茲では高足附のテーブルか又は普通の机でよろしい、成るべく大きくてそして長方形の者を撰むがよい、若しそれが有合はさなかつたならば戸板を脱して代用してもよい、是をコースとしてステッキの代りに尖つた火箸か錐のやうなものでも又は筆の軸のやうなものでもよろしいから、長さ約五六寸もあるものを、テーブルの兩側（横に中斷したるくらいの位置）に突刺して、それで毛糸で編んだ少女の襦袢の半襟でも乃至毛糸の襟卷のやうなものでもよい、すべて長三四尺幅五六寸もあるもので、殊にレースの切れッ端か網のやうなものなら一際妙で

あらう、是をネット(網)に代へて、ステッキの兩方に張渡し、それからラケット(玉を彈く板)は玩弄品の團扇太皷か正月なら羽子板でもよし又杓子の大な者を代用しても善が是は僅三四十錢で一對買へる故、買求むる方がよい、ボール(球)はセルロイドで拵へた小いハズミ玉でも又小兒の玩弄にする矢張セルロイドのから〳〵でも宜しいが是もピンポンのボールと云て買へば一個六錢であるから買ふ方が手易い扱かうして是で即席にピンポンとしての器具が整つたならば、甲乙二人テーブルの左右に分れてネットを中心とし互に對ひ合て遊戯を試むるのである、先甲より始めて球を乙に彈けば、乙は直にラケットを以て是を受止め、甲に對つて彈き返す、甲は又更に是をラケットにて受止め乙に返



すといふ風に、幾回でも同じ事を反覆へして、球を受損じないやうにすればよいのであるが、然し其球を彈くには一定の規則があつて、夫に違反すると負になる、其規則には種々の制約があるが、まづ第一にコースの上に於る球の飛ぶべき境域を定むるといふ事は最も必要であるのだ、それはネットを中心として甲乙各一尺五寸ほどを隔て丶、其處に長くネットと並行した線を劃る事で、玉を對手に向けて彈くには此線以外に逸してはならぬ、若し甲は乙に對つて球を彈いて、それが乙の劃線外に逸したならば、次は甲の過失であるから、甲は負とならねばならぬ、それから甲の彈いた球を乙が受損ずれば、是は乙の方に行かぬ時も甲の負である、殊にアウトといふは遊戯臺の外に球を飛ばすので一

番悪い、それ故球はすべてネツトの上を越えて對手の方に送らねばならぬ、茲が手腕と手加減を要する所なので、ピンポンに依つて受ける趣味も茲が山であるので、それから勝負の法にはいろ／＼複雑な方法があるが、素人に早く判明る單純な法は、恰好藤入拳の勝負のやうな者が一番よろしい、それに一回の勝負を一點とし甲が一回勝てば勝星一點、負ければ負星一點として、二回以上續けて勝てばそれが勝である、但し三回の中互に勝敗があれば最後の一回が決戦となるのである、本式の勝敗は點數であるが、是は最初の一回及次の二回に勝てば十五點、三回からは十點づゝで、百點でも五十點でも適宜に標準點を定めておいて、其最高標準點に達したものが勝となるのである、尚勝負を定むる方法は他にいろいろあるが煩雑を虞れて是には除いておく、是が簡易ピンポンの遊戯法で、誰にもできる事であるから極めて妙である。

（そはり）

慰み半分 鳥の飼法（三）

囀々子

扨て是れから普通に飼ひます鳥と飼餌とを申しませう、それに就ては、前以て御斷はり致して置きたいのは、

（一）誰にも分かる造作ない、鳩とか金絲雀とかいふものは省きました、

（二）見易いためにイロハ分けにしました、

（三）總體の名の下へ小分けを致しました、假へば（むく）の中に鳥も小むくも入れて、「から」の中に四十雀も五十雀もあるといふ風にいたしました、

事を御承知願ひたいのです。

（い）の部

岩くゞり　餌ごま、すり及四分餌

これは「はぎ」とも「岩さゞいと」も申します、大きさ

雀の倍ほどありまして、脊は萱くゞりに似て居ります、咽に白斑がありまして能く囀りますが、誠に尠ない鳥です。

鶍　　餌ごま、すり餌五分餌

赤鶍青鶍などに分けます、畢竟青が雌で赤は雄であります、諺にも鶍の嘴の喰違ひと申した樣な工合で惣身色濃赤で嘴が喰違つて居りますから、すり餌には一寸付き難いのです、麻の實でもよろしいです、余り囀りも致しません、先づ下鳥であります。

（ほ）の部

畫眉鳥　　餌黍粟稗米 すり餌 四分餌

俗に「頬白」と書きます、大さ雀に似て大ぶりで、色は雀よりも赤味があつて、目の邊に黑白の線があります、則ち頬白と申す譯であります、よく囀ります鳥で、其囀り方に「片すゞ」「諸すゞ」と申して善惡があります、子飼ひにしましても中々諸すゞ音を出すのは稀れであります、荒鳥は冬から春の初めに多く出て、子は夏の始めに出ます。

頬赤　　餌は前におなじ

俗に「あかしとゞ」とも申します、目の下に赤味がありまして、胸白く黑い斑點があります、美しい鳥です重に冬出ます。

時鳥　　生餌一匁五分 胡桃一ッ

此鳥は隨分澤山の異名があります、杜鵑、郭公、子規杜宇など、申します、中々飼惡い鳥ですが夏の間に巣から出ましたものを白餌のさし餌で育てまして、生餌も鈔は厭ひますから鰻の皮をむきまして、之れが一匁なら米粉二三分の割合に交せて能く磨てやります、時々鰻の生を細かにして與へます、冬の中は籠を内外とも紙で張り香盆へは打藁をよく編んで菰の樣にして敷きます、又た籠桶は布團へ包みまして暖な所へ置くのですが、決して日の當る所へ出してはなりません、冬の內は生の鰻で飼ふが一番です、

其れで生餌で飼ふとすれば直きに籠へ嗅ひが付いて不潔になりますから、取替への籠を用意して置いて時々替へてやるのです、此鳥は寒中は達者でも寒明になつて落ちます事が多う御在ります、新の四月末わたりから鳴出します、昔しから此鳥は飼ふのが面倒としてありますが、手當次第で何年も飼はれると申すことで、現に囀々子の先代も實驗いたしたとの事であります。

(ぬ)の部

ぬか鳥　餌ごま すりゑ五分餌

大さ雀に似て少さいものです、毛色も雀に似て居ります、頂に赤い毛がありまして、少しは囀る鳥であります、冬期に渉りますものです。

(る)の部

翠雀

大翠雀小翠雀の二種あります、又た翠雀鶲と申すのは鶲の一種ですが、玆に加へました。

大翠雀　生餌七分青味入 粉一匁

之は大さ鶯よりも大振りで、頭から尾まで瑠璃色をして胸は黒く腹白い鳥で、高音に囀ります、極めて美しいもので色鳥の第一と致してあります、昔は此鳥と鶯駒鳥の三つを日本の三名鳥と致して、飼鳥家の極めて珍重したものであります。

此鳥の雛は惣身茶色で少し黒味がありまして、尾羽だけ少し瑠璃色になつて居ります。

小翠雀　生餌一匁青味入 粉一匁

大さ鶯程でして總て大翠雀よりも濃い色であります、咽から腹へかけて白くなつて居ります、春の末に出て能く囀りますが、此鳥は寒さを厭ひますので一寸飼悪いのであります。

翠雀鶲　餌は前に同じ

之れは鳴かぬ鳥であります、胸に少し黄味ありまして脊が瑠璃になつて居ります。

(を)の部

尾長鳥

生餌一匁五分青味入
粉一匁胡桃入り

此は三光鳥だの三尺だのと申します、大さ連雀に似て小さく細いです、總て瑠璃色をして居り、目の中に青味がありまして、嘴は淺黄で腹は白くあります、尾の長さ尺餘もあります、能く囀る鳥ですが極て寒氣を恐れますので、巧者でなければ一寸飼悪い鳥であります、此鳥を餌付けますには皮剝鰻一匁粉一匁に青味なしにして、燒鷄卵の黄味計を半分ほど餌にすり交せ、又た胡桃を少々加へまして、度々割餌にして與へます、卵がないと決して保ちません。

關東尾長

生餌四分青味入
粉一匁

大さ鵯に似て頭黒く背は鼠色で尾羽は淺黄色です、尾の長さも尾長鳥ほどはなく、囀りも餘り善い方ではありません、冬出ます。

(か)の部

がら

唯だ「がら」と申す鳥はないので、茲には「がら」のつく小がら非がら、四十雀五十雀などを集めたのであります。

小がら

生餌一匁青味入
粉一匁胡桃入

之は「十二から」とも申します、大さ四十雀よりも小振りで、頭黒く背は鼠で腹は白くあります、冬出ますもので少しは囀ります。

ひがら

餌は前に同じ

小「がら」よりも少さいものでして、毛色は白に鼠交りであります、少さくて可憐の鳥であります。

山がら

胡桃餌胡麻の花い
づれも水入れ
すり餌にてもよし

大さ雀位で、毛色は樺色の中に、白黒濃鼠などの班點がありまする鳥です、之れは大して面倒な飼法でもありませんし、能く藝を致す鳥ですから、仕込み樣によつて中々慰みになるものです。

愛染がら

餌は前におなじ

大さ山がらに似て居ますが、羽色は總て赤勝の樺色です、之れは山がらと同じ取扱ひでよろしいです。

四十雀

餌は前におなじ

山がらよりも小さい鳥で、頭は黒班脊は淺黄に黄と鼠の交りで、腹は白い處に黒い筋があります、仕込様で藝も出來ます。

五十雀

餌は前におなじ

之れは「八十から」「さかつぼう」「さかほこ」「木鼠」などゝ色々の名を持つて居る鳥です、山がらに似て居りまして、總身淵鼠色で頭は黒く、咽から腹へ掛けて白いです、日光邊に多く居りますもので面白い鳥です、又た之れは少し大振りの籠へ飼つてやる方が宜しいです、瓢簞へとまる鳥は之れ計りです。

鵥

生餌四分青味入り 粉一匁

之は俗に「かけす」と申す鳥で、大さ鳩位ありまして頭は鼠色に胡麻班がありまして、總身濃鼠色尾羽の

端だけ黒く、羽のもとに瑠璃色の羽があります、容易く子飼の出來る鳥です。

島鵥

餌は前におなじ

鳩より少し大振りの鳥で頭は黒くあります、其他は大抵鵥に似て居りますが、嘴の強い鳥ですから丈夫な籠でないと突き破ることがあります。

合法鳥

生餌一匁青味入れ 粉一匁

大さ「ひよ鳥」位か少し其れより大き位です、總身黒勝ちの鼠色で大きな聲で囀りますが、弱い鳥で冬を越し兼ねますから一寸飼ひ悪い鳥です。

かしら

餌は、黍粟稗米 磨餌五分餌よし

大さ雀位で毛色も雀に似て居ります、胸に赤い胡麻班があります、年を重ねるにつれて、黒白の斑よく分かりまして見事になります、能く囀る鳥で冬季に多く出ます、島かしらと申す鳥も大抵之れに似て居ります。

かやくゞり　荏胡麻磨餌四分餌よし

大さ雀に少し大振りで赤黒く「さゞい」の色に似て居ります、其れゆえ一名大「さゞい」とも申します、よく囀ります鳥です。

（よ）の部

よしがや　黍荏胡麻磨餌七分餌

大さ雀位で色も雀に似て居ります、囀りは惡いものですが珍鳥として飼ふのです。

葭雀　生餌一匁五分粉一匁青味入れ

「行々子」「吉原雀」など丶呼ばれて名高い鳥です、大さ鶯よりも、大振で毛色は鶯に似て居ります、葭の中へ巣を作りまして、四五月頃から出て葭の中に住んで大音に囀りますが、土用になると聲を止めて仕舞ます、子飼にすれば飼えんこともないですが、寒氣に中てられて落ちるのが多いので困ります、稀に年を越すものもありますが、其は餘程强いのです、大さに依て大葭雀小葭雀の二種あります。

雜錄

高等女子佛英和學校と其寄宿舍

菊池雪子

霞をこめた春の朝かと思へばまたしても降り切る此頃の雨天に、道路の悪るいにもか丶はらず、海老茶の袴をちらり〳〵合羽の間から見せて、學校に行かれる嬢達の姿を見るにつけても、なんとなく學校がなつかしくなりましたから、女學校參觀と出かけること丶致しました、戰爭々々と騒いで居るに、のんきな事だと笑ふ方もありませうが、戰爭は戰爭、學校は學校でありますから、隨つて學校參觀も決して、今日に無益であるとは、いはれますまい。

神田猿樂町と三崎町とが、接して居る角を取り圍みまして、赤い煉瓦造りの高大な學校がございます、表札に高等女子佛英和學校と記されて、門を入ると右側には事務所、左側には供待があつて、次に生徒昇降口があり、立派に飾り立てられた洋風の應接室がございまして、正面にはたふときあたりの、寫眞を奉仕して、かたへに洋琴を装置てあります、此の學校は標札の通り、日本の文學は勿論佛蘭西語英吉利斯語を教へるので、日本でございますと、尼さんとでも申す西洋の婦人達が組織されたのであります、さうですから、隨分此校のことを尼寺など丶いふ人も多うございますが、何も生徒を尼さんにする爲に立てられたのではございませんから、尼さん臭くなる筈もございません、たゞ他目から見ますと、外國語の教師は尼さん計りですから、一寸さう思はれるのも無理はない様です、けれどその教員達は日本の

尼さんとは異つて、是れまで他に嫁したとのないと申ますと、妙齢な二八か二九かと想像されますがまた決してさうではありません、まあ二十五歳以上から五十歳迄の童貞と申て居られる人達であります、校長はジョゼフ孃と申まして本邦に十九年も滯在して入らつしやいますから、日本語もよく分り、我國の事情にも可成り通じてお出に成りまして、温順な方です、私はマリヤ孃に導かれて教場寄宿舎を參觀致しました、この方も日本に長く居られますから日本語をよくお話しなさいますが、私には佛語を以てお話しなさいました、私は嘗てこの學校で學びましたこともありますから、今日改めて參觀致すわけもございませんやうですが、昔し教へられました先生は皆轉任されました、又校舎も其後改築されましたから、昔日と變つたところも、まほしく、皆樣に確實な所を御紹介いたしたい考へで、まづ校舎から見始めました。

寄宿生

三十六名の内に日本人、佛人、英人など年齢はまあ五歳位から廿歳位まで、その内、男子が三名ほどございます、女學校に男子も混じて居るとはおかしいようですが、これは皆七歳未滿の子供ばかりで、滿七歳以上は、男子なれば、校舎にも學校にも収容いたしません、そうして男子の寢室は特別に離れておつて、教師一人監督して起臥を共にして居ります、本邦人と外國人とは寢室も化粧室も、食室も分れて教師の寢室は中間におつて、兩方の小窓から、夜中も監督するに便宜なやうにしてございます、別にまた年の行かない子供の寢室には、やはり一人の教師が側に休んで朝起きますとき、晩に寢ますときなど、暖い家庭のお母さんに代つて諸事萬端世話をしてやります、塵埃が一つもないようによく掃除されたところに、ま白な敷布を掛けられた寢臺が並んで側に一個づゝ椅子がございます、マリヤ孃は中々日本通なお方で笑顔を湛えながら、こちら（日本人の方）の方は、雑巾もて毎朝拭掃除をいたさせます、

ごらんなさい、奇麗に輝つて居りますこと、水で拭かせますと、塵もよく取れて、すぐ奇麗になります、あちら(西洋人の方)は蠟を付けて磨かきたがりますから、さうさせて居ります。

朝　起

生徒は朝六時半に床を離れまして、七時十五分過にもなりませう、二階を下りて食堂に行きますのは、

化　粧　室

化粧室は三階でございます、私はまた〳〵マリヤ孃に導かれて三階に上りました、中央には顔を洗らう瀬戸者の鉢、手拭掛が立派に兩側に整列んで、小さな引出には櫛、齒磨などを入れて置かれるやうに出來て居ります、兩側の窓下には簞笥、柳行李竹行李等各自の好に衣服を仕まひ置く器具を列べてあります、三階の片隅に水道が引かれてありますから、下まで水を汲みに行く骨折はございません、マリヤ孃は手づから栓を廻はして、これこの通り水をいくらでも得られまする、便利ですね、といひながらまた話を續げられました。

始業時間

八時に授業が始まります、朝飯が終つて生徒は窓の塵埃を掃つたり、机を拭いたりいたしますが、何分短い時間にやりますから充分なとは出來ません、ハイ手傳う人はございませんです。

授業時間

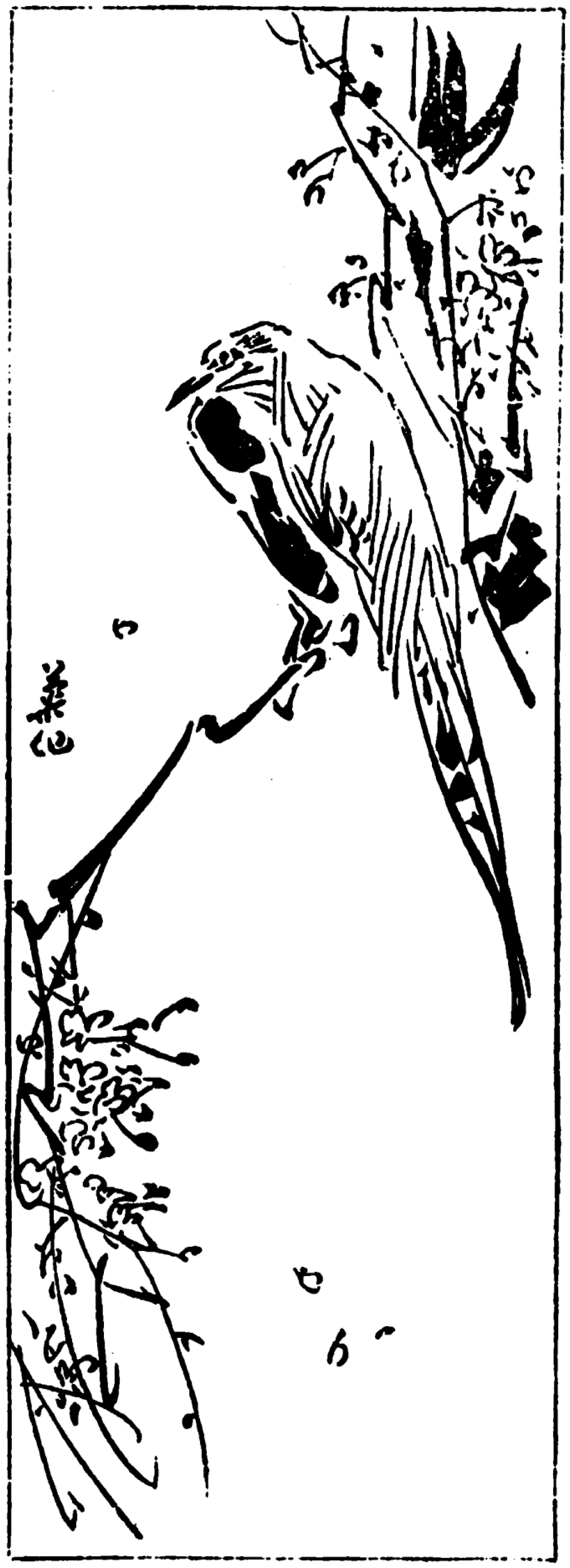
日々時が定まつて四五町先まで聞えるのは此校の鐘の音でございます、授業の時を報じますと、輕裝して快活な洋服の生徒や、普通の袴の生徒が、英語の敎室に、佛語の敎室に、高等女學校の課程を學ぶのはお茶の水專修科卒業の先生の許にと、右と左に廣く長い廊下を通つて居ります。三階より二階と梯を下りながら、マリヤ孃は、八時から四時までゞありますから、大分長時間のですが、生徒はみな慣れて居りますから、何んともないようです、私はへー子供もやはりさうなんでございますか、と少し驚いてお伺ひいたしましたら、いゝへ、小さいのには

もつと短くいたします、十時が鳴りますと放課させます、晝食後一時までは皆遊歩の時間でございます。

佛語教室

それから私はまたマリヤ孃の御案内で佛語の教場を參觀いたしました、これは第一室でございまして敎師は佛蘭西の婦人で生徒は十六七歳から二十歳位で十二三名でございまして皆日本の方でした。

第二室には日本人、佛人、英人など五六歳から二十歳位まで入り混りなのを二組に分けまして、敎師も二名やはり、佛國婦人が佛語を敎授して居られます、丁度甲組の敎師は書取を授け、乙組の敎師は習字を敎へて居りました、私はちらと其の書いたものを見ましたが、字はなか〳〵よく書いてございました、けれど同組で年齢のあまり差がありますのは敎へる方もご困難でございませうと思ひました。



第三の敎室には英國婦人が敎授して居られましたこゝも入り混りの組を敎師一人して敎へてお出になりました、英語は需用の廣いせいでもございませうが、此の敎場には他のと比べますと生徒が多いように見受けました。

次は食堂を隔てゝ日本學の敎場でございました、女敎師一人、助敎一人で受持つて、高等女學校程度

のものを敎へるので、今日は試驗前とかで、生徒に復習をさせるのださうで、皆手に〳〵本を持つて温習して居りました。

食　堂

二室に別れて居りまして、一ツは日本食室で疊を敷いて名々お膳でいたゞきます、こゝには食堂掛の少女がありまして、時間になりますと、それ〳〵持運びをいたすので、西洋の食堂にもやはり一人給仕して居ります、洋風の長い机で洋食する人ばかりでございます、此處にも洋琴を備いて、英國婦人が敎授して居りました。

唱　歌

唱歌の科もあるのでございませう、とお尋ねしましたところが、マリヤ孃はハイ、ございますが、一週に二度、四時から五時まで一時間いたします、生徒が學んで居ります語でもつて、佛語を學ぶ者には佛蘭西の唱歌、英語を學んで居られます方には、英吉利の唱歌を敎へますが、日本のは敎へて居りません。

裁　縫

生徒がたの手になつたものがございましたら拜見いたしたうございます、と申ましたところ、マリヤ孃はハイ、澤山出來ては居りますが、本月末に學期の終りになりましたら、展覽會に出します積りで、擔當の先生が悉皆集めてお仕舞になりましたから、出してお目にかけることは六ケ敷うございますが、惜しうございますね、美しく出來たものが、たんとございますよ……刺繡の先生は、葡萄牙の方でございます、洋畫の出來上つたのもお目にかけたうございますが、矢張先生がお仕まひに成りまして…………マリヤ孃は斯く私にお話し遊ばしまして、ふと側の机上に氣が付きまして、おゝ小供の分が、此處にございます、これでもといひながら、

洋　畫

これは七八歲から十一二歲迄の生徒が書きましたのですとお見せ下さいました、鉛筆畫と水彩畫が奇

麗に寫してございました、年長の生徒が二人參りまして、手づから寫されました大きな額煖爐前の衝立など、油繪に書きましたものを見せられました、手本を大きくして書くさうですが大層よく出來てございました、三時から四時まで、圖畫の敎授が隔日にございまして、英國婦人がお敎へなさいます、やはり洋琴の先生なんです、と語りながら、話しは琴に移りて、

琴

琴の先生は一週に三度敎にお出になります、稽古いたして居ります人も大分でございます、それから…

女禮式

今は女禮式の先生もお出になります、彼所が敎場でございます、と日本造りの室に私を導いてお出になりながら、こちらの方は裁縫室です、と丁寧に親切に、委しくお示し下さいました、私は就寢の時間は何時でございますかとお聞き申ますと。

就寢

ヘイ就寢の時間でございますか、皆八時に休ませます、晩食は七時にいたしまして、就寢までは遊んで居ります、授業時間が長うございますから、夜分はもう早く休ませるようにいたしてございます。

それから新築されました明るい浴室を見まして、長い廊下を左に折れ、英語、佛語、洋琴オルガンなどの特別敎授室をも見まして、深くマリヤ孃に謝してお暇することにいたしました、通學生と寄宿生とを合せて七十名位この學校に居りますさうでございますが、校舍はなか〳〵大きうございますから、二百は入れませう、まことに、先生方は親切深うございますから、小兒などにはお母さんに代つて手を盡して下さいまして、監督は行屆いて居りますから、いま一つ進んで年長生徒のために、例へば家政科などを設けまして、家庭的の生活を生徒時代から、そろそろ習はせるようにいたしますれば、卒業の後にはあつぱれ立派な婦人達を出すでありませう。

佛英和學校として、佛英の方はその國の方々が敎

へて入らつしやいますから、何等の缺點もございませんけれど、和學の方は少し見劣りはいたしますまいかと思はれます所があるやうです、是は知名の本邦教師がお出なさらぬためでもございませうが、惜しいことはこればかりでございます、しかし追々生徒が增加すれば本邦教師で名のある方を招聘なさいますさうでございますから、將來に望のある學校でございます。

世界最小の王國

竹陰舍

普通に行はる〻輿地圖には、影も形も記されて居ないが、南太西洋の詳細なる海圖を見ると、レオ、デ、ジヤチイロから東方七百哩の處に當つて、トリニダツトと記されたる、針の先で突た程の小さい島を見出だすであらう、是れが恐らく地球上最も小さい獨立國であつて、法律もあれば、國旗も有つて居る又た一人の統治者をも戴いて居るが、其人口はと問ふと、僅かに千人餘りに過ぎないのであるから、戶數は三百か四百位なもので、吾國の極々小さい村にも及ばないのである、現今の統治者則ち王をゼームス一世と稱して、常に自國產の葉卷烟草をスパリスパリと召上つて居られる、王は折々紐育府にも來られることがあるが、其時にはいつでも匿名されて、ハアデン、ヒツキー君と名乘られて居る。

ゼームス一世則ちハアデン、ヒツキー王は亞米利加合衆國を始め、南亞米利加の各國から公然一國の主權者と認められて居るが、其の王國は輿地圖にも百科全書の中には出て居ないから、世界中にも此の王國のことを知つた人は千人とはあるまい、故に此王國の建設者の經歷や、國内の有樣などを探つて見ると、全然小說的であつて頗ふる面白いから、少々記して、お慰みに供する積りである。

さて此のゼームス一世は、體格肥大にして、頭に白髮を戴き、其の顏色は熱帶地方の日光に曝され給へ

る故にや、茶褐色を帶びて、威容堂々たる老年の方であるが、其の出身はといふと決して左ほど貴い人ではなくて、愛蘭土の血統を受けたる一小賤民に過ぎないのである、少年の時に英國政府に對して、例の愛蘭土的擧動を起したので、其の土地に居られなくなつて、佛蘭西へ逃げて行つたが、甘く佛語を操つるので、誰れもみな佛蘭西人であると思ふて居つた、それから漂泊して或地の雜誌記者となつたこともあつたが、後ちには自ら「トリプレット」と稱する遊戲雜誌を發刊した、其後間もなく、どうした譯かその雜誌は突然發刊をやめて、その發行者たる彼れの姿は何時となく消えてしまつた、さうして其の行先地は、數年間知れなかつた。

此時彼れは亞米利加に來て居つたのであつて、交際社會にも立交つたが、遂に紐育府の富豪ジョン、フラグラーといふ人の令孃と結婚した、是れが抑も彼れの成功した原因であつて、彼れは一朝にして金滿家となると同時に、旅行の樂しみを味ふことの出來る身分となつたので、直ぐに一の遊船を艤ふて、夫婦伴れで世界周遊に出かけたである。

ところが、その周遊中に、ブラヂル沖にトリニダットといふ無人島を發見した、この島は何れの國の領地にも屬して居ないから、彼れは之を自分の手に入れて、自ら其島の皇帝とならうと決心した、そこで直に其島に上陸して、赤地に黃色の三角形を染め拔いた旗を建てた、則ち今のトリニダット王國の國旗はそれなので、此に於て、彼れは始めて此島に一獨立國を建設したのである、序に記して置きたいのは此島は英國殖民地のトリニダットとは名は同一であるが、決して同一でないから、混雜すべからざることである。

其後ち一年たつと、トリニダット王ゼームス一世の宮廷より派遣された全權公使といふ名義で、一人の佛蘭西人が、ブラヂル國に到着した、ブラヂル政府は之を公認した、其他の南米各國政府も同樣之を公認した。

次には紐育府にも同國政府の代表者があらはれて、一株二百弗を出金すれば、同國に居住することが出來るとの勸誘狀を公けにした、さうして此の出金者はトリニダツト王國の始めての居住者であつて、自然此の新王國の貴族となるべき譯であるから、社會上好位置を占むるものたるべき事、株劵は一年の後拂戻さるべき事、居住者は其正當なる主權者としてゼームス王を奉戴し、王の語をば、法律なりと承認することを宣誓する事、而して此島の產物たる鳥糞海龜及び地中の財貨專賣の權利は王の特權たるべきことを承知する事業を發表した、此の地中の財貨といふは、十九世紀の初代に於て、海賊等が此島に埋めたと言傳へられて居るのである。

又た此の勸誘狀には、文學とか、美術とか、博愛とか、事業とかで、世に顯はれたものには、位階を與へ、また功勞を國王の爲めに盡したものには、十字勳章を授くるとのことも記されてあつて、英佛兩國語の文書でもつて、中等以上の人口に配附された勸誘は成功して、ゼームス王は、五十人餘りの白人の臣下を有せらるゝことゝなつた、或者は是等凡べての事を、詐僞の手段であると、疑つたものもあつたが、事實は決してさうでないことを證據だてた、勿論王は無上の權利を有つて居て、生殺與奪すべて思のまゝであるが、決して此權利を用いないのみならず、その統御の仕方は誠に平和穩當のものである、王も其の臣下の貴族も、珈琲や煙草の耕作地を拓殖して、可なりの收入を有つて居る、勞働に從事する支那人や、印度人は五百人內外もあるが、支那印度諸國に定期航海を開いて居る一隻の小蒸汽船があつて、まだ其上にと兩國の勞働者を輸入して、盛んに人口を增殖しやうと企てゝ居る。

殊に不思議なのは、此の島王國の內には、罪科を犯して罰せられた例がないことである、それ故耕作地の監督人は置てあるが、警察といふものはない、人民は王に對して、一言一行みな直接の責任を有つて居つて、王と人民との間には何等の墻壁もない、勞

働者は盡く兵士の籍に入つては居るが、實際出戰しさうな樣子は少しもない。
首府はゼームス市と呼びて、二週間毎にはレオ、デ、ジヤネイロから蒸滊船が市の港に出入して、郵便物の發送を取扱ふて居る、王は盛んに郵便切手を發行して、合衆國や歐羅巴に輸出して、好事者に賣捌くので、少なからぬ利益がある、是れが王室の大なる財源となつて居る。
此の汽船は、實に一面にはゼームス王の海軍であつて、此王國は之に據りて世界各國と交通するのである、王はその近臣達と共に、最近の新刊書籍や、雜誌や、紐育府の日刊新聞、巴里の新聞などは、朝夕購讀されて居る、されば世界の如何なるはてに、どんな珍事が出來しても、二週間の内には、其の詳報は必ず此國に達いて、一般人民に知れ渡るのである前にも記した通り、定期航海船は、常にレオ、デ、ジヤネイロに向つて航海するのであるから、この國の物產は其船に積まれて、ジヤネイロに至り、其處から又合衆國や歐羅巴諸國に送られる、又た船が歸航する際には、器械やら、農具やら、又は此國に出來ない種々の品物やらを積むで歸るから、國民の便宜は、決して他の孤島に住むて居るものゝたぐひでない。
生活は簡短なもので、白人は時々騎馬で耕作地を乘り廻はる位が、その勤であつて、外にはさしたる用事もない最も是等の白人は、多くは他國に財產を有つて居る、ゼームス王も紐育府と、カリホルニヤに少なからぬ財產を所有されて居る。
住居は大きな平屋であつて、其の周圍には芭蕉など熱帶國の樹木が靑々と繁茂して居る、淸く澄み渡つた小川は、水音靜かに市街を流れて見るから涼しさうである、宮廷には時として宴會があつて、多くの近臣が集まるが、男は葉卷烟草を燻らし、女は釣床に横はつて互に笑ひさゞめく位なもので、舞踏などの騒ぎはないのである。
耕作に從事して居る支那人は、固より賤民であつて

雇人として使役されるのであるから至つて靜かなもので、奴僕問題などは、決して問題となつて居ない料理人でさへ、王の許可を受けなくては、甲の雇主の處から、乙の雇主に轉ずることは出來ないのであるから、其他は推して知るべしだ。

貴族等は、面當といふものを知らない、事業上の利益はみな紐育府やジヤネイロなどに派遣されてある領事が一切監督の責に任して居るから、態々商業上のことに就て他國に行く必要がない、已にかくの如く領事館の組織が出來て居る位であるから、若し事情が許すならば、ワシントン府には、トリニダット公使館といふが設けられるであらう。

紐育府に滯留せる當國の總領事は、コメトといふ人であつて、此人は時として外務大臣をも兼任するのである、王と時々紐育府に來られる、いづれもその本國の住居を慕はれて居つて、身は繁華な紐育の都會に住はるゝ時にも、夢は常に寂寥たる大西洋の一孤島を遶るのである。

菜の花と蝶

清水橘村

陽春晴朗の日、遠く野外を眺望すれば、柳陰燕子しきりに飛び、花上蜂兒かぎりなく舞ふ。時は三月中旬の頃なり、北壠南畝、黄氈一面に敷き、咲きそろひたる四片の小花、芳香をちかたの風に誘はれ來つてわが衣袖を渡る、知るこれ油菜の花なるを。

菜の花やよしの下りくる向ふ山(太祇)

油菜は俗にナタネナと云ひ、又略してナタネと稱す而して此ナと云ふ意義は、上古飯に伴ふて食ふべきものを總てナと云ひ、魚もナとよめりしが、今は之をサイと呼び、又飯にはサイと稱するものも、酒にはサカナといふなり、油菜は又蕓薹とも書せり。

花は四片の花瓣十字形をなすが故に、十字花植物の稱あり、六本の雄蕊中、四本は長く二本は短かき故、又是れを四强雄蕊といふ。仰いで天空を見れば

告天子玉音を弄して朗々地上の美観を告るが如く、黄蜂白蝶、花に戯れ風に舞ひ、兒童又此間を徘徊して美はしき唱歌を歌ふものあり。

蝶々とまれ、菜の葉にとまれ
菜の葉があいたら、櫻にとまれ
櫻の花の、盛ゆる御代に
とまれよ遊べ、遊べよとまれ。

麥青うして菜花黄なり。心なき兒童といへど此の優美なる景象に對せしめば、誰か何ぞ自然を愛する情を起し、理科に對する趣味を感せざらんや。卿等婦女子、幼き兒女の手を曳きて春日郊外の花間に行樂す、眞に家庭の教師となるも此の時にあり、賢明なる母姉となるも亦此の時にあり。何ぞ自然の生物を捉へ來りて、彼等兒童が腦裡に、新鮮にして愉快なる印象を與へざる、斯くして諸童皆其の美を味ふべし。然れども未だ其の妙に至りては及ばざる所あるが故に、即ち進んで花の一片を摘み、之を掌上に載せて、虫を呼ぶ花の蜜線を注視せしめ、花に戯る蝶蜂の體は花粉の爲めに彩れる等を觀察せしめよ。又その花粉は他花へ傳遞し、花の受精を媒介するものたることを知らしめよ、花の芳香を説明し、花の美くしきを見せしめよ。兒童は即ち不思議の感にうたれ、何となく求知心を引き起して質問するものあらん、これ乃ち教育者が兒童教育の手段として意を致すべき場合なり、此際にして若し愉快にして明確なる説明を與へすんば、兒童野外誘引の效それ或は零たらん。

菜の花の花蜜は、雄蕊の基部、綠色の水球より發す。この小球の表面より絶えず甘き蜜汁を分泌し花瓣の美色と芳香とを以て、野に飛べる昆虫を招く。油菜の葉は又養分に製造する用を爲すものなれば、盛んに養分を製造する時節に生ずる部分は其の形巨大にして、まづその下葉に就て實見せよ、形巨大にして叢生し、しかも日光を受くるに適する樣安排よく排列せるにあらずや、然して上部に至るに從ひて小形となり且つ散生す、又天工の一技なり。

菜の花や月は東に日は西に（蕪村）

清洒にして艶美、優雅にして豪宕、菜花萬圃に滿ち、月は白く日は紅なり、吾人等の屢之を實見する處、黄昏花色淡として無からんとす、葉かげの中よりは紫影空に曠がりて、野馬孤村に歸る影も微

此の十字形植物は、元來毒性なきが爲め、其の根莖、葉共に人の食用する所となり、

大根は莖（普通根と稱する部分）、カラシは實、ワサビは莖を以て各々香辛料に用ゐらる丶これ揮發性の油分を含めるが故にして、油菜の外には、三河島、山東菜、白菜、シヤクシナ等のツケナあり、右いづれも九月頃下種し、十一二月頃とりて鹽漬とす。

油菜の種より製せし油は、燈火用、食用、器械用運轉用となり、其の粕は室素肥料として農家に用ゐらる。

ダイコンとカブラとは稍異なれども、カブラとアブラナとは殆んど相似たり、左に之を比較せん。

	油菜	大根
花色	黄	帶黄又は紫色
蕚及花瓣	四片にして十字形	同
雄蕊	長四本短二本	同
果實	莢長し	同

菜の花が地方的特色を現はせるものは。

菜の花の中に城ある郡山（其角）

にして菜の花と胡蝶と理科的關係を表はせるものは

蝶々の花に離れぬ間かな（すて女）

之が美色を觀て歎せるものは、

わし曳の山吹にしもます色な

あや菜の花といひや暮さむ（民子）

次に蝶は昆虫の中に於て、最もうつくしく、最も優しき虫なり。殊に紅白紫黄の花、濃淡地に相競ひ、大小時に相雜る間に、翩々戯舞し、或は香を竊み或は夢をむさぼり、優艶の躰、春風に從つて飄る處、艶美婉麗なる形態蝶を措て他に比敵する蟲類なし、さりながら春季は一體に花は其の色濃厚ならず、虫亦發生する種類も少なきが故、蝶となりて表

はる丶も單純な形姿をなすなれども、晩春より初夏にかけて、植物には牡丹、芍薬の如き濃艶なる花開き、草木の葉はいよ丶茂り、昆虫の食物となるに不足なき時となれば、之より發生し來る昆虫にもカラタチの虫、ゴボーの虫などあり、從て蝶も亦美裝の上羽化し、盛粧して花間に顯はる丶が故、夏は蝶の全盛時代とも云ふべく、モンシロテフと云ひ、アゲハノテフと云ひ、花せ丶りと云ひ實に美麗なるもの丶みにもか丶はらず、多くの人は春の蝶(黄と白と)を賞して、夏の蝶に一言も費さざるは如何なる理由の存する次第にや、其處には又種々なる原因のあることなるべけれど、惟ふに春は蝶より外に愛する虫もなく、蝶は又春の如き靜かなる氣節に適する形態をなすが故に、忽ち人目にも觸る丶所以にして、夏は樣々の虫の音や、螢の如き有美なるものもあり、花も濃厚なるもの多く開くがため、人は餘り蝶の如きものに注意せずと云へるが如き次第ならんと信ず、瀟洒たる新裝の春の胡蝶は、如何にも得意の風あるに反し、夏の胡蝶は哀れ薄命の少女なり。

『てふの花にとひかひたる、やさしきもの丶かぎりなるべし、それも鳴く音の愛なければ籠に苦しむ身ならぬこそ、猶めでたけれ、さてこそ莊周が夢も此物にこそ託しけめ』とその昔俳人也有は喜べりけるが。詩人バイロンは『女子は蛾蝶の如く、光華の爲めに捉へらる』と痛めり。

蝶は美麗なり、而して花粉を媒介する益虫なれど、其の前身は植物の葉を食用する害虫なり。害虫なりとて無暗にこれを屠殺する勿れ、前身の害は後身の益より尠なし。蝶は前世に於て罪を得、後生これが功を以て報ずる所は、佛家に言はすれば大に喜ぶ處なるべし、功罪相償なり。

今蝶の種類を調ぶるに、まづ胡蝶と云ふは二種ありて、紋白蝶、筋黒蝶即ちこれなり。

此蝶の前身乃ち幼虫は菜虫又は青虫とて、重に野菜の葉を食用とし、時には甚しく害を與ふる昆虫なり、其の體の色は小鳥の類に捕食されざる要心にと

て、其の葉の如き青色をなし、蛹は地方によりてはオキクムシなどゝ稱し、附着する場所に應じて或は緑、淡緑、或は黄、褐、灰白等、其附着する物の色と混同し易き色を以て自體を保護す。

次に、鳳蝶は蝶界の女王にして、其の美麗なる他に比類なしと稱せらるゝ形態又大にして其の體も翅も眞黒なり。此蝶の形は平家の紋所と同じ。而してその美麗なる翅には數條の黄線と黄紋とを交へ、且つ後翅には長き燕尾の如きものを有し、實に一見優美の姿あり、此の蝶は重に初夏の頃より發生す。

成虫はかくの如く美麗なれども、此の幼虫はカラタチ、蜜柑、サンショーの葉などに生育するユズボーと稱する毛虫にして、之が蛹となり、蛹は蝶となり、たとへば蠶の如く(蠶の蝶は蝶に非ず蛾なり)變成して蝶となる、乃ち幼虫＝蛹＝蝶と三樣に變化してくる虫を昆虫と稱す。



又黄鳳蝶と云ふものあり、形は鳳蝶に同じなれど只其色の黄なるを云ふ。幼虫は人參、芹の葉などに生育する靑虫にして、頭には樺色の二本の角を有し物之れに觸るれば非常なる惡臭を放つが故に、容易に小鳥なども近かずと云ふ。

四季を通じて多く發生する黄蝶の幼蟲は、ネムノキ、メドハギ、カクラケッター等の葉に着生す。又花ゼヽリは小さき蝶にして翅は茶褐色にして白紋

散在す、其の幼虫はハマグリ虫とて稲の葉を食用して害をなす青虫なり。
以上蝶の幼虫たる時これを捕食するものは、トンボ、カマキリ、細腰蜂等などなれば、この三種の虫は決して捉らへん樣にして、之を保護すべし。
蝶の頭には二本の觸角(物に觸れて見る盲人の杖の如きもの)あり、又口部には彈力のある細管が、常はゼンマイのやうに卷かれて、花に止り花蜜を吸はんとする時、之を延してそれが使用に適せらる。
夜はほの〳〵と明け離れて、そよ吹く風も心地よく、うす衣を被げる森かげよりは、斜めに朝日子のかげ匂ひ來り、綠の野の上には、朝霞たなびき、草葉に宿れる白露の眞珠のごとくきらめく中より、折しも一つがひの胡蝶たよ〳〵とうかれ出で、輝く羽根を打ちひろげつゝ、心のまゝに飛びかふさまは、これこそ春の靈とも魂とも云ふべきものなりけれ。
げにその姿、げにその態、少女が戀を託するに相應しけれ。昔よりの定めとして、相思の人花かげに立つ時は、二つの胡蝶人のめぐりに飛び。戀の固めの三々九度には、雌蝶雄蝶の酌いでゝ、銚子にとまる紙の鳳蝶。

蝶は異性の媒介を爲すかと思へば、

うつるてふ迷ひやなほも深からん。
花をわくるとおもひなすとも(成章)

と歌はれて、人生の無果敢きにたとへらる。
記事は了りに近きたり。油菜に就て左に補筆せんとすること二三あり、乃ち油菜を煮るには一回茹でて水を替へざるべからず、然らざれば味旨からず。
カラシナ、ハボタン、ワサビ等アブラナに似たり油菜、大根の如き花を有するものは皆十字花植物たることを知るべし。
ダイコンには最も太き宮重あり、細長き守口あり澤庵漬とするには練馬大根最も可。
普通ダイコンに莖と稱する部分は葉にして、その根と云ふ處は莖(地中莖と云ふ)なり。

(完)

露西亞のいろ〳〵

こしのゆき

日露戰爭開始せられしより雨後の筍のやう、戰爭の雜誌は引きも切らず數多く生れ出で、かくて雜誌にまでも武裝せしむるとは、戰の最中とはいへまことに物新らしき現象にこそ、兎まれ内容の記事、いづれのを見ても、徹頭徹尾戰爭の話ならざるはなき今日此頃、吾等も少しは露西亞のことに就きて、讀み、又聞きし事もあれば、いでやそのいろ〳〵をそこはかとなく書い付けんかな。

露國婦人と喫煙

先づ婦人より語らんに、露國婦人の喫煙につきては面白き話あり、昨年佛國の文士ドラージュ氏は汽車に乘りて露國へと旅立ちせしが、同室に露國士官と其の妻も乘り居たり、さるに文士は長途の旅情わはれにしかも、喫煙慾に驅られたれど、紳士として、婦人の面前に煙草を燻ゆらすは無禮なりと思ひ、虫を押へて暫く辛抱したれども堪へられず、まゝよと、つひにポッケットよりパピロス(露國卷煙草の名)を取出し、つと起立しながら、士官とその夫人に挨拶して『マダム、パルドン、ラフメー?』(奥樣どうぞ喫煙をおゆるし下さい」と云ふ、でも付きの奥樣は愛嬌を湛へて微笑を漏らしつゝ、文士が鄭寧なる心得を謝したるものゝ如く『ジユ、ヴ、ザンプリー、ジユヴ、ザンプリー』(どうぞ〳〵御遠慮なく)と答ふ、よつて文士は奥樣の許可を得て安堵の思をなし、早速喫煙しはじめたるに、訝かしや、士官夫婦の座せし片隅よりも同じ烟の螺形を作りて、文士のそれに立交るを見たり、打ち見やれば、こはそもいかに、士官夫人の喫煙するならんとは!!!

文士の驚き魂消ゆるばかり、必然こは夫人にはあらで、歌妓などのたぐひならめと心中竊に想ひき、然るに座中氣の利きたる露國人あり、文士のいたく喫驚せる樣を見て、それと悟り、得たりけん、『あなたはお驚きなすつてお出でなさる御樣子ですが、私

共の國では婦人方は皆んな喫煙いたします。』
文士は婦人皆喫煙すと聞き、またしても驚きいやましぬ、されど〳〵曩に『露國婦人は皆佛蘭西語を話します』と云ひしことを耳にしたるに思ひ合せ、こはこれ「皆」とは皆の皆にてはあらざるべしと、獨り領きしも、たゞ婦人喫煙の理由は甚だ合點ゆかず、沈思默考すれども理解されず、腦中種々の理窟を構成しておもうやう、
露國婦人は閑居やるせなく、無聊に苦しめるより煙草を燻ゆらすならん、見るに手仕事など爲て日を送る計稀なり、遊ぶ手には卷煙草にても預けねば手持無沙汰にて堪へられざるが故やあらんか、或は心の底よりして、煙草を嗜むためか、はた年來の習癖今に至りて改めがたきためなるか。
文士は我れと我が心に解決し難く、腦中亂れて絲のもつれのそれの如く、想像に想像を重ねつゝありしが、その心もとなき有樣の他人に推されけん、座中の露人もまた解釋を下して、
此の奥樣方の喫煙せらるゝは、良人の西伯利亞のはて、又は遠き浦鹽などに遠征に赴かるれば、優美なる女性の心にも、雄々しき志を奮起せんがため、煙草を燻ゆらして、男兒的氣象を起さんとせらるゝなるべし。
文士は之を聞きて如何なる感情を起せしか、知らず、またわれ姑くこを言はず、されどわれらこを聞きてげに呆然たり、婦人の喫煙にして遠征を理由とし、はた義勇を理由とするは、まこと珍妙なることなり、されども良人の留守に空閨を守るの苦さを忍ぶ意に解釋せば、常識哲學とこそなるべけれ。(未完)

河原操子女史の書簡

左の書簡は、昨年末蒙古喀喇沁王府より、敎育主任として招聘せられたる河原操子女史が、同地より、華族女學校敎授兼幹事淺岡氏に送られたるも

のなるが、今川氏に乞ひて之を誌上に掲上することゝなしぬ、讀者をして蒙古教育の現況及人情の一端を知らしむるを得べきか。

謹で新年の御祝詞申上候、當年中は一方ならぬ御厚情を蒙り實に有難く厚く御禮申上候なほ相變らず御願申上候十二月十四日附の御手紙、今廿日着仕りまことにうれしう繰りかへし拜見仕り候處先生御始め、皆々樣には、何の御障もなう、御暮し遊ばされ候御樣子、まことに〳〵御うれしう存じ奉り候次に私事御かげ樣にて、着後益々健かに、且つ早速女學堂の規則を編纂致し、王幷に福晉(妃殿下の事に御座候)に御すゝめ申上げ、後宮の年少女子幷に王府附近在住官吏の女兒を集め、(現今二十四名御座候)早速女學堂を開き(舊曆十一月十日即ち十二月廿八日に盛大なる開堂式を擧げ申候)其後日々非常に樂しく過し居り候まゝ、何卒御心安う思召下されㄒ候。

學生等は初めて教育を受けしものにて、皆非常の熱心、殆ど夢中の有樣にて日々つとめ居り申候、私は蒙古語に通じ申さず候間、教授は困難ならむと、かねて心配致し居り候ひしが、幸にも當王府の太福晉(御年配六十二三)幷に福晉(同三十三四)は北京の御方にて、後宮に居られ候故、字は一字も見え申さず候へども、言葉はよく相分り申候、よりて第一に日本語を敎へ、次に私事北京語に譯し、福晉及北京の後宮兒に奉仕せし婦人をして是を蒙古語に譯さしめ申候、まだるき樣には御座候得共、案外工合よろしく候、此頃にては學生等「先生さよなら」など申候又私が我的筆と申候へば生徒は蒙古語にて「ミニービール」と申候、又私「テルチーイエンタイ」といへば生徒は「他的硯台」と申私「儞的紙」といへば生徒は「チニーチャース」と申候。王及び福晉は非常の御よろこびにて、日々御見えに相成り、生徒と共に御稽古遊ばされ、習字の時間などには、福晉が御手傳下され御めし物に墨などつき候折には、先生私は着物に習字を致せしなど、御戯

れに相成候まゝ、それはさぞ御上手に御なり遊ばしませうと申上げ大笑ひを致すことも御座候、太福晋も始終御見えに相成、我も生徒と共に勉强致し度ものよなど仰せられ候、當王府を始めとして、附近の者皆〇〇〇〇〇〇〇〇〇外國人視して、非常に嫌ひ申候、日本のことは一より十迄皆よしとして、王始め一方ならずよろこばれ申候、王、福晋共に非常に聰明の御方に御座候生徒の中に王の令妹が居られ候、今年十七歳になられ候よし、此御方の腦の御よろしきには實に驚くほどに御座候、日本の學校にて二三年も勉强遊ばされなば、如何に御立派になられ候はむと存候へども、すでに蒙古部内の或王に歸がれ候約束あるよし、先方にては直ぐにもといはるゝよしに候らへども、當王のかゝる無教育の者、いかで直に遣し得べき、二三年教育してと申され候て暫くの〻居候よし、此御方の教育につきては、王より呉々も御依頼をうけ申候、まことに柔順の方にて私を母の如くに思はれ、些々たる事までも、申通りにせられ候令妹が此の如くに御座候ゆゑ、他の生徒はこれを見ならひ、非常によろしく候、生徒中に賢き者も御座候へども、此方は不思議なるほどぬきむで居られ申候、二三年の後には喀喇沁部の他に日本好の部落が出來候ことゝ存樂みに致し御教申居候（中略）此度は先生に御心配いたゞき、有難き御言葉たまはり、まことにうれしう存候、日本婦人の代表者として踏み出し居候ことゆゑ些少のことにても、よくよく注意致してと、それのみは一昨年來、片時も忘れ候こと御座なく候へども、猶今後は一層の注意を加へ申すべく候、すでに先生の御承知たまはり候通り、私はたとひ全世界の人擧つての尊敬をうけ、はた賞賛を得候ともそれがため己れは「えらき」者よなどゝの考を起し候やうなる卑き、かつ狹き心は持ち申さず候、かつは生來の無口にて、時には自分ながらつらしと存候ことも御座候へども、その代りには生れて、今日まで口數を過してと、出過ぎてと

にて、失敗致せしことは一度も御座なく候、下田先生にも私の爲めよかれと思召給ひて、色々御心配遊ばし下され候まゝ、まことにうれしう存居申候何卒先生より、たとひ如何なる事の御耳に入り候とも、總ての點につき、御安心下さるゝやう宜敷御傳へのほど、伏て願上奉り候、皆々樣わけて御母堂樣に吳々も御よろしう願ひ申上候、今年の末頃には一寸歸朝仕り、御目もじの上にて、種々聞え承り度と樂み居申候、時節柄吳々も御自愛遊ばし給はるやう祈り上候、まづは右聞え上げ度此の如くに御座候。

一月二十日　　河原操子

淺岡先生

御侍史

四月頃に妃殿下と御一緒に撮影致して、御送り申上べく候間、和歌子樣に左樣御傳へおきいたゞき度候、

一笑一萬圓

（世界一の唱歌師パテ婦人の唱歌を批評す）

北米　澁谷馬頭

一笑一萬圓とは、當地のタイムス新聞が、アデリナパテ婦人の唱歌會の批評を書きました其見出しで御座います、パテ婦人は此度米國漫遊の途次、此のシヤトルに立寄りまして、一月二十一日夜グランド、オペラ座に於ける唱歌會に出席致しました。

パテ婦人の經歷

◎此前の通信にも一寸申上ましたと思ひますが、婦人の父は伊太利人、母は西班牙人で婦人は一八四三年の二月にマドリッド府に生れましたから、今年とつて六十歲と一つになります老婆さんで御座ます、

◎生れました翌年に、米國に移住しました七つの歲から、はや劇場に出て歌ひました程の天才で御座います、セダストロム男爵に嫁してから、英國の片田

舍ウエルスに居住して、榮花を極めて居ます、其邸は廣大なる一城廓で、クレジー、ノスと號けてあります。

唱歌會當夜の摸様

◎二十一日午後八時に開會で、入場券は七時から賣りますと云ふので、私は正直に七時を期して、オペラ座の前に行きましたが、まだ集つて來た人は、百人ばかりしか居ませんでした。

◎だんだん集りまして、八時過ぎて開會してからも續々と入つて來まして、遂にはさすがの劇場も一ぱいになりました。

◎出席の音樂師はパテ婦人の他に、男二人、女二人都合五人でありましたが、一人奏し終る毎に聽衆拍手喝采に續いて靴で床板をふみ鳴らすので、甚だ亂雜の至りと感じました。

◎聽衆の中に一婦人、中腰になつてパテ婦人の歌ふ身ぶりを見つめて居ました、時に其うしろに居る一婦人が、「私共見えませんから、あなたお座りなさい」と云つたら、前の婦人『今少し高い所へ御おがりなさい」と爭ひましたのが面白う御座いました、歌ふ人の身ぶりが見えませんでは、感じが薄うございます。

當夜のプログラム

◎第一部。ザメル孃のヴイオリン獨奏（デルージの一節及び蜂の歌）カンニンガム氏の獨唱（エリ、チユ）マルガリ孃のピヤノ獨奏（ラプソヂー、オンゴロア第十二番を奏する筈の所第二番に取かへました）ヴイルゴ氏の獨唱（シエバの女王の一節）パテ婦人の獨唱（モザールトのル、ノズ、ヂ、フイガロの一節）

◎第二部。ヴイルゴ氏の獨唱（エスメラルダ）ザメル孃のヴアイオリン獨奏（フアンテジ、フアウスト）カンニンガム氏の獨唱（タンハウゼル）パテ婦人の獨唱（フアウストの寶玉）

◎但し此ほか各員おまけぶんに二曲以上を奏しました、パテ婦人は前後六回歌ひました、一回五分間宛にして、都合三十分間歌ひました。

◎パテ婦人は第二部には、寶玉の歌の次に、ホームスヰートホーム最後にカミン、スロー、ザ、ライと云ふ蘇格蘭の歌をうたひました。

パテ婦人の風采

◎此老唱歌師が、滿場の熱心なる拍手歡迎の間に舞臺に現はれました、其風采は、どんな風で御座いましたか、伴奏のピヤニストなる某氏に手を托して威勢よく舞臺の中央に進み、聽衆に一揖して立ちました、長くうしろに曳いた水色の服のひまなく、ダイヤモンドを裝うてきらめきわたりまする有様は、晴れたる夜に星の光の輝きわふに似たと申したいので御座います、とても六十一歳の老婆さんとは見られません、況んや其赤く榮えた頬のあたりに、笑くぼを湛へて、髮には薔薇の花のあざや



今日のアデリナパテ夫人

かな簪をいたしましたやうすは、まだ三十歳になるかならぬかと疑はれます、其歌ふ聲を聞くに及びましては、更に二十の上をいくらも越してないやうに驚かれますのが、不思議でございます、最後のカミン、スロー、ザ、ライの歌を歌ひました時などには聽衆をしてそゞろに蘇國の少女を髣髴として眼前に映せしめました。

唱歌の批評

◎世界一と聞えたパテ婦人の唱歌を、未だド、レミファもよく心得ぬ私が、大膽にも批評して見やうとは、決して企てませせぬ。

◎そこで私は自身の批評に代へるに、當地の二大新聞記者の批評を以てします、それが精確に聞き取るべき批評か、どうかは別問題として、兎に角白人の批評と云へば私の批評よりも安心して受け取られませう。

◎ピーアイ記者曰く、パテ婦人の唱歌を聞いて、坐ろに今昔の感をする今は只其おもかげのみを止めたばかりである、おぢいさんや、お婆さん株の人は、パテの盛時を思ひつゞけて、今も尚ほ賞揚するけれども、若い人たちには價の高い古道具を見るやうな心地がした。

◎曰く其中に、寶玉の歌は最もよく歌はれたのであらう、其嬉しがつた身ぶりが、うまくやられた、其他は奇麗に歌つたが用心しすぎた。

◎曰く最後のスコットランド歌に就いては、腹を抱いて笑ふ所の嬌態など、隨分目に止まつた、若もこれが二十年、三十年、四十年前にパテ婦人が少女であつた時にやつた事なら、たしかに非常の人氣を引いた事であつたらう。

◎タイムス記者曰く、パテ婦人其昔に比べては、聲の範圍が縮まつて、最高の調子には達しなかつたが併し尚ほ天才と評すべき價値がある、彼女は半ダースンの歌曲を歌つたが、いづれも愉快な調子であつた、高いノートに於ては、歳のおかげで悔やしかつたけれども、低音に於ては其熱心と、其聲の色と、

此般の奇態な事とは、確かに稀に見る所のドラマ的の技術である。

附記

此の最後の一曲「カミン、スローザ、ライ」は蘇格蘭の訛で此地方の俗語を交へた者で御座います、之を附記致します。

Comin' Thro' The Rye.

5 | 5· 5 5 3· | 2· 1 2 3·

Gin a bo-dy meet a bo-dy

5· 5· 6· 5 | 1 0 5 | 5 5 5 3· |

Comin' thro' the Rye, Gin a bo-dy.

2· 1 2 3· | 5 5· 6· 5 1 0

Kiss a bo-dy need a bo-dy cry?

5·3 1·3 | 2·1 2 3· | 5·3 12 345 | 6· 6 |

Il ka las-sie has her laddie, nane the say ha'e I, Yet

5·3 4·2 | 3·1 2·3 | 5·5 6·5 | 1 0 1 |

a' the lads they smile at me when Comin' thro' the Rye.





小説

隣同士

米光關月

（一）

小石川は大塚附近………、或大名華族の大きな屋敷の裏手に、此頃出來た新築の貸屋が二軒ある。孰れも同じ作りの、一寸小さな洒落た門もあつて、至極氣の利いた住居であるが、何分にも四邊が草茫々と來て居る上、夜分などは小買物の用を足すさへ、聊か薄氣味惡い屋敷裏の森のざわ〳〵つき、女中などは先づ一番に小首を捻る塲所である。

其一軒の家に、此頃引越して來た遠山曲江と云ふ人物がある。職業は畫師ださうで、尠しは雜誌新聞などでも名を賣つて居るらしい、年齢は三十前後の、恐ろしく太つた、丈の低い、近眼の先生であるが、それの妻君と云ふのは、又この先生とは頗る反對な、丈の高い、それは〳〵非常に高い、骨節の太い、眼の大

きな、なんと無く負けぬ氣の眉宇の間に顯れてる女で、某女學校を卒業したとかの噂もあり、左に右平凡の女で無い事は其口吻にも知れるのだ。

一家はこの夫婦の外に、四十斗りの雇女が一人、道具の餘り無い處は新世帶らしくも見え、時折怪し氣なヴワイオリンの音の響く事もあるが、晝夜とも至ッて寂然で、先づは見掛けた處苦勞は無さゝうな生活向。

六疊の南向の座敷は、今掃除の濟んだ處と見え、障子を左右にさらりと開いて、椽端には座蒲團が四五枚下してある。空は紙鳶のうなり、いゝ、遠くで響く獅子の太鼓、耳や目はなんと無く春らしいのであるが、隣りは空屋、前は空地、後は森を控へたこの淋しい住居の、なんとなく離れ小島で春でも迎へる樣な心地。丈高い妻君は、この椽端で日向に脊を向け乍ら新聞を讀んで居たが、耐り兼ねたと云ふ状で欠伸を爲乍ら、勝手を働いて居た雇女を呼んだのである。

呼ばれて得たりと、返辭より先に勝手を飛出して來た雇女は、頗る附衛生的の美人で、

「御退屈で厶いましよう。」

重たげな尻をどしりと据へて、變に御世辭笑ひをするのである。妻君はさも辛氣さうに、

「アヽ、なんだかね、島流しにでも逢つた樣な心地で、今年位つまら無い御正月はありやア爲無いよ。」

「御尤もで厶います。」

「餅でもお燒きな、お茶でも入れて話さうぢやア無いかね。」

「結構で厶いますね。ヲホヽ、これでもお正月は猶且お正月で、お餅が厶いますから御賑やかですよ。」

「意地の汚い事をお言ひだね、お前なんかはそれだから氣樂だわ。」

婦女は笑ひ乍ら、これには答もせんで、尻重の躰躯をこまめに動し、軈て火鉢の上では香ばしい匂がするのであつた。而して巧に網の上の餅を返し〳〵て居た婦女は、思出した樣に顔を上げて、
「旦那樣はなんだつて又、這麼淋しい處へ御越しなすつたもので厶いますかね。氣樂な事は申て居ります樣なもの丶、夜分などの御使ひは、全く可厭になつて終ひますよ。」
一然うだらうともね、私は那樣事には無頓着だから、臆病風も引無いけれどね、全く淋しいには閉口してよ。」
「せめて御隣家へでも御引越しになる方がありますとね、御話にいらつしやる處も出來て可うございますが…………。」
妻君は我意を得たりと云ふ樣で、一ッ大きく首肯いたが、
「其事さ、私もせめてね、御隣家へでも御引越しになる方があると可いのだけれど、これぢやア閑靜も餘りだわね。」
「しかし旦那樣は、這麼處が御氣に召してるので厶いましよう。」
「それはね、那麼職業をなすつていらッ志やるから、閑靜な處が可いと有仰つて、まあ、この宅も御自分で御見當なすつたのだがね、私だつて、何も賑やかな處を好くと云ふのでも無いから、可う厶いましようつて、つい引越す事になつたのだけれど幾らお前閑靜だッてね、眞逆這麼に淋しからうとは思は無つたわ」
「へー、ぢやア奥樣も御閑な處が御好きなので被在いますか。」
「ア丶、賑やかな方はね、何方かと云へば嫌いなの、それかと云つてね、這麼淋しい處では、幾らなんだつても退屈しようでは無いかね。」

「御尤もで厶います。」
妻君は澄切つた空を見上げて、熟と紙鳶のうなりに耳を傾けて居た様子であつたが、
「お隣家の空いてるのも随分久しいね。」
雇女は、この不意の辭に一寸妻君の顔を見上げて、
「貴方、此方は御引越になつて、一イニウ恰度三月越しの間ですもの、随分永く空いて居りますわ。」
「猶且不便利であつたり、淋しいものだから、それで借り手が無いと見えるね。」
「左様で厶いましようよ。」
「で無けりやア、家は新しいし、直ぐと借り手が無ければならぬ筈だがね。」
「何うしても、旦那方のやうな御職業をなさる方で無ければね、一寸向が悪いと見えます。」
「然うね、毛色の變つた人で無けりやア、一寸住れ無い處だね。」
「アレ、然う有仰いますと、何うやら旦那様が、毛色の變つた御方の様に思れます。」
「思れるも無いものだね、全く變つて居るに違い無いさ。」
「ヲホヽ、酷い事を有仰いますね。」
二人は不思顔を見合して笑つて居ると、この淋しい場所へ珍らしい車の響、聽て其響が門前でハタと止つた。

(三)

むつくり肥へた主は、羽織袴の禮服着用の儘、べつたり椽端に座つて居ると、丈高い妻君は突立つた儘、其狀を瞰下して、むづかしさうに眉を顰めて居るのである。
「貴方、何うなさいましたのです。」

「フム、酔つたのさ、慥に酔つたよ。」
と、主人は如何にも性體は無い。
「アレ、那樣座り狀をなさいましては、袴が台無しになりますよ。」
「イヤ、然うがみ／＼云ひなさんな、歸舘早々、一々劍突を吃されてはうんざりする。」
「だつて貴方、後で甚麽に私が困るか知れませんわ。」
「まあ、然う云ひなさんな、今日は七草と云ふ祝ひ日だ、可しか、ね、正月の七草と云ふ祝ひ日だ、何も酔つてさ、袴の一ッや二ッ台無しにした處で、格別驚く程の事も無いでは無いか。」
「何時も貴方は然うですよ。酔つた時には、氣の大きな事斗り有仰いますが、醒めると直ぐに、衣服のしみなどを八釜敷有仰つて、私斗り御呵めなさいます。」
「これは怪しからむね、何時私が那樣難題を云ひ掛けたね。」
「もう宜しうムいますから、さあ、御袴を御脫んなさいまし。」
「處が脫き度いは山々だがな、何うも自分の宅へ戻つたと云ふ氣のゆるみの出たものか、酒の酔ひが一時に發して、殘念乍ら腰が上ら無い。」
「まあ、なんと云ふ意氣地の無い事でムいますかね。」
妻君は眉を顰め乍ら、漸くの事でこの難物の禮服を脫つて終ふと、大島紬の書生羽織を後から着せ掛けて、
「全體那樣に御酔ひなすつて、何處で召上つたのでムいます。」
「ハ、ア、私の今日飲んだ處かね。」
「左樣でムいます。」

「珍らしい處さ。」と、主人は大得意。

「珍らしい處ッて、又惡い方角へいらしッたのでは厶いませんか。」

「處が然うで無いのさ、決してもう那樣下劣な事は致しませんよ。」

「ぢやア何處で召上つたのです。」

「實はな、今日神田のそれ、太田の處へ出掛けて行くとな、思ひきや、珍らしい人に出會したのさ。」

「まあ、茶かさずに默つて聞きな、其珍らしい人と云ふのが、お前も知つてるだらう、京都の新聞に行つて居た、五十嵐雄山さ。」

「ヲヤ、大層珍らしいづくしで厶いますね。」

「ヲヤ、それは珍らしい方で厶いましたね。」

「ソレ、御覧、珍らしい人間だらう。其處で久振逢つたと云ふ一件で、太田と三人、大に飲んだと云ふ次第さ。」

「それは御結構で厶いましたね。」

「ウン、結構さ、其上私の這麼に大醉したと云ふのは、實はも一ツ結構な事があるでな。それは、あの變屈であつた五十嵐が、今度妻を迎へる事になつてな、それと同道に上京したと云ふ一件、かた〳〵目出度いと云ふ一件で、祝盃を擧げたと云ふ一件…… ……。」

「まあ、あの方が………、可くそれでもね、お早く奥樣を御迎へなさいましたです。」

「ウン、其一件さ、私も至極其一件を喜んだのさ、元來あの男はな、お前も知つてる通り詩人肌な男で、妙にその變屈な處があつたが、其變屈な詩人肌な處が、案外早く妻君を迎へる樣にさしたのだから、いよ

いよ妙さ。」
妻君は夫の機嫌よく舌を動かす顔を見て、一寸眼にさかしい光りを見せたが、
「而して、甚麽處から奥さんをお貰ひなすつたので厶いますね。」
「イヤ、それが實に奇さ、妙さ、何うしてもあの男の詩人的たる處で、不圖した縁で妻にしたのださうだがね、なんでも妻君の出生は、丹波の國の何郡とか云ふ山奥ださうでな、或夏避暑に出掛けた際、止むを得ん塲合から妻にする事としたのださうで、何うもその、何處迄もあの男は詩人肌だよ。」
「へー、ではなんで厶いますか、そんな山の奥から御貰ひなすつたので厶いますか、あの方は何うしても物好きで被在いますね。」
「ウム、隨分と物好きだね。而してな、今度は東京に足を停めるとか云つて居たからね、隣家の貸家の事を話すとな、それは願つたり叶つたりと云ふ一件さ。」
「ヲヤ〳〵、それでは五十嵐さんは、御隣家へ御越しになるので厶いますか。」
「然うさ、五十嵐の話ではな、妻君も山出しではあるし、旁々、君の妻君の御指導を仰げば、萬事好都合だからと云ふ一件さ、何分とも其隣家の借家を、手に入れてくれろと云ふくれ〴〵も依賴なのだ。」
「まあ、それは何よりで厶いますね。五十嵐さんよりも私の話對手が出來て、甚麽に賑やかになるか知れませんよ。」
「然うだ、お前の豫々氣にして居た、隣家の空家もいよ〳〵人の入る時節が來たのだね。」
「私、然うなつたら、まあ甚麽に可うございましよう、屹度五十嵐さんの奥樣の御力になつて、御世話致しますで厶いますよ。」

「何しろ、先方は山の奥から出て來たと云ふのだからね、萬事お前が何かと親切に爲無けりやア可んな。」
「もう私其話を聞いた斗りで、甚麼に氣が引立つて參つたか知れません、屹度親切に致しますわ。」
「イヤ、永々お前からこの借家の攻撃を吃つたつけかな、恁うなりやアお前だつて、玆處が萬更惡くも無いだらう。」
「ハイ、それはもう御隣家さへ出來ますればね、私だつて、何も不服は厶いませんです。」
妻君は俄に眉を開いて、いそ／＼勝手の方を振向き、
「銀や、お聞きかへ、御隣家へね、御引越しになる方があるのだとさ。」
例の豪傑肌の雇女は、此時敷居越しに顔を出して、
「左樣な御話で厶いますね、何より御結構です。」
醉つて大の字成りになつた主人は、寢乍ら床柱を足蹴にして、
「其處で何うだね、前祝ひの一杯と云ふのは。」
「ヲヤ、未だ召上るので厶いますか。」
妻君に續いて、雇女も口を出し、
「那樣に御醉ひ遊して、可く召上り度くなりますね。」
たつた今迄淋しかつた此家は、なんとなく世間一樣の、七草らしう賑しくなつた、屢々笑聲が戸外に漏れるのであつた。而して妻君はなんとしたのか、或一種の誇りの色が、隱せず面に顯れたのである。

（三）

正月は夢の樣に經つて終つて、日和續きを喜んで居た返報が俄に起り、連日の降る、吹く、寒さは增々烈

しくなると云ふ仕末で、有繋の全都も、玆處に始めて冬枯の光景となつたのである。されば小石川も、餘程邊僻になつて居る大塚奥、殊に其二軒借屋の邊りは、全然山家の狀のやう、獨り勇しいのはどつと鳴る裏手の森のざわつきで、夜は犬の遠吠さへせぬやうになつた。

今日も亦朝から怪しかつた空合が、晝前頃からいよ〳〵霙交りの大降りとなつて、晩方からは風さへ吹出し、雨戸は一樣に悲鳴を上げてがたつく、震へる、而して堪へ難い寒氣は其隙間から容謝無く座敷へ侵入するのである。

遠山の宅では、早くから戸を差籠めて、主人は六疊の座敷に大火鉢を前に控へ乍ら、お膳に並んだ三品四品の皿を眺めて、陶然となつて居る向ふに、例の丈高い妻君は、何か不平らしい顏附で、其前に茫然と座つて居る。

「馬鹿に寒いな。」と、主は猪口を持ち乍ら一ツ胴顫ひをして、

「これぢやア、幾ら酒の力でも、全く遣り切れ無いね。ヲイお絹、何か肩から掛けてくれ。」

「ハイ……。」と妻君は、依然茫然した顏附で、重々しい辭附、

「ヲイ、冗談ぢやア無いよ。早く爲てくれ。」

と主は增々胴顫ひをやる。

「貴方それだつて、御酒を召上つていらしッて、那樣に御寒いので厶いますかね。」

「ヲヤ、理屈かな……。まあ那樣事は何うでも可いわ、早く出してくれないぢやア、ぞく〳〵寒くて堪ら無いよ。」

「私は又、御酒さへ召上つていらしッたら、御寒くは無いだらうと思つて居りました。」

「可んなア、未だ那樣事を云つて腰を上げ無いのかへ、ぐず／＼言はずと早く出してくれ。」
「腰を上げ無いのではありません、出せなら、夜着でも蒲團でも出しますが、いつそ那樣に御寒う座いますなら、御寢みなすつた方が宜しいでは御座いませんか。」
「ホイ、又理屈かな一々理屈附きの御返辭には驚いたね、御寢みなさいと云つた處で、お前今猪口を手にした斗りでは無いか。」
「可い加減な事を有仰いまし、貴方もうそれで二本目の御銚子で座いますよ。」
「イヤ、然うだつたかな。」と、主は一寸額に手を加へて苦笑ひ。」
「だからもう御廢しなすつて、御寢みなすつた方が宜しいでしよう。」
慥うなると主は又、唯下手から斗り出ては居無いで、なんとなく辭も尠し眞面目になつて來る。
「イヤ、寢むまいよ、未だ／＼飲むよ。お前はなんぞと云ふと、近來私の言ふ事を用ひ無いが、全體何うしたと云ふ了簡だ。」
「まあ、なんと有仰います。」
「イヤ、私の命令に服從爲無いならば爲無いで可いよ。私には又私で別の考へがある。」
「何も貴方、服從爲無いと申すのではありませんわ、唯御躰軀の爲めを思つて、這麼事も申上るので座います」。
「それが畢竟生意氣と云ふものだ。尠し隣家の妻君の遣る事を手本に爲なよ。」
妻君の面は、見る／＼此時變つたのである。
「何うせ私はね、御隣家の奥樣のやうには參りませんです。」

「なんだと……。」と、主の聲も稍癇高になつた。
「イエ、お隣りの奥樣の樣に、山の中の生れで座いませんからね、ついがさつになつて仕樣がありません」
「フム、それがもうその、口答へと云ふものだ。私は何が嫌ひと云つて、この女の口答へをする程可厭なものは無いよ。」
「まあ、何時私が口答へを致しまして……………、餘りでは座いませんか。」
「何、それが即ち口答へと云ふものだ。お前可く隣家の妻君の事を、山家者〳〵と云つて輕蔑して居る樣だが、山家者だつてあれ丈け出來て居りやア結構さ。五十嵐は眞に仕合せな妻君を持つたよ。口答へ一ツするでは無し、何うがなして慰めよう、足らわぬ乍ら氣は配つて居ようと云ふ處が、他人の私達の目にさへ可く釋るでは無いか、女は口や手は無くともさ、あの柔順な處さへありやア澤山だ。」
「貴方は大層、御隣りの奥樣を御賞めなさいますが五十嵐さんだつて貴方の樣ぢやアありません。御酒を召上るぢやア無し、奥さんをお呵めなさるぢやア無し、あれでは如何な奥さんだつて、默つて被在る筈です。」
「フム、するとなんだな、私が五十嵐の樣で無いから、お前もあの妻君の樣に柔順にせんと云ふのだな。」
「…………然うではありません。」
「イヤ、無い事があるものか、其辭が既に其意ある證據ぢや實になんとも早や云ひ樣の無い魂性を持つて居るな」。
五十嵐が隣家へ越して來た當時は何うであつた。一番に喜んだのはお前で、互ひに深切を盡さうと云つて居たのが、いよ〳〵引越して居附いて見ると、直ぐに婦人通性の、僻見斗り出して來たのは、ありやア全

體裁だつたらうな。皆お前ぢやア無つたか。私が一寸隣りの家庭の狀を賞めれば、直ぐとお前はそれを打消す。而して果ては、五十嵐夫婦が野合であるから、早晩必ず衝突が起るだらうと、前途を見る樣な事を云つて居たが、何うだへ、もう二タ月近くなるが、ついぞ紛擾の起つた事が無いでは無いか。それと云ふが、あの柔順な、妻君のある爲めだ。私はお前に餘計な事は賴まん、唯あの柔順な處丈けは何うか眞似てくれ。

お前は眞逆に這麼でも無つたが、隣家に五十嵐が越して來てからと云ふものは、なんと無く修羅斗り燃してるやうだな。それが不可んのだ、それが大きに宜しく無いね。あの妻君は何も東京馴れ無い、高が山家の人間ぢやア無いか、お前は齡も上だし、大に盡さ無ければならむ理じや、それを逆に、私が賞めるからと云つて、可厭に隣家の妻君に反抗する處も無らう、だから從つて私の云ふ事も、つい〳〵口答へをする樣になつて來るのだ。」

妻君はなんと思つたか、口を衝いて出る悲痛の聲と共に、がばと其處へ伏して終つた。夫はぢろり其狀を見た儘平然と、

「お前泣いてるな、泣きなさい〳〵、其淚もお前のは皆僻見から出る淚なのだ。」

「何うせ然うですよ。」と銳く云つたが、妻君は此時ット顏を上げて、

「貴方、然う迄有仰いますなら、尠し聞いて頂く事が厶います。」

「なんの用だへ。」と主は何處迄も險しい顏附、

「外でも厶いませんが、何うか茲處を引越す理には參りませんでしょうか。」

「何、引越す…………、さては何んだな、隣家の連中が氣に入ら無いのだな。」

「イエ、然うぢやアムいません、よく／＼考へて見ますると、御隣家へ五十嵐さんが御越しなすつてからと云ふものは、いつも貴方に御隣家を例に引れて、もう／＼大體な辛棒ではムいませんから、私共一家の幸福の爲め、何うか轉居なすつて下さいまし。」

「イヤ、いよ／＼お前本音を吹くな。轉居した處で、お前の精神から直さんけりやア、所詮何處に行つたからと云つて、お隣家へ對する僻見は無くなりは爲無いよ。」

「イヽエ、それはもう、五十嵐さん御一家でさへムいませんなら、甚麽方だつて、屹度立派に御交際ひ申して見せます。」

「馬鹿な事を云ひなさい。それ程ならばお前の魂性を直して、隣家と引越し當時の樣に交際ふが可い。私は引越すよりも、お前の僻見根性の直るのを靜に待うよ。」

（四）

何時止むとも計り難かつた嚴寒も、三月上旬の頃となつては、もう忘れた樣になつて終つて、耳障りにして居た森のざわつきも、それも昨今では鶯の床しい宿となつて、大塚奥の二軒借家も、春の日影のうら／＼とした柔かな光りに終日包れる樣になつたのである。

併し遠山の隣家に引越して來た五十嵐は、何かの都合上、この借宅を引拂つて、二月の末方、本郷臺のさる處へ引越す事となつた。理由と云つては格別無つたが、五十嵐の後での話によれば、何分妻が居づらがつて……との事で、遠山も畧其旨を了解して居た。而して力を落して淋しがつたものは、獨居女の銀であつたが、不思議は其引越のいよ／＼あつてから、次第／＼に遠山の妻君が、わざ／＼本郷臺迄も五十嵐の宅を訊ねる樣になつた一事である。しかし近來は又隔日の樣に、五十嵐の宅を訊ねて行く。

日當りの可い六疊の座敷で、頻りと繪筆を舐めて居た遠山は大略圖取りの出來たものか、からり筆を投ずると、莞爾獨笑を續け乍ら、靜に卷烟草の烟を吹いて、我勞苦の跡の圖取りを、一心に見詰めて居たのであつたが、軈て不圖思出した樣に、机の上の呼鈴を鳴らすのであつた。

呼鈴の音の未だ消へぬ中、座敷へ這入つて來たのは雇女のお銀で、

「お呼びなさいましたですか。」

「ウン、茶を一ッ入れてくれ。」

畏つてお銀は次の間へ引退ると、間も無く直ぐに茶を入れて持つて來る。

「大層今日は、御精を御出しで厶いますね。」

「ハヽア、氣に向いたから大勉强で精を出した。」

「御晝飯を召上りまして、御休みなしで厶いますね。」

「然う……と云つて遠山は床の間の置時計を見たが、「もう三時半か、隨分續けたな。時にお絹は未だ還ら無い樣だね。」

「此節は五十嵐さんへ御越しになりますと、屹度お遲う厶います。」

「ハヽヽ、又何かと世話を燒いてるのだらう。」

「不思議で厶いますね、五十嵐さんが御隣りへ御引越しになりました當時は、大層御喜びなすつた奥樣が間も無く妙に袖になさいます御樣子で厶いましたが、それで又いよ〳〵御隣家で御明けになると、あゝして、毎日の樣に御越しになるので厶います。」

「何、別段不思議な事は無いさ。」と主は微笑を續け乍ら「女と云ふものは兎角あんなものさ。」

「イエ、それが貴方、五十嵐さんの御隣家を御明けになる前に、張物板さへ、御貸しなさいません程、むつゝりしてお在なさいましたのですからね、餘つ程妙ぢやァ厶いませんか。」

「近く居りやァ僻見が起る、離れて居りやァ可懐しくなる、而して遠くなりやァ忘れて終ふのが人情の常だが、女は別してそれが酷い様だね。」

「併し奥様のは又別で被在いますよ。あゝして見ると、全く五十嵐の奥様を、心から袖になさる御了簡は無つたので厶いますね。」

「勿論さ、何も敵同士の末ではあるまいし、唯隣同士になつたと云ふのが、女丈けに衝突を起す、早い材になつたのだ。」

「御尤もで厶いますね。」

「それで絹の了簡方は、畢竟何時迄も姉さん氣取りが出來さへすりやァそれで可いので、罪も報ひも無い話さ。」

「然う御仰いますれば、五十嵐の奥様だつて、御遠方から御越しなすつて御在なさいますから、さて此方様を離れて御覧になると、俄に又、此方の奥様が可懐しくおなんなさるので厶いましようよ。」

「其處だ〳〵。」と首肯き乍ら獨り遠山は愉快氣に笑ふのであつた。折から玄關の格子戸が開く音に、

「ヲヤ、御還りの様ですわ。」

お銀は御出迎ひに次の間に引退ると、軈てさや〳〵絹擦れの裙が鳴つて、座敷へ這入つて來たのは、例の丈高い妻君である。

「ヲヽ、暖だつた事。」と、吾妻コートを脱いで、額の汗をハンケチで拭き乍ら、

「貴方只今還りました。」

遠山は妻君の顔を見ると、思出したやうに獨笑みをして、

「何うだ、五十嵐では何か御馳走でもあつたのか、大層遲かつたぢやァ無いか。」

妻君も一寸笑を含んで、さも〳〵快活な調子になり、

「イヽエ、別段御馳走と云ふのでもムいませんがね、貴方、實は今日飛んだ處に參り合したのでムいます。」

「フム、何か惡い處へでも行つたのか。」

「處が然うではムいませんの、お目出度いお話の最中へ參りましてね……………。」

と、妻君は、腹の底から湧き上る樣な笑を、さも〳〵悄々とした面に浮べ乍ら、

「貴方、五十嵐の奥樣は、御懷妊なすつたのでムいますよ。」

「フム、出來たのか。」と夫も不思膝を乘出す、

「恰度今日が其帶祝ひと云ふのでムいましてね、私は今迄ちつともそれを知りませなんだの。」

「其奴は何うもお目出度い處へ出會したな。」

「それでね、奥樣は私の顏を見ると、もう何も云はずに、默つて二階へ連れてお上んなすつてね、あの……………此迄も、姉樣と思つて居たのですが、何うかこの後も、這麼知ら無い土地で、這麼體軀になつたのですから、何うか何處〳〵迄も見捨無いで、あの………御世話をお願ひ申ますと有仰るのです。」

「ウン〳〵。」と、夫は首肯く斗り、

「私も其お話を聞きますとね、ほろりと致しましてね、何、御心配なさいますな、不及乍ら御力になる心算でムいます……………と、恁う申まするとね、貴方、奥樣は嬉し泣きにお泣きになるのでムいますよ。」と

妻君は其場の狀を思出して、そつと袖で眼を拭ふ、

「這麼遠方で初產と云ふのですからね、さぞ貴方、お心細いでしよう。」

夫は熱となつて考へて居た樣子であつたが、此時ツト顏を上げて妻君を見る、而して、

「お絹………。」と呼んだ聲が、何時もの調子とは聊か變つて居るので、

「エ、………。」と驚いて顏を上げた妻君は、「なんで厶いますか。」と一寸眞面目になつて聞く、遠山は其妻君の眞顏を見て、不思包み切れぬ笑ひをドット出したが。

「誰れだつたかね、つい此間は隣同士になつて居たので、玆處を轉居すると云つたものがあつたね。」

「アラ、其事を有仰るので厶いますか。」

と、細君は眞赤になる、

「併し、隣同士は離れて見ると、又格別なものと見えるね。」

お絹は莞爾笑つて立上つたが、

「知りませんわ、其時の事を今は云出しなすつては、それは酷う厶います。あの時はね、私全く何うか爲て居たので厶いますよ。」

云捨て次の間に這入つたが、間も無くする／＼と帶を解く音。夫は日當りの可い椽端に足踏伸して、長閑な空を見上げ乍ら、獨り高く／＼笑ふのであつた。

例の森では、鶯の二聲三聲。

（終）

撫子の花束

瑪理、維瑠璃女史 作
河越てる子 譯

おのれ、佛國ルーブルの美術館にて、始めて彼女の畫像を見しとき、何故にや、知人のやうに感じにき、穩かなる笑を含みて、微かに茜根さす頬の上には、美くしき頭の毛が、しどけなく打掛り、燃ゆるが如き麝香撫子の花束を、なかばあらはなる胸に押あて丶、靜に見下せるさま、そゞろ身に徹むばかり思ほえて『お待ちなさい、何も彼もお話いたしませう』と呼止めらる丶心地し、有名なる畫師グリウズの、そをゑがきしと聞くだに、さばかり其名の心には止まらざりき。

程なく、一人の畫師のそを見取せんとて、近づきければ、やをら立退き、出口のあたりにて、何心なく回顧りしに、あはれ、美くしき彼の畫像は、狂へるが如き、悲しき笑を含みて、此方をながめ居るさまの、いとゞ名殘惜げに見えければ、おのれも心のなやましうなりて、急ぎ庭へと立出づ。

日は燃ゆるが如く輝き、あふさきるさの人の賑はしき、折しも何者か、いたくおのれの心を搏ちぬ、見れば、不思議や、そこなるアルテミス神の傍に、腰うちかけて、撫手の花束もてる少女の、文讀みてあり、おのれ近づきて、わざと足音たてしに、少女は、フト頭をもたげ、云ひ知らぬ哀にほゝゑみぬ、白き衣を着て、肩もあらはに、帽子いたゞかぬ顔の、たとへなく美くしう、果敢なげなるに、符號の撫子は、胸に燃え立ちて、誰かは斯るさまの、目に止まらざるものやある、さるを、いぶかしきは往かふ人々の一人だ

も、そを氣付かざるにてありき、おのれ恐ろしさの、身に徹みわたる心地して、アット一聲叫びしに、見れば早や、少女の姿はあらざりき、たけき撫子の香のみ殘して。

心にいたき苦痛もて、それより美術館をいで、おのがじゝ、たつきの業にいとまなき、巴里の市中を、鐵道馬車に打乘りて、太洋館へと歸り行きしが、この珍らかなりし事柄については、何事も語らざりき、さるほどに、若きみの丶幸福は、朝な夕なの、さま〲なる動作に、いつしか忘れて、はや十日あまりを過ぎぬ。

或夜の事なりき、友どち打連れて、とある芝居へ行きしに、此夜おのれは、藝する人の何演めたりけん、をさ〲覺り得ず、たゞ明かに見えしは、向ひなる棧敷に、撫子の花束もてる少女の、以前のまゝなる姿して、此方をみつめ居るのみなりしかば、おのれ友なる一人に對ひ、いとさゝやかに、

君は、あの白い衣服を着た少女が見えるかエ、赤い撫子の花束を胸にあてた……

と云ひしに、友は首をふり、

イーヤ那邊に

おのれ、聊か聲をはげまし、

ソラ、其處の眞向に、確かに見えるだらう、其大きな棧敷に、たゞ一人居るではないか、

友は驚愕の眼もておのれを見、

君は夢を見て居るよ、其大きな棧敷は空虚ではないか、

空虚……さもあるべし、と思へば、おのれは、そを強いて笑にまぎらし、少女の旣に立去れるよし云ひ設けて、話をかへつ、斯くて心を舞臺にそゝがんと、ひたすら務めたるも無益なりき、少女は絶えず悲げに

おのれをうちまもり、こたびは、いと古き黄色の扇をとりいだして、そを夢のやうに動かしつゝ、何事をか、陰かに示すものゝやうなりき。

やがて芝居は終り、おのれ立去らんとせしに、少女も亦立上り、いともあえかに、幼なきさまして消え失せしが、出口のあたりにて、ゆくりなく手に觸れしものありと思ふや、少女は又も現はれて、直に消え失せつ、おのれは覺りぬ、必ずや、さる原因のありて、斯くは少女のおのれに付纏へるならんと、されば無益なる恐怖を去りて、静かに時の來るを待んと心を定め、其後は、何事もなくて、二週間を巴里に過し、やがて、ブリタニーへと出立ぬ。

おのれの友人に、風來夫婦と云ふがありて、英國の人なるが、此度、佛國の南なる、クイムピールの海邊に、古き別莊を買ひ得たりとて、いとねもごろに招待きたれば、行き見るに高きいはほの上に立てられたる、異樣に古めきたる家には、見下す四方の海岸には、逆卷く波、さながら白き馬の猛り狂ふが如く、突き出たる巖の上に、碎けては寄せ、寄せては碎け、おのれ着きにし日は、わきて風の强かりければ、其勇ましさ云はん方なく、繪のやうなるとは、眞に是等をや云ふなるべし、風來夫人は、性質いと快活に家治むる道にはいみじう、巧にて、心かど〳〵しき人なれば、此怪しき隈多き家に、折に幽靈の現はるゝよし、村人の云ひ傳ふるなど語りいでゝ打笑ひ、かつ何時の事なりけん、さる名高き畫師の、此家に住ひせし事ありて、そが用ゐしといふ大なる畫室は、今も猶堅く鍵られ、誰一人あけうるものなしといへば、いと珍らしうて、其畫師の名を問ひしに、忘れたれど、ものせし畫は、グリウズの其れに、露たがはぬと云はせもはてず、おのれ聊かほゝゑみて、麝香撫子の、こゝに生ふるや否やを問ひしに、『家敷全體』と夫人は答へ、共にそゞろありきしつゝ、いと高き觀臺に登り見れば、道はいかに薫たけき花の、怪しく濃き

き眞紅なるもあれば、褪せて、色やゝ薄黑きもありて、此荒れたるものすさまじき庭に、云はん方なく照りかゞやきゐたり、されば、おのれこたびこそは、心の迷想ならぬを知り、少しばかり摘みとりて胸にさし、午餐にと家に入りつ。

屋内は、いとをかしう、しつらはれ、奇しき彫刻せる小柱の、絡めるが如き樫の楷段、壁にかけたる古代の掛物、其他古き貴女の肖像、武士の笑顔なんど、何れも皆古りすゝけたるが、古昔ゆかしう名殘をとめ居たり。

三四日を經てある朝の事なりき、おのれ、ひとり庭にいでゝ、彼方此方はひゝろごれる雜木の中を押分けつゝおりきしに、一の大なる石の、そのかみ上様に立ちたりけんと思はるゝが、たふれありて、半ば土に埋もれ、何やらん刻まれたるやうなりければ、苔うち落して能く見るに、『不貞なるマノン』と銘してあり、おのれいといぶかしうて、其由たゞちに、風來家に語り聞かせ、人皆うち集ひて、取しらべたるも、村人の老いたるすら、遂に其由來を知るものなかりき。

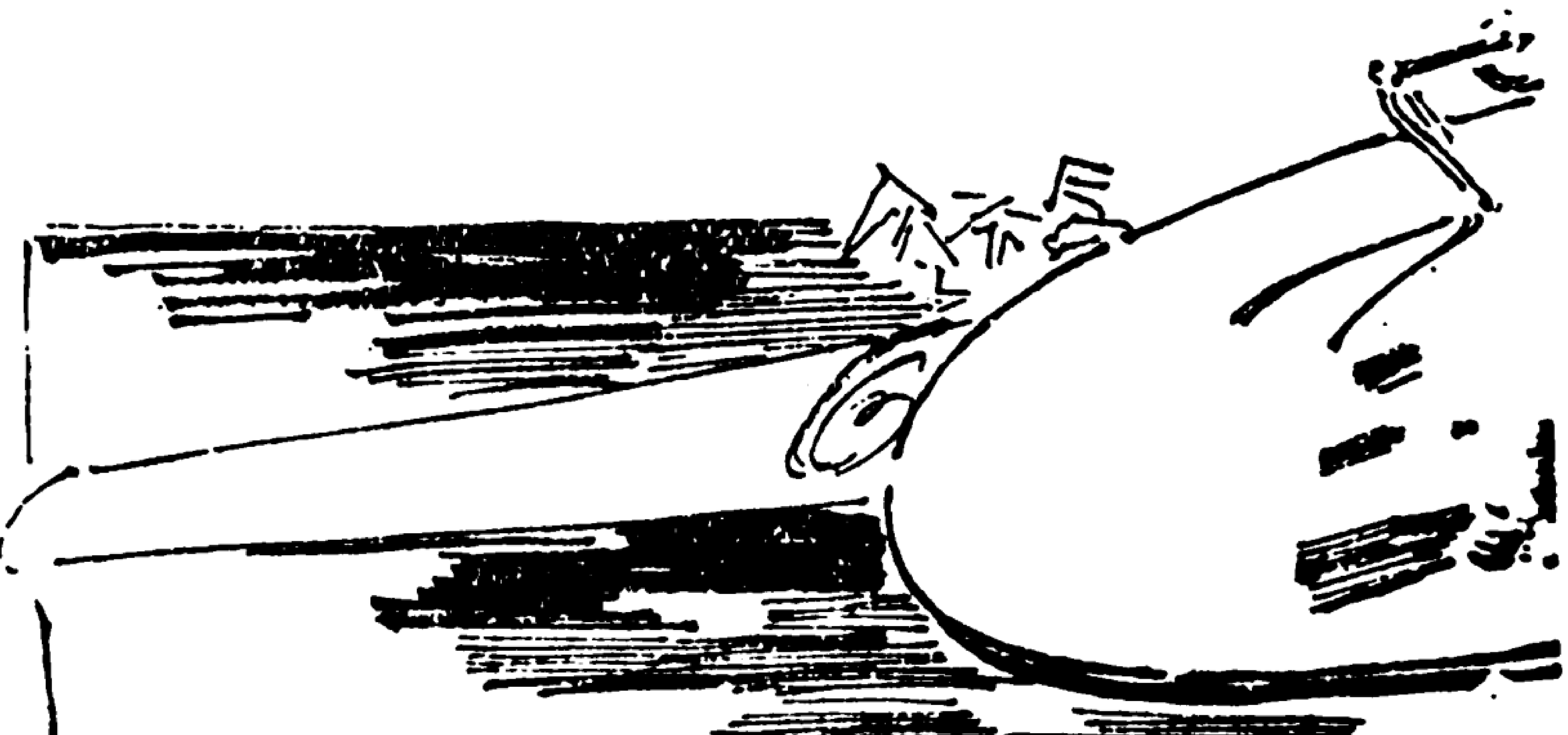
一夜家のものども打連れて、いつものやうに、和らかなる月の光をふみつゝ、海の邊を散歩し、やゝおそなはりて立歸りしに、おのれは、寢屋へと入りしも、眠られざりければ、起居て窓明け放し、月に燦めく海の面をながめつゝ、夜風に漂ふ、撫子の、たけき薫に醇はされて、人の一生の榮えあること、死てふものゝ解きがたき事、且つは未來の妙じう美しかるべきことなど、そこはかとなく思ひめぐらすうちに、いつしか人のけはひして、おのれ一人ならぬやう思はれければ、ふりかへるに、こはそも撫子持てる少女の少し距りて、其がらうたげなる悲しき顔に、何やらん願望の色を浮べて立てるなりけり、されば、おのれ今こそ、怪しき秘密のとけつべきときならめと、氣を勵まし、いと強うながめやりしに、少女は聊か怖氣

だちたるさまにて、手を動かし、猶も何者か求むるものゝやうなりき。



ナゼ其處にお出です、貴女は何故其樣に私につきまはりますか、とおのれ低く明かなる聲もて云へば、少女は、又も賴むが如きさまして、

幼兒かと思はるゝばかりに、いと柔かく、
御親切に………
何か御心配があるのですか、
大層………
憂れたげに白き手を握りつ、おのれやゝ神經だちて、
それでは云ふて御覧なさい、何をお望みです、
ドーゾお祈り下さい、數百年此方私が死んでから、誰一人私のために祈て呉れる人はありません、
ドンナ死に樣をしました、
せはしき胸の動悸を押へつゝ問へば、少女は、いとも悲しげに打笑みて、やをら花束を胸より取り去り、白き上衣の血もて黑みたるところを、指ざしゝが、やがて又もとのやうに花をおきつ、
殺されたのだ………
おのれさゝやげば、少女は細やかなる首をたれて、消えいるやうに、
けれども誰れも知りませんから、私のために祈て呉れる人もありません、それで私は死んでも休む事が出來ません、ドーゾお祈り下さい、大層疲れて居ます、
誰れに殺されました、お云ひなさい、其れを云はねば分りません、
少女は憂はしき眼を擧げて、



心から憎んで仕たのではありません、大層私を愛して居ました、此隣の書室で私の書像をかいて居ました其時に……私が心變りを仕たと思ふたのです、けれども私は決して……『不貞なマノン』など、イーエ、イーエ、イーエ『貞節なマノン』です、行て御覧なさい、隣室に、私の殺されたのは其處です、祈禱なくして死ました、ドーゾ貴殿が私のために、お祈り下さい、すれば、モー決して出ることはありません、

那邊に葬られました、

波の中に、荒い冷たい波の中に、而して數百年の間、此憐れな悲しいマノンのために、誰一人祈つてくれる人もありません、

云ひしらず悲しげなる顔に、泣かじとすれど、いつしか涙の催ふして、おのれは直に跪き、請はるゝまゝに神に祈りつ。

少女は、見る〱其美しき目に喜悦の光をあらはし、手を擧げて別を告げ、後の方へと退きしが、やがて消えなんとして、又もふりかへり、

貞節なるマノンとお書き下さい、

と語りぬ。

其後はいかに夜を過したりけん、覺えず、朝とく深き睡眠よりさめて、いそぎ書室に行きみれば、不思議にも、戸はなかば開かれてあり、押開きて入りみるに、室はいと長う高やかにして、何の装飾もなく、朽ちて虫喰みたる繪絹架の、すゝけし壁によせられたるのみなれば、あらたむるに『マノン』と深く〱刻みてあり、おのれいと怪うて、彼方此方打ながむるに、フト目に止まりしは、大なる入江窓の左側にかけ

られたる古き戸棚にて、中には汚れし跡に昔の名殘をとゞめたる、一の顔料板と、黒く錆びたる拔身の短刀、あはせては、過にしとき、巴里の芝居にて撫子もてる少女の手にせし黄色の扇と、此三つの品の入れあるを見つ。

あはれ貞節なるマノンよ、彼是思ひくらぶれば、正しく彼女は其が戀人の嫉妬のために、ゑがゝれたる顔の、いまだ乾きもはてずさし殺されたるにて、死體は高き巖の上より、冷たき波へと投げすてられ、無慘なる戀人は、猶も飽きたらで、堅き石碑の上に『不貞なるマノン』と永遠に銘しおかれしなり。

斯て戸棚の中を檢めおはり、靜に書室をいでゝ、風來夫人の許にゆき、こたびの出來事について、洩れなく語りきかせけるに、果せる哉、夫人は心の迷想とのみ云ひ消して、受がはざりければ、おのれ強いて二階へ連れゆき、室の中を見せしめしに、夫人は驚いて身をふるはし、顔靑ざめて走りいでしが、おのれも從ひて室を出るや、怪しくも戸は鋭き音して内より閉られ、再び開くるを得ざりき。

さればさすがの夫人も、是よりはいたく恐怖を催して、いそぎ此地を立去らんと主張し、程なく打連れてブリタニーを出し時までは、此荒れたる家に、何の怪しきこともなかりき、たゞ心もとなく思はれしは、石碑の上なる不貞の文字の、いと深う刻まれて、取替うべき方法のなかりし事なりき、されど、此度の出來事によりて、おのれの覺りしは、人の靈魂の、祈禱なくして後の世の岸に達し得ぬこと、ルーブルなる少女の畫像の、グリウズが筆にはあらで、操たかき婦人の深くあやまられたる、肖像なることゝなりき、而して今おのれ爰にあらためて、少女が望みしやうに、貞節なるマノンと書き記し、とこしへに其美しき德を賞めたゝへん。

（完）



席上時事探題

遼東還附の當時を追憶して　　大口鯛二

ひとたびは捲きてかへりし日の御旗
　またおしたてむ遼東のやま
たなそこの珠うはゝれしそのかみの
　うらみはらさむ時はきにけり

戰死者の遺族に　　遠山英一

日の本の國のひかりとなるみれは
　すてゝかひあるいのちならすや

露探　　加藤義清

砲とりてわれにいむかふあたよりも
　にくきはかれかこゝろなりけり

出征軍人の家族を思ひやりて　　鯛二

いくたひかむねさわくらむ時ならぬ
　にひふみ賣の鈴のひゝきに
ひとり子のいさをゝたてゝ歸る日を
　おいたる親のかそへてやまつ

港にある敵の艦隊を　　英一

程もなくみくにの船となりぬへし
　のかれていてむ道しなければ

奬兵義會　　義清

國民のこゝろひとつになるみても
　わかみいくさのかたてやはある
すゝみゆくみいくさ人を少女子も
　くつ下あみてねきらひにけり

韓國近狀　　千葉胤明

北風のさむさいとひしてまひとや
いかにうれしき匂ふ朝日に

信號旗　綱二

いくさ船手足のことくうごくなり
かけひきしめす旗のまに〳〵

壞殘敵艦　英一

かたふきてうかふをみれは中々に
しつみしよりもあはれなりけり

林紋平　同

ちしほもてかきなかしたる水莖の
あとにもしるし赤きこゝろは

斥候　義清

こゝろみにうち放ちたる筒音に
あたのものみもあらはれにけり

閉塞隊に附隨して決死隊を
收容したる水雷艇隊を　胤明

隼のかけるかごとくのりめくり
すくひあけゝむますらをの友

友千鳥かなたこなたにみえなから
つとひかねけん浪高くして

同司令千鳥艦長に　同

思ひやるもうれしかりけり殘なく
すくひし時の君かこゝろを

賀出征　英一

いてゝゆく車はみえすなりにけり
また萬歳のこゑはとよめと

篤志看護婦　胤明

いかならむあつき情をまきこめし
ぬのにまかれむますらをの友
みいくさの數に入らすはあて人の
つくりし布にまかれさらまし
たへかたきいたてもやかていえぬへし
なさけこもれる布にまかれて

稚子（をさなご）にかきてあたへしうた　山本細柳

小園にあそぶをさなごの

花と蝴蝶にまよふ見れば
まだ罪しらぬこゝろねを
誰かあはれと見ざるらむ

雛をあかくいろどれる
つぼみがちなる海棠も
なが唇にふれもせば
のこらず花とさくならむ

月夜の笛にさも似たる
ながうるはしのその聲に
鳥もしらべをあはせつゝ
洄れる水もすみぬらむ

毒ある牙をみがきつゝ
葦邊を渡る荒鰐も
ながほゝゑみにふれもせば
むくろも醉ひてとけぬらむ

うき世の塵にまみれては
いとしのなれも汚れなむ
たとへば清き花瓶を
くだくに似たる親ありな」
軒端にすがくさゝがにも
たくみの絲のあやあるを
なれもうき世のいたゞきに
智惠のうてなをたてよかし

春月

下田春與

わしがらのみねのまつばら
まつばらにふりさけみれば
ふもとにははなさきをゝり
たかねにはかすみきらへり
そのかすみはれゆくすゑに
そのはなのこずゑしらみて
てりもせずくもりもはてぬ
おぼろよのつきこそのぼれ
うきしまがはら

海邊霞

かげろふのもゆるはる日に
いさなどりうなびを見れば
さくらがひひろふをとめが
くれなゐのもすそもわかず
はなくもりわくるをふねに
とるかぢのおともきこえず
うちみるしまのさきざき
かき見るいそのさきざき
八へがすみかすみぞわたる
はるのうなはら。

婦人會の歡送歌

第二師團管內婦人會團體より出征軍人の各位に耳嚢を贈り參らすとて

一、

おさらばさらば　いざさらば
征かせたまへよ　勇ましく
仁義のいくさに　敵やある
世界をてらす　光明は
み旗の色に　かゞやかん
征かせたまへや　勇ましく

二、

鯨鯢のいぶく　荒海に
颶風も吹かむ　黑潮も
猛鷲翔る　曠原
吹雪もあらん　堅氷も
まさきくいませ　長くも
わが肱肢との　大詔勅

三、

身はたをやめに　ありつれど
みあと守らん　やすらかに
われも大和の　おみなへし
皇國を思ふ　一筋の
針ごとこめし　まごころは
日本武士の　美彌武久穆

敎の庭

正三位子爵 黒田清綱先生撰
（菊池武則先生代撰）

遠山花

天

熊本市中坪井町七十七番地　日高かず子

我にはのまつのひまより見ゆるかな
　とほ山の端のはなのしら雲

地

東京　森まさ子

朝付日にほへる見ればあしびきの
　遠山の端はさくらなりけり

人

熊本市東寺原町　田代綾子

遠山のみねにかゝれるしらくもの
　うごかぬみれは櫻なるらん

甲

和泉　福原菫子

あくかれて心をそらになすものは
　遠山さくらさけるなりけり

三河　永井さい子

山とほみくもかはなかの疑ひを
　さやかに晴す峰のはるかせ

肥前　前田川千年子

きのふまてやまとも心つかさりし
　遠山しろくはなそさきける

越後　五十嵐美代子

ふりつみしみ雪は消てさきにほふ
　花にうもるゝはるの遠やま

東京　きさ子

ほの〳〵と明ゆく遠の山のはを
　はなれぬくもやさくらなるらむ

東京　つね子

明わたる遠やまのはにうら〳〵と
　にほふかすみや櫻なるらむ

山梨　標武子

春さめのたえにしひまに遠やまの
きのふの雲は花とかはりぬ
東京　るい子

おほそらも明わたりゆく遠やまに
にほふかすみや櫻なるらむ
東京　たまき子

つくはねも遠つあしほも白くもの
かゝるや花の盛りなるらん
東京　なか子

あさかせのかすみをはらふ遠山に
いろこきくもや櫻なるらむ
靜岡　齋藤杜子

遠やまのあかつきあらしふきたちて
きえせぬくもや櫻なるらむ
壬生　三町とし子

しら雲のかゝると見しは遠やまの
たかねに咲ける櫻なりけり
壬生　上町壽代子

消え殘るみ雪と見しはみよし野の
今を盛りのさくらなりけり
名古屋　木下鶴子

外くにのひとも仰けるすめらきの
御やまの櫻いまそにほへる
大阪　桝田益子

やまのはにたてる霞のたえまより
もれいてゝにほふ花の白雲
松山　上原のふ子

くもと見し遠山さくらうたかひは
折てかへれる人にはれけり
山口　村上操子

とほ山にきえのこりたるしら雲は
ものにまかはぬ櫻なりけり
埼玉　横田秋子

かつらきや高間のさくら咲しより
はなの七日はしらくもゝなし
東京　岩谷梓子

杉たてる門はかすみにうつもれて
花にことゝふ三輪の山もと
松山　山崎匡子

乙

またゆきのきえて間もなき遠山は又さきかゝるはなのしらゆき
東京　三坂鐵子

さくら花咲にけらしなあしひきのとほ山のはにかゝるしらくも
岡山　日下[illegible]龜子

山ひめのかすみの袖のうすものにあやとる色やさくらなるらん
島根　勝部綾子

見わたせは雲かとはかり見ゆるかなはなにうもるゝみ吉のゝ山
東京　山口孝子

とほ山にいろこき雲のたちそひてかゝるや花のさかりなるらん
東京　小島ふさ子

春風ににほひ來ぬるはをちかたのやま路のおくの花のかをりか
東京　小川政子

ほのほのと明わたりゆく遠山にはれぬくもゐやさくらなるらむ
東京　高[illegible]子

ほの〳〵とあけわたりゆく遠山のいろこき雲やさくらなるらむ
東京　大江春子

朝風にかすみもはれし遠やまにうれしく見ゆるは花のひとむら
磐城　三森須磨子

をちこちになり〳〵しろき遠山の花こそむかししのはれにけれ
播磨　森脇[illegible]子

冬のひもいつしかすきて遠やまにきえぬ雪みるころとなりけり
肥後　岡山登[illegible]子

つはさあらは行てみましなさくら花たゞしら雲とみゆる山の端
肥後　秋吉輝尾子

遠の山木のまほのかにさく花はゆきかとのみそあやまたれける
山口　上田いそよ子

とほ山のやまのふもとは霞めともたかれは花のさかりなりけり
福井　平田そう子

しらくもの懸るとみしは遠山のたかねに咲けるさくらなりけり
山梨　標武子

人里を遠くはなれてみれの上にきよくもさけるさくらはなかな
名古屋　齊子

色かへて匂ふをみれはかすみたつあなたのみれも花やさくらむ
東京　淸水はるみ子

ほの〳〵とかすめる山の峰つゝきおなし色なるはなそさきける
近江　福永かつ子

はるさめの名殘りのくもはうすれとも匂そ優るよし野やまざと
東京　柏田靜子

わかやとはいまた咲かぬに遠やまは櫻かされのはなのしろたへ
東京　林[illegible]子

春雨のなこりうれしも遠やまを今朝うつむなるはなのしらくも
東京　林[illegible]子

くれなゐの雲かとみしはひかめにて花さきつゝく遠のやまやま
東京　甲藤若子

遠やまにかゝれる雲のにほへるはけふしも花のさかりなるらむ
靜岡　竹内みつ子

遠山のかすみのおくもしろたへの雪かと見えてはなさきにけり
鹿兒島　池田とよ子

遠山のかすみのひまにみゆるかな今をさかりのやまさくらはな
東京　青木たま子

白くものかゝると見えし一むらは遠やまさくらさかりなりけり
大和　粟山[illegible]子

うろはしきくもは櫻のはなゝらんなかめまはゆきみよしのゝ山
大和　栗山たか子

ひとむらのをりゐる雲とみえつるは遠山さくらはなやさきけん
肥後　千知波橘子

遠目にはそれとわかれとよし野やま白きは花のさかりなるらん
出雲　高橋[illegible]子

さほ姫のかすみの衣のひまみえてはなとそにほへ遠のやまの端　東京　河田いし子

はれやらぬ雲かと見しはとほやまに日ことさきそふ櫻なりけり　東京　しづみ子

はる〳〵と雲また高くなかむれは雲かとそ見ゆやまさくらはな　長野　中村さき子

見わたせは雲かかすみかしらゆきのさためかねけるとほ山の花　北見　中川伊代子

をちかたの山はま白になりにけり峰のさくらやさきにけらしも　秋田　古瀬惟子

よこくものわかるゝ山に一むらの花こそみゆれよやあけぬらん　秋田　古瀬りく子

遠やまは霞てよくはみえねともいろこきかたやさくらなるらん　東京　荒井千代子

暮かゝるとほやますかたなかむれはくもと見えしは櫻なりけり　東京　荒井こう子

ふくかせに花なつかしくおもふをりさきそめけりなとほ山の花　東京　榊戸すゑ子

見渡せはよものやまのはあさひさすいつれおとらぬ花の色かな　東京　荒井あさ子

あけほのゝ雲かかすみにまよふらむかけこそ見へねかをる春風　信濃　山本直枝子

風なくは匂ひおこさしさくらはなたゝくもとのみみ山へのさと　伯耆　樋口つる子

かすかなる深山の櫻あめふれどこゝろのどかに見ゆる今日かな　三河　榊原きく子

心ゆくかきりなりけりやへかすむとほ山のはのはなのしらくも　三河　榊原てる子

白雲の立田のやまを見わたせはかすみのひまににほふはなかな

白くものたな引とのみ見ゆるかなをちの山へにさけるさくらは　長野　山本[illegible]子

しら雲とみしはきのふのこゝろにて花さきつゞく遠のやま〳〵　東京　荒井満武子

遠山にかすみたなひく木の間よりにほひこほれてはなそ彩とる　東京　荒井幾久子

さたかには見えねと遠の山かけにかゝれる雲はさくらなるらし　熊本　田代[illegible]子

うちかすむをちの高根の白雲のうごかぬみればさくらなるらむ　熊本　猪原みさを子

しらゆきのふりてつもりし遠やまもはなの浪よる様とかはれる　下野　菅沼淑子

遠山の高ねのさくら咲きにけり行きもやられすこなたにて見ん　下野　菅沼[illegible]子

遠やまの梢のまより洩れて咲くゆきにもまかふはなの見ゆなる　下野　菅沼つれ子

見渡せは霞のうちにいろ見えて咲きにけらしなみよし野のやま　壬生　上町初江子

つまきこころみちさへ今はうつもれて花になりゆくをちの山もと　東京　岩谷淺子

鳴あかるひはりの聲をしるへにてをちの高ねのはなをこそみれ　美濃　吉村せん子

此頃のそらのくせなる遠やまにうこかぬくもやさくらなるらむ　埼玉　横田音羽子

いさゆかんかすみのわたる山こえて遠き尾の上に花のみゆれは　同　吉澤いと子

淺くともかすみあまきる山のはにいつよりかゝるはなのしら雲　埼玉　横田やな子

野野　小泉みつじ子

遠山のまつにかゝれる白くもと見えしはゝなのさけるなりけり
東京 渡邊初子

とほやまのまつのこのまに咲花のいろこそことに立まさりけれ
東京 渡邊名加子

遠山のたかれのはなはふりつもる雪ともみらんながめなりけり
神奈川 森田はな子

をち方のをの上にかゝるしら雲はむかしながらの花やさくらん
三河 白井よし子

遠山にはるの光りもましそひてはなさくやまにうぐひすのなく
長野 小泉たつじ子

見わたせはおち山のれはま白にてゆきかとまがふさくら花かな
宮城 杉田哲子

遠かたや八重たつくもとまがふまて花にうもるゝみよしのゝ山
宮城 大槻慶子

きえのこるゆきのおもかげたちかへて花にうもるゝ遠の山のは
宮城 大槻初音子

さく花にうつもれはてゝ遠かたの山は名のみそあらはれにける
伊豫 渡部のぶ子

白くもかゆきかはなかとまよふかなちさとのおくのみれの櫻は
秋田 伊東よし子

雪としもみまがふまてにさくらはな遠やましろく匂ひけるかな

海上雲

天

沖とほくたなひく雲はかちときを
わけしみ艦のけふりなるらん
秋田縣由利郡本荘町裏尾崎町十三番地 古瀬りく子

地

熊本市東寺原町 田代綾子

ゆきゝする船のゆくえも見えぬまで
海原とほくくもぞかゝれる
福岡縣三井郡善導寺高等小學校 山川敬子

人

みいくさの烟りと見えて勇ましく
きたのうなはらくものたゞよふ
山陰 なにがし

甲

沖とほくかせにのりゆくあま雲は
とまる湊やいつこなるらむ
美濃 吉村せん子

たなひくと思ひし雲は見るか内に
大海はらをたちおほひけり
東京 岩谷梓子

立なみの千重につゝきていつの海や
大しまやまにかゝるしら雲
東京 岩谷淺子

舵の音はたかくきこえて和田の原
滿くる汐もくもかくれゆく
松山 上原のふ子

はるゝ日もおきつなみまにたゞよひて

浮べる雲や小しまなるらむ

静岡　齋藤杜子

わか夫の船のけむりかわたつみの
うなばら遠く雲のたなひく

熊本　日高かず子

大船のけふりにつゝくしらくもは
いつこの島をめくり出けん

熊本　田代艶子

立波もみえかくれしてわたのはら
おきつしまやま雲のたゞよふ

東京　きさ子

わたの原風や吹らんしほさゐの
おき波くらく雲のおりゐる

埼玉　横田晉羽子

いそやまに夕ゐるくもゝすゑ絶に
はやてとなりて干潟吹らし

埼玉　横田秋子

和田の原やへのしほかせ吹にけり
いそ山しらむおきの横くも

大阪　桝田奎子

乙

わたつみのけさは霞むと思ひしはたゝよふ雲のたてるなりけり

東京　青木たま子

松浦かた八重たつ雲は浪の上にことなるしまのうかふとそ見ゆ

神奈川　森田花子

ひさかたの大海原にみれつくろくものいろにもはるはみえけり

信濃　山本直枝子

うち合しうみのいくさの砲けふり其まゝくもにたちのほるかな

長野　山本茲子

ゆく人に何のうらみかありそうみ舟へたてたる八重のしらくも

長野　小泉たつじ子

ゆくふれはまた程とほくあらなくに波路はるかにへたつしら雲

三河　榊原てる子

見わたしのいせのとう山かげくれてなみと一つにたてる雲かな

東京　渡邊初子

あまくもの奥となりけり舟うけてきのふつりせし沖のこしまは

東京　渡邊名加子

ふたつみつ釣する舟もみえにけり沖のあまくもはれそめしより

三河　白井よし子

はてもなき平の海にくろくものにしにながれてゆくぞみえける

和泉　稲原蓮子

うなはらにみ平ふれもみえなくにたゆたふ浪にくもたちわたる

大和　栗山たか子

ふきまよふ風にみたるゝしら雲にやかても海のなみやたつらん

出雲　高橋依子

わたつ海のはなれ小島とみるか中にたなひきわたる沖のうき雲

東京　河田いし子

かへりこんふれまちなれば沖とほく心にかゝるくものひとむら

肥後　千々波橘子

大ふれのけふりとゝもにわたの原たちこそ靡けそらのうきくも

わたの原ふく春かせになびきつゝなかめなかしきなみの上の雲
長野　中村さき子

くもりなきやまとしまねの海原にわれしらぬ間にたつや白くも
東京　湯淺光子

あまを舟すきゆくあたり雲見えてゑにも似たりな春のうなつら
北見　中川伊代子

うな原に雲の浮はしかゝりけりあまつひかけやてりわたるらし
秋田　古瀨惟子

舟てして朝ひのそらをなかむれは雲のまそてにつゝくうみかな
東京　荒井千代子

隔つれど一とむら白しうみのうへゆふひにゝほふ雲のみれかな
東京　荒井こう子

くれそめてたれかそめけん横雲はなかめ淋しきたこのうらなみ
東京　神戸すゑ子

空はれて風もなきさにあま小舟なみまをいてゝいつちゆくらん
東京　荒井満武子

見わたせは青うなはらに風なきて雲井はるかにたつやなくらん
東京　荒井きく子

見わたせはうな原とほき波の上にたなびきわたる雲のひとむら
長野　小泉みつじ子

はる〳〵と海路はるかになかむれははるたつ霞みまかふしら雲
香川　宮たけ子

いくさふれうちはらふらんわたの原はれたるそらにかゝる横雲
陸前　吉澤いと子

いせの海の渚のくももしらむなり朝日をかみにいさやゆかまし
埼玉　横田やな子

波の上にうかへるくもはわたつみのみやの烟のなびくなるらむ
山口　村上操子

大船のしらほと見えてうなはらの濱にたゝよふくものひとむら
名古屋　木下鶴子

天の原ふりさけみれはいくさ舟うかへるおきにあやしげのくも
下野　菅徳子

海上にたなびきにけん其の雲はうすむらさきのあけほのゝそら
下野　菅つれ子

ほの〳〵と東の海にたなひけるうすむらさきのけさのくもかな
宮城　杉田哲子

ひとしほのなかめの色となりにけり八重のなみぢに浮ふしら雲
宮城　大槻慶子

たもとふくかせたにあらてなにはかた空をこき行くあまの釣舟
宮城　大槻初音子

和田の原沖にたゝよふうき雲はよはのあらしやふきのこしけん
伊豫　渡部のふ子

うなはらはやみかとも見しくろ雲の旭にはれてけふそさやけき
秋田　伊東よし子

海原に一むらくものたなひきてのとかに見ゆるあまのつりふれ
名古屋　淑子

わたつみの沖にたゝよふしらくものゆくへやたつの都なるらむ
近江　稲永かつ子

いそやまの松のこすゑを吹く風にみだれて沖にまよふ白雲
肥後　秋吉輝尾子

大海の濱またたてるしらくもはふれまつおきのしまかあらぬか
肥後　佐々小琴子

八汐路の汐の八百あひにたつ雲はいつこの空になびくなるらん
肥後　佐々有鄰子

わたのはら濱路はるかにうき雲のれかゝるかたやちかのしま山
東京　山口琴子

うなはらの入日に雲の立そひていろあるなみのおきにたゆたふ
東京　杉田仲子

大船のゆく衞いつれとわかぬまてうなはらくらく雲たちわたる　東京　金原玉城子

かきりなきあた海はらにさまよひて島ともまかふおきの黒くも　磐城　三森須磨子

けむりとも浪とも分かぬうす雲の霞みそめたるうみの明けほの　横須賀　上田壽子

海原のはるのけしきもうきくものかゝりて浪のたちさわくなり　周防　上田いそよ子

うちいてゝ汐路はるかになかむれはくもゐにかける蟹のつり舟　福井　平田そう子

見る人のこゝろも知らす田子の浦つきなへたつる夜半のむら雲　東京　林環子

わたの原こきゆく舟やいかならむ冲なみたちてくもたちわたる　靜岡　竹内みつ子

淡路島つきへたつるとみるひまにまたもはれゆく雲そくすしき　東京　林黙子

果しなく限りあらしとおもふ海もうちみるひまにわたる雲かな　東京　松川ちよ子

いくさひとふな出なせしときゝし日より心にかゝる波の上の雲　松山　山崎秀子

春を惜む詞

華族女學校教授　井上賴圀先生撰

天

熊本市中坪井町七十七番地　日高かず子

野に山にあこかれんと、待し春にもあらぬものから、うら／＼と霞める空の雲雀の聲、朝日に匂ふ櫻花など、長閑からぬはなき四方の景色に、氣も心もうき立て、己の花も咲かせんと思ひたのみし心さへ空しうなりぬるほと、根に歸り古巣に歸る花鳥に、かつ／＼我世も更行て、春や昔と忍ふにも、あはれ己おくれたるか、はた春の件はさるか、もとのまゝなる身のはつかしう、いとゞ暮れ行く春のみ惜まれてなむ。

地

大坂北區松ヶ枝町二百六十九番邸藤田友治郎方　藤田春江子

親しき友に遠く別れて、都とは名のみなる片隅に住みわぶる身は、さえわたる月を一人さひしく、いひしらぬ思に泣き明せしも幾夜なりけむ。雪の中より梅咲きぬ、と思ふ程なく野邊に若草もえ初めて「麗けき彌生の空となりしより」さすがにわれも、花鳥の色音にうかれて、樂しき世やと唱ひぬ。九十の春光、いつしか更けて、花やいづこ、鳥やいづち、春の名殘は、花の香にしみし袖袂と文にはさみしすみれにこそは殘りしか「行く春の形見とや見むすみれ草ゆかりの色のあせすもあらなむ」暮れずもがなと、思ひし日ははやく山に臼づきて西の夕映、みるからにいよ／＼行く春のをしまれて、

明日よりは青葉のかげにたゞ一人、昨日の春の夢をたどり、さむる枕に山杜鵑のあはれにおとづるゝ悲しきを、誰とふ人なき都の空にきくらんかと、移り行く世の哀れも、我身にそへていとゞわびし、あはれ行くらん春の、つひのとまりやそもいづこ。

人

神戸　一女子

何事にまれ、迎ふるときの嬉しさに引きかへて、いやが上にも、悲しきは、送る折の、心地なり、あはれ、喜びを以て、迎へられ滿足を以てもてはやされたる、花やかなる春も、何時しか、ふけ行きて、櫻も散り、山吹の黄金の色もあせはてゝ、夏にわたりて、咲きかゝるてふ、藤紫のゆかりの色の、若葉が間に、ほの見えて、明日よりは、はや夏に入らなんとす、あな惜しきかも、悲しきかも、涙の雨はきなれたる花の衣の、袂をうるほしぬ、光陰矢の如く、月日は流水の如し、との古人の名句は、いつも〳〵我こゝろを、かきみだすなり、さはいへ、四時折々の移り變はるは、自然の理にして、人爲をもて如何とも、なしがたく、なか〳〵に、一定不變の、單調ならんよりは、多くの趣味を我等に、與ふるなり、されば、たゞ此月日に、後れざるやう、つとめはげみて、世の爲、國のため、我本分を盡しなば、年の長くるも、光陰の過ぎ行くも、いかでかは、嘆くに及ばん、つとめよや人々。

福岡　中島武子

花さく春は、年々にあへど、いつかは、暮行く春の、惜れぬ時やあるまして今年は、世のさはぎに、我故鄕の春のさまも、得しらで、こまの荒れ野に、ほことれる人も、多かるに、はた、國に居るも、花の下に、うかれありかんは、いとはばかりなり、軒の櫻の雪と散り、庭の鶯の、音を絶えぬまに、旭日さすかたより、消ゆる春の雲のごと、仇なす國を、平げて、この花の下に、我も人も、打集ひて、御軍のかちのいはひを、擧げましなど、思ふものから、花は根に、鳥は古巣に、かへらんことの、いとゞ惜れてなん。

大阪　桝田益子

殘りなく暮行春を惜むとて、心をさへに盡しつる哉と、論ひけんもげに、ことわりなり。綾織り出す佐保姫の、霞の衣も、やう〳〵薄れて、四方の檜皆、青葉になりたる、此頃の空の氣色の、あはれさよ、此春は花の渠して、心の儘に愛彼所に物せんと、樂み侍りしを、學の道の暇なくて、え果さゞりしは、いと〳〵口惜き限にこそ、さるにても情きは、雨風にも侍る哉、今しばしが程、心してあらましかば、過ぎなん春の形見に、衣の色も深く染まし物をと思へど今はかひなくてなん。凡そ四つの時、いつはあれど、春の曙に若く物あらざりけり、されば雲井の雲雀、芝生の雉子も思ひ上り、かげろふもゆるなべに、人皆の心も野べに山邊に、あくがれてあはれに樂しう覺ゆるを、都大路は柳櫻の、春の錦を織りいで、野山を見れば萬花千草の、若葉麗しく

生ひと生ひいで、ゆ種蒔く千町の小田の、瑞穂の秋の收穫を祈るも、長閑きみ代の春の光にこそ、獨り草木のみかは人もほだ若葉の時に、いそしみ勤めずば、遂に枯落と成り、窮屈に愁歎して過ぬべし。花になく鶯水に住む蛙の、聲さま〴〵に盡しぬとも、かひなき物から、春の行ゑの、いと〳〵、惜しまれてなん。

兵庫　飯島淳子

樂しきはのどかなる春の日ならずや、花咲ける野邊に、鳥啼く山路に心あへる友垣と、はた、父母同胞うち連れて、若菜つみつゝあそびつゝ、携食ひらきて共々に、吾が思ふ儘かたらひながら、たうべる愉快さたのしさよ、心こめたる料理ならねど、青苔しける廣き野原に、眺めよき山の頂きにてしかも時は、寒からず暑からず、衣の袖もいと輕く、花にあくがれとび狂ふ、胡蝶追ひつゝ馳け巡る、うなひ小女の愛らしさよ、さても日月は流るゝ、水の如しとは、よくもいひ得し諺よ、治まる御代の芽出度さに、千代も變らぬ新玉の、春を壽ぐためしとて、松竹樹てゝ七五三張りしもつひ此程のやう覺ゆるに、いつしか梅散り櫻わらひ外國までも名を得たる、櫻の花も散り果てゝ、四方の木々には、若葉生ひしげり、あたり何となう、夏景色の備さるゝよ、嗚呼樂しき春うれしき春もいまやくれなんとす、實にも名殘の惜しまるゝ哉

肥後　徳永廣子

四時うつりかはるは世のならひなれど。のどけき春のすぎゆくほど、惜きはあらじ。さるをまた梅花のなつかしかりし名殘さへつきせぬに、日ごろにほひし櫻の。すけなくちりはてぬるを。鶯もなげきつらん只一聲だにたてぬはいはん方なくうたてし。あはれ短き花の盛よ一日二日にかくも。はかなくさびしきふぜひ。となりつるを思へば。春の雨風いとうらめしくぞおぼゆる。まいて。山に川に立なびきたる霞さへ。けしきなく見渡すかぎりへだてなきはなかしからずや。たまたまめでにし花染衣も今はわすれなんかし。あはれにもかなし。しけりゆく青葉にかよふ風はあれど。花のかならんよしもなく昨日今日ふりしきる春雨は。鶯のなみだにや。世人のすぎゆく春を惜む涙にもありつらんかし。

肥後　岡山登游子

櫻のまにはや春も最中とはなりぬ。さしもまちとほかりし花は。雲かゆきかとばかりさきみだれ。囀る鳥聲のどかに。一年中のいと樂しき日は今日にこそ。友どち打むれ。吉野山に來てみれば。今を盛とさきみてる。大和櫻の名もたかくあなゆかしや。ふきくる風にさそはれて心ありげにはら〳〵と。飛くる蝶かとばかり、降くる雪かとばかりに。心ある人の袖にかゝりて。春の名殘ゆかしくにほふなり。あはれながき春の日をなぐさむる吉野の花はさかり短かくなんいとゆかし。惜まれてちるこそはなのさかりなれと昔の人の詠たりしは誠にめでたき詞にこそ。

肥後　秋吉輝尾子

いつはあれどなかしきは春にこそ。いづこはあれどあはれなるは山里にこそ。山里にして此春を詠む。春にして此山里。其ながめやいかに。其あはれやいかに。とちこめて家政を學ぶうち、今年の春も。やうやくふけゆきて。まちし櫻もうつろひぬ。今日は心あへる友どち。うちつれて燒野の原に。早蕨もとめ青める野べに。土筆とれば。糸遊のもゆる大空に。千代とゆかしき雲雀のまひうたひ。田地は菜花さきみだれ。さながら黄金のむしろしきたるが如く。みどりのむぎ生は青海原かとうたがはる。河岸なる青柳の糸は。瀬織津姫のひきはへし色かとあやまたる。すみれ。たんぽゝ。れんげ草。今を盛りに花さきみだれだるなど。なべて見るものごとに。たのしからざるはなし。秋をはらふ風さむからず。げに快樂のおもひせしが。光陰矢よりもはやく。昨日と暮今日とあけて。響かす山寺の鐘。さかりの花も色あせてくれかゝる春のそら。あなたのしとてなんぞたのまるべきや。さかりとてなんぞ心ゆるすべきか。高貴貧福たのみ得らるべきやいさゝか春を惜む詞をかくなん。

東京　松澤まつ子

木々には若葉もえ初めて、はかなげに散り殘りたる花びらに、胡蝶の

身を寄せて、昔を夢むらむ邊に、鶯の老いたるもしろく、二聲三聲啼きいづるなどげにさうざうしき眺なるかな、まいて小雨の降りいでなば、いかにあらむとぞおもほゆる。

さるにても昨日までは、桃、さくら、花すみれなど、とりどりに咲きみだれて、ふりはへて行きかふ人の袖さへも、香るばかりに覺えられしを、たつこと易き花のかげかはと、今更に人の春さへ思ひやられてあはれ深し。

ことをあまたにやらじとや、しばし咲き後れたる藤、山吹も、夕の雨朝の露に色褪せつれど、これや春の名殘りの花にしあれば、いつまでも散らであれかしと念ぜし甲斐もなう、にくや風のはらはらとわたりて、かたへの小川に吹き散らせば、ゆかりの色と、口なしの色とをこきまぜて、一きは榮えを見せしよと思ふ間もあらせず、流るゝ水に誘はれつゝ、さすらひ行きしこそうたてけれ、あはれ春の行えやいづこ。

東京　松川ちよ子

あゝ、名殘惜きかな、暮れゆく春。四方の山邊のうちけぶれるだにのどやかなるを、まして、盛りの花の下かげに、うらやさしく匂へる菫を友として、無邪氣なる胡蝶の羽音につれ、我を忘れて、あこがれありくなど、其長閑さはいかならん、げに、いひしらず、うれしく樂しきは、此春にこそ。

あゝ、さりながら、天の與へしすべての幸は、決してとこしへならずとかや。げにもことわりにて、かばかり美しと眺めにし百花もあたら無情の雨風に、さりげなう、ちりうせつ、其艷なる姿、芳はしき香も、今は、いづこの空を、さまよふらむ。あゝ悲しや、我、こよなき樂しき友は、今や、そが美しき衣をぬぎて、ゆかんとはするなり。止めんとすとも、いかでうべき。たゞ、惜しんで、ふ言の葉もて、送らんのみ。げにや、春は行くとも、又、昔ながらの面影に、いでゝ、うつゝ世に、立ち返る時もあるものを、あゝ、人は一度春過ぎて、さびしき冬にあふ時は、と、思ひ浮べし我は、いひしらぬ、異樣の感に、うたれぬ。あゝ、行く春よ、我待つ春よ、よしや、今は、見る影もなうなりぬとも、來ん年は、一しほの、美しき色と、かんばしき香とを、もたらして、我を樂しましめよ。

吳　和住千鶴子

をちこちの、見渡す山は薄くこく霞みし頃よ。乙女らが、袖ふりはへて、野に山に、あくがれぬべき彌生の空ののどけさも、谷の戸の初音まちつけし事とも、春雨と共に、ふり過ぎにけり。今はしも、待ちし櫻も、うつろひて、をりをり通ふ春風に驚かれぬる春のくれ。たれこめて、春の行くえもしらぬまに、いつしか、花は根に古巣に、鳥は、とりどりに、春をとぢむる哀れさよ、花をし見れば、物おもひもなしと、詠みけん歌まで思ひいでられ、いかで一日も長く咲きのこりてよと、たのみしものをいかにせん、ひとへに、惜しき此の春を止めんとすれど、行く水に、いつかさそはれゆくもしらずなりにけり、あなたのしき春はくれにけるかな、あはれ。

東京　石川蕪子

南の梅咲き初むる頃よりは鶯の初音如何と思ひ、霞渡れる空に春雨の降りては、花や咲らむなど、風の便りを待ち詫びつ、蜘の巣に玉貫ける露の景色、柳の糸の動きもえやらぬ。何れ長閑なるながめならざるはなきに、花も漸く景色立つ程こそあれ、舟をながれに泛べて、ちる花をめで、或時は野に出で、彼處の堤此處の山とかけめぐりつゝ、菅の根の長き春日の暮るゝも知らで、夢にすぐせしが、ア、春は今……、彼方の空に去らなんとす、乙女子が母子草摘むべき野邊の末もさもすきなんとす、思へば短かき春の日なりしよ、さはれ思ひめぐらせば、なす事もなく長き日を、あだに過ぐせしうたてさよ、心あらば再び返すよしもがな、されど春は再び留らざるべし、今は只又來ん春を待んのみ又過ふ日迄つゝがなかれ、さらば春…樂しかりし春の日よ。

松山　梯たけ子

げにすぎやすきは月日なるかなと、今更打驚かるゝもことわりなりや春を迎へてし嬉しさは、未だ昨日のやうにおぼゆるに、はかなくも早、限りとなりたるぞうらめしき。四時のうちことにすぐれたる折なりけ

れば眞たのしさはつきぬものから自づから我心さへも浮き立ちつゝ幾日を過しけむ、思へばげに、夢のまなりしよ。あかざりし花は一夜の嵐に、あはたゞしく散り果てゝ、空しき梢に、鳴く鶯の聲さへも何となう行く春をうらむやうに、聞ゆるもなか／＼あはれなるに、まいて老いませる我たらちねの君は、野山にあこがれつゝ、此上なう樂しみまししに、あゝ今より後ちはいかにして、慰めまゐらせん。うらゝかなりし、四方のけはひいつしか淋しうなりもてゆきつゝ、時のうつりかはりを示しぬ、あゝいかに惜みても、止まらぬ春とは、知りながらも、なほあかぬ心地のせらるゝまゝ、かくなん。

和泉　稲原萱子

朝夕めかれせず、雨に風に心をいためしめでにし庭の花も、美はしう囀づり交はせし百々鳥も、根に古巣にと、くれ行く春のいと惜しさよ、又もこん時ぞと思へど、いかにせん、花鳥はしらず、再びとだにきたらざる、ことしの春なるこそ、中々に惜しき極みなれ。年毎にみるはなゝれど何となく惜しきは春の別れなりけり。

越後　井口なほ子

暮れ行く春の、名殘とて、散りにし、花の一ひらを、紙につゝみて、靜子の、贈り來しぬれば、あはれ、殘りの春の、色香を見ばやと、柴門を出でゝ、野べに杖けば、落英地に委して、蘚苔花の衣をつけて、山の端るを飾る、行く手の、枝を遮りて、啼く鶯の音も、いと老たけに、きこえていと哀れに、覺ゆなり。漸くにして、山頂に登れば、はや、南の枝は、離々として、淺き緑に色どられぬこゝかしこと、さまよふに、春を愛づるは、我れのみならずとみえ、暮れ行く春を、惜みてか、浮世捨てし、旅僧も櫻のかげに、獻ひつゝ、たゞ一輪の、花を愛で歌や詠むらむ、只ひとりと、思ひの外、花の香もなきに、胡蝶は梢さりがてに、まよふ夕べに、風ふきてはかなし翅は折れぬ。あはれせめては、あゝ吾れも、去りがたし、暮れ行春の野山を捨てゝ。おぼろに、匂ふ月影てらす、這もさまよはん。

東京　中村八重子

軒端に懸る、さゝかにの。糸にとまりし花一片。春の行衛の片身にか。昨日まで。霞のひなに。雲となびき。大空にゆとまがひし。春の錦は今何處ぞや。愛ある人もしばし忘れ悲しき人を慰めし。色美しき花の木陰は夢なりしが。雨に風に眉ひそめにし詩人の嘆きを外に入相の鐘の響を限りにて無情の風にひらく／＼と。蝶に戯れ散り行く。花にぞ春はとく元の土へと歸へりける。あはれ詩人の波風荒き世の海に世話の道をたづれんと。三伏のあつさ凌ぎしも。怨りなき秋の夜月仰ぎつゝ。果なき思にくれにしも。深雪ふり積み風すさむ。冬をたへしも。鶯の初音に。しるき春の光を望みなば如何に苦しき思とて行く水の流れて跡も濁さぬを。色うるはしく香の清き花の面影なかりせば。誰か望を抱つゝひたすらばげむものやある。この樂しくうれしきも早や青葉の緑と變りゆく夢とやいはん現とや。さはれ來る春毎に。花は梢に咲くべきも。人は年々同じからず。芙蓉の高峰の白雪は消ん時のあるども。頭の雪は如何でか。來る年毎に咲花の。吹く春風に。世の人の樂もなし得で。徒に腰に梓の弓張るを。さぞや哀れと。思らん盛りはよしや短かく潔よからばせめて心やりともなるべきを。人生僅五十年たゞ一醉の夢と過すぞ是非なき人の心にむち打つ汝よ。年毎に匂ふ花よ。汝こそいとも幸多きとはに安かれ。年々に時をたがへで。世の人の啓示となりつなぐさめよ。描きながら吾も又汝の訪ひきし其折にはげみし跡を示さんをあゝ花よ

熊本　猪原みさを子

きのふにも、春のあしたの樂みは、あれやこれやとかゞなへて、ある日曜の日は、あさまだきより、大野が原の、かすみをめでゝ、春のいろは、はてなきこゝちして眺めぐらし、あるは岩れこゝしき、山路をわけ、谿の流れや、峰の櫻、松吹く風もおもしろく、ひねもすうかれあるきては、すがのれの、春のながひも、みしがきこゝちして、いつしか暮れて朧月、春のながめは、これにぞまざるとそゝろこひしき昔の雅人と。古歌吟しつゝ、家路にかへしは、きのふにて、またこむと契れる色を、青葉にみせければ、老たるこゝのはつかしとや、鶯ひ

ゝにうとくなるぞ、惜しき春のわかれや、
かゝなへてまちし深山の花のかもわかれぞなしき春のくれかな

松山　匡子

我が故郷に歸りてより、只自然の景色を友として、閑靜なる、片山里にぞ春の行くえを眺めつゝ、朝には、賤が伏屋にき鳴く、鶯の聲に、夢驚かされて、起出、野暮、山暮、のたり／＼つくし早蕨かり盡し、扨は八手葉抗、摘み取て、文よむしなりともなし、或は、月夜花の香りをさぐり抔して、遊び暮し一日たに心のうさもしらま弓、樂しく送るも皆春のたま物と思ひし物を、今は早や、彌生と過ぎて夏來にけりと時鳥、うの花蔭に鳴く時と成ては春の別れの悲しくて、今一日たに留めたき心地のせられて悲しとも悲しいかに思ひめぐらせはとて返らぬ事なれば、我もこれより家事にいそしみ、又こん春の、朝を待ちて咲き出る花諸共に心の花咲かさなん

北見　中川伊代子

ホゝ春よ〳〵、汝はいかなればかく姿としたたしくなりしにや、げに姿は云はん方なき、かなしみも花の朝月の夕汝によりて、なぐさめられしこと、そもいく度ぞさるに今姿をすてゝ、遠く〳〵、旅立せんとするとや、アゝこれより後は何によりて、こゝろの悲しさをなぐさめんや、しかはあれど、又こん年もあらんにその折は、きたりて今としにかはらず、ひばりたかくなく野に姿をなぐさめてよ、さらばよさらば春よ、なごりはつきれど今はせひなし、

北海道　宮原いすよ子

火桶こひしき冬は、うち過ぎて、春雨に、野山は青き錦をかざり、梅開きて、鶯來鳴き、櫻花ほころびて、日暖にのどかなる春を迎へて、人の心も浮き立ち、梅見、櫻見なんどに、心うばはれ、知らず知らず暮し行くうち、櫻のちるに心づきて、かへりみれば早やおほかたはちりうせて、一ひら二ひら枝にのこりて、春の終を惜むものゝ如し。ちる花と共に、春も今はすぎ去りて、暑さに苦しむ夏は來らんとす、今更、長閑けき春に、別るゝことの悲しくていつも暑き時、寒き時の、來らずして、暖かき春のみならんには、如何に樂しく、人の心もすがすがしう苦しき事のなくて、安らかならんに、されど、今は惜めばとて、月日の人を待つ理なければ、又、つぎの年に來らん春を樂しみに、暑き夏のさかひにもうつり行きて、暑さとたゝかひ、過し行かまし。

熊本　宮本乙子

木枯の風さむく霜枯の前栽もいつしかと春めきてはなやかなる朝日の影もうらゝかに霞たなびく遠近の山のたゝずまひ、いとゆかしく山里の梅も一重八重咲き初めて花のはざまになく、小鳥の聲もおもしろくいつしかと吹く春風にひらひらととぶ花びらぞげに心もとなくなむ、いつかやよひもなかばはすぎて、麓のさくらさきそめて野邊の若草色ふかくこがれ色なるなの花に、とぶや胡蝶のはれかろく霞をのせてひらひらとみ空に高くとび遊ぶかなたにつどふ小女子は、いとふくだみたる髪を春風に二すじ三すじふかせつゝめ手に花かごかゝげつゝ、咲けるすみれやつむならむ「春日野にすみれつむらむ小女子が野邊の若草ふみしだきつゝ」いつしかと春も名殘なうすぎなむとして花の香もいづこにかうせゆき、梢の花も根にかえり立田の里のいとしづけくなしのま白の花びらの空ふく風にさそはれて、ちり行く樣ぞあはれなるあゝ果敢なしや、春よ花はいづこにちり行くやいづこに春はゆくならんかしばしまてかし春の花。

肥後　佐々有鄰子

櫻は山かぜのために花ちりはてゝ。菊池川の塘の眺望なにとなう。うらさびしくなりまさりつるに。岸の山吹のみつよつふたつ咲いでたる。花の色香はいはれどしろき。春の名殘惜しみがほなるに。空に雲雀のこゑたかくきこえくるもなりからあはれなり。風はおもむろに吹て天にはいかのぼりあがり地には雉子の妻よび。ほろゝうつ羽音。のどかにきこえぬめり。今日は彌生のなかばもすぎぬれは。女の友だち二人三人そゝのかして。郊外散歩をくはだてぬれば。いづれの方かよからん。川邊にも野原にも春の名殘の遊びはあるぞかし、いざ〳〵とて。水野川の堤づたひに。菊池川のはき合のあたりにいたりつきけれ

ば。こなたかなたの汀には。目につくつくし。さいたつま。つばなまじりに。春ふかき色。とり〳〵なり。學校の成績試驗もすみて。いづれも心おきなし春遊にうかれつ。あなおもしろやと一人がいへば。二人さけび三人うたひて。うかれあるけるが。おもひがけぬに。春日西山にうすつきて。日暮の景色をそへて。糸柳のはなだの色の。しただるも。春を惜むこゝろならんか。

長野　小泉みづし子

月日に關守なく、行水のしばしだによどみなしと、古の人のゝたまひけん、げにことわりなり、昨日とくれ、今日とくるゝ程に、花散り鶯老いて、今年の春も、はやかぎりとなりぬ、熟々我身をかへり見れば、今まで長き日を、何ひとつなしえし事もなくて、又た行く春を送るべきか、花咲く春はふたゝびめぐり來るとも。人生の春は、ふたゝびある事なからん、其心して、いそしまずんば、老てくゆとも甲斐なかん、いざや是れよりは、心の駒にむち打ちて、家事のかたはらには、學びの道を分け行かん。

神奈川　森田花子

雪間の若菜摘める頃より　雪をあざむく梅の花やみにもかくれぬ香なゝづれ、霞たなびく遠山にかゝれる雲と見し、花の朝日に、にほふ、うるはしさ、夕べに、むせぶ月のかげ、身も心も、空になりて、小蝶と、ともに、結びし、ゆめも一夜の嵐に、やぶられぬ、今はたのみし春風ぞ、うらみなる、花に霞に吹きさそひいづこにや、さそひ行きけん、さはりし袖に、とめし香も、きえうせて、ちりにし花の木のもとも、雪と見るもつかのまなり、行く春を、流るゝものゝしがらみと、とまらぬ、ものか、惜めどもかひぞなき、天さかる、かなたには、嵐の花のそれならで、ちりうす君も、ありときく、花はまだしも春に逢ん春はまだしも花さくあれど、人の命は常ならなくに、

秋田　古瀬りく子

鶯もなきて惜めどちりかゝる、吉野の川のはな筏春をながしていたづらに、今日も行くらん夕ま暮聞ゆるかねのひゞきさへあはれを知らぬこゝろなき、人やうちかと思はるゝ、都大路もこのごろは淋しさそへて青柳の、いとにのみこそ春のいろを結びとめてや見えにけれしかはあれども奥深く、尋ねいるさの山ざとはすゝな麥生や疇にいでゝ暮れ行く春の早蕨の、おり〳〵もえて何となく花も及ばぬ賑はひをみやこのひとの知るよしも、無き樂しみもこもりけり池の蛙もさそふみづの有らばいなんと思ひてや、みを浮きくさの上にしも泣き明すこそあはれなれむかしの春を思ひでに、若代の事をくりかへすひとり小ごとをならしつゝ調もふしもよしあしの、わかぬなにはにとゞめたる舟は港にあるものをはるのゆくゑやいづこぞと、問へどこたへずくちなしの花より外にものはあらじな

故郷の友に試驗成績を報ずる文

天

羽前最上郡眞室川村新町　遊田美江子

四方山の花も咲きそろひ、浮香天地をこめ、柳の糸も長閑にうちなびき小鳥の歌もをかしう聞きなさるゝこのころ、定めし故郷の山水の春深きなかに、靜に詩想を御こらし遊ばさるゝことゝ浦山しく存候、さて御存知の通り私は今年が卒業の期に候へば、其忙はしさ一方に候はず、人はうかるゝ梅見にさへ行かで引こもりひたすら學の道にいそしみしがその甲斐ありて、席次番號はイロハ順なれば相分り申さね

ど、通約甲點にて目出度卒業いたしたるわけに候ふあひだ、御喜びなし下され度候。答案にて最も殘念に候ひしは、理科にて候、五十五點とは餘りと言へば情けなき次第に候らはずや。いつれ私は先天的理科にはうときに候はんと、今更乍あきらめ申より外之なく候。今や試驗全く相すみ申候まゝ、四五日後は是非歸鄉いたしたき考に候へば、答案は其節ゆる〱御目にかくべく候。尙歸鄉の節は、秀ちやんや、好ちやんなんどをつれて、櫻見にも御同道いたさんと今よりたのしみ居り申候。早々かしこ

地

東京市神田區今川小路二丁目十六番地　中村八重子

花さき風長閑に、そゞろ心浮きたつ頃と、相成候處君樣には、御恙もあらせられず候や、私事もかはりなく暮し居候まゝ、御心安く思召被下度候、扨て先つ日は、このたびの試驗成績是非にとの、御文たまはり、不束なる身のいと面はゆう、御答へ申すべも覺えずなん、同じ學びやにありしより、よろづ人に遲れがちなる身の、まして秀才の君多き此の校に入りしよりは、いやましにおくるゝばかりにて、才なく智なき身をかこつのみに候ひしもかくては、曾て修業せし學校の名を汚し、かつは故鄉の恥ともなるべく候まゝ、腑甲斐なき身ながら、つとめはげまば、など龍のあぎとの玉取り得ぬるとやあるべきと、只管いそしみ申候ひしに、其の甲斐ありて思ひかけなうも首席てふ、高根の花得し如き名給はり候まゝ何卒御安心被下度く候、これと申すも、昔教られ給ひし師の君の植え給はりし種の實り、君達の折々の、花や紅葉の、御文もてはげまし給はりし、甲斐ありての事と、有がたき惠のほど身にしみ〲と覺られそゞろ感淚に吳れ申候、猶此の上も勝ちて甲の緒をしめよとの言葉、あだになさで、一しほ心の駒にむち打ちて、此の月の桂誰が手にも渡すまじう、心にちかひ居候ば何卒雨の朝風の夕、句はしき御文もて、おろかなる身御はげまし給ひてよ。先づは拙き筆もかくなん。あなかしこ

人

越後國新發田町字本村寺町浦　佐藤菊野

過ぎ行く駒の足早く、なれし鄉里を後にして、あか

ぬ涙に袖を別ちしは、昨日けふと思ひしに、はや二とせの星霜を經ぬ、契し言葉忘れたるにはあらねども、暑さ寒さの音づれを缺きつるは、今更詫び言繰り返すも詮なき業なれど、去りとて餘りつれなき仕打ぞと、思召のほどもはかられねど、千歳かけて隔てぬ妾が誠心に免じて、平に宥させ給へかし。

雪深き下越の限も、いつしかのどけき春の景色となり、四方の草木も青み渉りてしけふ此頃、ひと／＼は籠を携へて鴻沼ケ浦に若菜摘み、雲雀舞ふ青野に終日遊び暮すなど、さま／＼の樂もあらんなれど、妾は終末試驗とて、一さいの事を斥けて稽古に勵みし甲斐ありてか、思もよらぬ優等の成績を之て全科了へ候ひき元よりふつゝかもの、せめては驥尾につらならば、幸多かりなんと、案じ煩ひ侍べりしに、この光榮にあひしは一重に、姉の君より賜はりし訓誨による事と思ひ侍るになん。

窓外春雨のしきりなる夜半、惠深き御なさけの程を今更に思ひ出て、其二歳の昔をくり返すや賤の小田巻つくるよしもこれなく、なつかしく存あげ申候、何卒この後とても幾久しく御心添下され度ねんじ上申候、かしこ。

熊本　日高かず子

此程の御玉章にて、恙なうおはする御事承り嬉しくぞ侍る、扨もこたびの試驗の成績のよしあし、何の方を聞え奉すべきかと、まちに待ちしに今日しも公に示され侍り。此處の梅彼處の花の便をよそにして、呉竹の夜となく晝となく、いそしみしるしにや、はからずも優等に數へられ、此一年がほどの學の業もやう／＼卒へ侍りぬるは、拙き身のあやしきはかりになむ、こはかれて、人傳にも文の便にも御心添へはけまし給へるによることゝ、ひたふるに嬉しくて、なこかましうも別紙成績のうつしをとりそへて御覽せさす、筆の跡の今も猶心にまかせぬ身のはつかしさよ、來ん卒期までは、日數も侍れば、殘の花をたづれ、都の春の景色も、あとより聞ゆべくなむかし。

東京　松川ちよ子

承り候へば御許様には此度首尾よく御及第遊ばされ、ことに、御優等のよし、さぞかし御滿足の御事と御さつし申上候。さて、私方の試驗は、去る廿日にて終り申候、つれ／＼文机の塵も拂はず、硯の海もかはきがちなる身には、もしや落第にても致さばと、ひとり心をなやましこぞよりはよほどつとめ申候處、それがあらぬか、此度は殊の外成績よろしく、誠に嬉しう存じ候、なほ委しくは別紙に認めおき候まゝ、御笑覽までに御目わづらはし申候。

もはや業を卒へ、久々にて、戀しき故郷にかへり、なつかしき君と語りあふも、一とせの春秋と思ふにつけても、此後は、いよゝはげみて御許様のやう、よき成績をゑて、歸らまほしくと、それのみあけくれ念じをり候。かしこ。

兵庫　飯島淳子

ひま行く駒の足はやく、御許様と御別れ申してよりまだ一月あまりのほどゝ思はるゝに早第一期小試驗は夢のうちにすみぬるぞうたてき扨も其後西と東に身はへだつれど互に心は變りなくまけず劣らず勵みあひ試驗成績わかりなば、早速御しらせ申さんと兼て約せし言の葉

の忘れ難くて有の儘別紙に寫し、御目に懸け候へば御許樣の御成績も何卒御示し下され度、ひたすら待ちあげ參せ候此度の試驗成績はあまりおもはしからず候へども、入學後初めてのをとて萬事土地の人に先んぜられ殘念に存じ候につき、今より第二期を相まち申居り候かつて他郷に出でし事なき身の彼是多用に取り紛れ、意外の御無沙汰いたし候段何卒廣き御心に赦し給ひてよ末筆ながら、御兩親樣はじめ御皆樣によろしくよろしく、御傳言下され度ねがひ奉り候先は右まてかしこ。

橫須賀　岩橋花子

類なかりし梅か香も、昨日の夢と過ぎはてゝ、遠方近方山に棚引く霞も、いと麗らかに、櫻の花こそ時を得顔なる折柄御許樣には、如何に過させ給ふにや、峰子の君等と袖ふりはへて、なれにし野路の、菫や摘み給ふ、胡蝶の夢や驚ろかし給ふと、御なつかしさ堪え難くなんさて妾今度の試驗、恙もなく及第し侍れば、御心安め給はりてよ、知らせ給ふ如く、いともおろかしき性質なりければ、都に登りて朝な夕な學びの庭に通へばとて、おくれ勝ちに侍りしか今度の試驗もいかゞと思ひわづらひしが。師の君始め友の惠みにて恙なく侍りき御まへ樣には御兩親の君の下に家政の事々勵み居給ふよし、女の道の本分ぞかしつとめ給へや、御いとまも御在し給へば故里の春の景色、もらし給ひてよ、末ながら御兩親の君へもよきなにをとり給へかしまづは右までかしこ

肥後　秋吉輝尾子

涙の露をかたみにとゞめて、汽笛の聲に袂を別ち參せしは、昨日の如く覺候へど。はや一年あまりの夢路とはなり侍りぬ。さるにても君には恙なくやおはすらんいと心元なくこそ。花の朝月の夕いかにと心に浮ばぬ日はこれなく候へども、學業のしげきにまぎれ。御音信も怠りがちなりし。罪は何卒ゆるさせ給ひてよ私事も其後無事にてひたすら學道に心をそゝぎ居候うち。早も試驗すみて成績發表となり侍れば。もとより鈍才の私なれば、いたく心配いたし居候處。おもひしよりも劣つ等にはいたり申さず首尾よく及第いたし申候。御意やすうおぼしめし給りたく候。拙きはしり書にて。御しらせまでかくなんかしこ

伊豫　たけ子

うらゝかなる春景色に、百千鳥の聲さへも、いと樂しげに聞ゆる今日此頃、まいて君には、幸みちたる御家庭の内に、いかばかりみ心長閑におはし給ふらんと遙に御羨ましう存候。學びの道繁き身にも、なほ君と共に、睦まじく敎草摘みてしこその、樂しさは、忘れがたくてなつかしき故里の空のみ打眺めらるゝ折しも、いと懇なる御消息賜りなる嬉しさよ、さても隙ゆく駒のあがきは、いと早くてはや此都に一とせを過せども、學びのわざは後れがちなるをいかにかひなしと、思し給ふらんこたび終へし試驗には、幸及第てふ名を得て、しろし文たまはりつれば、よそ事ながらみ心安うおぼしめし給はり度なむ、されど、成績の思ふやうならざりし、口惜しさよ、是も日頃の怠りの著れし事なれば詮方なく、今更恥かしう存候得共、茲のこと聞えまつらんと、袂別の時ちかひてし言の葉も、あれば報せとの仰せには、いなみがたくて取あへず別紙成績表御目にかけ參らするになむ、一つ學び舍の折よ、いつもながら、打勝れさせ、一の位をのみしめ給ひし君の、御覽じなば、定めて笑はせ玉ふらんと、御恥かしうこそ、かしこ。

松山　みなは子

花鳥の好時節と相成候處、御許樣には、如何過させられ候か、定めし野邊につくしなど物せられつゝ、歌よみ給ふ、しをりともし給ふらむと、御羨しうこそ、當地も昨今は、花の盛りに候へども、故郷戀ふてふ、病ひになやめる身には、御地の空、忍ばれて、一日も早く君の御あと慕ひまゐらせむと、其のみ樂しみ居候、扨かれ〳〵、御頼みの試驗成績表いよ〳〵發表と相成候、例により委しきをは示されねども、同級生には落第一人も御座無候、御許樣の點數はいづれの、學科も皆甲點しかも御優等にて級中第一の御成績に候まゝ御嬉び申上候、御兩親樣始め御兄君にもいか計御嬉びの事と、乍陰御察し上げ、私事、此度はよくも調べざりしかば如何やと、心を痛めしが幸にして恥かしき後れ

も取らざりしこそ偏に師の君の御惠みと存候明後日は、卒業式にてふつゝかなる私卒業生の惣代として、御許樣に代り皆々樣の御前へ出ればならぬ事と相成、愚かなる身の、恥かしう候へども、同鄕人のかく一、二、をしめ候事の肩身廣き心地もせられ候まゝ、心をはげまし見苦きもの無樣にと此頃は大に練習致居候、いづれ委しきことは歸鄕の上申述べく、先は取急ぎ御報までかしこ

和泉　福原茲子

吹く風もいと長閑に隅田堤の櫻花も今を盛りなる此頃、君にはいかに過させ給ふらん、妾は例よりもいと健やかなる嬉しさ、まして、常に御心にかけ給はりしこたびの試驗も、別紙成績表のごと、幸ひ優等の中に加はり侍りしは、いよゝ嬉しうてなん、こも親しき君の御かげにそよるなれと、感じ居り侍り、元來しろし召す如く、兄をおきては他に同胞とて侍らぬものから、只管君をのみ姉君と頼みまゐらせ、振分髮の頃より、幾年月同じ窓に螢雪の苦を共になし侍りしに、去年の春思へはさり難き事のため君は一人故鄕にとゞまり、われのみ都へ物せし其後の心細さよ、されど雁の玉章のたえず行きかふは、せめてもの心やりに思ひ侍り、倚ほ此上ながら、御心そへの程ねきまゐらせ侍る、またねもころにも、折々わか家へおとなはせ給ふとか、故鄕より申まゐり侍れば、こもあつく御禮申上侍るになん、まづは試驗の成績御報いたしたくかくなん、かしこ。

大阪　藤田春江子

御文の樣承りぬ、とく返り言聞えさすべかりしに、漸々今朝發表せられしなれば、惡しうな覺し給ひそ、兼ての御諭しもおはせば、ひたすらはげむものから、此庭に、學びしより始めての、試驗とて萬に心おくれ、いと覺束なく思ひ侍りしな、師の君の御情や深かりけむ、人並樂しき式に列なる事となり侍りしよ、諸共に悦び給ひてよ、別紙は、成績表の寫になむ、習字の得點いと少きは、例の例の事ながら面赤らむ心地にこそ、唱歌は年の始お庭の松蔭にて共に唱ひし「太平曲」なりし、君と共にある心地してそゞろに唱ひ終りぬ、得點の多きも宜とや覺し給ふらむ、來む二日式すみなば、やがて、歸り侍らむ、ふりはへて去年のごと、後の山の椿折らなむ、土筆とらなむ、さて積もる話も聞えさすべくこそ、あなかしこや

北見　中川伊代子

去年花のころ、別れまゐらせしより、昨日今日と思ふまに、早くも年はくれて、今年もはや四月と相成今更に年月のいと早きに、おどろき申候、さても其後おかはりもあらせ給はずや、妾はいとすこやかにて、日々學の庭にいそしみ居候まゝ、心やすうおぼしめし給はり度候、されど何ごとにもおくれがちなる身は、今度の試驗いかゞあらんかと、ひそかにきづかひ居候ひしが、意外にも成績はまづ中位にて及第いたし候まゝ、はゞかりながら、御安心ねがひ上候先はみぎ御知らせ迄。かしこ。

肥後　佐々有鄰子

去年の彌生の末の空に袂をわかちまゐらせてより。月日に關守なくはやくも一年となりぬ。門での昨年は。故鄕に錦をかざり駟車にのらずばかへらじものとちかひしか。怠心のふかくして。此の期の學術試驗とは成り侍りぬ。ゐは玉の夢のうちに。花もちり。月もすぎて雪さへいたう降つもりぬ。火桶かこむも。何かしの卿の桐火桶ならば。眠りをのみ催して。終日書籍をとりはなち侍りしものから。文このむといふ紅白梅花も。ちりかゝりたるに驚き。學校にはせゆき勉勵せしかど。おもはしからず。教師の君たちの袂にすがりて。やうやく及第の人數にはいり侍りぬ。席次の寫眞一枚を今度の紀念におくりまゐらず。笑ひて留置たまはらば幸甚

長野　小泉みつじ子

門田の雪もむら消えて、四方山の眺めも、長閑に相成り候處、御前樣には、御けしき美はしう渡らせられ候由、何より御目出度き事に存じまゐらせ候、さてとや先日は、いとも御親切なる、御手紙たまはり嬉しう拜誦仕候、私こと此度の試驗に付ては、一生懸命、夜の目もあは

さす、勉強致し候得共、平常愚の私故如何あらんかと、心を痛め居候折柄成績表かゝげに、相成候を見れば、意外にも甲點にて、首尾能く及第致し候間、御安心下され度候、就ては、一寸閉校前に歸郷致す、心組みに候まゝ、何れ御面會の上、つもる御物語り致さんと、樂み居り候、先は取あへず御報まであら〳〵かしこ

神奈川　森田花子

都も今し、花のつぼみもほころびんとする、折柄歸雁にならひてか春を、見すてゝ此都をたちゆき給ひぬ、さてもあまり、故郷をいそがれし事よと、御うらめしく存候、御心にかけさせながら猶こひしう思さるゝまゝにせられしをさらでだに、參らすものを兼ての御依頼の通り、別紙の試驗成績御報知申上候、表の如く、いつも天の星の光をうばゝせ給ふ御才智のほどゆたかなるこそかへす〳〵も、御うらやましく存候へ、行く末賴しきはこの君と、師の君初め誰とてか稱へぬ者はなく候、この表を御兩親のみまへに披かせらるゝ御うれしさいかばかりと認むる筆もおどる、ばかりに候とりいそぎ、御報らせまでかしこ。

石川　岡部りう子

度々、御玉章を頂き、何日も乍からの、御親切誠に嬉れしう、拜見致候、承り候へば、御とり〳〵様、御すこやかに、渡らせられ候、由目でたく祝ひ上候、就ては、かねてより、御心配被下候ひし、試驗成績只今發表致され、あなうれし、御なさけにて、首尾よう、及第致し誠にうれしう、御座候、倚ちかき内、一泊がけに、歸宅致度う、御座候へば、其折は、御めにかゝり、くはしい、御はなし、致可く候、先は右とりあへず、御通知までかしこ。

短文　（無題投稿隨意）

よふ子鳥　東京　河合象子

朧月のをかしき、宵のほとに來たりける、人の立なから、歸りにたる、名殘いとをしうて、中空をうち眺れは、霞めるよの、あはれいはむかたなし、竹の林まつの木立など、たゝ薄墨に、書たるさまに、にほへるはいかなる繪工の筆も、およはじと思ふにそ、の木立のあたりに、呼子鳥のしは〳〵鳴ける、今しも道ゆく人を、わかずとや呼かへすならむと、思へば、賴もしき心地せられて、庭の苔道立ならせは、足もいとう、なやましくおぼゆれど、影たに見えす、更行鐘の音の、ほのかにきこゆるのみなるに、かひなの鳥の名やと、うとましうさへなりぬ。

山家　越後　井口なほ子

垣根をめぐる谷川の、清き流れに、魚を漁りて、樂しき夕の膳に、向ひつゝ、軒端の山の木立に、塒をいそぐ鳥の姿をながめ、水のながれに耳を澄ましゐれば折から、峯の松が枝より、月さし昇りて晝をあざむくが如し。あゝかゝる、山家の、樂みいかにぞや。

峰々谷々此處かしこ錦おりなす紅葉のかげをうつして隱くれたるこゝしき岩根をめぐりては白玉を散らしやさしき歌をうたひつゝ流れ下る細谷川よ、とて

へ迄も清らかにて、物に滯ることなきを、吾が心ともがな。

茜さす、夕日は西に入りはてゝ、杣人の、斧の響たえ、風かなしく吹き、老松に木傳ふ、ましらの聲も、ものさびしき、あはれなるに、山家の親子等は、星さへもるゝ、伏屋も、金殿玉樓の、思ひして、心よく住ふ。

彩雲峰にかゝり不斷の音樂谿谷に聞えて求めぬ富は胸裡にみち〳〵ぬ。

あはれ、樂しき山家、あゝ吾れもいかで、浮世の風波に、たゞよはされて、あやうき海をたどらんより、峯にほゝゑむ、花のかげにねむり、谷間に歌ふ鳥を友とし、招く潮の心のまゝに、ながめつきせぬ奥山の浮世よそなる樂をこそいとゞ望ましけれ。

漁士の生涯　　東京　石川藏子

黄金色の夕陽海面を射り、鳴き倦たる鳥は既に影もなく、眞帆片帆卷く舟人の歌、埼に急ぐ鵜の聲も最忙數頃、夕ばゑの光をあびつゝ、今日の獲物の多きにや魚籃重げに、こゑかしましく、家居を差て歸る漁士柳影遙か欄干せし岬に出で歸りを待てる彼が愛子笑もて迎ふ彼が妻！心盡しの此夕げ如何に樂しく味ふらむ、美衣美食希望もあらぬ彼が身は、只己が家有のみ、妻子あるのみ、げに清く高く美しきは漁村の生涯には侍らずや。

女鑑を喜びて　　松山　たけ子

開けゆく世につれて、雜誌てふもの、いとさはにあれど、わきてなつかしきは女鑑の君なる哉、都遠き我家に迄はる〳〵と訪れし時の嬉しさ、何事をも打捨てゝ、繙かるゝよ、あはれ貞淑賢良なる婦女を養成せんとて、道を修め德をつむべき事より、及の學藝家政のわざ等何くれと至らぬくまなく、懇に敎へ導かるゝを、讀みもてゆけば、そゞろ身にしみ渡りてなむ、殊に此頃は、紙數をも增して、妾らの爲に改良を加へられしこそ、いと嬉しけれ、いでや此文を師とも仰ぎ、慈父母ともしたひつゝ、眞の鑑として、わざを習ひ、心の玉をみがき究めばや。

可愛の子　　伯耆　樋口つる子

ほんに私がわるくありました、あなたに、まかせたこのからだ、打つなりと、去るなりとなさりませ、天地の間に、夫といつたら、あなたより、子といつたら可愛の武より、ほかにはござりませぬ、何にも私の不束からとはあきらめておりまする、がさりとはあんまりひどいではありませぬか、鬼でも子は可愛とやら、この子は何ともおもひませぬか、只子故の闇にふみまよひ、かきくれる涙の雨がこれが一番、つらいのでございますと武をひざに、いだきあげ、よゝとばかりに、なくのであつた。

汽車　　羽前　遠田美江子

汽車は故鄕迄きた。一寸よりて御父上樣や御母樣に久しぶりで逢ひたいは山々だが、いたし方がない、只なつかしい家を見て居るばかり、忽ち村はづれの踏切まできた、其所には澤山の男の子が汽車を見て居る其中に—なつかしい弟も。妾は溜らない大きな聲をあげて、『良ちやん！』と叫んだら驚いたやうだが上を見て、『アラ姉樣が……』言もあへず少さくなつて山陰に……あゝ汽車!!。

月夜の櫻花　　大阪　桝田金子

霞に暮れし、東の山の端高く、さし昇れる月の光に催されて、そこは

がとなく、そゞろに立出たる、嵯峨野の春の朧夜のあはれさよ、風をもむろにふきて、誰がすさびにか遙に聞ゆる笛の音に、うたゝ其世を忍ばれてなん、並み立てる老木の松は、濃くけぶりて、まゆ造るみぎはの柳は、玉なす露をかざして、そよふく篠の小笹は、春の樂をや奏づらん、散りも始めず、咲も殘らぬ花の匂ひに、桂の光はおぼろ〳〵に、ゑへるが如く、小倉の岑は嵐も知らず、靜に眠れるに似たり、蔭をめぐる大井河は、さゝなみ清く月のみ舟の影を浮べて、井ぜきにむせぶ花の白波、聲さやかなり、とある汀の小舟に乘じて、たゞ中に漕ぎいづれば、風冷やかにふきて、花の香いよ〳〵芳し、あはれ心いや進みに進みて、おかん所を知らず、肴たうべ盡せど、花のあはれは中々に、匂ひあひたる夜目遠目の宜しき、邊りのたゞずまひ、何に譬へつべうもあらぬを、嵯峨山下し吹くからに、ほろ〳〵と散りかひ亂るゝ花の白雪、襟元にま袖にはふりて、春の形見としみぬべく、千鳥が淵も瀨に埋む共、誰かは深く感けざらんや、花の木の間を渡ると見しは、あやにくなる浮雲のおほひきて、暗に落ちくる雁の一聲、我が歸り路をつながすに似たり、岑の白雲翅にかけて、常世に歸る汝が旅路も、花の別れは一つにやと、思ふ物から、尙めづる心の、いやまさりて、かくながら莊周が夢も、結ばまほしう、あはれ、心ゆく夜のさまなりけり。

肥後　德永廣子

なりふしの跡はあまたありつれど、わけて春の夜の盛の花に、嵐なく月の光にくもりなき景色にしく物はあらじな。昨日今日ふるともわかぬ春雨の夕つかたより。名殘なう。ばれわたりければ。こもりがちなるはうしとて庭に立いで待ほどもなく東の山の端より。いとうらゝかなる月の。かすみながらにさしのぼり。けにおもへば今宵こそ彌生の望の夜にてありけれ。光は秋の空におよばれども。照もせずくもりもやらぬ影は。軒をおほへる白雲に。まがふばかりさきにほへる花のひまよりもれ出たる顏。なづかしくおのづから花の色さへすぐれてゝけ高き風情いはんかたなくなかし。かくてこそ百花の長と世にめでらるゝもなかしけれ。朝日ににほふ姿はわがしき島の大和心にさへたとへられつるもげにことわりならずや。一しほかん深うおぼゆ。愛のまゝにかくなも。日ならねどゆかしき春の月影ににほひもなかしやまさくらはな」このけしき外國人に見せなましいとゞゆかしき大和こゝろを」

下野　菅德子

深山のゆきもやう〳〵とけそめ、野邊のわか草萌えいづる頃としもなれば今日かあすかと老も若きも待ちわびにし、甲斐ありてこそあれ千株萬朶の櫻花は燦爛として、錦繡を織りたらんごとくにさき出だし櫻はあばれ、皆人の目をなぐさめ氣を晴らさしむるよすがなりとやいはざらん、殊に月の光のさし添ひたるながめこそいと興あるものよと親しき友どちあまた打集ひ出づるとはなしにあしにまかせ、家を後にあくがれいで菜公園に至る。

ゆく〳〵彼方此方を、見渡せば雲かゆきかとのみまがふ花むしろ月はおぼろにかすみわたり花と花との間をもらぬまで、咲きみだれぬる中貫きてあしなみそろへうたふ唱歌の音たかやかに、あちこちの山々にひゞきて山彦高くこたへ面白さかぎりなきこゝ地、こそしたれ、ふとみちの傍へをながむれば、築山の岩かどより落つる瀧は水音たかくさへ渡り、白布をぬきみだすやうなり板庇なる茶屋ありたれど晝の間とはまことちがひて、物うくもこゝへもありと見うけられぬあやれ月は山の端にかたぶき春風も、夜更けぬればはだへに寒ぞ覺えぬる犬の遠吠さへ手に取るやうになれば、いでかへらましとおのがむき〳〵枝手折り肩にしてかへる、これさま〳〵の資料となるならめ嗚呼月雪花のながめはさこそあれなどいふも實に、宜なる言葉にこそあるなれ

肥後　佐々有隣子

二月十一日の女鑑教の庭。撰歌の天賞として。大林弘一郎編の中等國文學史を賜りけり。ひもときみれば第一篇上古の文學より第六篇江戸時代の文章にいたりぬ。くりかへし見ておもへらく。上古の文學より江戸時代の文章にいたるまで。御代御代のふりあればしろ人をたより

てしらべはやとおもふなりから千々波幡子刀自勧きまゐせり。先望なれば。此書籍をとり出て。見せまゐらすれば。刀自きみにも一月の撰歌天賞に此の紙を得つとありければ。刀自のもとにかよひて敬をうくることゝはなしぬ。あなうれしとおもふものからかくなむかしこ。

田家の春

岐阜　白川貴子

見わたせば柳櫻をこきまぜてとやらむげに麗しきは都の春にこそさはあれこの天さがる鄙とてもまたおもむかしきふしのなきにしもあらじ

遠の高峰の眞白なるはいはずもあれ近き岡も北陸はまだむらむらと殘れる雪のまゝながら棚引き初めし霞の奥に消えはてたるにまつ春の兆あらはなり賤が垣根の梅もほゝ笑みてゆるく吹く東風に清き香をたくふ頃は早や里の少女等袖ふりはへて野邊に若菜をあさり小川のくろに根芹ひくなりけり

雪間よりあさりし若菜ぞめづらしきいまだかひなき二葉なれども

朝な朝な霞を分けてうらうらとのぼる日の光は氷にとぢられし谷陰までもさしにけん高きに遷る鶯の春をむかへし物若き初音の今日にあへるうれしさ

たゞ一人きゝてしをれは鶯の谷より出でしけさのはつ聲

さるにこの鶯はつひに去りやらで近き岡邊にて朝な夕なのしらべ次第に上手めきたりさながら我が家にかよふ心地せられてなん

朝毎に山鶯のなく音をば我がものがほにきくぞうれしき

四方の山べにかゝりし霞のいよいよ深うなり行きはてはかなたに一とむら茂る森こなたの賤が伏家までもさながら薄絹をへだてゝ見るが如く軒よりは玉水のほとほとと落ち初めぬさては春雨の降り出でしなりけり春雨は草木をめぐむ母とやらん其雨に野邊のみどりは色まさり咲きつゞきたる梅花もやうやううつろひ方になりぬ

ふく風にあへなく散るも梅の花我が書の葉に匂ひのこせよ

梅の精いつしかと待たるゝ頃ぞ賤が身にとりて春の内の春なりけり

此の里人の氏神と仰げるはほど遠からぬ山の麓の檜杉の木立深う繁げる内にさゝやかながら淸げにしつらはれたる御社なり今日しも春の御祭り催さむとて朝まだきより立ちさはぎていとさうざうしやがて晝頃ともなれば少女等は赤きを晴れと着かざりて遊ぶもをかし今や村の若き男の子等神の御前にて神樂獅子あげんとてねり行きまよ北田舍びたるはまぬかれねど狩衣木綿襷のまなびをほくほくしからず太鼓打ち立て笛吹きならし行くに若き者のみかは年老いし翁も孫の手ひきつれやはらかき春の日に照らされゆるき東風に送られて麥畑つゞく田舍道を御社に詣づるさまぞ見ゆるかくて夜に入るまで笛太鼓の音絶えまなく聲高の謡歌は高くめぐらせる我家の垣の内にも聞へ來りぬいかに村人は心ゆくばかりに樂しき一日なりけんかし

村人が神の御前にぬかづきて祈るや年のたり穂なるらん

かくてめづらかなりし野邊の若草も時すぎて小草花さく時は來にけり水淸き小川流るゝあたり黄金色に匂ふたんぽゝゆかりの色なつかしき菫草さては麗しきれんげ草などとりどりに咲きほこりたる野邊に立ち出づればそこはかとなうそゞろありかれてなんなつかしき菫摘みとりつゝかざしとしなどしてたはぶるゝもをかし

かざしたる花やいかにと見まほしく野澤の水を鏡とはしぬ

思ひやる都にては後る花のなくにしとまるものならばわれ鶯になは人々のかこつ頃こそ此のわたりの花盛りなれ山の端のひとむらど棚引く雲かとあやまたれ岡のほとりに咲けるは殘れる雪かとまとひはた賤が伏家の軒端にも咲きみだれて藁ふき屋根のほの見ゆるなどさまざまの眺めいと艶なりあるは月おぼろおぼろと四方の景色さだかならぬほどに霞める宵一人しづかに柴の戸をして立ち出づれば山の姿も野邊のさまもそれかとのみにてたゞしるきは匂へる花のかしこゝにひとむらふたむらけしろきさまさなから襷物がつきてれふれるやうなりてりもせず曇りもはてぬ春の夜のげにや朧月夜にしくものあらしなどつぶやきつ花の本去りかぬる折りしも風はふくとしもなきに二ひら三ひら袖に散り來しぞまたなくあはれなるに筧の水さへ

ほのかにさゝやきぬ

月かげのおぼろ／＼と霞む夜にあはれひとひら散る櫻かな

此頃ぞ賤のをとこをみなは苗代小田のすきかへしにいとまなくてなかく／＼に花にうかるゝみやひ心も出でぬならしやがて苗代田に水引き入るれば其夕より早や蛙のここころえがほに鳴きはじめぬ春雨のしき／＼と降出でし日は玉水の音さびしき窓のもとにつく／＼と書讀みて古へ人をしたひあるは都の友に贈る文をかきはた花の上いかゞあらんと心をくだき風な吹ぞと祈りしかひもなう夕暮より嵐とはなりぬ待／＼てよう／＼咲きつるにあくまで見るほどもなく一夜の嵐に散るか限りなううらめしくてなんあくる朝とく起きてまつ心もとなかりし庭の櫻をとへばあはれ／＼大方根にかへりてなごりの雫ほろ／＼と梢よりこぼるゝは涙かとあやしまる水かさまして苗代小田の面にも眞白く浮きて後の盛りをこゝに見せたり水の上に散りつむ花を見る折そはじめて風は嬉しかりけると古へ人の云ひ給ひしはいつか一度は散るべき花にしあればいかに惜みてもかひなかるべしされはせめても二度の盛りと見るべしとの心ならんとおぼえてあはれなり

まちわたりさくと見るまに櫻花夜半のあらしに散るぞかなしき

うちわたすをちこち眺めやれば麥生田のみどりはいや深うなりうちまじる鈴菜畑はさながら黄金を敷きしやうに咲き滿ちて今や野邊は錦織りなしたりこのころまつ目にいるは伏家の軒端高うのこんの雪と見ゆる白き李の花青葉ましへし紅ゐの海棠の花なるべし家毎のほとりに此の花の木一本二本つゝあれば櫻の後の見ものなり

うつくしさ何にたとへむ我が園の雨にぬれたる海棠のはな

宵の根の長き春の日もやう／＼西にかたふき初めし頃門邊に立ち出でゝ見ればいつしか苗代田は宵みわたり夕日にはえたる色つやゝかなりことわりや今日は日れもす鳴子の音ひきたりいかに賤の童もひまなかりつらむ外山の小田耕して行きし男をみれば今しもやう／＼かへり來るなり御佛にさゝけん爲にや清けなる白躑躅にたく火の色にもにたる紅つゝじ折りそへて持ちたるもなつかしきにわざ／＼徑まはり來て惜しげもなう二枝三枝分ちめくみつる心ばせのやさしきいみじううれしき事になんありける

賤の女かわかちめぐみし白つゝじ清き心の色にやあるらん

後ろ見送れば其入り行く家はほど近くして例の藁ぶき屋根に柴の折り戸いたく荒れたれど其垣に匂へる山吹の花よ七重に八重にさきみだれたるうつくしき行きて柴の戸おとなはば今の賤の女は一枝手折りてみのひとつだにと云ひてさし出しやせんと思ひやりしもをかし

都人來ても見ませよ山里も春は春にてたのしかりけり

夕もはや山の麓より次第／＼にかゝり來て小暗うなりぬ蛙の聲はいやしけくなりゆくをりふし[illegible]るは苗代田の水見にと人の來つるなるらむ

暮れゆけば苗代小田に住む蛙かしましきまでなきしきる哉

すゝなの花もやう／＼こぼれ初め池の汀の松が枝にかゝる藤波ゆら／＼と春もかぎりぞとおどろかせぬ朝な夕なにわれをなぐさめし山鶯も青葉がくれの聲ふりて春と花とのゆくへをしたふかといとあはれなりいかに藤波のはひまつはるもいかに鶯のなきとゞむるも暮れゆく春と散る花はとゞまらざりけりあはれ春の行方はいづちなるらん

短歌

軍艦　　和泉　福原菫子

海ゆかは水つく屍と歌ふらんみ軍艦のますらをの友

陸前　阿部初美子

新らしき天の福音を傳ては希望の潮むねにみなぎる

春姫がうたけの樂の響かも小笹にそよぐ春雨のおと

濃紫みなぎる空に月姫がとばりかゝげて美しのまみ

こたび征露軍醫としていでたつ
大阪醫學校教諭なる兄福原義柄を祝ひて

和泉 福原菫子

いさよや御劍はきて梓弓引返さしと勇むかとでは
我とても心雄々しく送らなん益武雄のいろね持身は

祝海軍

秋田 古瀬りく子

勇しき皇らみ國の軍艦むかふ海にはたつなみもなし

風 同

天津日の光さへぎる浮雲をみな吹はらへいせの神風

餘寒月

三河 長尾さだ子

梅が香は袂ゆかしく薫れ共まだ影さむし春の夜の月

山家春

東京 小島ふさ子

山靜か月も霞に匂なりいさとめこかし花のしたいほ

東京 桑原茂代

大君のみたてとなりて勇ましく花とちるらむやまとますらをを

月前の梅

下野 井上滋子

懐しき朧ろ月夜に咲く梅のかげ踏なから友と語りし

山寺の鶯 同

鶯のゆかしき聲は山寺のかなたの森を洩てきに鳧

名所花 良子

飛鳥山あすも亦こむ麓なる花みてけふは日暮しの里

山吹 まさ子

口なしの色に咲とも山吹の盛りはつげよ井手の里人

春のうたの中に

大阪 長野悦子

咲花に心ひかれて後けんひとりなきつゝ雁歸るなり
うすくこくけふり立添蜑家をみるめも霞春の曙

名所花 るい子

筏師の棹のしつくも薫るなり隅田堤みの花盛りにて

夕雲雀

大和 栗山俊子

あけひばり霞みながらに暮れ果て聲夕月に殘ける哉

霞中鶯

大和 栗山高子

殘ける雪まは早く打ち霞みけさめつらしく鶯のなく

旅行

肥後 德永廣子

あさ霞たちへたつれと鶯の聲は洩ても聞えける哉

春雨

下野 菅德子

露しげき草の枕の上にさへ結ぶはおなじふる里の夢

餘にも霞と思ひし春の夜の名殘やけさの雨となり剱

春雨　同　すが子

霞みさへ雲さへ深き山奥に昨日もけふも春雨のふる

春雨　同　菅淑子

とぶ蝶の羽袖重くも見ゆる哉小草いろよき春雨の庭

旅行　同　壬生すが子

旅人が荷物背負し其の上に散かゝりけり花の一ひら

春雨　同　櫻まち德子

さほ姫の霞の袖やしめるらん柳もけふる春雨のそら

谷鶯　三河　加藤壽子

春の日のひかりもうすき谷陰の雪に埋れて鶯のなく

春雨　伊豫　高市もと子

何となく薫を見は春雨も庭の木すゑの花にそむらむ

今様

花　大阪安堂寺町二丁目一〇〇　長野悦子

ちり安けなる花さくら　けふは終日ながめてん
鳴うくひすの聲かすみ　蝶のは風ものどかなり

人の七十の賀に　東京市神田一つ橋通り女子職業學校寄宿舍内　入尾いへ子

渚につるはうたふなり　かめも巖にあそぶなり
君かちとせを壽ほきて　萬代うたふなみのこゑ
出る光りのうら〳〵と　梅か香にほふ春のやと
古巣出てたる鶯も　君かちとせや歌ふらん

春野　出雲國簸川郡　高橋隆子

春の彌生に來て見れは　野邊も山へも花そ咲く
鳥のしらへに松の曲　つかひ放れぬ蝶の舞

物思ひ　伯耆國日野郡二部村大字二部宿一二八　樋口つる子

別れし君のこひしくて　一人つく〳〵物思ふ
さらでも淋さ此夜なが　思へば涙ぞ止めなき

花と人　同

夕しぼむと知らずして　朝花咲く朝かほよ
果敢ものと人は云へど　昨日の人ははやもなき
けふの哀の世を見ずや　など花のみと思ふらん



○皇后陛下還啓期

一月以來葉山御用邸行啓中なる　皇后陛下には日夜御建勝に渡らせられ昨今侍醫の拜診に依れば御體量六百目餘御增加の御有樣にて本月末若くは來月早々一と先づ還　啓仰　出さるゝ由拜聞す

○雪子女王殿下の御仁恤

京都に御在住あらせらるゝ賀陽宮邦憲王殿下の御姬宮なる雪子殿下には本年御年八歲に渡らせられ上京竹間尋常高等小學校の二年生に渡らせらるゝが征露の役起りて我忠勇なる軍人が身命を投じて國家に盡す事を聞召され學校長よりは何等の御勸誘だに爲さゞるに十五圓を狀袋に封じ御自筆にて表に「金十五圓賀陽宮雪子」裏に金曜日明治三十七年二月二十六日」とし校長永松木長氏に向はせられ親宮より貰ひし日常用の手當の內貯へ置きたるものなれば日露戰爭に赴きたる軍人恤兵の內に與へ吳れよとて御差出し遊ばされしにぞ永松校長も其御　志の厚きに感じ流石は神の御裔と生れましたる御仁德のおはしますよと淚に咽けりとなん

○高千穗山の靈火

今は昔なりける二十七年七月端なくも日淸干戈を交ふるや日向國高千穗山麓に鎭座せる霧島神宮より數萬の巨火列をなして鷄林の空に彷徨ひ王師の擁護をなしけるとかや然るに今や又露國と事を構へ滿韓の戰雲日に急なるに及び去月八日夜十一時頃と覺しき頃數萬の巨火縷々として東霧島山麓に出現し見る〳〵西北方に位地を

替へつゝ其長さ里餘に及び約三十分間を經て朧に消え失せたりとて同地方にては神軍遠征に赴むき玉ひしならんと噂し合へりと最も奇しき事ながら目出度瑞祥にこそ

○愛國婦人會の榮譽　愛國婦人會々長岩倉公爵婦人代理同會相談役清浦男爵は去る廿九日午後一時參内したるに思召を以て　天皇陛下より金七千圓　皇后陛下より金五千圓を同會に御下賜相成りたる由にて同會にては此の難有き恩命に感激し近日理事委員會を開き益々會務擴張に就き協議する筈なりと云ふ

○貴夫人の繃帶製造

府下澁谷村なる赤十字病院の一室を借り繃帶製造をなし遠征將士を慰籍せんとて習はぬ日頃の業なから雄々しき心を振り起して一心不亂に其製造に從事さるゝ篤志看護婦人會こそ實に賞歎するにも餘ありといふべし、今その近況に付いて二三聞く處を記さむ

▲初め同會より恤兵部へ寄贈せんとせし繃帶の豫定數は一萬三千卷なりしを以つて卷き上るまでには高貴の身の馴れぬ仕事とて少なからぬ時日を要することならんと思ひ居りしも各夫人のいと熱心なる勉强により其の進步著るしく今にては一日平均七百五十餘卷を製作するに至れり殊に熟練したる夫人は一人の手にて一日五六十卷も仕上ぐるさへありと聞く何れ劣り勝りはあらざれど華族の中にて分きて勤勉なるは同會長鍋島侯爵夫人榮子副會長千家男爵夫人俊子を始めとして毛利公爵母堂安子樺山伯爵夫人常子德川公爵夫人知子の各夫人にて其他黑木大將夫人百子の如きも看護服を裝ひて快活に力を盡し居らるゝよし

▲中にもいとゞ畏きは名譽會員に渡らせらるゝ各宮妃殿下の此處に席を列ねられ御手づから繃帶卷をなし給ひ他の會員に御模範を下し給はるゝことこそ恐れ多き極みなれ此の頃の雪まだ解けぬ北山颪の風寒

きをも御厭ひなく梨本宮妃殿下並に故北白川宮妃殿下には常に擬らで御精勤遊ばされしかば席に列なる各夫人等一同其の御仁慈の厚き御精勵の程にみなみな感佩措く能はざりしとぞ殊に梨本宮妃殿下には一日六十餘卷も御製作あらせらるゝ由御いそしみの程さこそと拜察し奉るだに恐れ多き事どもなり

▲豫定一萬三千卷なりし綳帶も其の後北白川宮奥女中一同より白布百反、東伏見宮奥女中一同より五十反、蜂須賀家奥女中一同より五十反、酒井伯爵家より百反寄附ありしを以て尚幾千の數を増すべしとなり其の他の寄贈品は多く患者用の帽子なるが承はれば梨本宮妃殿下には御手づから帽子二ダースを編せ給ひ御寄贈遊ばされたるよし

猶ほ聞く處によれば各貴夫人は頗る節儉にて辨當等の如きは握飯に梅干を添へたるもの或ひは食パン海苔卷などの粗末なるものにて却つて粗食を誇るの有樣なりといふ參會の貴夫人中米國婦人ウエスト英國公使館書記官パークレ夫人は取り分け同情を寄せられ綳帶卷も美事に四五十卷は必ず仕上ぐると云ふ

○戰爭と女學校

各女學校に在學せる少女等も此際何をかな奉公の微衷を表せんといそしみ受業の餘暇を以て思ひおもひに種々の計畫を爲せる者少なからず今聞き得るに從ひて左に掲載する事となしぬ

▲實踐女學校、女子工藝學校　帝國婦人協會附屬の同學校にては曩に生徒の志願に依り毛絲にて造りたる頸卷（耳鼻を掩ふ）の寄附を陸軍恤兵部に出願したるも其物品に一定の內規ありとて許可されざりしかば更に手巾千五百枚（一端に和歌一端に校名を書きしもの）を獻納する事に決して目下專ら準備中なるが尚ほ同校にても毎日授業の終了後日の長短に應じ生徒に三十分乃至一時間づゝ特に服業せしめ其收入の金品若しくは勞力を以て海陸軍の用途に充てんと此程左の趣意書を父兄の許に送りて同意を求めたりと云ふ

目下國事日に急を告げ來候に付ては國民舉りて邦家に殉するの志氣振作致し居り候事は勿論に候へども今日の時局は素より戰爭の終結と共に節止すべき義にあらざるは亦炳然たる譯にて御互に今日の志氣を永久に傳へ異日戰捷平和を告げ候ふ時に至り候ても尙第二の國力優勢を占め候事の如何は今日の青年子女たるもの丶注意如何にこれある儀と存候就ては當校にても内此氣象を養成し外陸海軍人の忠勇に對し聊慰籍の意を表し度存候處生徒諸子もまた大に時局に感奮の様子相見候故此好みすべき氣風を更に奬勵致し候て尙此毅氣を後代にまでも遺し候はんには深く今日の動機を腦裏に印せしむるの手段を取候事肝要と存候(下略)

▲女子學院　麹町區六番町なる同校の職員生徒等は取敢へず從軍兵士に對して物品を寄贈することゝなし種々考案の末生徒一人に付き更紗の袋一個づゝを調製せしめ其中には萬病膏寶丹清心丹手巾(ハンカチーフ)手帳鉛筆などを入れ之を軍人袋と名づけて今明日中に陸軍恤兵部に献納する由なるが右は彼の米西戰爭の際米國有志婦人より從軍者に贈りて大に重寶したりとの事を態々同國婦人より知らせ越したるを以て思付きたるものなりと

▲女子美術學校　本郷弓町の同校にては他校に卒先し先頃已に靴下千足を陸軍恤兵部へ献納の義を出願に及びて許可を得たりしかば目下生徒一同は日夜織手を働かして其製作に餘念なし

▲女子技藝學校　星松子の主管せる深川の同校にては生徒中より續々と軍資を献納せんと申出でたれど生徒の出金は取りも直さず父兄の力を煩はすものなればとて之を見合さしめ別に自費を以て原料を出し各自專攻の技藝に依りて相應の物品を造らしめ其の製作品をば學校に保管し置き三月末を期し公衆の展覽會を催し其の賣上高を以て陸海軍の用途に充つる事とし其用途等に就ては追て協議の上決定する筈なり

▲東京府第一高等女學校　生徒間にはいろいろの内議もあれど結局金額を定めて出金せしむるは自ら他に弊害を生ずるの恐れあり又授業時間を割いて仕事を取らしむるが如きは甚だ敎育の趣旨に背くものなるを以て此際は只管勤儉貯蓄の風を奬勵し微衷を致すに如かずとて職員生徒相談の上一つ箱を設け各自健康の許す限り又時間に差支へなき限りに於て車

代を節し其他日用品等の費を省きて之より得たる金をば此函中に投ずることゝ定め而して毎日正午時職員立會の上開函して貯蓄し得たるものを學校に保管し用途は追つて協議することゝなし既に去月より實行し居るよし

▲東京府尋常師範學校　幷に同第二高等女學校にては生徒の申出では追つて審議することゝし取敢へず兩校職員中にて申合せ俸給の十分の一を醵出して國庫債券に應ずることゝなしたりと

▲東京府第三高等女學校　麻布日ケ窪の同校は處柄とて生徒中軍人の家族多きより先づ第一に是等の者に對し相當の擧あらんとて目下協議中

▲三輪田女學校　生徒の節約し得たる所を以て一人に付毛絲靴下一個宛を造り恤兵部に寄附する筈

○華族女學校生徒の繃帶製作

花かとも沓かとも思はるゝ生徒達は皆白の假衣を纏ひ更に白布もて髪を包み充分の消毒を行ひ各級何れも受持教師の監督の下に雪と見まがふ白布を卓上に置き並べテニスの技やお手球の遊びの外に餘念あるべしとも思はれざるいとも幼き年頃の姫君たちまで小さき手もて一心不亂に卷返し卷き直ほしつゝ繃帶製作の健氣なる有様は打見るからに自ら奉公の念の奮ひ起るを覺ゆるばかりなりき御在學中の各宮女王殿下にも進んで之に御從事遊ばさるゝ由申すも畏けれど各女王方が貴き御身の生徒の中に立ち交られ御繊手に力をこめて堅き繃帶を卷上げらるゝいみじさは頓て勇士の膽に銘じて猛き雄心の又幾倍を添ふるなるべし是より先き同校は生徒より種々の申出でもあり奉公の意を表するの道に就きて種々協議の末遂に繃帶製作と決し運動會其他の會合に要すべき茶菓及び其他の費を省きて木綿千反購入のことを宮內省に願ひ出でしに許可ありたるに付き爾來毎日授業終りて後高等小學三年以上の生徒總員四百二十六名並に五十餘人の職員總掛りにて製作し居れるものゝよしにて千反の木綿を五裂となし即ち五千

巻の繃帯を造る豫定なるが其技漸く熟して昨今は一日千巻餘を製作し得るとの事なれば不日完成献納の運びに至るべしと

○英國婦人の同情

島津公爵家家庭教師ハワード女史の日露戰爭に關する所見を聞けるまゝ其の概要を記さん

▲上下の同情　日本の貴族社會の子供達は戰爭と云ふ事に就ての考へが何うも昔しのお伽噺のように思はれて居は仕まいかと私は考へます、夫れ故同情の念が幾分か薄くはないか、心から軍人に對して同情を寄せると云ふ考が乏しくはないかと云ふ事を憂ひて居ります、日露戰爭に就ては兵士の境遇を充分貴族の子供達に見せて置き出征軍人に心から同情を表するように教育する事が必要だと思はれます英國などでは斯ういふ際に上流の者が下等社會の者を訪問するのは一種の習慣になつて居る故左程苦にもならぬが日本では上下の懸隔があるように思ふので此際上下互に隔てなく心から同情を表する事を望むのです

▲水泡に歸す　南阿戰爭の時でしたが英國では上下擧つて出征軍人の家族を慰問する事に勗め軍需品は何くれとなく作つて夫れを戰地の軍人に贈りました此時の英國民は戰爭熱に浮かされるばかりだから我勝に物品を贈つたが運送船の都合などを能く聞き合せないで此等の品を戰地へ送つた故肝心な軍人の手へは屆かないで後に其品が積返されたような事があります、折角の送品も斯んな風に徒勞に歸すような失敗に終つては徒に水泡に歸する計りですから出征軍人に物品を寄送するに就て或は御參考になるかと思つて申上げます

▲日用品の寄贈　出征軍人の家族を慰問する事は兵士が出征する義務ある際と同じように跡に殘つた國民の義務であります、夫れから南阿戰爭の時でしたが私は履下などを出征の軍人に贈りました處が先方からの返事が大層悦びの言を表し其端に文信

は尙更だが古新聞でも宜いから本國から屆いたものなら實に軍人の心を慰めます又何を貰ふより小さな石鹼でも宜いから送つて貰ひたい日用品は不足をして居る故斯ういふものなら何を送つて貰ふより忝ない其他戰地の煙草は其味を忘られる事が出來ないとの事でしたけれど土地こそ變れ日本軍隊の遠征にも之れ等の事から思付きの寄贈品がある事かと思ひます

▲同情を表す　時局の切迫して將に戰端を開かうとする時に際し日本國民の態度の悠靜なのには深く感服の外は御座いません英國などでは南阿事件の將さに破裂しようとした時國民は未だ日本程靜和の襟度を執る事が出來ず何んとなく人心騷擾を極めました、實に日本は正義の國で吾々英國人は深く日本人に同情を寄せるのみならず出來得る丈は軍族を慰問する事を勸めたい考へであります、又英國人ばかりではなく歐州列國で日本に同情を寄せぬ國民は恥辱であります實に日本は一に歐州平和の爲めに戰つて下さると思へば出來得限り同情を表したいのです

○日本淑女學校の大學組織　同校は今回大學組織となし來四月の新學期より大學部一二年級及高等學部（高等女學校）各年級五十名づゝの生徒を募集する由にて大學部卒業者へは學稱を授くる筈なりと

○東京高等女學校　芝區三田四國町なる同校は昨年四月文部大臣の認可を得て開校し高等女學校令により四ヶ年の程度を以て女子に須要なる學術を授けつゝあり特に校長棚橋絢子刀自は修身を擔任し日本固有の道德に基き歐米の長を參酌し女子に最も適切なる勤儉貞淑なる婦德を養ひ明治の賢妻良母たるの美性を得せしめんことをつとめ幹事小川文學士を初め小川直子三角錫子大塚とき子その他多年女子敎育に經驗ある敎諭諸氏は文部省監督の許に非常なる熱心を以て訓陶の任に當りつゝあるを以て開校日淺きも好評己に盛なるに至れり殊に同校は電車の通路を距ること僅に一町にして交通至便の地にあれば甚だ通學に便なりとぞ同校は構內に寄宿舍の設なきも遠

來の子女の便を計り塾舍を附近に設け小川直子親かう監督保護の任に當り居れりといふ

○アレキサンドル孃逝く　女子學院教授アレキサンドル孃は廿四歲の妙齡を以て三月十二日午前十時永眠せり同孃はフルペッキ氏に次で來朝しタムソン氏等と共に多年我國の教育、傳道に盡力し後病を得て布哇に航し同地に於て病沒せし故アレキサンドル氏の嫡女にして京橋明石町に於て生れ十五歲にして故國に歸りテネシイ州メレビール大學に學びマスターオブサイヤンスの學位を得るや亡父の遺志を繼ぎて我國の女子教育及び傳道の爲に力を致さんとし昨年一月來朝女子學院に教鞭を執りしが日本は自己の誕生の地なりと云ひ父の半生を献げし所なれば、最も忠實に其職に從事し衆望亦厚かりしが、昨年十二月不幸病を得遂に起たず、前途有望の資を抱きて天の故鄕に歸れり

聞く孃ば性質忍耐に心強く且つ温順よく衆を愛し人の爲には己を忘れて力を致叉人知れず善を爲すを以て喜びとなしたりしと一昨朝側にありし三谷民子氏を見つゝ徐かに「戰爭々々」と云ひしにより戰爭の結果を知らんとするならんことを思ひ耳に口つけて「日本大勝利なり萬歲なり」と囁きしに孃は疲れ果てし目に喜びを湛へ「我國我國我が愛する國」の一語を洩らせしが暫くして父の跡を追ひたりと

生死元と天なりと雖ども妙齡青春將に爲す處あらんとして夭折す、これを悲むもの豈これ我國女子教育の爲めのみならんや

○結婚費を軍人家族に贈る　四谷區南伊賀町四谷銀行の頭取波多野尹政氏の六女隈子孃は此程農學士某と良緣結ばれ近日結婚式を擧ぐるまでの運びとなりたるが折柄今回の國難に際したるに父尹政氏はたとへ一生の大事なる婚儀とはいへ徒らに冗費をかくるは國民として憚かるべき事儀式さへ正しければ酒は茶にても事足るべしとて其旨先方にも申し通じ一切の費用を節減して一昨日金三百圓を四谷區より出征せし軍人遺族の扶助料として出金せしと云

○殊勝なる覺悟　赤阪區青山北町五ノ廿三森谷龜三郎(三十)は妻しづ(二十六)の間に長女てる(三つ)と云がわり且つ目下姙娠中なるが龜三郎は多年同所に靑物商を營み居り北淸事件の際には從軍して今は後備の籍に在り然るに今回日露戰爭起りて豫後備を續々召集さるゝと聞くより明日は我が上に命令の下るかと心勇みて待ちたるが一方には今回出征する事とならば到底生還は期すべからず妻子ありては却つて足手まとひとならんと決心し妻にも其次第を説き明かし離緣せんと言出したるにしづは開き直つて夫に向ひ妾も日本に生れたからは御國に盡す心は男に變る筈もなく又軍人を夫に持つは名譽な事よしや戰死と聞くとも女々しく泣きはせず留守も大切に守る故離緣ばかりはお許しありて安心して出征し晴の戰爭なし給はれと殊勝なる答へに龜三郎も其上離緣を强兼て兩人が仲は其まゝなるも店は其日の内に鎖して同町廿七番地に小さき家を借りて引移り從前の如く靑物商を營ませ之で家の事は一切心配なしと知己の者を招き意中を語りて後々の世話を頼み置き召集の日を一日千秋の思ひに待ち居るも未だ令下らず心急きて用も手に付かぬより日々敵國降伏出征軍人の健康を神佛に祈願し廻りて只管出征の日を待ち居るといふ

○節儉の婦人一萬圓を献ず　神戸市三宮町二丁目三宮神社内に住居する淸水せい(五十六)と云へるは故同社々司淸水次郎氏の寡婦にて平素は人の爪彈きする程節儉をなし飲酒を唯一の樂みとするのみにて折には一升を傾くる程の豪のものなるが今回の日露開戰に就ては豫て夫の遺言もあり旁皐恩を報ずるの秋なりとて此程左の願書に金一萬圓を添へ軍資献納方を神戸市役所に願出で同時に金二百圓を赤十字社に同百圓を恤兵部に献納したりといふ

謹白陳者愚夫故淸水次郎儀は元埼玉縣川越平澤村小久保某の三男にして十五歳の時江戸に出で大島高橋方へ三年間勤務致し後ち田安侯の藩士に從ひ江戸と大阪長柄に三ヶ月毎に交替詰を勤務し廢藩後當縣下有馬郡平田村田中吉郎左衞門方へ寄り同人の媒介にて當市三宮神社神官淸水濟七方の婿養子となり然して實父濟七と愚夫の兩人は爾後國恩を報ぜん爲め專ら節儉を守り其業務に勉勵罷在候處近日當神社の盛大なるに從ひ不幸にも愚夫次郎儀は去る明

治卅年舊曆一月十日死去せり其際同人の遺言には一朝國家に事あらば萬分の一たりとも國恩を報ぜん爲め軍資献納致すべしとの事に有之候依て不肖せい此度の事變に際し亡夫の遺志に從ひ些少には候得共玆に金壹萬圓献納仕候間乍御手數萬事宜敷御取扱被成下度先は右御依賴迄匆々頓首

明治三十七年二月廿七日

神戸市三宮町二丁目三十六番屋敷三宮神社內

清水せい

大藏大臣曾禰荒助殿

○女子同情會　は慈善、矯風、交誼を目的とし去る三十三年六月一日設立したる婦人の公益團體にて會員の數は三百名內外會費の額は僅に一日一錢に止るものなるが創立以來專ら節約を旨とし質實を主とし努めて資金の貯蓄を爲し敢て片々たる零碎の支出を爲さゝりし結果として今や其資金積て二千餘圓に上りければ此際之を恤兵部に寄附するとに評決し陸海軍省へ各金千圓宛差出したり於之會員は同會に應分の寄附金を爲し尚又節約質實を努め再び資金を增殖し更の他日の備を爲さんとて大に盡力することゝなれりといふ

○對馬篤志看護婦人會　同會は明治卅四年の創立にして卅五年及卅六年の二回に七十八名の卒業生を出し次に現今修業中のもの三十九名ありと云ふ對馬は日本のまるた島とも稱すべき土地柄なるを以て生徒も熱心に勉勵し又軍隊よりも種々の便宜を與へられ居ると云ふ又同島の鷄知村及竹敷村にも同じく婦人會の組織成れりとぞ今左に生徒養成規則を掲ぐ

第一條　目的名稱及位置

本會ハ戰時ノ傷病者ヲ救療愛護シ力メテ其苦患ヲ輕減スルヲ以テ目的トス即日本赤十字社ト同一ノ目的ヲ有スルモノトス

本會ハ對馬篤志看護婦會ト稱シ協立嚴原病院ニ置ク

第二條　平時戰時ノ事業

本會ハ第一條ノ目的ヲ達スル爲メ左ノ事業ヲ執行スルモノトス

一、平時ニ於テハ傷者病者ノ救護ニ應用スベキ人員ヲ養成シ戰用衞生諸材料ヲ蒐集シ勉メテ戰時ノ準備ヲ完成シ置ク事

二、戰時ニ於テハ陸軍衞生部ニ附隨シ之ヲ幇助シテ傷者病者ノ救護ニ盡力スル事

本會ハ第一條ノ目的ノ外左ノ事業ヲ兼行スルコトアルベシ

一、臨時天災ノ場合ニ於ケル負傷者ヲ救護スル事

二、前件ノ費用ハ特ニ有志者ノ寄附金ヲ募集シテ補充スル事

第三條　卒業者ノ義務

第四條　本會ヲ卒業セシモノハ戰時及天災ニ係ル傷病者ヲ看護セシムルモノトス

第五條　看護婦生徒タランヿヲ志願スルモノハ卒業後格別ナル身体ノ拘束ナキ限ハ國家有事若クハ天災發起ノ時ニ際セバ速ニ本會ノ召集ニ應ジ看護ニ從事スルノ義務ヲ有ス

看護生徒ハ左ノ資格ヲ備フル者タルヲ要ス

一、年齢十五年以上四十五年以下ニシテ修業中家事ニ係累ナキモノ

但高等小學校二年以上ノ學科ヲ修メタル者ハ此限ニアラズ

二、身体强壯ニシテ性質淳良ナル者

三、從來ノ履歴品行ニ尤ムベキ處ナキ者

四、尋常小學卒業以上ノ學力アル者

第六條　生徒志願者ハ姓名ニ住所年齢ヲ記載シ本會ニ申込ヘシ

第七條　修學期ハ一ケ年トシ毎年十月ニ始マリ翌年九月盡日ヲ以テ終ル而シテ前半ケ年ハ主ニ學業ニ就キ傍ラ實地勤務ヲ講習セシメ後半ケ年ハ專ラ實務ニ服シ其習得シタル學科ノ應用ニ熟練セシムルモノトス

第八條　學術科ノ講習ハ毎週水曜午後一時ヨリ三時迄トス

第九條　學年ノ最終ニ大試驗ヲ擧行シ及第者ニハ卒業證書ヲ授與シ特志看護婦名簿ニ登錄ス

第十條　卒業生ノ居所轉換身上ノ異動ハ必ス本會ニ屆出ヲナスヘキモノトス

第十一條　看護婦生徒養成ニ關スル職員ハ協立厳原病院會議ニ於テ決定スルモノトス其職員ハ左ノ如シ

看護婦養成委員長　一名

看護婦養成委員　一名

教官　若干名

第十二條　教育期間ニ講習スヘキ科目左ノ如シ

教科表

學科

赤十字條約ノ主旨

一般ノ看護法

治療ノ介補法

人身ノ構造及官能

傳染病看護法

日常多キ疾病ノ看護法

外傷救護法

急症救助法

術科

繃帶術

救急術

第十三條　學科術科ノ實地演習ハ協立厳原病院ニ於テ患者ニ就キナサシムルモノトス

○戰爭玩具

開戰以來兒童の遊戯が甚だ荒ッぽくなりて玩具の軍刀を振舞はし或は小さき空氣銃を打ち或は喇叭を吹き國旗を携へ人の群集するを見れば只譯もなく萬歳を唱ふるなど是迄とは餘程變り行きたるが今某玩具商の語る所を記さんに▲賣行多き玩具　二三錢か四五錢位の安直なる玩具にして四五歳迄の兒童に用ひらるゝ品は別に賣行に變りなけれ

ど六七歳以上の兒童向にて十錢以上の價ある玩具に至りては所謂戰爭物の外賣行皆無とも云ふべき有様なり其種類は軍艦、水雷艇、海陸軍の軍刀。洋刀、騎兵持の鎗、喇叭、劍附鐵砲、國旗、軍艦旗、萬國旗等が主なるものなり而して萬國旗の中にも露の國旗は之に手を觸るゝさへも快しとせざるものゝ如し茲に可笑しく思はるゝは兒童が墨其哥の旗章たる鷹を鷲と誤まることにて同國旗も露の國旗と同様全く賣れずと云へり▲新案の玩具　日露戰爭を當込みの玩具にて一寸面白く思はるゝものは電氣作用砲撃の軍艦と水雷驅逐艦なり前者は木製五寸大の軍艦二個を一組とし一は敵艦ワリヤーク他の一個は我軍艦淺間に擬し双方を適宜の場所に置き淺間艦に設けたるベルを押す時はワリヤーグが砲撃を受けたる意にて忽ち顛覆する仕掛なりとぞ今一ツの驅逐艦も木製にて二寸五分大とし別に大きさ四寸程の木製の敵艦一個とを一組と爲し双方一尺二三寸程を隔てゝ驅逐艦よりゴム仕掛の魚形水雷を發射して敵艦を顛覆すると云ふ趣向なるが右二種共目下製造中なれば茲一週間を出でずして諸所の玩具店に現はるべしと▲畵合と積木　畵合にも日露戰爭畵合と稱する新物が現はれたり其畵は仁川及び旅順の海戰、艦隊の出發、京城の戰爭等種々あり又積木にも艦隊積木とて各種の軍艦、驅逐艦、水雷艇等の形を作るべきものを賣出し其他軍用電信機、軍用望遠鏡など稱する玩具等もある由

（以上の叢報は總て三月十日〆切）

新刊概評

音樂體操 第一編啞鈴體操　定價十五錢 郵税二錢

日本女子大學教授 白井規矩郎氏の編纂したるものなり號令呼唱の無味なるに代ゆるに活潑なる音樂を伴奏して兒童に愉快なる運動を行はしむるを得るは本書の特長なるべし（銀座十字屋發行）

新式日本唱歌　定價十五錢 郵税貳錢

近來唱歌の兒童界に流行するは悅ぶべしと雖ども往々時勢に後れたる音樂や頑固なる思想より成りたる歌ありて甚だ不適當と思はれしに今此の唱歌の出でゝ此の方面の不足を補ふを見るは洵に多とするに足るべし（發行所同上）

乘算九々唱歌　定價六錢 郵税貳錢

井上鎭氏の多年研鑽したるものゝ由にて算術教授法改良の一として

乘算九々な順序面白く修學立志齊家の訓戒となるべき趣旨もて唱歌としたるものなれば算術教授の傍ら修身科の材料として有益なるものといふべし（發行所同上）

第一學年第十七號 中學科講義錄

大日本國民中學會に於て發刊するものにて講師は高等師範學校の中學教育を擔任せる人なれば各科の講義よく整頓して間然すべきところなきが如し束脩三十錢會費一個月三十五錢にて發行は毎月五日廿日の二回なり（本郷區湯島六丁目大日本國民中學會發刊）

鳥物がたり　定價弍拾錢

此書は佐々木濱子刀自が最とみやびやかなる筆もてものせられたるものにて如何にも百千鳥の聲面白く囀つるにも似ていとめでたし東久世伯下田歌子女史の題詠坂正臣氏小川直子刀自林甕臣氏の序文ありて大和綴和紙の美麗なる册子なり（麻布區飯倉町四丁目徭世堂發刊）

高等女學校用 女子教育學　市川源三著　定價五拾錢

女子の教育學を修めざるべからざることに就ては嘗て本誌第十四年第二號に於て元新潟縣尋常師範學校長阿多廣介氏が論じたるところなるが世間此類の良書なきは甚だ遺憾なりしに今やこの適當なる書籍の發刊されて世の希望に應ずるに至りしは女子教育の爲に甚だ悦ぶべきなり（東京築地圖光社發刊）

新刊書目

大日本婦人教育會雜誌（第百六十二號）　麹町區永田町　大日本婦人教育會
音樂之友（第五卷第五號）　下谷區仲徒町　樂友社

商家之友（第廿四號）　京橋區鍋町　時事新報社
東洋哲學（第十一編三號）　小石川區原町　東洋哲學會
家庭の友（第一卷第二號）　神田區南甲賀町　內外出版協會
兒童研究（第七卷二號）　神田區裏神保町　富山房
日本婦人（第五十二號）　豊多摩郡澁谷村　帝國婦人協會
中學科講義錄（一學年第十五、六、七號）　大日本國民中學會
倭村文學（第一號）　三重縣一志郡倭村　倭同窓會
裏錦（第百卅六號）　神田區北甲賀町　尙桐社
學校衞生（第十號）　下谷區上野櫻木町　學校衞生研究會
工談雜誌（第百六十八號）　京橋區新榮町　工談會
中央公論（第十九年二號）　本郷區西片町　反省社
婦人と子供（第四卷三號）　本郷區湯島　フレーベル會
正教雜誌（第五卷三號）　神田區東紅梅町　教要社
成功（第三卷六號）　本郷區弓町　成功雜誌社
二十世紀の婦人（第五卷二號）　小石川區高田　双龍會
體育（第百廿三號）　神田區仲猿樂町　日本體育會
東京經濟雜誌（每號）　京橋區彌左衞門町　經濟雜誌社
平民新聞（每號）　麹町區有樂町　平民新聞社
爲週報（每號）　神田區錦町　正則英語學校
慶應義塾學報（第七十五號）　芝區三田四國町　同發行所
六合雜誌（第二百七十九號）　同　ゆにてりあん弘道會
婦女新聞（每號）　牛込區五軒町　同新聞社
愛國婦人（每號）　麹町區下二番町　同發行所
なゝな（第四卷第三號）　麹町區下二番町　大日本女學會
國學院雜誌（三號）　同　飯田町　國學院
近畿評論（每號）　京都　同評論社

締切期限毎月十五日

繪畫募集廣告

募集規定

一 應募繪畫は日本畫たると西洋畫なるとを論せず、又流派材料の如何を問はずと雖も、成るべく時期に適合せんことを要す

一 其の素畫なると着色畫なるとは應募者の随意なりと雖も、用紙の大さは、縦六寸横四寸に過不足なきを好しとす

一 應募繪畫は某畫伯に囑托し嚴蜜調査の上、其中より一等二等の二種を選拔し、當選者へは本社發刊の書籍を贈呈す

一 締切期限は毎月十五日とし、當選繪畫は、翌月十五日發兌の女鑑口繪に挿入して發表すべし

一 應募者は左記の切符に住所姓名を記入し、繪畫に貼付し、女鑑編輯局に宛て送付すべし

府縣　市郡　區町村　番地

國光社

女鑑編輯局

明治三十七年女鑑月並兼題豫告

歌　　文

五月　猿　夏朝　／　硯　吾が常に愛讀する書籍に就て　〆切四月十日

六月　親友　郭公　／　藤花を贈る詞　梅雨中日記の一節　〆切五月十日

投稿募集

短歌
今樣
短文

各題隨意

兼題投稿心得

一投稿歌文は　女子は何人にても隨意投稿することを得べし

一投稿用紙は　文は半紙又は半紙二ツ折和歌は同上又は端書を用ふべし但題異りたるときは必ず別紙に認むべし

一題目の下　には必ず住所姓名を明記すべし

一文字は　必ず楷書にて句讀點を施し鮮明を主とすべし若し二葉に渉るときは必ず紙捻にて綴り置くべし

一文は　題毎に用紙を別にし一行十五字詰に認め三十行を越ゆべからず

一歌は　一人一首若くは二首を限りとし上下句中二音の漢字三字を入れ其の他は悉く平假名にて認むべし

一投稿宛名は　國光社女鑑編輯局とすべし

一總て以上所記の規定に違ひたるもの及び〆切期限に後れたるものは採用せず

一原稿〆切期日は　雜誌發行日の廿日前則ち四月分は三月十日五月分は四月十日とす

一當撰者には　文は一圓(天)五十錢(地)三十錢(人)歌は其半數に當る計算を以て各代價相當の書籍を呈す

投稿注意

投稿規定あるにも係はらず近來大に違反のもの多く爲めに整理上不都合を來たし、止を得ず沒書せざるを得ざるに至るものあり甚だ遺憾なれば今後殊に注意して寄稿せられんことを希望す

歌は上下句中二音の漢字三字を入れ其の他は平假名にて認むること即ち例せば「あら玉の年たちかへるあしたよりまたるゝものはうぐひすの聲」と認めたし

題毎に別紙に認むことは特に嚴重に守られたし即ち決して同一の半紙若しくは郵便葉書に異題のものを認むべからず然るに例せば海上雲と遠山花とは題異るに之を同一の用紙に記載するもの往々これありて猶甚だしきは應募短歌をも記せらるゝの不都合あり殊に注意を要す

以上の諸點若しくは〆切期日に遲れたるものは事情の如何を問はず一切沒書すべきによりよく／＼熟讀の上寄稿せられんことを切望す

女鑑編輯局

定價

一册	前金貳拾錢
三册三ヶ月分	前金五拾七錢
六册半年分	前金壹圓拾錢
拾貳册一年分	前金貳圓拾錢

全國無逓送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行		金三拾錢
半頁	三十二行	金八圓
一頁	六拾四行	金拾貳圓
表紙二頁		金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附ありたし

明治三十七年三月三十一日印刷
明治三十七年四月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊楽一

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

吉丸文學士編

名家修養談叢

菊判洋裝美本全一冊
定價卅六錢郵稅六錢

○哲學者の進境及一貫の精神……文學博士 井上哲次郎
○數學的智識の必要……島田三郎
○常道論……文學博士 元良勇次郎
○日本の人種の言語……法學博士 田口卯吉
○快樂……文學博士 加藤弘之
○善良なる市民……安部磯雄
○吾人青年の三大急……農學士 志賀重昂
○苦學生に告ぐ……文學博士 村上專精
○言論文章に就て……島田三郎
○國民氣質と英吉利風……文學士 山田一郎
○青年を誡む……文學博士 加藤弘之
○學問、出身、目的、手段……島田三郎
○兩極主義……文學博士 藤井健次郎
○苦學……文學博士 根本通明
○實學……島田三郎
○無窮的進步……海老名彈正
○讀書と修養……松村介石
○進化論と現今の日本……元良勇次郎
○ベーコン、ルッソー、及びバーゼドーの教育思想……尺秀三郎
○歷史的國民と非歷史的國民……獨逸文學博士 長瀨鳳輔
○慾望……文學博士 元良勇次郎
○苦學生に望む……片山潛
○福澤諭吉翁……島田三郎

東京築地 國光社發行

小松宮彰仁親王殿下題辭
內務大臣內海男爵題辭
前內務大臣樺山伯爵題辭
賞勳局總裁大給子爵題辭
內務大臣官房編纂

明治國民龜鑑

菊判大和綴美本紙數一千餘頁
口繪褒賞者肖像寫眞石版色刷插入
定價金貳圓郵稅十五錢

山崎忠和先生著

日露の英雄

四六判洋裝肖像入　定價金二十錢　郵稅金二錢

日露戰爭の豫言者として我維新前に於ける彼我英雄の心事を知らんと欲せば須く本書を讀まるべし露國の彼得大帝と我朝の德川齊昭島津齊彬とは其の識見事業の世界的なる處同一なりと論じ三雄の音容動作眼前に現はれ出でゝ宛も活動寫眞を見るが如し大方有爲の諸君一讀して萬古の心胸を開拓し一世の智勇を推倒する志氣を養成せられんことを望む

發行所　東京市京橋區築地二丁目　株式會社國光社

明治三十七年四月一日發行 毎月一回一日發行 第拾四年第五號 明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷